魔王×勇者

ACT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔王×勇者

【Ｎコード】
Ｎ７５８９Ｉ

【作者名】
ＡＣＴ

【あらすじ】
穴に落っこちたらそこには吸血鬼幼女がっ！？ネギま過去編始まります！

プロローグ：魔王（前書き）

9／3・・・・編集開始だぜ！！

プロローグ：魔王

少年の目の前には迫り来る大型トラック、そして少年は、死んだ。

【完】トゥル～♪トゥル～♪

……て、おいおい！！終わらせるな！まだ始まったばっかり俺まだ何にもしてないから！！

「ここは……」

俺は確か家に帰る途中で……うん、やっぱ考えるのやめよ、って？ここ何処だ・・・・・・もう一度聞きますここ何処だ？

俺の目の前に一人の少女？が現れる・・・うぉ！？びっくりした～取り合えず此処が何処か聞こう、いや別に突然現れた事に疑問は持ってるよ？うん

「あの～ここ何処だか教えてくれませんか？」

「此処か？ここはお主の心の中じゃ」

「ああ、俺死んだわ」

「はい？」

少女は何でもないように普通に答える・・・え～と、この人馬鹿？てか、もし俺の心の中なら俺どんだけ心が暗いんだよ。全方面暗闇て、「どんだけ～～」　古い？知るかそんなもん

「誰が馬鹿じゃ始めて会った奴に思う事がそれか！」

あらコレは失礼し……ま……ってありゃ？俺しゃべたっけ？あれれ？まぁ、いいや

「いいんかい！！よくないじゃろ！つっこんで！」

「あ・ああ・何デ心読メルンデスカ？」

「ふふん、なぜって此処はお主の心の中、だから何を考えているのか何て聞きたくなくても聞こえるのじゃ！！」

なっなんだってー！？・・・・やっぱおかしいわこの子、早く病院に連れて行かなくちゃ、ていうか本当に何処だここ？

「信じてないな、なら私がお主の一部といったらしんじるか？」

「信じない」

「即答!?・・・いや、まぁ、そうじゃが」

「だってよく考えても見ろ、いきなりここはお前の心の中ですって言われてはい、そうですか何て言うか?言わないね絶対」

「ならば、これでどうじゃ?」

そう言って少女は俺の体に手を当てそしてその手が俺の体の中ズルズルと入っていく、足、体、そして最後に顔が

「うおおおおおお!?はいてったよ、何!?また死ぬの俺?!いやまだ死んだ事はないはず……ないよね?いやそんな事より女の子がからだに~~~~~~!?」

『フフフ、どうじゃ信じたか?』

「信じる!信じるから早くでって~~」

少女の声が俺の頭の中で響く

5分後~

「はぁ~よっかた、あのまま乗っ取られるのかと思った・・・・っで此処は俺の中っていうのは信じてやる。だけどなぜ俺は自分の心の中に?」

「死んだからじゃ」

「死んでない、もう一度聞く、なぜ？」

「死んだから」

「－－－－」

ははははｗ、俺は何と死んでいたのだ・・・え？知ってた？うるさい、俺は知らなかった・・・最後に一言

両親よ。さらば！

「あ～、あと言い忘れてたがお前の両親、本当の両親じゃないっていうか両親すらいない。」

「ははははっはは……は？」

又もや、少女から知りたくない真実が告げられる・・・・うん？えっ何それマジ本当とかいてマジ？

「本当（まじ）」

はい即答てっかだったら俺は何者だよ。曲者ｗ・・・面白くない？知るか！

「魔界の王じゃ簡単に言えば魔王」

少女から出される不思議なワード・・・・ん？

「は？魔王？は？やっぱ君、病院行こうか？ね？怖くないから」

「事実じゃ！なら証拠を見せてやるから此れを見よ！」

っと言って俺の前に大きな鏡をか……が……みをてえええええええええええええええ！？

「何コレ誰コレ？え、俺？いやいや俺もう１８だぞこれはない。だってどう見ても
子供だろう６歳ぐらいの」

鏡に映っていたのは、小柄の体に中性的な顔をした少年・・・・・

「いや、見て欲しいのは目なんじゃが・・・・と言うかお主、気付いてなかったのか？」

「いや、あまりにも自然すぎて・・・・・じゃなくて！これはどういうことだ！？」

「オヌシシンダ、カラダバラバラ、カラダツクッタ、ソシタラソウナッタ・・・・・ハイ」

片言で喋る少女・・・こいつ失敗しやがったな！絶対そうだ！・・・まぁいいか、どうせ死んだんだしはぁ～

「でっどうすればいいんだ俺は此れから・・・」

「ん？お主の力を覚醒させるそして違う世界へ送られる。」

覚醒させる？・・・ああ、魔王の力って奴か、本当に俺、魔王なんだ、それにしても

「送られるねぇ～まぁいいけどさぁ～覚醒させるにはどうすればいいわけ？」

「主と我が契約を結ぶそうすれば覚醒するはずじゃ」

「はずね～・・・で契約はどうすればいい？」

「それは血じゃお互いの血をのむのじゃ。」

うわ～・・・マジかよ、死んで、魔王になって、次は血を飲むのかよ・・・・ってあれ？

「そういやさ、お前て俺の一部なんだろなのに契約なんかできるのか？」

「できる、一部といってもお主のなかに入った使い魔みたいなものだからな」

「ふ～ん。ま、いいやさっさと終わらせようぜ？」

「ＯＫなのじゃ」

少女は自分の指を切り・・・血を容器（何時の間にか合った）に入れる

「次は主の番なのじゃ・・・・」

「ああ・・・・」

少女からナイフを貸してもらい、自分の指を切り血を容器に入れる・・・・まさかこんな体験をするとは

「それでは主、此れを・・・・」

「ああ・・・・んっ！」

≪ゴクゴク≫

少女に渡された血を一気に飲む・・・・それと同時に溢れ出す力

此処からおれの人生は、大きく変わっていった・・・・・

プロローグ：魔王（後書き）

こんなものかな？

異世界（前書き）

9／3　編集

異世界

「うお！？すげ・・・」

少女と契約した瞬間、風間賢一は自分の奥底から力がみなぎるのに驚きを隠せないでいた。

「体が一気に軽くなったぞ・・・すげ～な、魔王すげ～」

「まだ、力の半分も出せていないからの主」

「これでも半分！？」

マジかよ・・・魔王怖～って俺か魔王ハハハハ……はぁ～

「そう気落とすな主よ」

「あっいやもういいけどさ～でも、この体はな～如何にかならないか？」

そう何故か知らないが、この少女が失敗したせいか俺の姿は６歳の子供になっている。

どうやら蘇生させるための魔力が足りなっかた為、俺の体の一部を使って再生はしたのだが
この姿が精一杯だったらしい

「多分魔力をそれなりに使えるようになれば元の姿にはなれるがの・・・」

「じゃあ「無理じゃ」しゃべってない!?」

「此処は、主の心の中と言っても正確には私の中じゃからな主に魔力何か使わせて、此処が壊れたら敵わんからな」

そうだったのか、ならどうやって元の姿に戻るかだが……いいやもうこのままでそのうち戻れるんだろ?ならいいや……一生戻れないんだったら少し動揺するがその内戻れるならいいや……うん

「主よ「賢一」ん?」

「俺の名前これからは賢一って、呼んでくれ主はちょっと。」

「ん?そっそうかならけ…けん……賢一……よこれでいいか?」

人の名を呼びなれていないのかぎこちなく言う・・・か、かわいい

「おう！ってお前は？」

「何がじゃ？」

「名前だよ、な・ま・え何て言うんだ？」

「名前はない。」

「は？名前がない？」

う～むまさか名前がないとは、だけど何時までもお前じゃな～

「ん～」

「何じゃ？」

俺は眼の前にいる少女を見据える・・・よく見るとこの子、超絶にかわいいんだよな～肌は白、
髪は白と言うより銀で顔も超絶だしな～白と銀ね～・・・シルバー＝シルでもシルじゃ変だな～よし

「お前の名前、今日からシエルな？」

「何だいきなり！？」

「何時までもお前じゃ可哀想だからな！」

「むっまぁだが……シエルかよしわっかた今日から私の事は、シエルと呼べ」

「よし決まりだ。」

はぁ～・・・にしても暇だな～ため息が多い？仕方ないだろ1日でいろいろ会ったんだからよ
にしても何時まで此処にいればいいのやら

「なぁ～シエル俺何時まで此処に入ればいいんだ？」

「それなら大丈夫だと思うぞもうすぐ召還されると思うからの～」

「召還ねぇ……ん？」

何だか光ってない？俺光ってるよね！？俺の足元に魔方陣観たいのが……ちょっ！？
どんどん光によって侵食されていく俺の体ああどうなるんだろ俺……そして賢一は意識を失った。

目を覚ました時、俺はまた知らない所にいた。
だが今度は周りは真っ暗ではなく、普通の森だった……≪ギャア、ギャア、グギャア≫……たぶん。
って何、先の声！？いやまだ声と決まった分けではな……い……はい、目の前にいました。

声の主が・・・・もう俺が一歩でも動いたらガブッて行かれそうです……はい。

誰か助けてください。

「やめなさいイグニール」

一人の女性がイグニール？とか言う化け物を静止させる・・・・・女神様だ女神様が光臨なさったぞ！

「大丈夫かな、君？」

「あっはい、ありがとうございます。」

どうやら普通の人間らしい……人間？人間でいいのかな～う～む

『そやつは、人間で正解じゃぞ』

突如、俺の頭に響き渡るシエルの声・・・・・うぉ！？びくっりした～・・・・シエル何処にいるんだ？『賢一の心じゃ』

へ～・・・・いきなり話すの辞めてくれないか？心臓止まりかけたぞ？『ふむ、それは失礼した。』

「お……おーい、おーい君、聞こえてる？」

「あっはいすみません」

どうやら女性は先程から俺を読んでいたようだ・・・気をつけなければ

「それにしてもまさか召還でこんな小さな子がでるなんて君、種族は？」

「え！？　え～と」

おいこれは魔王って行っていいのか？シエル

『いや辞めといたほうが良さそうじゃ』

なんでだ？

『如何やら間違えて召還されたようじゃ』

はぁ？間違えて？何でそんな事が？

『もし、魔王として召還されたなら魔族に召還されるはずじゃからな』

そうなのか？

『たいていそうじゃそれにこやつ悪人と言うより善人にはいるぞ』

ふ～んまぁなんとなくわかるけどな、じゃあ何て答えよう？

『お知えられないでも言っとけばよかろう』

そんなのでいいの？

『いいと思うぞ？』

適当だな・・・・・

「すいません、教えられません」

「へ？なんで？」

「それは……えっと」

「まぁいいわじゃあとりあえず契約を……っとよしできた」

そう言って女性は俺の首に石が付いたネックレスをくれる・・・・

契約て言いながら何かくれたぞ何だこれ？

『ふむ、どうやら此処では、自分の魔力を渡す事で契約を成立させているみたいだな』

ふ～ん、じゃあこれは彼女の？

『うむ魔力の結晶じゃ』

「私の名前はヘレン・コーナよろしくね♪」

「はい、お『賢一よ自分の姿を考えて話すのじゃぞ』ぼ…ぼくは、風間賢一です。」

「カザマ・ケンイチ？聞いた事ないわね？珍しいのかしら？まぁ人型だし。」

「アッハ…アハハハハハ」

危な～もう少し怪しまれるとこだった『もう十分怪しまれとる』うるさい。

「じゃあついて来て仲間に紹介するから」

「あっはい！」

そして俺の新しい生活が始まった・・・・・・やばくない？なぜ？なぜってそりゃねぇ～俺は仲間の所に行って自己紹介をしたんだそこまではいい。

だが問題が３つあった１つ男が俺しかいない！ちなみに５人パーティだ。もう一つは相手側に危機感がない何たって俺がこんな姿だからな見た目６歳のガキ、「はぁ～」で、一番の問題がこのグループは勇者御一行様、

笑えね～勇者はだれかって？なんと俺の主人になったヘレン・コーナもっと笑えね～なんだよこれ死ねってそういう事か神よ？まっばれてないのが救いだな……はぁ～どうなる……俺

前途多難の人生？の始まりだよ・・・・orz

異世界（後書き）

こんなもんか？

勇者御一行様～（前書き）

9／4　編集・・・・・暑いな

勇者御一行様～

おっす！俺、賢一！！今魔王の力を試してるんだ。わくわくすっぞ……ごめん

『如何した？賢一？』

「いや少し自分のしたことに罪悪感が……」

『？』

「気にしないで良い・・・・で？どうやって魔法やらをつかうんだ？」

『む、そうか？・・・・・なら、まず頭の中に火をイメージしてみよ』

「ＯＫ～」

頭の中に火をイメージする・・・・・こう、メラメラ～っとした火をネ～

『それを手のひらに出してみよ』

「いやいやそんだけで、出たら苦労しな・・・・・・い』

俺の手から盛大に噴出す黒い火・・・出ましたね。盛大に黒い火が、魔王ぽっいすね～てかご都合主義～

「ケンイチ～？」

遠くから俺を呼んでいる、俺の主人ヘレン・・・・・・

「やば、おい如何すればこれ消えるんだ？」

『消えろと念じればいいぞ』

「ふ～消えた」

え？なぜそんなに慌てるかって？忘れたのか？

俺、今勇者御一行のヘレン・コーナの使い魔しかも【勇者】ここ大事

俺、【魔王】主人、【勇者】何これ……まっ取り合えず、ばれたらまずい、てか死ぬ

非常にまずい。状況おわかり？分かったならいい……たぶん

「いた～こんな所で何してるの？」

「散歩と状況把握」

「？まあいいけど、あんまり遠くにいっちゃ駄目でしょ。」

「すいません。」

そういって人差し指を立て起こるヘレン・・・・

それにしても、このパーティ美人揃いだよな～と言うよりさすが、勇者御一行？

てかなぜ全員女？なぜ？なぜ？なぜ？ｏｒｚ

「どうした。ケン？～」

今馴れ馴れしくして来たのが勇者御一行の大剣使いのメーゼ・フラン・・・・・

「いえ、少し今の状況に泣けてきまして」

「？」

首を傾げるフラン・・・・・分からないですか？そうですか、まぁそうでしょうね・・・・

「二人ともおいてくぞ～」

「「まってください～（まってよ～）」」

俺達を置いて先に行ってしまう皆、徐々に慣れて来ている俺がいる・

もういいや如何にでもなれ……てか魔王の力まだ全然試せてね～

後でシエラに聞こう。

勇者御一行様～（後書き）

編集・・・・？出来てるのか・・・・・

力試し　～隠れてコソコソと～（前書き）

9／4　編集・・・・しなくてよくないか？ここ

力試し　～隠れてコソコソと～

「なぁ～本当に誰も来ないのか？」

『うむ、結界をはっておるから誰も此処には入れんぞ』

結界・・・流石ファンタジーの世界だ。何だか燃えて来たぜ

「よし！なら今日こそ俺の力がどんな物か見てやるぞ」

『それでわ、この前と同じように火をイメージしてみよ』

「ＯＫ～」

イメージする自分の頭の中に燃え上がる火をそして、それを手のひらに出す！（ボゥ）

「よっしゃあ」

『うむ、次はその火の形を自由に変えてみよ』

「ん？そんなことできんのか？」

『賢一は、特殊での魔力の形を自由自在に変えることができるんじゃ』

「へ～やっぱチートだな。まっ、やってみますかね」

イメージするのは龍、すべてを焼き尽くす炎の龍を想像する

「うわ、まじでできた」

『ふむ、まさかこれほどとは……』

俺の手の平にあった火が大きさを変え形を作っていき、龍を形成する

「他にどんな事ができんの俺？」

『うむそれは、【ステータス】を見たほうが早いじゃろ』

「は？なにそれ？」

ゲームとかのアレ？・・・・・まさかな

『む？言わなかったかステータスと言うのは自分の強さや能力が見れるんじゃ』

正解かよ・・・・もう何でもありだなコレ

「それを早く教えろよ……はぁ」

俺のステータスはどんなのかね～まっ何となくわかるけどね、読者の皆々様

ＨＰ：測定不能／測定不能
ＭＰ：測定不能／測定不能
ＡＴＫ：測定不能
ＤＥＦ：測定不能
ＳＰＤ：測定不能

何これ～チートどころじゃなくない？しかも予想の斜め上

能力：創造（武器、防具、アイテム、食べ物、自分が考えた物を作り出す。
能力を付け加える事も可能）
魔力変化（魔力を自由自在に操り変化させる）
次元移動（異世界へ飛ぶ事が出来る。扱える用になれば好きな所への
移動が可能）
謎の眼（相手の能力、ステータスを見ることが出来、見たものす

べてを理解できる。）

　ｏｒｚいやいやいや、これもう魔王所じゃないよね。チートを超えた超チートじゃん……魔神……ハッ一瞬認めてはいけない言葉が聞こえたようなｏｒｚ

『賢一……強く生きろ』

　え？泣いてませんよ。うん泣いてない、もうね諦めただからいろんな人巻き込んで、引っ掻き回してやる……フフそうと決まれば特訓だ。がんばるぞシエル！

『うむ』

今頃になって目から汗が……ハァ

力試し　～隠れてコソコソと～（後書き）

取り合えず読みやすく・・・・

修行を終えて（前書き）

9／7　編集

修行を終えて

おっす、あれから【地獄】の特訓をやってそれなりいや、かなり能力や魔力を扱えるようになった賢一です。
死にそうになりました。え?どのくらいって?
そりゃあ【地獄】って付いてるんだから、か・な・りつらかった。
思いだしただけで鳥肌が・・・・・・・ｏｒｚ　だが!
そのかいあって、か・な・り強くなったぜ!此れから楽しくなるぜ!!　たぶん

『賢一、６才の子供が一人で笑っていたら不気味だぞ』

一人森の中で笑う少年・・・・確かに不気味だ

「そういや、俺らって何処行こうとしてるんだっけ?」

『大都市ケイルで行われる大会に出るらしいぞ。』

自分が今から何処に行くかさえ覚えていない主人公、ダメダメである・・・・

「へ～なぜ?」

『金じゃ』

「へ？」

『賞金目当てでいくそうじゃ』

「何か俺の勇者図が跡形もなく消えていく音が」

と言っても確かに金が無いのはわかるわ。
ん？なぜってwそりゃ大食いバカ２人に
マッドサイエンティスト１人がいるからさ！
え？誰て？まず大食い２人は大剣使いことメーゼ・フラン（この前説明したね）
もう一人がクリス・シーン双剣使いのチビ
でメカマニアはルーズ・レイン銃やらロボなど
科学の力をとことん使うマッドサイエンティスト
以上３名でした。

「「おい何か失礼なこと考えてなかったかケン」」

「滅相もございません」

心を読んでくるとは・・・・流石勇者御一行・・・・・・・

≪グギャーーーー！≫

《！！》

「何で此処に上級の魔物が！？」

何あれ～？ゴリラみたいな体に鬼みたいな顔、怖！シエラ！あれ何！？

『うむ、上級クラスに入る魔物ゴリガじゃ』

うわ～何か名前がＦＦのファイヤ、ファイラ、ファイガ見たいな感じだゴリヤっての居たりしてｗｗ

『居るぞ下級じゃが』

マジかよ・・・って事は中級はゴリラ・・・・まんまじゃん

「おいケン速く来い！」

「え？」

あれ？～皆さん何時の間にそんな所まで行ったの？ってのん気に考えてる場合じゃない俺も逃げなきゃ。

〜〜〜〜一時間後〜〜〜〜〜

「はぁはぁ・・・・・・やっ・・・・・と・・・逃げれた」

『なぜ戦わないのじゃ?今の賢一ならあれぐらい殴っておしまいじゃろ』

「力がばれたらいろいろまずいだろ」

『なるほど』

てか俺あんなのを殴って倒せるのかよ・・・・・・

「そういえば、ケンちゃんてどんな事が出来るの?」

「え?どんな事って?」

「能力よ能力」

「あ〜」

どうするどうするどうするどうするやばいやばいやばいやばい

『魔力の強化でも言っとけば良いのでわ？』

俺そんな事できんの？

『うむ魔力変化を応用すれば出来るぞ？』

え？魔力変化って他人のも出来んの？

『そうじゃが？きずいてなかったのか？』

そうだったのかてかそれって俺には魔力は効かないぜみたいな？

『実質的にそうじゃな』

はぁもう何も言うまい

「魔力強化ですね。」

「魔力強化？」

俺の言葉に首を傾げるヘレン・・・・・

「はい、ヘレンさんの魔法を2倍に強化できます

（本気だせば2倍じゃすまないけどな）」

「へ～すごいわね。って言う事はさっきの敵倒せたんじゃない？」

「あっ（今きずいたフリ）」

「ま、いいけど」

「すみません」

今日は、此処で野宿をするようだ・・・・そして明日にはケイルにつくそうだ。やっと休息が出来る

「今思ったけど俺って不幸じゃね？」

『今頃じゃな』

泣いてないからな！

修行を終えて（後書き）

編集

ケイル闘技大会（前書き）

9／7　編集・・・・先は長い・・・・・orz

ケイル闘技大会

「やっと・・・・やっとっ！着いたーーーーーー！！」

長かった、とても長かった何が明日には着くだよ。
あれから一週間だぞ！長すぎだっての！！あ？何があったかて？
そりゃ・・・なんだ・・・まぁいろいろ・・・・そう！いろいろあったんだ！

『まぁあれから行く先々に魔物が居ればの～』

いやー！思い出させないでー！思い出しただけで鳥肌が止まらない。
てか何だよあれ何で行く場所全部魔物居るの？バカなの？死ぬの？
しかも上級だしー何これ何て言う無理ゲー？
神様やっぱりあんた俺の事嫌いでしょ？そうでしょ？

「ケンー何一人でブツブツ言ってるのー？行くわよー」

「ちょっとおいてかないでー！？」

まぁなんだかんだ言って無事着いたから良いか・・・・うん・・・

・

それに死にそうになればチートパワー全快で行けば良いしね。
うん?そんなことしらばれる?目の前で人が死ぬよりましっしょ！
お人好し?
いやいや御人好しだったら、魔王何かやらないよ?
うんっま辞めれるんなら辞めるけど?え?それじゃ
面白くない?俺はもう面白くない

「ケンてさー子供ぽく無いよねー?」

「（ギク）そうですか?」

行き成り何を言うんでしょうか・・・この人は・・・・・俺は何処から如何見ても6歳児!!
言ってて悲しくなってきた

「うん、何か同い年ぐらいの人かと思うもん時々」

「気のせいですよ僕は幼いただの貴方の使い魔ですよ（魔王であり敵ですけどねー）」

何て考えながら誤魔化す俺・・・・・そうだよな~何時かこの人たちと殺し合いをしなきゃ
行けないんだよな・・・・・そう考えると何だかな~

「そういえば誰が大会に出るんですか?」

「全員よ」

「え？もしかしてボクモデスカ？」

「そうよ～♪私と同じチームと言うか使い魔だからチームとカウントされないけどね♪」

「そっそうなんですか」

うっそーー！まじで！？観客席で観賞しようと思ってたのにーまさかの展開ですかーえ？そんなに驚く事でもない？主人公何だから？当たり前？さようですか・・・・何回も言うが泣いてなんか無いぞ！！

「お？あれ旨そうだぜなーへレンあれ買ってくれ～」

「駄目よお金がそんなに無いのに」

「ブーブーなんだよーケチ」

「誰のせいだと思ってるの？」

「メーゼ」

「ちょっとまってくれないか？それを言うならお前のほうが」

「なによーアンタのほうが」

（くどくど）

「あんたら二人とマッドよ（ゴゴゴゴゴ）」

「「「すいません」」」

怖！主人こわっ！？何あれ今までのほんわかな感じは何処へ！？
やはりストレスが溜まっていたのか・・・・
それにしても、優しい人が怒ると怖いと言うが本当だな
俺も気をつけよう・・・・うん

「あの～大会の受付が後一時間で終了するんですけど～」

「な！？急ぐわよみんな」

「ちょ！まって」

あっ最初の人はローズ・シャイン回復魔法が得意なんだ
そういば勇者御一行の人物紹介してねぇな
次の話で紹介するか・・・・うん？
ネタが無いんだろう？そういうのは作者に言え！以上

「ようこそケイル闘技大会へ出場するには5人か6人まで必要となっています。
ルールは相手を気絶するか降参をすれば勝利です。

殺してしまった場合、即失格となります。
武器は何でもいいです。召喚獣や使い魔も出場できます。
出場しますか？」

「はい！」

「それでは出場する人の名前を言ってください」

「ヘレン・コーナ、メーゼ・フラン、クリス・シーン、
ルーズ・レイン、ローア・シャインです。
それと使い魔のケンイチを登録お願いします。」

「はい、ヘレン・コーナ、メーゼ・フラン、クリス・シーン、
ルーズ・レイン、ローア・シャインですね。
それとその子が使い魔ですか？」

うわ～なんか物凄く見てくるよ～やっぱおかしいよね、
人の使い魔なんてしかも子供・・・６歳・・・・・
泣いていいですか？

「はい、ほらちゃんと使い魔の証の魔力の結晶」

「本当ですね。しかし珍しいですね
人型の使い魔なんて・・・しかも子供・・・・・・・かわいい（ぼそ）
」

あれ？何か認めたくない言葉が受付の人の口から聞こえたような

？気のせいだよな

「そうでしょ！？やっぱそう思うよね！？」

「はい何というか撫でたくなりますね」

「そうなのよね～」

「抱っこしていいですか？」

「いいわ～よ♪」

盛り上がる二人・・・・・はい？なんで近づいて来るの？え？ちょ！？

「なっなにするんですか！？」

「かわいい／／／」

「でしょ～♪」

ヘレンさん！？てかなぜ！？かわいい？かわいい！？

いや！認めん！認めんぞ我はーーー！！

だけど６歳だからしょうがないのかな？

そうだ俺の容姿が６歳児だからだ。決して女顔だからじゃあない！！

『そうれはどうじゃろうかw?』

シエルーーーーーー!貴様ーーーーー

「お持ち帰り（ボソ」

ありゃ?受付の人何処行くんですか?皆は向こう側ですよ?え?誘拐?
ちょっHELPME~~~~~

「だめよ」

「チッ」

たっ助かった。まさか連れて行かれそうになるとは・・・それにしても人多いな~
この人たちの誰かと戦うんだよな~勝てるかな?皆?ん?俺?
俺はサポートだけだよwばれたら不味いじゃん
弱虫?なにそれ?美味しいの?
っといろいろ考えていたら、前方からマイクを持った人が現れる・・・受付の人だ

「え～皆さん今から転移するのでグループごとに別れてください
後ケンイチくんは私の所に来なさい」

何言ってるんですか？この人？て言うか諦めてなっかたんですか？

「え～と如何すればいいでしょうか？」

「「「「無視しなさい」」」」

「はい」

「まぁいいわその内手に入れる（ボソ」

おいおい聞こえてるっておっ魔法陣が出てきた。
何処行くんだろ？てか転移とかあるんだね、流石ファンタジー

「何処？」

はい、現場把握しますね。目の前には木、右側には木、左側も木
もちろん後ろも木、森ですねわかります。
ん？何か丸いオレンジ色の玉が浮かんでる。
ドラ〇ン〇ール？いや、あれは浮かばないかｗうん
じゃああれは？

「あ～あ～マイクテス、マイクテス」

あ受付の人の声だなんだろ？ミスったのかな？

「え～今からあなた方には・・・バトルロワイヤルをして貰います。８グループまでが大会に出場できます。頑張ってください。ケンちゃんもね～」

え？なにそれ・・・・・しかもケンちゃんっておい最初の方のクール感は何処へ消えた

めんどくさいな・・・・・

ケイル闘技大会（後書き）

7月9日・・・読み返すのがだるい・・・・・・はぁ

キャラ紹介（前書き）

とりあえず

キャラ紹介

キャラ紹介～イエーイ！！

まずは俺の主人勇者ヘレンだぜ

名前：ヘレン・コーナ
性別：女
職業：魔法剣士
趣味：かわいい物を愛でること、困ってる人を助けること
嫌いな物：気持ち悪い物
性格：優しく、怒ると怖いお姉さん的な人
能力：光を操る能力

うん勇者って感じだね・・・・・・ん？それだけかって？ああこれだけだ
次は大食いの一人メーゼ

名前：メーゼ・フラン
性別：女
職業：剣士
趣味：旨い飯を食う事、修行
嫌いな物：虫、弱音を吐く男
性格：頼りになって、影で皆の事を心配している心配性
能力：火を操る能力

いやー何というか熱い人って感じと思うけど大抵はクールなんだよねこの人

次はクリスですね

名前：クリス・シーン
性別：女
職業：トレジャーハンター
趣味：旨い飯を食う事、宝集め
嫌いな物：怒ったときのヘレン
性格：明るく元気な幼女
能力：風を操る能力

幼女ですはい俺はロリコンではないのでこれで終わり、「誰が幼女だーーー」（ぐはぁぁ！！）
つっつ次はルーズです

名前：ルーズ・レイン
性別：女
職業：サイエンティスト
趣味：実験、機械いじり、
嫌いな物：お化け
性格：何時もクールでなにを考えているかわからないマッドサイエンティスト
能力：雷を操る能力

この人はほとんど喋りませんクールの中のクールですそこにしびれる憧れるー！！
さて次は

名前：ローア・シャイン
性別：女
職業：魔法使い

趣味：薬草集め
嫌いな物：人を傷つける物
性格：優しく謎が多い
能力：水を操る能力

いつものんびりしてて一番謎が多い人
以上終わり！！え？俺いらないっしょｗやめ物投げないでわかった
紹介するよ

名前：風間賢一
性別：男
職業：魔王
趣味：平和に過ごすこと
嫌いな物：人を傷つける物、平和を壊される事
性格：適当でやる時はやる男
能力：創造、魔力変化、次元移動、謎の眼

うわチートもういや泣いてないからな！？て言うかおれは泣きキャラじゃね～

キャラ紹介（後書き）

予定では１５話あたりで原作ブレイクの旅に出ようと思います。
がんばるかな～

闘技大会（前半）（前書き）

むむむーー

闘技大会（前半）

どうもケンイチです。え?今何処にいるかって聞いてくださいよダンナ何時の間にか置いてかれちゃって敵に囲まれてます
え?何故こうなったかって?よし回想に入ろうか!!

~~~2時間前~~~~~

「ケンー!行くわよ」
「あっはい」
「それにしても歩いても歩いても木ばっかね?」
「敵も出てこない」

ほんとですよね~どうなってるんだろ?ん?何だあれ・・・・・スゲーでかいなこの扉な~シエルこれなんだ?

『わからんじゃが何か不愉快な感じがするの』
「ふ~ん」
~~~

扉を触ろうと近づこうとする

『ケンイチ!!触れない方がいい』
「なんで?」
『かなり強力な結界が張られているこんなのに触れてしまうと』
「死んじまう?」
『いや結界が壊れていろいろ不味い事になる』
「なんかもう・・・いやいいや」

もうさあれだよね。俺何でもあり

『ケンイチ皆先に行ってしまったぞ?』
「え?ちょっちょまてよ」

すいません物投げないで・・・・・・って
皆どこですか~~~~~~森の中で助けを叫ぶ
ありゃぁ~もう皆迷子ですか?

『・・・・・・』

御免なさい突っ込んでください無視しないで~!?(ぐす

『カワィィ(ボソ)』

やめって～～～そんな言葉はまっていないです
つっこみを待っているんです！！
はいっすみませんさって如何しようかな？
シエル皆の位置わかる？

『いや』

一言！？一言で会話を終了された！？
くっだが俺は負けないぜ・・・・・・・・

～～～～～～一時間経過～～～～～～～～～

すいませんさっきの言葉撤回させてくださいくじけそうです。
負けそうです。もう誰でもいいから
でってこいやーーーーーーーーーーーーーーーー！！

《ガサガサ》

！！

A「っち敵なんかいないぜ?どうするよ?」
B「もうほとんどやられたのかもしれないな」
C「はぁ～なんでこんな事になったかな～」
D「そりゃお前が・・・・・」
E「まだいたぜ?しかもあの使い魔のガキ」
F「あ～あの女どもの?」

うわ～いかにも悪そうなのが

～～～回想終了～～～

で今が来たわけ

ケン「貴方がただれですか?」
A「誰だと思う?」
ケン「敵ですか?」
B「正解～」
C「賞品として俺たちと戦ってもらおう」
D「さ～やろうか?」
EF「「ケンイチくん」」
ケン「ダッ」
ABCDEF「まちやがれ!!」

何故俺のなまえを!?て言うかやばい!どうしよ?『倒せばいい』
だからばれる訳にわいか・・・な・・・い・・・・だろ・・・ん?
まてよ?
今の俺の状況は迷子そう【迷・子】フフフという事は、近くに勇
者御一行は
いない俺一人＝力使い放題!!

ケン「クククククク」
A「どうした坊主?」
B「恐怖でおかしくなったか?」
「「「「「「ぐはははははは」」」」」」
ケン「いや・・・やっと自分の力が試せるんでな?」
ケン『「うれしいんだよ!!」』
「「「「「「「!!」」」」」」」

さぁショータイムだ!!

「食らえ炎龍!!」
《グギャーーーー》

ケンイチの背後から巨大な龍が現れ敵ＢＣを食らう

ＢＣ「「ぐわあああああ!!」」　（ぼと）

敵の目の前に変わり果てた仲間が2人いた
（ぐぅぅ）まだ微かに息はあるようだ。

A「なんだよ何なんだよお前！うおぉぉ」

斬りかかろうとする敵だがその剣を素手で掴むケンイチそして
そのまま近くにある岩にぶつける

A「ぐは！？」
DEF「ひっ」
ケンイチ「逃がすか！くらえ俺の世界のアニメの力！！
俺の右手が真っ赤にもえるー！！お前らを倒せと
轟叫ぶ！！爆熱！！ゴットフィンガー！！」
DEF「ぐあぁーーー」

ふー・・・すげクレーターができちまったうーんて言うかアニメの
ガ〇ダ〇の技出来ちまったよ・・・・
適当に手に火をイメージしただけなのに・・・・・まぁいいか

「バトルロワイヤルを終了します。
勝ったチームを転移しますのでお待ちください」

おっ終わったみたいだ。てかどうやって確認しいているんだ？

まさか見てたとか・・・・・
『いやどうやら出場しているチームに
発信機みたいなのを付けていたみたいじゃ』
ほっならいいか・・・・一安心
お魔方陣転移だな・・・・・・・・

「ふー戻ってこれた・・・・皆何処かな?まさか負けた?」
「誰が負けたって?」
「あっメーゼ!よかった」
「勝ったんだよね?」
「「「「「もちろん」」」」」

よかったーと言う事は今度こそ大会って事なんだ

「えーそれでは対戦相手を決めたいと思いますんで
クジを引きに来てください」

おっ対戦相手が決まる見たいださーてだれになるのかね~
強くなかったらいいな~ん?うわ何あのチームイケメン2人に
美女4人めっちゃ絵になってるw
すげ~リアルイケメン死ねばいいのにw

「よし、それじゃ私たちも引きに行こうか?」
「「「「はい(うん、いいぜ)」」」」

あ！受付の人だ！名前何て言うんだろ？
受付の人て言うのめんどくさいんだよね。
おっ近づいてきた。・・・・・うわ！？

「なにするんですか？受付のお姉さん」
「セイン私の名前」

そう言って頭を撫でて来るセインさん、
くすぐったいでもなんか気持ちいい・・・・・

「ケン！」
「はっ」
「セインさんはなして下さい」
「いや♪」

むむむ～はっ思考がだんだん子供にやばいやばい
俺は大人俺は大人・・・ん？でも体は子供？
・・・・・・・ぐす・・・・・・ハッいかんいかんとりあえず脱
出しなければ

「放しなさい」
「あっ」

助かったヘレンには後でお礼言わないと

「さっクジ引くわよ」
「ケン引いたら？」
「なぜ！？」
「何となく？」
「いや聞かれても（汗）」
「まぁ良いからほら」

はぁしょうがないよーしザコと当たりますように！・・・・・
『まぁ予想道理というか』ｏｒｚ何ということかいきなり優勝候補とだなんて（泣）

「あら～」
「なんというか」
「まぁ良いんじゃない」
「・・・不幸体質」
「うわ～」
「何かすいません」

皆の視線が痛いだから嫌だったんだー！！勝てるかな？

「それでは試合を始めたいと思いますので試合のある方は待機室にお持ちください」

おっと行かなきゃ、ん？最初なの？そうなんだよ
ほんと何かに憑かれてるのかな俺？

「がんばるわよ！」

「「「「「おー！！」」」」」（金のため、部品のため、飯のため）
ボソ

あれ？何か聞きたくない言葉が・・・・・気のせいだよな・・・
そうだよな・・・うん

「それではー！！ケイル闘技大会開始します！！
まずっ一試合目右から現れるのは優勝候補ガイアチーム！」

うわめっちゃ強そう流石優勝候補、気合いれなきゃな、まっ俺は
補助だけどなｗ

「そして今注目の勇者御一行の美女と使い魔チーム！」

うわ何このチーム名てか勇者ってばれてるんだｗ

「さぁこの戦いいろんな意味で見逃せないぞー！！」

いろんな意味？如何言う事？

「試合を開始します。」

ちょっまだ心の準備が

へ「ケン強化お願い」
ケ「わかりました！」
へ「全てを焼き尽くす紅蓮の炎よ大地を焼き尽くせ！！」

うわ・・・・行き成り上級魔法・・・相手焦ってるよ・・・・・
とっとりあえず強化っと・・・・・・あミスった
2倍所か5倍にしてしまった・・・・・敵さん・・・ごめんなさい

へ「グランドファイヤ」（金のため）ボソ
（ボギャアアン）

うわ～目の前真っ赤だよ・・・・・相手大丈夫かな？てかへレン
どんだけ金欲しいの？

ガ「っくあぶねー」

おっ一人だけ倒れてないのこたんだなって・・・・クリスさん？何処行くんですか？

ク「くたばれー」（飯ー）
ガ「ぐは！？」（バタ）

うわー容赦ねーてかあんた等、欲望駄々漏れだぞ（汗）

「何ということかー！？優勝候補と言われたガイアチームが2分もしないうちに倒されてしまったー！強い強いぞ美女と使い魔チーム」

もう何だかなー・・・・・・・・・・・・・

闘技大会（前半）（後書き）

うむ何が何やら

感想待ってま～す

闘技大会～休憩～（前書き）

ネタがネタがーーーーーーーーーーーー！！

闘技大会～休憩～

一試合目を一分で終えたケンイチです。
あれから何があったかって？
二試合目も一瞬で終えてしまいました。・・・・・・・
え？それだけかって？それだけですよ？
だって・・・何かもういえ・・・・あっ・・・・そうですね・・・
これだけ言えます
このチーム怖！？

「あっというまに決勝・・・・」
「よし！もう少しでお金が！！」
「飯が」
「部品が」
「ご飯が」
「フフフフフ」

怖！？本当にこれ勇者？何だかな～はぁ

「決勝まで休憩を取りたいと思いますので
一時間後にまた此処に集まってきてください」

ふむ・・・闘技場をブラブラしようかな？この人達戻って来ないし・・・・・ん？
あ・れ・は！？何だろう？果物？どっかで見たことあるような？・・・・
・・・・・あっ！思い出した！〇ラ〇ンボー〇・・・・・・じゃなくてあの時の

オレンジ色の丸い玉だ！！でもなんでこんな所・・・に？うぃ？視界が急に高く・・・・

「うわ！？」
「捕まえた♪」
「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ！！」

は！？思わずネタに走ってしまった！？
てかセインさんまた貴方か？

「話してください」
「だめ～♪」
「ＨＥＬＰ～～ＭＥ～～～～」
「話しなさい」（バシッ）
「いった～～」

タスカッタ～

「ありがとう、ヘレンさん」
「どういたしまして～♪」
「可愛い」

ふっもうなれたぜ・・・・・・・・ごめんなさい嘘です。
そんなに心強くありません・・・ｏｒｚ
そんな事より闘技場見て回ろうっと・・・え？セインさん？
ヘレンに叱られてますｗ
ザマー

「此処は何処だ」ｏｒｚ

あれーただ歩いてただけなのにな～?俺って方向音痴?
まぁその辺ぶらぶらしてたら見つけてくれるでしょ・・・たぶん

（グ～～）

腹減った～飯～何か食べ物は～
『創造で作れば良いだろう?』
は!その手があったか、よしイメージ開始

「できた～う○い棒」
（バリバリ）
「味が無い」
『ちゃんとやらないからだろう』

くっ次こそイメージするコンソメ味を
あの何とも言えない味をイメージする
来い！！う○い棒ーーーーーー！！

「うん、旨い成功」
『はぁ～』
「どうした？」
『いや、こんなので大丈夫なのかと思っただけじゃ』
「・・・・」

あっあのイケメン二人は！
『誤魔化すきか？』
次の対戦相手だよーーーし
『ケンイチ』
此処であったのも何かの縁だ
『はぁ～』
道聞こう
『ケンイチ・・・・』

「すいませ～ん」
「ん？」
「どうした？カズ」
「いや、子供が・・・」
「む・・・その子供は、使い魔の」

さてどうやって聞こうか？

「僕のこと知ってるんですか？」
「ああ対戦相手だしな」

「それじゃ話が早い」
「「！！」」

如何したんだろ？身構えて？まぁとりあえず聞こう

「道教えてください」
「「は？」」
「だから道教えてほしいんです」
「そっそう言うのを次の対戦相手に聞くか？」
『まったくもってそのとうりだ』
「そうですか？（しょうがねえだろ迷ったんだから）」
「まぁ・・・いいや向こう側を真っ直ぐいけば闘技場だ」
「ありがとうございます！！」

やった教えてくれた。イケメン死ねって言ってすみません・・・・
・やっぱ死ね・・・
え？なぜかって？後ろ向いたら何時の間にか女の人が来てて抱きつ
いてるんですよ？
むかつきません？むかつきますよね。嫉妬？なにそれ？おいしいの？

その後無事皆と会って決勝にいきました・・・・『コッテリ叱られとったけどの』・・・・・orz

闘技大会～休憩～（後書き）

反省はしてない！

伸びろーーーーーーーーーー

闘技大会（後編）（前書き）

誰か俺に元気を分けてくれー！！

闘技大会（後編）

やってきたぜ決勝！！相手を完膚なきまで倒してやる！
え？何でそんなにやる気があるのかって？
何故なら！相手があのイケメン美女チームだからだ！！
フフフフフ・・・・・・・・何回も言うけど俺は補助だけどね♪
弱虫？嫉妬？だから何それ？おいしいの？

「さぁーやって来ました！決勝戦右から来るのは」

出番だ・・・・ククククク

「美女と使い魔チーム！！全ての戦い１分で
終わらせるという驚異的成績をだしている！！
この戦いも一瞬で終わらせるのかーー！？」

あのーこのチーム名如何にか成りませんかね？無理？やっぱり・・
・・・はぁ

「そして右から来るのは光の翼チーム！
このチームも殆どの試合を好成績で倒しています！
さぁ注目の戦いどうなる！？」

え？何ですか？もう始まりますよ？俺の影が薄い？
・・・・フフフフ・・・・ｏｒｚ・・・・・・・どうせ・・・・
どうせ・・・

「ケンイチ？どうしたの？」

「いえ、読者達の言葉が心に刺さっただけです」
「？そう？」
「はい」

俺は負けない！！（主に精神的意味で）

「試合を始めたいと思います！！両者構えてください！」

【強化発動】

「試合開始！！」

さぁいくぜ！！

へ「くらえー！【光斬】」

光の剣が相手を襲う

？「あめーぜ！！」

相手チームのリーダーカズヨがそれを防ぐ（以下カ）

へ「くッローア補助お願い」
ロ「わかったわ！全てを飲み込み！！我に勝利を！【アクアロード】」

大量の水が相手を襲う

？「させない・・・・ブリザード」

水を凍らせ津波を止める

カ「サンキュ、リーサ」（以下リ）
へ「よそみをしてる場合？」
カ「クっ」
へ「ケン！強化を！」
ケ「わかりました！」

【強化発動】

ヘレンの光がより一層強くなる

へ「喰らえーーーー！！」
カ「やべ！！」
？「まったく、シールド」
カ「あぶねー！！もう少しでやられる所だった！」
？「気をつけろ」
カ「ああ！援護頼むぜカイ！」（以下もういいや）いいよね？

カイトがヘレンに斬りかかろうとする

メ「させないよ！」
ク「喰らえ！！」

メーゼがカズヨの剣を受け止めクリスが短刀を投げつける

？「させないわ」
？「やれ！」

投げられた短刀を弾き返されもう一人が召喚獣で攻撃を仕掛けて

くる。

ク「うわ！何こいつ！？」
メ「糞が！！」
カ「あんがとよ、ルナ、サイ」
ル「死ね・・・・・・」

おいおい・・・（汗）

カ「お前の相手は俺だ・・・」
ル「チッ・・・」

あれー俺一人ぼっち？なわけないかｏｒｚ誰だろう？

？「悪いけど相手して貰うわよ少年」
ケ「ハッハハハ（汗）」
？「一撃で終わらせてあげる」

うわ！？子供相手にそんな強い技使うか普通？

ケ「チッ」
？「な！？」

やべー思わず受け止めちゃった！！どうしよ？
《ドウギャーン》

ケ？「「！！」」

どうやら向こうは終わったみたいだな・・・よし逃げよｗ

？「あっ待ちなさい」
ケ「無理デース」

フー逃げ切ったぜ！流石俺！

へ「あっ大丈夫だった？」
ケ「はい！」
へ「それじゃぁ一気に決めるわよ」
ケ「分かりました」

結構強いから強化８倍位にしよｗフフフフｗイケメンなんてイナクナレバイイ！！

へ「我が敵を撃ち滅ぼせ【サンシャイン】」
ケ「（強化８倍）」（笑）
《ドガーン》
へ、ク、メ、ル、ロ「え！？」

うわーステージが半分消えうせちゃったｗ

「何という威力だー敵を全て倒してしまったー！
しかし、殺してしまったら失格、相手の生存を
確かめていますので今しばらくお待ち下さい！」

生きてるかな～・・・まぁ大丈夫でしょ・・・

「大丈夫です！相手は生きています！
これによって今年の優勝者は美女と使い魔チームだー！
やはり強かった！勇者の名は伊達じゃない！」

「何はともあれこれで、金が！」
「飯が」
「ご飯が」
「部品が」
「薬品が」
「「「「「手に入る！！」」」」」

はぁやっぱそれなのね・・・・

～～～～～～謎の大きな扉～～～～～～

［結界］ピシ）

ケンイチが訪れた事によって封印されていた。結界が壊れる。
謎の扉の向こう側には大量の【魔物】
《《《《《グギャーーーーグワー》》》》》

闘技大会（後編）（後書き）

今日の最新は（たぶん）終わり
感想書いてくれたらやるきでるんだけどなー＾＾
まぁとりあえず《また来週》バイ

PV100000ヒット記念（雑談）（前書き）

ついについに

ＰＶ１００００ヒット記念（雑談）

ＰＶ１００００ヒットーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！

みなぎってきたーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！

『うるさいぞケン』

だって１万だぞ１万やったね♪って成るだろう？

『だが五月蝿いもんは五月蝿い』

何か今日は厳しいね・・・はぁ・・・・いかんいかん！！
今日は明るく！元気に！顔輝に！

『なんだその顔輝とは？』

なんだろう？とりあえず今の俺の力と現場把握だぜ！

『何という適当さ・・・』

いいんだって！よし行くぜ！

ＨＰ：測定不能／測定不能
ＭＰ：測定不能／測定不能
ＡＴＫ：測定不能
ＤＥＦ：測定不能

ＳＰＤ：測定不能

改めて思ったけどこの測定不能？如何いうこと？

『うむまぁ規格外だとおもっとけば良いじゃろ』

答えになってねぇ（汗）

能力：創造、魔力変化、次元移動、謎の眼

うん、これねもうさ、完璧に使いこなせたら、たぶん負けないよね・・・

俺以上のチートじゃなきゃ・・・

『うむ、そうじゃな』

そこは、うむ惚れるな！って言って欲しかった・・・

『む？ウムボレルナ？』

いや、別に言い直さなくても、しかもカタカトだしよｏｒｚ

『ケン・・・・がんば♪』

人事ダナおい！

『ほとんど人事だし？』

（グサ　うっシエル何かシエルなんか大嫌いだーーーーーーー！！

（ダッ

『かわいい』（止め

俺は可愛いくなーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーい

PV100000ヒット記念（雑談）（後書き）

キッターーーーーー

魔物（前書き）

もうすぐだなｗ

魔物

『ケンイチ！！』

あ？なに？

『大量の魔物が町に向かってきてる！！』

は！？如何いうことだよ！！

『わからん！だが何かに惹かれるように一直線に向かってきておる！』

くそ！如何すれば！？

「皆さん！！大変です！魔物がこの町に向かって来ています！」

「「「「え！？（なに！？）」」」」

如何やら向こう側も築いたみたいだ。これなら間に合うか！？

「どうして此処に！？」

「如何やら封印されていた魔界への扉が開いたみたいです！」

「魔界への扉？」

「ええ・・・此処から奥に行った森の中にあるのですが・・・どうやら何かの表しに封印が解けたみたいです」

「誰かが解いたの？」

「いえそれはありえません、あの扉には不可視の魔法が掛けられていますので
人間の手で解く事は不可能に近いです！」
「そうなの・・・・・」

森の奥にある扉？・・・・・・扉・・・！まさか！？あの扉か！？シエル！

『うむ・・・どうやらそのようだ・・・あそこから大量の魔物の気配がする』

でも・・・なんで・・・いや俺のせいか・・・・俺の魔力によって・・・

『ケンイチ・・・・』

糞が！！

「魔王・・・の・・・襲・・・・撃」

！！

「如何言う事よそれ！ルーズ！」
「魔王が動き出したってこと・・・」
「とうとう・・・」
「覚悟決めなきゃね・・・」
「ああ・・・」

覚悟か・・・・・・はぁ・・・俺も覚悟決めなきゃな～・・・・・・

こいつ等と【戦う】覚悟を

『そうじゃな・・・・・悲しいか？』

ん？ははは・・・悲しいよ・・・悲しいけど・・・・最初から最後まで・・・

逃れられないからさ・・・この運命には・・・・・・

『そう・・・・じゃな・・・・・・』

ま？今は今を楽しむけどな！そんな先のこと考えてもしょうがねぇしｗ

『強いなケンイチは・・・』

（強くねぇよ）ボソ

「皆！行くわよ！！」

「「「「「ああ！！」」」」」

「皆さん！？何処へ行くきですか！？」

「もちろん、魔物退治へ！」

「危険です！相手は大量にいるんですよ！？」

「大丈夫よ！それに無限にいるわけでもないのに」

「いえ・・・相手は実質的に無限にいます・・・」

はぁ？なんだそれ？

「如何言う事？」

「さっき言いましたよね・・・扉の事」

「ええ・・・！まさか！？」

如何言う事?俺にもわかる様に言ってくれ・・・

『ケンイチ・・・扉の向こう側にあるのは?』

ん?そりゃぁ魔界だろ?さっき言ってたじゃんw

『そこにいるのは?』

そりゃぁ・・・・・・魔・・・物・・・だ・・・ろ!?そう言う事ね・・・

「奴らを消すには扉をまた封印するしかないんです!」

「それじゃぁ封印すれば良いじゃない」

「それが無理なんですよ・・・」

「?どうしって?」

「封印するには最低でも上級の魔法使いを１００人集めなければ・・・・・・」

「な!?・・・他に方法は?」

「あります・・・・・ですが・・・不可能に近い」

「どういう方法?」

「魔王を倒すんですよ・・・・・」

「!!」

マジッすかうわぁを俺、命の危機w

「でももし倒したとしてもあそこが閉まるの?」

「いえ・・・魔王倒してもあそこは閉まりません」

「じゃぁどうやって・・・・・」

「魔王の血ですよ・・・しかも心臓の血を」

「血？・・・・でもなんで・・・・」
「血を魔力の代わりにするんですよ・・・そうすれば・・・・」

うわぁーグロイですなーしかも俺のだぜ（汗）

「よし！ならそれで行こう！！」
「無理ですよ！魔王ですよ！」
「大丈夫！！何たって私は【勇者】何だから♪ね♪皆」
「はい！」
「ああ」
「うん・・・・・」
「はい」

・・・・・・・・・・・・・・・こりゃぁ早めに覚悟決めなきゃな・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・わかりました。魔王たぶん魔界の城に居ると思います・・・・・」
「わかったわ！」
「でも魔物の足止めは誰が・・・・・」
「「それは俺たちが引き受けてやる」」
「貴方たちは光の翼の・・・・・」
「ああ、カズヨだ！よろしく！今の話し聞いてたぜ！
俺たちがあいつらの相手をしてやるからその内向こう側へ行きな」
「え・・・・でも・・・・」
「大丈夫！！俺らは強い！からな」
「・・・ありがとうございます・・・」
「良いって俺らよりあんた等のほうが大変だろ？がんばれよ」
「はい！」

おおー協力者が！て言うか思ったんだけどこのカズヨって物凄い勇者って感じがするの俺だけかな～・・・・・・

「それじゃ皆今度こそ行くわよ！！

「「「「「ああ！！」」」」」

これが俺と勇者との最後の旅だった・・・・・・・・・・・・・・

・・・

魔物（後書き）

行ってほしい世界があったら感想に書いてくださいｗ
１６話から異世界なのでｗ

魔王城へ（前書き）

最新最新っと

魔王城へ

「これが魔界への扉・・・・・・・・」
「今頃になって怖くなった？ｗ」
「そんなわけ無いでしょ！さぁ行くわよ」
「その前に回りにいる魔物を如何にかしなきゃ・・・・」

扉の回りには魔物の群れ群れ群れ群れ！一言言ってキモイ！

「どうする？」
「突っ切るぞ！」
「「「「へ？」」」」

そう言って走っていくメーゼ・・・・・マジかよ

「ちょっ！？」
「あーもう！皆！こうなったら行くわよ！」
「ちょっとヘレンまで！？」

えー！マジですか！？俺イヤダナ・・・・・

「ほら！行くわよ！」

え？ちょっ！？ヤメ・・・やめてーーーーーーーーーーーーー

ーーーー

・・・・・・・・マジかよ・・・・本当に突っ切りやがった・・・・

・・
この人達・・・・俺・・・・・勝てるかなー
・・・・いやマジで・・・・はぁ・・・・・・・え?そんな事はどうでも良い?
俺にとっちゃどうでも良くないんだよ!
・・・すいません・・・物投げないで・・・え!?ちょっ
その持ってる刃物を置いて下さい・・・マジでお願いします
・・・・・・え?今の状況?教えてほしいw?~・・・はい説明しますんで・・・
その・・・刃物を・・・・・向けないでください・・・・

「何だ此処!?」
「黒い木・・・・・」
「何この空・・・・」
「太陽が・・・・・」
「不気味・・・・・」

何と言うかまぁあれです簡単に説明すると・・・・・・
赤い空!黒い木!紫の太陽!そして!!目の前に城ですね・・・・
何か勇者に召喚されてよかったーって今なら言えそうです・・・・
はい

「何か来るぞ!?」

うわーすっごく大きいです・・・・・・鳥みたいな魔物が・・・

「な!?アクババ!?何で伝説の魔物が!」
「さすが・・・魔界」
「そんなこと言ってる場合じゃない!」
「来るわよ!!」

来て早々バトルですか!?やだなー

『根性無し』

聞こえなーい♪

『クズめ』

グサ）あれ?何か目から汗が・・・・

「ケンイチ強化を!!って何泣いてるの?」

「違います!!心の汗です!」

「そっそう（汗）」

俺は・・・俺は・・・・クズじゃなーーーーーーーーーーーーーーーい強化１０倍じゃぁぁ

『クズが弱点か・・・フフフ』

何か聞こえたような・・・・・

「【サンシャイン】」

≪ズギャーン≫

わおっ馬鹿でかいクレーターがｗ

「時々思うんだけどこれ2倍じゃないよね?（汗）」

ははははは・・・そのとうり!!っとわ言えないので

「気のせいですよ」
「そうかなー？」
「とりあえず城へ急ぐわよ」
「「「「ああ！！」」」」

どうやって魔王である事をばらそうか？
と言うかテンプレ的に四天王とか居そう何だけどなー現実と非現実は違うてか
まっこの世界来てからもう非現実だけど・・・言ってて悲しい

「止まって貰おうか？」
「「「「「「！！？？」」」」」」
「誰だ！？」
「我らは四天王この城を守るものだ」

うわー噂をすれば何とやらだ・・・・

「四天王！？」
「此処を」
「通りたければ」
「我らを」
「倒していけ」

またバトルですか・・・・て言うか俺戦って良いのかな？
相手もきずいてないし・・・・
どうしよ・・・・シエ『自分で考えろクズ』
・・・ぐすん・・・この頃シエルが虐めてきます・・・

「皆！準備いい！？」

「「「「ああ！！」」」」

え！？まだ俺でき・・・・て・・・ねぇ・・・・・もういいや流れに任せよ・・・

魔王城へ（後書き）

後3話でこの世界も終わりですねー
ケン「それも運命なのさ・・・」
・・・・・・・・・・・・
ケン「すいません・・・突っ込んでください」
皆さんの感想まってまーす後次の世界のこともお願いしまーすw
ケン「突っ込まないで無視だと！？」
『哀れ・・・』
ケン「ぐすん・・・・」
ばーいw

四天王との戦いそして裏切り（前書き）

フフフ駄文だぜ・・・・・・orz

才能がほしい・・・・・・・・

四天王との戦いそして裏切り

拝啓、父上、母上様、私、風間賢一は今、物凄く困っています
・・・・・本当に・・・・・・・どうしようｏｒｚ

「私たちは魔王を倒して世界を平和にするのよ！！だからそこを退けーー！！」

此処に居ます。シエルさん・・・・・・

「ふん、貴様ごときを魔王様に合わせられるか！」

だから此処に居ます・・・・・

「負けられるか！！魔王に会うまで！」

もう会ってます・・・・・・・てよ・・・何で此処に俺が居るのに
あいつらはあそこを守ろうとするんだ？・・・・・・・まさか・・・
俺以外に魔王が・・・・・

『おらんぞ』

ｏｒｚ俺の希望が一言で粉砕にされてしまった
・・・・負けない・・・・・・だって男の子だもん♪

『かわいい』

ぐは）まさかの攻撃！？読者に包丁で刺されると思ったのに
まさかのかわいい！？・・・・シエル恐ろしい子・・・
え、ちょやめ、包丁をこっちに向けないでーーーーー

おっとこんな事してる場合じゃなかった

「くっケン強化をお願い！！」

えーどうしよ？此処でばらそうかな？え？それじゃぁ面白くない
もう少し先で？
じゃぁとりあえず【強化】

「喰らえーーーーー【シャイニングフォース】」

うわぁ何か凄い技出たよ・・・・・

「なっ！？」

四天王の一人がナッパ見たいに死んでしまった・・・・・何と言
うか哀れ？

「くっ何だあの威力は！？」
「余所見をしてる暇は無いぞ！！」
「喰らえ・・・」
「グッ」

どんぱっちやってるね～・・・・そうだ！！今のうちに奥に進ん
で皆を待とう。
簡単に表すとこんな感じ。

先に進む→奥で皆が来るのを待つ→魔王である事をばらす→バトル！！

うん完璧！さぁそうと決まれば実行だ！！

『いいのか？ほっといて？負けるかもしれないぞ？』

あれぐらい勝ってくれなきゃ・・・相手にならないでしょ・・・・・
それに面白くない

『そうか・・・』

さぁ楽しませてくれよ・・・・・勇者殿・・・・・ククク・・・・・・
・どう？魔王ぽい？ね？ね？

『ケンイチ・・・・』

おっ話してるうちに着いたぞ・・・・・・・・・ダレ？アノヒトダレ？ネェシエル？シッテル？

『いや分からん』

よし！こうなれば聞いてみるのが一番！！

「貴方どちらさまですか？」
「見て分からんか？」

わかりません

「魔王じゃ」
「は？」

え？ちょ如何いうこと？困ったときのシエルー
あの人が魔王って言ってるんだけど本当？

『いや、魔王ではないと思うが』

じゃぁ偽者？

『そうだと思うが・・・・』

これは直球に

「おい、こら！偽者！！」
「偽者？我が？ハハハハハハ、小僧面白い事を言うな」

この人本当に偽者？めっちゃ怖いんですけど・・・・・

「なら証拠を見せてみろ！！」
「証拠ならこの力だよ」

そう言うと自称魔王が魔力を放出した
うん凄いねこの魔力何と言うか禍々しい。
シエルこの人本当に偽者？何度も聞いて悪いけど

『うむ完璧に偽者じゃ』

なぜ？

『力が弱すぎる』

これで！？

『ケンイチはこれ以上じゃぞ』

ぅぐ・・・じゃぁ如何する？この人？てか人？

『殺してしまえ』

物騒ですね・・・・・シエルさん・・・・まぁしょうがないか・・・

「自称魔王さん消えてもらいますかね？」

「は？小僧？何といった？」

「消えろ！！って言ったんだよ！糞が！」

「小僧が調子に乗りよってーーーー！！」

魔王の手に禍々しい魔力の塊が集まる・・・・・

「死ねー！！小僧！」

「小ちぇな」

ケンイチの真上にそれの１０倍はある。黒い炎の龍・・・

龍は口を大きく開け自称魔王を飲み込みそのまま外へ

「やばーボロボロにしてしまったｏｒｚ」

『穴が開いた所に椅子でも置いて座っておけば感じが出るのでは？』

「おう、それだ♪」

さて後は皆を待つだけ・・・・・フフフ・・・皆の驚く顔がたのしみだ・・・・・

あっ後父上、母上様何とか成りました。

『両親は居ないのじゃがな』

いいの♪いいの♪こういうのはのりが大事♪

四天王との戦いそして裏切り（後書き）

後二話～～～～♪明日には終わらせる気で行きます！
うおおおおがんばるぞーーーーーー
あっまだ次の世界で行ってほしい所があったら感想よろしくまだ間に合う！！

魔王（前書き）

最新最新ｗ

魔王

「暇だ・・・・」

あー暇だ・・・まだ来ないのか？シエル

『如何やら今勝って此方へ向かって来とるようじゃ』

遅いなーこうなったら罠とか作ってやろうか入ってきた瞬間３千を超える剣とか・・・

『いや死ぬじゃろ』

ですよねー・・・・暇・・・・・・しりとりでもしようぜ

『なぜ』

暇だから？

『はぁ・・・わかった』

よし！！ならしりとりのり、からだ！り《ギギギ》・・・来ましたね

「魔王！！お前を倒しに来たわよ！って・・・ケンイチ！？」

「お前何処へ消えたと思ったらここで何をしてる？」

「それに魔王は！？」

さて・・・・やりますかね

「此処で何をしていたかと言えば貴方たちを待っていた。
魔王が何処かと聞かれれば・・・・『俺が魔王だ!!』」
「「「「な!?」」」」
「何の冗談?」
「『冗談ではない・・・』」(残念ながら)
「じゃあ何か魔王はずっと私達と一緒に居たと言う事か?」
「『そうだ』」
「向こうでの扉を開けたのもケンイチ?」
「『ああ・・・もう良いだろ・・・さぁ殺りあおうか・・・』」

そう言いケンイチの回りから莫大な魔力が出てくる・・・・

「くっ」
「何て魔力!!」
「これが魔王という証拠か」
「こうなったらやるしかないよ」
「でも!!」
「ヘレン!これが現実だ」
「・・・分かった・・・皆いくわよ!!」
「「「「おお!!」」」」

さぁ皆さんお待ちかねの俺様チートタイム・・・・・だぜ

ケ「『燃えろ』」

炎の波がヘレン達を襲う

ロ「水よ我らを守れ【アクアシールド】」

ローアの魔法で炎から身を守る

ル「【サンダークラシャー】・・・・・」

雷がケンイチを襲うが魔力変化でそれを打ち消す

「「「「「な!?」」」」」

ケ「『俺に魔法は効かないぞ・・・・【黒龍】』」

闇の龍を放ち武器を創造する
すべてを飲み込み無に返す闇黒の剣を・・・・・

ク「光よ!!」
（バッチ）
メ「全てを焼き尽せ炎よ!!【フレア】」
ク「全てを飲み込む爆風よ!【ストーム】」

メーゼによって出された炎がクリスの風によりさらに強くなる

ケ「『無駄だ・・・』」

もう一度消し今度は魔剣で斬りかかる

ケ「『死ね・・・・』」

魔剣から真黒の闇が出るその闇クリス達を襲い飲み込もうとする。

「「「「「キャァアア」」」」」
ケ「『弱い・・・弱すぎるぞ!!勇者!これで終りにしてやる!』」

魔剣に魔力が溜まる全てを飲み込むように闇が溢れ出す・・・・・

ケ「『終りだ!!』」

クリス達を襲う闇の斬撃・・・そして全てを飲み込みケンイチの前には闇の塊だけ

ケ「呆気ないな・・・・・」

シエルこれでよっかたんだよな?本当に・・・・・・・

『ケンイチ・・・・・!!ケンイチまだ終わってない見たいじゃぞ!』

闇の中から光が漏れ出しどんどん光が増していく

ケ「!?」

へ「まだ・・・終われない・・・世界を平和にするまでは!!」

闇の塊が割れその中から虹色に輝く剣を持ちへレンが出てくる、他の奴らは倒れている、如何やら魔力を全てへレンに預けたようだ・・・・・

ケ「『ククク・・・そうこなくてば』」

へ「行くぞ!!魔王ーーーー!!」

ぶつかり合う魔剣と聖剣

へ「うわあああーー!!」

ケ「『クッ』」

段々とケンイチが押される・・そして隙が生まれる・・・
悪いなシエルやっぱり無理だわw・・・・こいつ等を殺すの・・・
・

『別に良いケンイチ』
そう行為的に出来た隙が・・・・

ヘ「喰らえーーーー」
ケ「ぐあああああ」
ヘ「やっやった?」

ああ・・・痛ぇ・・・・・また・・・死ぬのか俺・・・・
まぁいいか中々楽しかったからな・・・・その前にヘレンにあれ
渡しとかなきゃな

ケ「フフフ・・・やっやっぱり強いですね皆は・・・」
ヘ「!?」
ケ「早く心臓の血取らなくていいんですか?」
ヘ「ケンイチ・・・貴方・・・」
ケ「勘違いしないでください・・・最初は殺す気でしたので・・・・
ゴファ」

やべぇマジで死にそう・・・さっさと渡しちまおう・・・・創
造開始・・・・・

ケ「後これ、僕を倒した賞品みたいなものです。
これを封印した扉に投げると向こうとこっち側
・・・・魔界と人間界は一生交じり合う事は無くなるアイテムです。
」

へ「そんな物が・・・・」

もう無理っぽいな・・・・俺が言うのも変だけど・・・・・

ケ「皆さんによろしく・・・・言っといて下さい」

此処で俺の意識は途切れてしまった

今思えばこれが俺の始まりだったのかもしれない・・・・・・・・

魔王（後書き）

いやー終わりましたね決戦！
さぁーいよいよ後1話賢一が行く世界は！？

次話「精神世界～～また此処か！？～～」

お楽しみに～～～（今日には最新しようと思ってます）

精神世界　～～また此処か！？～～

此処は？何処だ？

『精神世界じゃよケンイチ』

は？またですか？てか俺死んだんじゃ？

『ん？言ってなかったか？ケンイチに死という概念は無いぞ』

・・・・・・・・・・何ーーーーーーーーーーーーーーーーー！！

じゃぁまた・・・・異世界で魔王を！？

『少し違うがまぁそうじゃな』

少し違う？如何いうこと？

『違う所はもう魔王では無いこと・・・・』

へぇ～！？は！？如何いうこと？

『いや斬られたじゃろ最後・・・』

え・・・うん・・・まぁ斬られましたけど

『そのときの何と言うか聖剣の力を奪ってしまったようでな
そのケンイチの力が強くなりすぎて魔王ではなく魔神に』

いやーーーーーーーーーー！！聞きたくない！！
これ以上強くなって如何すんの俺！？

『まぁ世界を何処でも行けるようになったと思ってくれて良い
いわゆる自由じゃ！』

自由ですか・・・自由・・・フハハハハハーーーフリーーーーーーーダム
ってなるか！！ぼけっで俺の力どれ位になったの？

『見るのか？よした方が』

良いからみ・せ・ろ！！

『わっ分かった』

ＨＰ：∞／∞
ＭＰ：∞／∞
ＡＴＫ：∞
ＤＥＦ：∞
ＳＰＤ：∞

ぐはっこの時点で俺の精神ダメージが・・・

能力：創造（武器、防具、アイテム、食べ物、自分が考えた物を作り出す。
能力を付け加える事も可能　ＮＥＷ　生命を生み出せるようになった！）

魔力変化（魔力を自由自在に操り変化させる　ＮＥＷ　魔力を吸収出来るようになった！）

次元移動（異世界へ飛ぶ事が出来る。扱える用になれば好きな所への
　移動が可能　ＮＥＷ　時空を飛べるようになった！！）

謎の眼（相手の能力、ステータスを見ることが出来、見たものすべてを理解できる。
　ＮＥＷ　相手の技をコピー出来るようになった！）

ＮＥＷ　自然の力（全ての属性を操れるようになった！）

ＮＥＷ　不老不死（年齢操作が可能２５才から発動できます）

俺はーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！

何処へ行くのでしょうか？誰か教えてください・・・・・・

『とっまぁこんな感じに・・・・・』

ｏｒｚ・・・・・・・・・ブツブツブツ・・・・・・・・・死・・・？・・・・ぁ・・・

『ケンイチ！！』

あっはい！！何でしょうか？シエルさん？

『なぜ、さん付け・・・・まぁいい・・・・後まだ言わなければい

けないことが』

まだあるのかよ・・・・・・・・もう何でもこいや！

『また再生するのみすって6歳児から2歳児にグレートダウンしました。テヘ♪』

へ・・・・・6歳児↓2歳児・・・・・・テヘじゃねーーーーーーーーーーーーーーー

如何してくれんの！？ねぇ？何でお前はこういう所は抜けてるの！？ねぇ

『めんぼくないぃ♪』

え・・・・・・もしかして業と？

『違いますよｗ♪』

わざとだ嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼・・・・・・・・本日二度目のｏｒｚ

『じゃぁ次の世界行ってみようぅ♪』

この体でどうしろと！？

『大丈夫拾ってくれそうな人居たから』

まさかの養子フラグですかーーーーーーーーー！！

『さぁいってみよう！』

いくでがんす！！

『ふがー』

ってちがーーーーーーう！！

マジかよ

精神世界　～～また此処か！？～～（後書き）

次なる世界へ！！

ケン「俺のからだがーーーー！！」

リリカルな世界だと！？（前書き）

来ました異世界！！

リリカルな世界だと!?

どうも・・・・・賢一１０歳です・・・・2歳?ええ2歳でしたよ
・・・拾われる時は・・・あれから8年ですよ・・・え?誰に拾われたかって?
それじゃぁ回想入ります・・・・・どぞ

～～～～8年前～～～～

「うぎゃぁうぎゃぁ」（しゃべれねーー）

くそー何故こうなった!!

『なぜじゃろうな?』

おめぇのせいだろ!?・・・・くそ!それより此処は何処なんだ!?

『もうすぐで分かるよ♪』

くそがーーお前覚えとけよーーーーー!!

『ほら、来た』

「赤ん坊じゃないか!?」
「大変!!捨て子!?」
「如何やらそのようだ手紙がある」

この人たちが俺の親になる人?ていうか本当に拾ってくれるの?
この人たち

『さぁ分からん、まぁそのときはなんじゃ』

そのときは?

『ＢＡＤ－ＥＮＤ?』

貴様ーーーーーーーーーーーー!!糞・・・そうなったら
この世界混沌に支配してやる・・・だって魔王だもん

『正確には魔神じゃがな』

それだけは認めん・・・・・て言うか手紙になんて書いたんだ?

『む?それは・・・・・・』

～～～～ｓｉｄｅ???～～～～

「うぎゃぁうぎゃぁ」

!?私達が家に帰る途中泣き声が聴こえて来た・・・・

「何かしら?あなた」
「うん見に行ってみよう・・・・」

そこに居たのは2歳ぐらいの赤ん坊だった・・・

「赤ん坊じゃないか!?」
「大変!!捨て子!?」
「如何やらそのようだ手紙がある」

私達はその手紙に目を通した手紙にはこう書かれてあった。

【私は、この子を育てる事がもうできない。
私と一緒に居るとこの子はきっとあいつらに殺されてしまう
だからこの子を見つけた人この手紙を読んでくれた人に頼みたいのです
この子をどうかよろしくお願いします。この子の名前は賢一(けんいち)と言います】

「なぁこの子を家で育てたいと思うんだが・・・」
「あら私もそう思った所よ♪」

〜〜〜〜side　賢一　〜〜〜〜

うわ〜〜〜何だその手紙ぜってー嘘って分かるよ・・・・無いな・・・・

『なんじゃっと!?いやこの手紙を読んで拾ってくれるはずじゃ』

手紙は如何か分かんないけど・・・・拾ってくれる人は相当のお人好しだな・・・・

「なぁこの子を家で育てたいと思うんだが・・・」

「あら私もそう思った所よ♪」

マジかよ・・・・・

～～～～回想終了～～～～

って分けよ、え?誰に拾われたか分からないって?それは・・・・

「兄ーちゃん何しとるん?」

「ん?ちょっとなw」

八神家の人です。はいリリカルなのはですね

最初は違うかも知れないと思ったんだよ?

でもね・・・・ここ海鳴市だし・・・・しかも翠屋があったんですよ

・・・さ・ら・に夜天の書あるんだよもうねリリカルなのは以外何がありますか?

でこの子が八神はやて・・・・俺の義妹・・・・向こうは知らないけどね・・・・親?

死んだよ・・・・・・原作道理ね・・・・悲しかったな・・・・・・

っま何だかんだ元気にやってます。

でもね・・・・・

『ケンイチに平和はやって来ない』

本当だよ誰か俺に平和を・・・ん?なのはと知り合いになったのか?
ならないよだって平和に過ごしたいじゃんwえ?
はやてが居る時点でお前に平和は来ない?
それを言わないでｏｒｚ

「兄ちゃん!!」
「!?なっなに?」
「もう、ぼうとしてなんか考えこと?」
「ん~?もう少しではやての誕生日だな~と思ってさ」
「何をくれるんか楽しみにしとるけんな!」
「ははははw任せろｂ」

そう、もうすぐ誕生日だはやての・・・・・

リリカルな世界だと！？（後書き）

ククククこれからどうなる事やら

フラグ確立→死亡フラグ→さらば！

ケン「いやぁあああああああ」

本当に俺何かに憑かれてるんじゃ（前書き）

行くぜ！俺のコスモーーーーー！！

本当に俺何かに憑かれてるんじゃ

どうも、皆さん賢一です。はやてを病院に送って今、買い物をしてます。
今日はカレーがいいなーっと思って買って帰る途中何ですが・・・・
綺麗な宝石を拾いました。知ってる人は、知っている、知らない人は覚えてね♪
・・・・・・ジェルシードですね。わかりますｏｒｚ

「なぜだ!!」

おっと思わず声に出してしまった・・・・・皆が見てくる／／／
退散～～～

・・・・・くそーなぜだ!第一期は関わらない積もりだったのに!!
よっし!こいつを投げ捨ててしまおうか?そうだ!そうしよう・・・
・フフフフフ

『バカな事は考えるなよケンイチ』

だってー・・・・見つけてしまったのはしょうがない
・・・・こいつはその内渡そう・・・・うん・・・そうしよう・・・
それが「君その持ってるものは渡して」

俺の平和がーーーーーーーーーー!!ｏｒｚ　え?誰かって?
皆さんお馴染み、フェイト・テスタロッサ?だっけ?すいませんど

忘れしました。

「君？聞いてる？それは危険な物なのだからそれを渡して」

もしやこれはチャンス！？このまま渡しってはい、サヨナラよし行けるぞ！

「あ・・・はいわか「フェイト！！」」

なんだよー糞ーもう少しだったのに・・・・

「ジェルシードが発動したみたいだよ！！」

「え！？急がなきゃ」

え？ちょ・・・何処行くんですか？これいらないの？ねぇーねぇてばーーーーーー！！

本日３度目のｏｒｚ

「はやて迎えに行こう・・・・」

もう慣れたさ・・・でも今何話ぐらいなんだろ？まぁ良いか

俺は流れに任せる！・・・・適当？ふッ褒め言葉だぜ・・・ぁぁ

「兄ちゃん？何泣いとるん？」

「心の汗だ妹よ・・・」

「そっそうか？（汗）」

「さって帰るか！」

「そやね（切り替え早いなー）」

デバイス作とっこうかな?皆さん如何思います?
今の俺ならユニゾンデバイスも作れますよ?・・・作るならＡＩはシエルだけど

『ついに我に体が・・・』

まだ作るとは決まってないけどね・・・流れ的に作りそうだけど・・・

「兄ちゃん?今日の夕食何?」
「カレーだぜ!」
「やったー!」

そんな今日の平凡?な一日・・・・・

本当に俺何かに憑かれてるんじゃ（後書き）

短い？都合によりこれだけになりました。すいません
感想や質問ケンイチにやって欲しい事まってまーす。

管理局

不幸だーーーーーーー、どこぞの主人公のように始まりました賢一です。
え?何が不幸かって?それはデスね、結界の中に居るんです・・・・しかも管理局が出てくる。
場面ですよ・・・・もういやｏｒｚなぜこうなったかって?フフフそれはですね。
そうあれは公園に居たときです。

～～～～回想～～～～

「鯛焼きうめ～～～～平凡最高～～」

やぁ皆!!俺は今最高の気分だ!あれから特に変わった事も無いし平凡な毎日だ!!
後はこのジェルシードさえなければ最高なんだが贅沢は言えない

「あー最高ーーー!!」
「にゃぁ」
「ん?」
「にゃ」
「鯛焼き欲しいのか?」
「にゃぁ♪」

フフフ良いだろう今の俺は機嫌がいい鯛焼き一個丸ごと上げちゃおう♪

「旨いか？」
「にゃ♪」
「そうか、そうか♪」

はやての検査が終わるまでまだ時間あるな・・・・森でも探検しようかな？

これが間違えだったこのまま素直にまっていればあんな事には・・・・くそ俺のバカ！！

「いやー綺麗ですな～」
「にゃぁ～」

懐かれました。悪い気はしないのでいいですが・・・

《ゴゴゴゴ》

「え？ちょマジで？」

嘘だーーージュエルシードが暴走してる！？しかも木の化け物・・・あれ？俺の持ってたジュエルシードが無い・・・・・まさか・・・

俺→ジュエルシード落とす→暴走→現在

いや違うかもしれない・・・・でもジュエルシードない・・・・Ｏｒｚ！？結界！？やべ隠れよ

〜〜〜回想終了〜〜〜

え?自業自得?ｏｒｚ(ドギャーン)てかさ〜これ魔法?魔法ですか?
めちゃくちゃ怖いんですけど・・・どっちかっつうと魔砲?《ドガーン》
絶対そうだよね・・・・

おっここら辺で管理局かな?ん?俺?俺は大丈夫築かれない!なぜ?
フフフ聞いておどろけ!!俺は今魔力変化でかなり魔力を抑えてるしかも!!創造で作った封印の腕輪があるしなこいつの効果は１０段階封印だ!
まぁ身体能力を下げると思ってくれ・・・で今の俺の魔力量はリリなので例えるなら
Ｅランクだ!!ハハハハハ!驚いたか!

『ケンイチもう誰もおらんぞ』

え?マジで?何かショック!そんな事より原作介入しろ?えーー・・・
包丁むけないでーーーー!!分かった分かったからしょうがないなー変装はするからな!!

『ケンイチはやての検査おわっとるぞ』

マジ?やべーーーー急がなきゃ

「はぁはぁ」
「兄ちゃん遅い！」
「わっ悪い！」
「もうっ」
「何でも言うこと聞くから！な？」
「本当？」
「ああ」
「じゃあ明日一緒に買い物やからな！」
「ああ分かった」

財布大丈夫かな・・・・・

管理局（後書き）

ククク短い・・・ｏｒｚ

ＰＶ５００００アクセス記念（前書き）

いぇいｗきたぞ！

PV５００００アクセス記念

５万アクセスきたーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！

『そうじゃな』

乗りが悪いな～～

『そうか？』

ああ悪いね・・・まぁいいけどさ、それにしても来ましたね～リリカルな世界マジでそして俺はあれを魔法と認めないからな！！

『まぁ人それぞれだしの』

はぁでもさこの世界に魔王が二人になったな・・・・

「魔王じゃないもん！」

次元を超えた！？なんだ・・・空耳か焦った～

『まっケンイチは魔神じゃがな』

魔神じゃないもん！

『かわいい』

またこのパターン!?俺は負けない・・・この先は言いません刺されますから・・・
でもシエルをユニゾンデバイス計画は実行する事にしましたー

『おおー!!やったぞ!』

さってどんな能力を付けようかな?

『やはりここは・・・・超チート性能を』

却下!でも・・・もうそれで良いかもしれない・・・・

まぁとりあえずがんばって逝きたいと思います!応援よろしく!

『行きたいの字が違うぞケンイチ』

ＰＶ５００００アクセス記念（後書き）

感想まってまーす

ネタをだれかネタをーーーーーーーーーーーーーー！！

未来の魔王現悪魔（前書き）

フハハハッハw話が話が思いつくぞーーーーーーーーーー

未来の魔王現悪魔

さぁやってきました！原作介入！今の俺の姿は
大人で仮面を付けている完璧までの怪しい人
そして俺の目の前では　なのはＶＳフェイト！！

「やってるねー」
『どこら辺で介入するのじゃ？』
「戦いが終わって雷が落ちって来る所かな？」
『最後までか』
「いいじゃんｗなんか不満？」
『デバイスという奴に成ってみたいだけじゃ』
「ああ～じゃぁもう納得？」
『おお！良いのか』
「いいよいいよｗ」

創造開始！ユニゾンデバイスの形は最初にあった時と一緒で
性能は魔力補助、およびハッキング、幻術を使う、こんなもんかな？
発動！！

「一応成功かな？」
『おおー体じゃあ！！』
「口で喋らないのか？」
『ん？そっそうじゃな』
「あっあよしこれからよろしくなケンイチ！」
「ああ！！」

さてデバイスもできたし見学するかな？《ボギャーン》今日はよ

りいっそう激しいな・・・
何で俺の周りはこんな人ばかりなんでしょうか?

「運命じゃな・・・」
「まだ心読めんの!?」
「うむそのようじゃ」

はぁ・・・おっフェイトにバインドが終りかな?

「スターライトブレイカーーーーー」
《ボギャーーーーン》

うん・・・帰る・・・

「ケンイチ・・・・・」

だってさ見たでしょ!?さっきの何あれ?本当に非殺生?認めないね!俺ぁ認めない
しかも何?あの子どんな魔力!?あっちの方が魔王だろ!!やべぇよ、マジで俺でもあんな
ことしないぞ!?

「それはまぁその通りだが」

関わりたくネェーーーー!!

「はやてと一緒に居る時点でそれは無理じゃ」

家出してやる!!

「はやてが悲しむぞ？」

グハ）ちくしょうーーーーーーー！！こうなったらやけだ！
確かもうそろそろだよな雷！来た！！俺様のターーーーン行くぞシエル！！

「「ユニゾンイン！！」」

よしゃあ！いくぜ！封印1，2，3，4，5開放！！

「おらぁあああああああああああ」
《バチチチッ》
「「な！？」」
「消えうせろ！」
《バシュン》

任務完了！俺様かっくいい！！

「大丈夫か？」
「「え？」」
「はい大丈夫です・・・・貴方は？」
「敵ではない・・・・・・・今はな（ボソ）」

さてとプレシアの所に行くかな？何で？殺させねぇために・・・
誰のためだって？
俺のためだよいやじゃん人が死ぬのってさ・・・・・甘ちゃん？ハハハハ甘ちゃんかもね
でも助けられる命は助けたいじゃん・・・・それに親が死ぬのは悲しいと思うから・・・

「行くか・・・・はぁ」
「待ってください」
「誰だおばさん？」
「おばっ・・・まぁいいわ今は・・・貴方は誰ですか管理局の物では無いようですが？」
「さぁな」

行きますかね・・・・さぁ原作ブレイクだ！！『すでにしてるがな』うるせい

「あの！」

行かせてくだせい・・・・

「何だ？」
「ありがとうございます！助けてくれて」
「当然のことをしたまで・・・じゃあな」

たく・・・・やっと行けるぜ・・・・能力発動、転移！

白き魔王と会話しちゃったｗキャｗ

未来の魔王現悪魔（後書き）

おらに元気をわけってくれーーーーーーー

親として（前書き）

今回は気まぐれ最新

親として

～～～～ｓｉｄｅなのは～～～～

私はフェイトちゃんとの勝負に勝ったのでも目の前で
フェイトちゃんに雷が降って来たのでもそれを防いでくれた男の人
が来たの
仮面を被っていて顔は分からないの

「あの！」

「何だ？」

「ありがとうございます！助けてくれて」

「当然のことをしたまで・・・じゃあな」

そう言って男の人が消えたの・・・でも分かった事があるの
あの人はとても優しい人ってことが・・・・

～～～～ｓｉｄｅリンディ～～～～

「なにあの人！？」

「艦長！魔力Ｓランクです！」

「Ｓランク！？」

何て魔力量！でも何でこんな所にしかも管理局の物では無いようだし

「行くか・・・・」

ちょっと！行かせないわよ！

「待ってください」

「誰だおばさん？」

「おばっ・・・まぁいいわ今は・・・貴方は誰ですか管理局の物では無いようですが？」

「さぁな」

なっ！いい度胸ね・・・だけど・・・そう簡単には・・・行かせないわよ・・・

「あなた人の・・・・！？」

「艦長・・・もう行ってしまいましたよ・・・」

本当にいい度胸してるじゃない・・・・

～～～～ｓｉｄｅ賢一～～～～

「クシュンッ」（ズズッ）

風かな？気をつけないとな～～～それにしても此処広すぎ・・・・

・はぁ～

そういや～フェイト嬢と話してないな～まっどうでも良いけど・・・

いいもん

別に・・・・

《ドガーン》
「うお!?びっくりしたー!」

管理局ナイスb音の鳴るほうへ行けば・・・・・・・ビンゴ!いましたぜ!皆さん!

お?あれがアリシア?本当にくりそつだわ・・・・え?さっさと介入しろ?

いやいや、どうやら今シリアスな状況みたいだから・・・・俺空気読めるからw流石に

「何処へなりとも・・・・消えなさい!」

「お願い!もうやめって!」

ね?超シリアス・・・・・・

「良いことを教えてあげるはフェイト・・・貴方を作りだしてずっとね、貴方の事が・・・大嫌いだったのよ!!」

わお！えげつね・・・・・フェイト嬢、気失ったね

・・・どうやらガジャットが出てきたようだな？さて介入しようかな？

「よいっしょ！」

「誰！？」

「ど～も～謎の仮面の騎士、Kで～す～気軽にケイって呼んでね♪」

「貴方はあの時の・・・・何のよう？」

「いやぁ～貴方を助けようと思ってねw」

「なに？」

おお、怖！そんなに睨まなくても・・・・

「知ってるよ貴方、不治の病に懸かってるんだって？」

「・・・何処でそれを・・・」

「フフフ、さぁね・・・でも、もし治す方法があったら貴方は如何します？」

「！？如何いう事」

「私なら貴方の病を治せると言ったんです。」

「別に治さなくていいわ、私はアルハザードへ行き
そこで病を治しアイリシアを・・・」

「フェイトは如何するのですか？」

「あんな人形には用はないわ」

ありゃ～これは少し時間が掛かるかも・・・はぁ

「あれは貴方の娘ですよ？」

「娘？笑わさないであんなのは娘でもなんでもないわ！」

「いいえ、あれは貴方の娘です、貴方が作り出した、もう一人の娘・・・
貴方にとってあの子はもう一人の娘であり、あの娘にとっては貴方は・・・・唯一の母親」

「！？そっそれが如何したと言うの・・・あんな子は私の「娘ですよ」！？」

「もう一度言います・・・あの子がどう生まれ様と貴方が生みの親です、
だから貴方は母親です、あの子の・・・・唯一無二の母親・・・」

「・・・・」

「それに築いてるんでしょ?アルハザードには行けないという事に・・・・」

「!?」

さてと・・・・もうそろそろ渡すかな?

「これを」

「これは・・・・」

「エリクサーです。飲めば不老不死となることができると伝えられる霊薬、万能薬です。」

「!?何故そんな物を・・・・」

「親がいなくなるのはとても悲しい事だから・・・・私も一緒だったからかな?まっ自己満足ですよ」

「でも、私は・・・もうフェイトに・・・・酷い事を・・・・」

「それは貴方が決める事です・・・でも一言、言わせてください。・・・・それで良いんですか?」

「私は・・・・」

「それでは・・・・私はこれで・・・・あっ後、不老不死には成らないんで・・・・」

ふ～緊張したー！・・・・・・さて・・・・・っと
もう一つやらなきゃいけないことが出来たな・・・・アリシア・・・・か

親として（後書き）

少し書き方を変えてみました。どうでしょうか？前の方が良いですか？感想お待ちしています。

１０万アクセス記念（前書き）

もうそろそろ、ペースが落ちそうな作者です！

１０万アクセス記念

１０万アクセスきました！！

ケ「やったぜーーーーー」

シ「イエイーーー」

ケ「今日はハイテンションだなシエル！」

シ「新しい体が手に入ったからな！！」

ケ「おっそういやそうだな！
でもユニゾンしても違和感無いんだよな？如何してだ？」

シ「ずっと一緒におったからじゃないか？」

ケ「あ～なるほど」

シ「だが！一つ不満がある！」

ケ「なっ何だ？」

シ「なぜ幼女のまま！？」

ケ「いや、最初と一緒がいいかな～って思って」

シ「先に言っとけば良かったｏｒｚ」

ケ「まぁまぁ、その内大人にするから・・・」

シ「本当か！？」

ケ「ああ・・・その内な・・・・・」（そんなに成りたいのか）

ケ「それにしても１０万アクセス行くとわな～」

シ「予想外じゃな！」

作者（ひどっ）

ケ「作者が本番で出てくるな！！」

シ「帰れ帰れ！！」

作者（ぐはっ）

ケ「邪魔者が出てきたけど・・・・改めて
この小説を読んでくれた皆さん本当に」

ケ、シ「「ありがとうございます！！」」

１０万アクセス記念（後書き）

感想、質問、お願い、指摘待ってまーす！！

やっぱＨＡＰＰＹ　ＥＮＤでしょ（前書き）

しんどいぜ！

やっぱHAPPY　ENDでしょ

ど～も皆の友達賢一だよｗえ？友達じゃない？ひどいｏｒｚ

「！？」

「なのは！」

「サンダー・・・・レイジー！」

「フェイト！？」

お？フェイト嬢が来ましたね・・・・てかテンプレだな～・・・・ん？俺？見学してますｗ

ハハハハ原作ブレイクは、しましたよ？え？もっとやれ？え～～～～・・・・・ちょ！？

だから包丁や《ドガーーン》・・・・・でかいロボキターーーー！！

「サンダー・・・・バスターーー！」《ビギャガガガ》

「ディバイン・・・・バスターーー！」《ビギギギギ》

「「せーの！！」」

《ドガーーーン！》

怖ーーーーーーーーー！！俺やだ！あの人達と関わりたくない！いやすぎる！

絶対！平和が壊される！『もう無理じゃがな』ＯＯＯＯＮＯ－－－－－！！

『それより良いのか？』あ？『行ってしもうたぞ』え？嘘？『マジ』・・・・・

「いくよ！ディバインシューター！フルパワー！「はいストップ」！？」

「そんな事してる場合？」

「貴方は！」

「そんな事はどうでも良いから・・・・先を急ぎな・・・・」

「でも・・・・」

「大丈夫・・・・ここは俺が何とかするから、ね？」

「！ありがとうございます！」

「いいよいいよw」

さてと・・・・やりますかねぇ～フフフ・・・久々の戦闘だ・・・・さぁ始めようかな？

「ククククッ楽しませてくれよ！」

『悪役じゃな・・・・』

うるさい！人が気にしてる事を～

『自覚しとるんか・・・・』

グッそんな事よりバトルだ！バ・ト・ル！

「ぶっ壊れろーーーーーー！」

《ドガガッガガガン》

「フハハハハハ！弱い弱いぞー！」

『やっぱ悪役じゃな・・・・・・』

「黙れーーーーーーー!!」

《ドガガガガガン》

ふぅ～このぐらいで良いかな?それにもうそろそろ・・・・・・終わりそうだしねw

・・・・・さて急ぐかな!【転移】

～～～～移動中～～～～

よっと!お!いたいた・・・・・ロリコ・・・・・クロノが説得してますね～

もう少し様子見しようかな?っとフェイトが来たね・・・・

「ゴホゴホ・・・ゲホゲホ・・ぅぅ」

あれ～？エリクサーの飲まなかったのかな？

「母さん！」

「何をしにきたの？消えなさい！あなたに・・・・あなたにもう用は無いわ！」

おいおい・・・・如何いうつもりだ？・・・・もしかして死ぬ気か！？糞が！

「あなたに言いたい事があって来ました・・・・」

「・・・・・」

「私は・・・・貴方に作られた人形かも知れません・・・・ですが貴方の娘です！」

「！？フハハハだから何？いまさら貴方の事を娘と思えと？」

「貴方が望むなら・・・・貴方がそれを望むなら・・・・私は世界中の誰からも
どんな出来事からにも貴方を守る・・・・」

「・・・・・」

「私が貴方の娘だからじゃない・・・・・貴方が私の母さんだから！！」

ヒュウ～言うね～本当に9歳かね？この子ら？

「貴方の負けだよ・・・・・プレシアさん」

「！？」

「貴方は！？」

「ど～も・・・・プレシアさん・・・・良いんじゃないのかな？
もう・・・芝居はさっ」

「「「！？」」」

「私は許されて良いの？」

「良いんですよ・・・・『グリーンですよ！』」（お前・・・・・）

『すっすまん、つい・・・』

今度はついじゃすませねぇぞ・・・・・こんなシリアスな時にネタを出しやがって！

『面目ない・・・・』

「私はあんなに酷いことをしたのに？」

「それは私に聞くことじゃない・・・・・貴方の娘に聞いたらどうですか？」

「フェイト・・・・・私を・・・・・私を許してくれるの・・・・？」

「母さん・・・・はい・・・・・もちろん！」

「ゴホ！ゲホゴホ！」

「母さん！？」

「やばい！早くエリクサーを！？」

といっても俺の渡したエリクサーを持ってない！？くそ・・・・・作るか・・・・創造開始！！
どんな病をも治す伝説の薬！来い！

「くっ早くこれを！」

「これは・・・・・」

「説明は後だ・・・・早くしろ！」

「！？はい！」

「ゴクゴクゴク・・・・・・ぅぅぅ」

「よしこれで後は目覚めるのを待つだけか・・・・」

原作ブレイク！これにて・・・終了！っと行きたいけど
・・・・・アリシア蘇生してやるかな？ん？そんなこと出来るのかって？
ハハハハ・・・俺を誰だと思っていやがる！『バカ？』ｏｒｚ
くっともかく・・・超チートマンだぜ！俺ぁよ！
だから蘇生なんてちょちょいのちょいだぜ！

「さてとやりますかね・・・・・」

「？何をするきですか？」

「ん？ちょっと蘇生をね。」

「へぇそうなんですか・・・・・蘇生！？」

うぉ！びっくりしたー

「そんな事出来るんですか？」

「出来るよー最初はするきなかったけどね」

うんマジで最初はするきなかった・・・・・けど・・・・やっぱ
・・・ちゃんとＨＡＰＰＹ　ＥＮＤにしたいじゃんｗね、皆！

「本当にそんなことできんの？」

五月蝿いです・・・アルフ・・・・・出来るんですよ・・・・・

「じゃぁ見ててください・・・・今から行うんで・・・・」

「あら？怒ちゃった？」

「違います！・・・・・・いきます・・・・・・」

さてと集中集中っと創造開始！・・・・・生命を生み出す力を応用！

・・・アリシアの破損した部分を再生、再構築！

《ピキャーン》

「おし！成功！・・・・・やべ・・・・ポットに出すの忘れてた！」

《バリーン！》

「あぶね～～～～・・・・・ん？」

「「「ポカーン」」」

あらあら・・・・・何かめんどくさい事に成りそう・・・・・

「この子を」

「え!?あっはい!」

「フェイトちゃーん」

おっとなのはが来たね・・・・《ゴゴゴゴゴゴッ》!?・・・・崩れてる!?・・・・・なんでさ・・・・はぁ～

「あんた等!」

「「「「!?」」」」

「少しそこに集まれ!」

「なんで?」

「いいから早く!」

「はっはい!」

よし!・・・・・・転移開始!!・・・・・・

「!?」

「な!?」

「うわ!」

「転移!?」

「嘘・・・・」

《ブウン!》

よし!行ったな?・・・さてと俺も帰るか・・・・・・これから先を見ないのかって?
良いんだよ・・・・俺が手伝うのは後一つだけ・・・・ん?何かって?フフフ・・・プレシア
の罰の軽減だよ・・・・もちろん・・・・フェイトもね♪・・・どうやってか?幻術を使って♪

まぁ・・・その後は・・・・・・アニメと一緒でフェイトとなのはのお別れのシーン
違うといったら・・・・プレシアとアリシアがいることかな?

原作ブレイク完了てね♪・・・・・・これからが俺の恐怖の始まりだ・・・・orz

やっぱＨＡＰＰＹ　ＥＮＤでしょ（後書き）

この４日間書いたから長いぜ・・・・まっ嘘だけど

感想マッテマース

日常（前書き）

とりあえず・・・次の話の流れを考え中・・・

日常

どうも！賢一です！あれから無事原作ブレイクできて今・・・・・
はやてに
・・・・・・叱られてます・・・・なぜだ・・・

「聞いとるん？兄ちゃん！」

「はい！聞いています！はやて様！」

「で！昨日は何をしてたん？」

「はい！困ってる人を助けていました！」

「嘘だ！！」

「本当だ！！」

「まぁええわ・・・本当の事言うまで夕食無しや！」

「ちょっ・・・勘弁してくれ・・・・」

「本当のこと言うか？」

「だから本当だって！」

「・・・・・・・」

くぅううううう・・・・俺の夕食が～ｏｒｚ
こうなったら！武力介入で『どうするんじゃ？』
どうしよ？『・・・・・・・』え？何この空気？

（ぐ～～～～）

腹減った・・・・・・良いもん・・・・・別に・・・・・創造で作るもん！
悲しくなんか・・・・無いやい！

その日の夕食はしょっぱい味だった。

～～～～翌日～～～～

今日は昨日の罰として、はやてと買い物に来ている
・・・皆なら羨ましいと思うだろう・・・だが！
俺はうれしくない何故なら！

「あ！兄ちゃんあの服ええわ買って！」

「え・・・・・うわ高！はやて・・・これ「昨日」ぐっ・・・・」

財布の中身がーーーー！！え？創造すればいい？
いや持ち金が減るのってなんか、いやじゃん。ねぇ・・・
それに理由はもう一つ血は繋がってないけど・・・妹だし・・・
まぁそこがまたいいって言う人も居るんだろうけど・・・

「兄ちゃん、何しとるん？はよ行くで！」

「おい！待てよ！」

まぁ良いか・・・・楽しそうだし・・・・・それにしても・・・
・・平凡最高ー！！
はやての誕生日もう少しだな・・・・はぁ・・・とりあえず・・・・
プレゼント考えとこ・

そんな俺の平凡な日常・・・・・『我が紹介されるのは何時だろうか？』

はぁ・・・・もうすぐするよ・・・・・『そうか！♪～』・・・・楽しそうだな？

『うむ♪初めての人間の知り合いが出来るのじゃからな』・・・・・

俺は？

『主は人間か？』・・・・ぐすん・・・・

原作ブレイクも一苦労です。皆さん・・・・え？がんばれ？はじめて応援された。

あれ？目から汗が・・・・

日常（後書き）

シ『賢一とシエルの！ドキドキ！賢一の力！？コーナー』

ケ「何これ？」

シ『賢一の能力が如何いうものなのかを詳しく説明するコーナーじゃ』

ケ「へぇ～」

シ『今日は！創造の説明じゃ！』

ケ「おう！」

シ『まぁ頭にイメージした物が作れる能力じゃな・・・・』

ケ「うぁ、簡単に終わらせやがった・・・・」

シ『で！新たに付け加えられたのは！生命を生み出す能力じゃ！』

ケ「これは、自分が考えた生物を生み出せるって事だよな？」

シ『そうじゃ！さらに、上手く使えば蘇生もできるのじゃ！』

ケ「そうだったんだ・・・」

シ『ケンイチ、この能力で蘇生したではないか？』

ケ「あ！これのおかげで出来たんだ！へぇ～」

シ『まさかの無意識！？』

ケ「ハハハハハハ」

シ『まぁよい・・・今日は此処までじゃ！次回は何時かする！』

ケ「次回じゃないなの！？」

シ『また会おう！』

ケ「無視ですか～！」

感想お待ちしております！

誕生日1日前（前書き）

最新最新♪

誕生日1日前

「うぉおおおおおお」
《ボギャーン》

『ケンイチ後ろじゃ！』

「！？」

どうも・・・ケンイチです、今俺は鈍った力を取り戻すために別の世界に来てます！
どんな世界かって？ハハハハ聞いてくださいよ・・・何と神獣しかいない世界ですよ？
何回も・・・あ・・・・俺死んだ・・・・・・って想ったんですよ？でもがんばってます！

「くっ！」
《バギギギギギ》

何百という、火の塊が襲い掛かる、それを魔剣で全て防ぐ

「【八岐大蛇】」

ケンイチの背後から八つの頭を持つ大蛇が現れる
敵の神獣に言葉では表せない禍々しい闇の塊を放つ

≪グギャーーーヤ≫

神獣は闇に呑まれそこには神獣だったであろう、骨だけが残る

「くそー!!何でこんな事に!」

『しょうがないじゃろう・・・ケンイチの力を
もっと使いこなすためにはこういった方法しかないんじゃから』

「でもよー敵全部が神獣ってどんな無理ゲー!?」

『そんな中生き残っとるケンイチであった』

「くっ!言い返せない!」

≪グギャー≫

「!?ちっまたか!」

『がんばれケンイチ』

くそー!覚えてろよ!

「デカ！？」

『デカいの』

「いやデカすぎるだろ！」

『これがあの有名なゴ○ラか・・・・』

「え！？嘘マジで！俺感激なんだけど！ゴジ○大好き！」

『そうなのか？』

「ああ！！怪獣の中で最強だと思ってる！」

『今、それと戦おうとしているケンイチだった・・・』

「逃げて良い？・・・・マジで！？」

『もう無理じゃな！』

≪ブウオン≫

○ジラがエネルギーを溜めている・・・・それを見た俺は・・・・・

逃げた

・・・・それはもう光の速さで・・・・・・

皆様！俺、風間賢一あらため八神賢一はがんばりました！

そして貴方がたに出会えてよっかたです！

≪ボギャーーーン≫

だが逃げるのが一歩遅かった・・・・・・

「ぎゃあああああああああああああああ」

しっ死ぬかと思った・・・・・マジやべぇよゴ○ラとかないよ・・・

もう絶対！戦わない！

『戦っておらんがな・・・・』

ぐっ・・・だが分かった事があるゴ○ラ神獣より強し！

『いやあれは、神獣じゃぞ？』

え？まさかのゴジ○神獣説！？

『いや、あれは○ジラが神獣になったものじゃ』

おいおい・・・・マジかよ・・・・よかった・・・・戦わなくて・・・・
だけどもう一度みたい！けど怖い！どうしよ？

『契約したら如何じゃ？』

契約？何それおいしいの？

『・・・・まぁようするに使い魔にするのじゃ！』

え？まさかの・・・〇ジラ・・・・使い魔・・・・・・そんなことしたら俺更に最強に・・・・

『備えあれば憂いなしじゃ！』

ハハ・・・・でも如何するの？　↑　（ゴジ〇欲しさに負けた

『うむ、ああいうのは力で黙らせれば良いの！』

さて・・・・帰るか・・・

『諦めるのか？』

いや、無理だろ！？どうやって黙らせれば良いんだよ！？

『力で・・・？』

何故聞く！？そしてそれが無理！？・・・・しかもかわいいいいい！！

『ケンイチ壊れて来とるぞ？』

は！？いかんいかんしっかりしなければ・・・・・

『大丈夫じゃ・・・今のケンイチなら余裕じゃ・・・たぶん』

え？そうなの？って言うかーーーーー最後の聞こえてたぞ！？たぶん？多分なの？

『おっ噂をすればじゃな』

「え？」

そう言い俺は後ろを振り向く・・・・・そこには・・
・・話の噂だった・・・・〇〇ラが・・・・・

「不幸だ・・・・」

《ボギャーン》

「くっ【闇の壁】」

《バギギギッギ》

ぶつかり合うエネルギーと障壁そして障壁に徐々に輝が付いていく

「おいおいマジかよ!?」

《ボギャン》

「ゲホゲホッ障壁を壊されかかったぞ!?ちぃ!
これでも喰らえ!【ダークジェノサイド】!!」

闇の斬撃破がゴ〇ラを襲う!

≪グギャアア≫

「どうだ！！思い知ったか！」

≪ギャアアア！！≫

「あれ？そんなに効いてない？」

≪ブワーン≫

「え？ちょっ先よりでかい！？」

《ズガガガガッガガ》

「くっ痛ぇなー！！腕が無くなっただろうが！死に腐れ！」

そう言いケンイチはただの純粋な魔力の塊を相手に飛ばす・・・・・いわゆるかめはめ波だ

《ボガーン》

「ハハッハハどうだ！痛いだろうが！！」

《ビーン》

エネルギー波がケンイチを襲う

「おっと危ない・・・」

≪ギャアア≫

「へっやるな！楽しいぜ！」

この戦いが5時間ぐらい続いた・・・・・・・

「へっ見たか！俺の方が強い！」

≪グギャ≫

「お前俺についてくるか？」

≪ギャーーー≫

「その返事、ＯＫと受け取るからな？」

≪ギャ≫

「よしゃぁ・・・・契約ってどうやるの？？」

≪ギャ？≫

『お？終わったか？』

あっシエル・・・契約どうやるの？

『もう終わっとるぞ？』

「え？」

≪ぎゃう≫

「小さくなってるー！？」

かわいい・・・何これ？え？最初ってきもくなかった？ゴジ○って

『これは神獣じゃ』

まぁいいやかわいいし・・・・ん？どんなのかって？まぁ黒いひよこ？
見たいな感じかな？小さくてかわいい・・・

『ケンイチ後一時間で予定の時間じゃぞ？』

お？まじでじゃぁ帰りますかな？

「帰るか！」

≪ぎゅ≫

かわいいいいいーーーーーーーーーー！！

はやてのプレゼント買うの忘れてったｏｒｚ・・・・創造で作るか・・・・・

そうしよ

誕生日1日前（後書き）

やってしまた・・・・・反省はしているだが後悔はしてない！・・・・・たぶん

ヴォルケンリッター（前書き）

昨日はあまり最新できませんでした！すいません！
今日は最新がんばります！

ヴォルケンリッター

「誕生日おめでとー！！」

「ありがとう！！」

今日は、はやての誕生日だ！・・・・・そして、あいつらが出てくる日だ！
はやて喜ぶだろうな！最初は知らないけど・・・・

「ほれ、誕生日プレゼント」

そう言って俺は、はやてに羽の形を模様したネックレスを渡した。

「うわ、綺麗！」

「気に入ってくれたか？」

「うん！ありがとな兄ちゃん！」

「どういたしまして。」

≪ぐゅぅ≫

「クロもあんがとな・・・・」

ふぅう、和む～めっちゃ和む・・・・・え?クロって誰か?フフフそれは!?
あの!ゴ○ラの名前ですよ!黒いひよこみたいだから、クロコ略してクロだ!!

はやてに如何説明したか?フフフ怪我をしていたから拾ってきたと言い流れに任せたら飼う事になった!それだけだ!予想外だ!

「じゃぁ飯食うか!」

「うん!」

≪ぎゅっ≫

『我の紹介は・・・・・』

お前はもう少し先だ!我慢しろ!

『な!?話が違うではないか!』

よくよく考えたら、教えてしまったら後々面倒だったんだ!!

『理不尽だ！』

すまん！我慢してくれ！

『くぅうう・・・・・』

「それにしても兄ちゃん今まで居らん成る事が多いけど何しよん？」

「え？あっああ・・・・えーと・・・・・」

「何しとるん？」

「いろいろと・・・・」

「いろいろ？」

「そう！いろいろ」

「いろいろって？」

やばい！まさかこんな展開になるとは！如何すれば！！くぅ

そうだ！！

「クロに餌を上げたりして遅くなってたんだ！」

「ふ～ん、てっ言うことは、クロは飼うきで

此処につれてきたちゅうことか？」

「え？あっあそう、そうだよ」

「まぁええわ」

あぶね～・・・今度から早く帰るようにしよ！うん、

「おっもうこんな時間だ！はやて風呂入って寝ろ！」

「何や？もうそんな時間か？」

「おう！」

「早いな～、今日は楽しかったで兄ちゃん、あんがとな？」

「おう！！」

今は１１時半ヴォルケンリッターがでて来るまで３０分か・・・・

・

さってまたもや原作ブレイクの時がくるぜ！・・・・・・はぁ・・・・

「じゃぁ兄ちゃんおやすみな・・」

「ああ、おやすみ」

さて・・・どういう基準で原作ブレイクしようか?いっその事・・・
俺を募集させて・・・・いっきに終わらせるとか?そしてバグを取り除く
・・・・面白くないな・・・・・・これじゃ・・・なのは達のパワーアップも無くなるしな
最初の方は干渉しないで行こうか・・・・

《ゴゴゴゴゴ》

!?来たか!・・・・行きますかね

「はやて!如何した!」

「誰だ貴様!」

「貴方方こそ誰ですか!?はやてに何をした!」

まぁ知ってるんですけどね・・・・・怪しまれないように持ってきた棒で殴りかかる!

「うぉぉおおおお!」

「甘い!」

「うわっ！」

力抑えてるから戦いにくい・・・・

「このガキ何すんだ！」

「・・・兄・・・ちゃん・・・・」

「はやて！大丈夫か！」

「「「「兄ちゃん！？」」」」

「驚いて気絶しただけや・・・・」

「そうか・・・・・よかった・・・・」

「じゃぁあの人達誰だ？空き巣か？」

「さぁ？分からんでも本からだてきたん」

「本から？」

本当は知ってます・・・大事な事なので二回言いました！

「で？あんた等誰ですか？」

「我らは主を守るヴォルケンリッターだ！」

ああ・・・俺の平凡の日々よ・・・・さよなら・・・・非凡よ・・・・こんにちは・・・・

ヴォルケンリッター（後書き）

本当にすみませんｏｒｚ

蒐集（前書き）

書く！書くぞー！俺の心が燃え尽きるまで！

蒐集

「へ～・・・じゃああんた等はあの闇の書？ていう守護騎士？ていうの？」

「兄ちゃん！もうええやろ！新しい家族の歓迎会しよ！」

「え？あっああそうだな！」

「家族？」

「そうやで？」

「でも我らは貴方を守るだけの」

「違うで！シグナム達は、私たちの家族！主命令や！」

「うぁ・・・命令かよ！」

「ええやん・・・一回言ってみたかたんよ！」

ハハハハハ良い子だよな・・・・はやて・・・・・・それともうれしいのかな？

家族が増えるのが・・・・・まっ俺もそうだし・・・・

「それじゃあ・・・歓迎会しますか！」

「うん！」

「「「「はっはぁ・・・」」」」

まだ話について行けていないシグナム達は・・・呆然としていた・・・

「のりが悪いぞ！」

「そうやで！」

「「「「はっはい！」」」」

そんな家族が増えた楽しい一日・・・・・・

～～～～翌日～～～～

「にぎやかになったな～」

「そやね♪」

うん、本当ににぎやかに成った・・・・・・・・・原作ブレイク・・・・がんばれそう・・・・

そういや～今日は、はやてが図書館に行って友達を作るんだよな？

此処は原作道理、行って欲しいな・・・・・・うん

「じゃぁ兄ちゃん行って来るけん♪」

「ああ、行ってらしゃい♪シャマルさんはやての事頼みますよ」

「ええ♪」

行きましたな～・・・友達できると良いな～

「さてっ俺も行くか」

「何処へ行くのですか？」

「ん？散歩？と買い物？」

「何故聞くんですか・・・」

「何となく？」

「はぁ・・・もう良いです」

あらあら・・・そんなことじゃぁ・・此処でやっていけないぞ？
シグナムさん

「じゃぁ行ってきます！」

「はい、いてっらしゃい」

「おう！」

本当は何するのかって？フフフ・・・カメラを設置するのさ・・・
・え？盗撮？
うん、そうだよ・・・・犯罪？フフフ俺が良いといえば良いんだ！
これこそ！
俺・様・主・義！あっでもやらしいことには、使わないよ？
・・・戦いを見たいだけだから・・・え？自分で見ろ？いや怪しま
れるから・・・・

「よっと・・・・これで全部かな？」

『にしても、カメラ配置しすぎじゃろ・・・ケンイチ』

「備えあれば憂いなし！だよ」

これで・・・明日取りに行けば・・・万事解決！え？俺の介入？次の戦いの時だよそっちだと、なのは達パワーアップ！&謎の仮面の男が
出てくるからね、そっちのほうが面白い・・・・クロは待機だけど・・・クロの出番は
シエルより遅いと思う。それに！仮面の男は二人も要らない！（３人だけ？）

明日はビデオ鑑賞だ！・・・・気付かれないようにしないと・・・

・

蒐集（後書き）

少し短いかな?まぁいいか・・・さて続き続き!

観賞&原作ブレイク！（前書き）

最新じゃーーーーーーーーー！！

観賞&原作ブレイク！

どうも！ケンイチです。今から原作に介入しようと思います！え？ビデオ？
あ～みましたよ？え？どうなったか？え～如何しようかな♪・・・・・学習能力がない？
いや・・・・・やめ・・・包丁向けないで～～～～かっ回想入ります・・・・Ｏｒｚ

～～～～回想～～～～

うおぉぉおお！スゲーまんまアニメだわ・・・・いや～いいねぇ・・・あ！？なのはがやられそう！フェイトが来た！ってあれ？フェイトが二人？あ～アリシアか～管理局に入ったんだ・・・・こういう微妙なとこが変わってるね・・・・

まぁこの後は皆さんが知るように原作道理いきました。

「いや～よかった！」

「何がよっかたん？」

「え～それはこのビデオが・・・・・・ってはやて！？」

「へぇ～そんなに面白いん？」

やばい！如何すれば！！くそ・・・何故こうなった

『気を抜くからじゃ・・・』

「兄ちゃん見せて？」

「ア・・・はい、どうぞ」

って・・・渡しちゃった！？くそ～上目遣いとか反則だろ

・・・そう思いますよね？皆さん・・・・・

『ケンイチそんなこと言ってる場合じゃないぞ』

おっと！？やばい・・・くっ惜しいけど・・・ビデオを壊すか・・

・

創造開始・・・・創造するのは特殊の電波を出して対象にした物を壊す！
指輪！創造完了！！

「さ～って見ようかな～」

させるか！俺が壊すのはあのビデオの中身！

「あれ～うつらへんで～兄ちゃん？」

「え？マジか？」

ミッション完了！！

～～～～回想終了～～～～

とっまぁ大変だったわけよ・・・・くそ～永久保存しようと思ったのに！

≪ドギャーン≫

おっと・・・シグナムが来たね・・・・さ～て介入しようかな？

（奴等は、なのはとフェイト達に任せよう）

（私たちは如何するの？）

（僕達で闇の書の主を探すんだ・・・）

（闇の書を？）

（連中は持っていない・・・おそらく奴らの仲間か主が何処かにいる
僕は、結界の外を探す、君達は中を）

（そうはさせないよ？）

（（（！？））））

「誰だ！！」

「どうも～謎の仮面の騎士Kだよ？お久しぶり♪」

「あなたは！？」

「やぁアリシア元気そうでよかった？」

「何故聞くんですか？」

「何故でしょう？」

「はぁ～でさせないと言うのは？」

「ん？こう言う事ｗ」

そう言ってケイの手から魔力の塊が作り出される・・・

「「「な！？」」」

その魔力をアルフ達にぶつける・・・・

《ボギャーン》

「くっ何をする！」

「お？流石流石・・・あれを防ぐとはｗ」

「ユーノ！クロノこの人は私に任せて！」

「でも・・・・」

「一人じゃ無理だ！」

「良いから行って！」

「くっ行くぞ！ユーノ」

「でも・・・・「いいから！」・・わかった」

まぁいいか・・・・・あいつ等にはもう一人の仮面の男に会ってもらわないとな

「さて？話は良いかな♪」

「ええ、いいわ」

「それじゃぁ♪・・・・戦おうか？」

「！？」

ケイはもう一度魔力形成そしてなのはの技を繰り出す・・・・

「ディバイン・・・・バスター」

《バゴーン》

「な！？これは、なのはの技！？カートリッジロード！！」

《バガガガガ》

「ほう・・・カートリッジシステムか・・・・」

「先のは如何いうこと？」

「先のとは？」

「技の事よ！！」

「ああ・・・俺のレアスキルだよ・・・・喰らえ」（これぐらいは良いだろ）

「させない！」

ケイが打ち出す前にアリシアがバインドで動きを止める・・・

「あまい・・・・ふん！」

《バリーン》

ケイはバインドを筋力だけで壊す・・・・

「な！？」

「眠っとけ・・・・」

「きゃっ」

ふぅ、さてと

《ボギャーン》

《ドギャーン》

《ガーン》

うわぁあっちこちでやってるな～・・・てか・・・原作名変えたほうがよくね？
どんなの？科学魔法メカニックなのはってどう？ねぇどう？よくない？

《ズガーン》

絶対あってると思うんだけどな～・・・お？来たな仮面の男！
・・・・謎があるのは一人だけで良いんだよ！行くぜ！【転移】

～～～～クロノｓｉｄｅ～～～～

見つけた！闇の書を持っている！あいつで間違いない
如何やら念話をしているなチャンスだ！

《カシャン》

「！？」

「捜索しているロストギアの所持、使用の疑いで貴方を逮捕します。
抵抗しなければ貴方には弁護する機械がある。
同意するなら武装を解除してください」

《ブウン》

「え！？」

「は！？」

《ドン》

「ギャァ」

《シュゥウ》

「仲間！？」

何だ！？あいつは仮面？Ｋの仲間か・・・・

「貴方は？」

「あれを使え・・・」

「でもあれは」

「仲間が死んでしまったらもともこも無い」

《ドンン！！》

「ガッ」

「ど～も～謎の仮面の騎士Ｋデ～ス、クロノ先ぶり～そこの人始めまして～
蹴り飛ばした人～謎の仮面の騎士は俺だけで良い！！」

～～～ケイ（賢一）ｓｉｄｅ～～～

キマッターーーーーーーーーーーーー！！いやマジで！かっこよくね？俺

「おいそこのアンタ？」

「え？」

「アンタだよアンタ！」

「はい！」

「俺がこの結果を壊してやる・・・だから使わなくて良いぜ♪」

「なぜ・・・・」

「そっちの方が楽しいからな！！」

これは本音・・・それにはやてには早く助かって欲しいからな・・・・

「行くぜーーーーーーー！！」

ケイの頭上に魔力の大蛇が出てくるそれは結界へとぶつかり破壊する！

《ボギャーーーーーン》

「さぁて此処は俺に任せてあんた等は逃げなー」

「いいんですか？」

「ああ！それとアンタ名前は？」

「シャマルです！」

「ＯＫ～シャマル覚えたぜ・・・・じゃぁ逃げろ！」

そう言いケイの右手の魔力が光り輝く・・・・・

《ピカーン》

「くっ！」

「きゃっ何！？」

「くっ」

よし逃げたな・・・・おっとなのはたちが来ましたね

・・・あいつも何時の間にか居ないし・・・はぁ・・・厄介な

「ケイさん！如何いうつもりですか！？」

そう言って俺に問いかけるなのは

「ふふふっ今はこうでもいっとこうか・・・こっちの方が楽しいから」

「な!?」

「あんた分かってるのか!?あれが完成したら世界は滅びるんだぞ!」

「滅びはしないさ・・・・」

「如何言うことだ・・・?」

「さぁ～♪じゃさよなら♪」

あいつらより先に帰らないとな・・・・・転移

《ビュン》

「「「「「!!?」」」」」

観賞&原作ブレイク！（後書き）

フフフ書き終えた、だが！まだ今日は最新する！
少し質問しますがA，Sが終わってら一気にＳｔｒｉｋｅｒＳに言って欲しいですか？それともほのぼのした・・・学園生活・・・・でときどき戦闘が良いですか？↑こうなると少し最新スピード落ちますが

やって欲しい方に感想お願いします！

はやて（前書き）

最新じゃーーー！！

はやて

どうも・・・この前原作介入して仮面の男を蹴り飛ばした・・・
賢一です・・・・
きょうは原作介入しないのかって?今日は、はやてが倒れる日なのでね・・・・
え?シグナム達?砂漠に言ってるよ・・・まぁ此処は原作道理言って良いだろう

「兄ちゃん、今日は何処にもいかんのんやね?」

「ああ・・今日は何もやること無いからさw」

「へへへそうかぁ」

「?どうした」

「いやぁ兄ちゃんと二人きりになるの久々やから」

「ん?そうか?」

そうなのかな~?

「じゃぁ今日は二人で思いっきり遊ぶか?」

「ええんか？」

「今日は何もやることが無いっていただろう？」

「うん！」

はぁ～癒される～～やはり平凡最高！！

「ククククっまだ甘いな、はやてよ」

「くぅ～強すぎや～」

「はい！俺の勝ち～ククククっ」

「てか兄ちゃんの笑いかた感じ悪い～悪役やわ～」

グサ）「ックそうか？」

「うん」

そんなに俺って悪い笑い方？『うむ、かわいい癖に腹黒って感じじゃな』

ｏｒｚ・・・グスン・・・まさかの二倍返し・・・・『楽しい・・・』俺って弄られキャラ？

『今頃じゃな』・・・ぐはっ・・・ｏｒｚ

「はやて・・・・俺って悪そう？」

「うん？いや・・・悪そうっていうか、かわいい？」

「ぐはっ・・・どうせどうせ俺なんか・・・・ブツブツブツｂツ」

「そうや女装しようや兄ちゃん！」

「え？勘弁してください！はやて様！
それをしたら俺が俺で無くなるような気がする」

「ええやん♪やろ♪やろ♪」

いやっいやっやめてーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！

～～～～数時間後～～～～

「おっおおー！！」

「ぐすん・・・もうお婿にいけない・・・・・」

「めっさかわいい！！」

「ぐはっ」

そんなにかわいいのか？シエル『・・・・・』シエル？
『はっ鼻血が・・・・』僕はなにも聞いていません・・・・ええ・・
・聞いていません

「ブツブツブツブツ」

「まぁまぁ兄ちゃんかわいいからええやん？」

「・・・それが駄目なんだよ！」

《ガチャ》

「！？」

「ただいまー♪」

「あっシャマル達が帰ってきた」

いやーーー！！来ないで～俺を見ないで～

「はやてただいま！」

「あれ？ケンイチは？」

「ビク！」

「あれこの子はやての友達？」

「ぷっそっその子がにっ兄ちゃんや・・・・ップハハハッハ」

はやて覚えてろよ！糞が！

「「「「えーーー！！」」」」

「何ともまぁ・・・・」

「キャーかわいい！」

「ヒャハハハハ」

「（哀れみの目）」

上からシグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラの順だ・・・・くそぉ・・・・

「覚えてろ！！」

そう言って俺は自分の部屋へ行く・・・・・くそ～まぁいい忘れ

よう

・・・そうしよう・・・うん、それがいい・・・・

下ではシグナム達が仮面の男について話してるようだ・・・

《ガタン》

「!?」

って早くね!?まだ話始めたばっかだぜ・・・やな予感がする・・・

「はやて!?おい大丈夫か!?」

「「はやて!?」」

くそ・・・早く病院に・・・・!!

あの後無事に病院に連れて行って目を覚ました・・・はやて・・・だが何かがおかしい・・・・

「はやて・・・こんな時に悪いけど2日間ほど・・・出かけてくる」

「え?なんで」

「いや少し・・・・調べたい事があるんで・・・・」

「・・・・・・」

「大丈夫w2日たったら帰ってくるからw」

「うん！約束やで！」

「ああ、皆さん・・・・はやての事よろしくお願いします・・・・」

「分かった・・・・」

「お前！！はやてがこんな状態なのに一緒に居ないのかよ！」

「悪い・・・・」

念の為に・・・・・どんなバグでも一瞬で消せるアイテムを作らないと・・・・・
2日で作れるか・・・・・いや作ってみせる！！シエル『ああバックアップはまかせろ』

「クロ！来い」

《グギュー》

「転移！場所・・・滅びの惑星！管理外！」

まってろ！はやて・・・・・・

はやて（後書き）

指がーーーーーー！！だがまだ書くぞーーーー！！

夜天の書（前書き）

燃え尽きたぜ・・・・真っ白にな・・・・・

はやて！！くそ遅くなった・・・！？この魔力は！
・・・・くそやらせるかよ！！

「うおおおおおお！！」

「！？」

「チェストー！」

《ドガーン》

「ぐあぁあ！」

《ブーーン》

「はやて！？」

「フフフ遅かったな・・・・」

「ケイさん！はやてを知ってるんですか！？」

「ああ知ってるよ・・・よくね・・・・」

くそ！はやてが戻ってくるまで耐えてやるよ！

「ここは俺に任せろ！「いやです！」な！？」

「私たちもはやてちゃんを助けたい！」

「そうです！」

「ふっ分かった、だが気をつけて戦えよ！」

さすが未来の魔王ですね・・・・そこに痺れる憧れるーーー！！

「なんか失礼な事考えてません？」

「そんなことないよ？」

怖ぇ～～～～～

「遅れるなよ！封印1～6番解除！喰らえ！ダークネスジェノサイド！」

《ボギャーーーン》

「やっぱこの程度じゃぁ無理か？」

「ディバイン・・・バスター！！」

《ボガーーン》

遠慮ねぇーってあれ？あいつ等なのは達の友達じゃねぇか！？そういや
居たなーくそ

「おい！なのは！」

「はい！なに・・・ケイさん」

「あれお前の友達じゃないか？」

「え？アリサちゃん、すずかちゃん！？」

「やっぱりな・・・此処は任せてあいつ等を安全なところに連れて行け！」

ちっこうなったら！やけくそじゃ！

「封印７～１０開放！！」

《ドガガガガガ》

～～～艦内～～～

「リンディ艦長！」

「何！？」

「あの仮面の男の魔力がＥＸランクに上がりました！」

「何ですって！」

「何者なんですかね？あの人」

～～～ケイ～～～

うぉおおおこうなったらはやてが戻って来るまで遊んでやる！

「行くぞ！【風龍】【黒龍】【炎龍】【水龍】【雷龍】！！
いっけーーーー！」

ケンイチの周りに何対もの龍が現れ闇の書にぶつかる！

《ボガガガッガガン》

そして巨大なクレータが・・・その真ん中にはボロボロのリインが立っている

「どうした！闇の書！そんな物か！もっと楽しもうぜ！」

「・・・・・」

あらだんまり・・・・まぁ良いけどね！

「貴様何者だ・・・・」

っと話か掛けて来た・・・フフフ此処は何時も道理

「謎の仮面の騎士Kだ！！覚えなくて良い！」

「フンッディバインバスター」

《ボガーーン》

おっと！？そういや蒐集した奴の技使えるんだけ？

「おお！ビックリした！お返しだ！ディバイン・・・・バスター！」

《ボガーーーン》

そう言って・・・何倍もある・・・なのは技がリインを襲う

「私のわざで競いあわなくても・・・・・・」

「なのは・・・・・」

なのはがショックを受けてるがそんなことは知らん！

「どうだ！てめぇのより数倍でかいだろうが！」

「私以上の化け物が居るとはな」

「褒め言葉・・・・として預かっておこう・・・悲しくなんか無いからな！本当だぞ！」

まさか・・・敵に化け物呼ばわりとは・・・・・グスン

＜あの！・・・・管理局の方！私はそこに居る子の保護者！八神はやてです＞

「はやてちゃん！？」

＜なのはちゃん!?ほんまに?＞

「うん、なのはだよいろいろあって闇の書さんと戦ってるの!」

＜ごめんなのはちゃん・・・何とかその子止めてくれる?
魔道書本体からはコントロールを切り離したんだけど・・・
その子が走ってると管理者権限が使えへん。
今そっちに出てるのは自動防衛プログラムだけやから!＞

「あっあ??」

「簡単に言うと魔力でぶっ潰せてこと」

「あ~あ、なるほど!」

「なのは・・・・」

＜あなたは?＞

「ん?謎の仮面の騎士Kだ!よろしく!」

ほっよかった・・・はやては無事だな・・・

「なのは達・・・お前達の友達だろ?お前達が助けてやれ・・・」

「「はっはい!」」

「エクセリオンバースター・・・・フォースバースト・・・ブレイクシュート」

「スプライト！・・・ザンバー！！」

《ズガガガッガガーン》

「やったな・・・・」

《ゴゴゴゴゴ》

《ビガーン》

無事にでてきたな・・・・

「ヴィータちゃん！？」

「シグナム！」

「我ら夜天の主に集いし騎士」

「主あるから我らの魂尽きることなし」

「この身に命ある限り我らは御身にあり」

「我らが主、夜天の王八神はやての名の下に」

《ビギャン》

「はやてちゃん！」

「夜天の光よ我が手に集え！漆黒の風リインフォース！セットアップ！」

うおおおお！！感動やでーめっちゃ感動やでー・・・

「ごめんな皆迷惑掛けたみたいで・・・」

「ううん」

「平気・・・」

「そのケイさんもすみません・・・・？・・・・」

「いや俺は自分のやるべきことをしただけだ・・・なんだ？俺に何か付いてるか？」

「ねぇクロ元気にしてる？」

「え？ああしてるぞ？」

「兄ちゃん？」

「「「「「！？」」」」」

「ハハハハオモシロイコトイウネキミ」

「なんで片言何？」

やばい！なぜだ！・・・・・くそ・・・まさか突然クロの事を聞かれるとは・・・・

「俺は賢一ではない！」

「何で名前知ってるん？」

「！？」

「帰ったらもう一度兄ちゃんを女装させようかな～？」

「たっ頼むそれだけは勘弁してくれ・・・・はっ」

しっしまったーーーー！！まさかだーｏｒｚ

「兄ちゃん？」

「はい・・・・貴方の兄・・・八神賢一です・・・・」

「その格好は？」

「正体を隠すためです」

「じゃぁまず戻ろか？」

「はい・・・・」

そう言って俺は、仮面と年齢を戻す・・・・

「うそ・・・・」

「私達と同じくらい・・・・・の男の子・・・・・」

「ケンイチ・・・・・」

「さぁ兄ちゃん誤ろか？」

「え？何で？」

「あ・や・ま・ろか？」

「ハイ・・・・皆さん正体隠していてすいませんでした！！」

「あははははは・・・・（汗）」

「何と言うか・・・・・」

「びっくり家族・・・・・」

ぐっは・・・・ビックリ家族だと・・・・・

「で?兄ちゃんのデバイスは?」

「え?あっああシエル!ユニゾンアウト!」

《ピカーン》

「どうもじゃ!我はケンイチの一部シエルじゃよろしく!」

「どっどうも・・・」

「ユニゾンデバイス・・・・」

「キャーかわいい・・・何この子・・・兄ちゃんのデバイス?」

「ああ・・・そんな事よりあれを如何にかしないとな・・・」

「それにはこの氷結魔法で防ぐかアースラの魔道砲で消滅するかそれとも」

「必要ない・・・・」

「な!?」

「兄ちゃんあれ消せるの?」

「フフフまぁ見てな・・・ふぅ・・・おらいくぞ!クロ!お前の全力全快の技をぶち込め!」

《ギャーオーーー》

「クロちゃん!?」

「うそ・・・・」

「マジかよ・・・・」

「行くぞーー!!ウオオオオオオ!!」

ケンイチの真上にどす黒い魔力の塊が出来る・・・・街一個の大きさ・・・

「俺とクロのクロス技!!デッド・ザ・ワールド!」

《ボガギャギャギャガガガ》

「ふはははははは・・・ぶち壊れろ!!」

「規則外や・・・」

「ハハハハ・・・」

「よかった・・・戦わなくて・・・」

めっさ気持ち良いー!!開放感が最高!!

「嘘・・・本当に・・・・・終わらせちゃった・・・・」

「ふぅ・・・はやてちょっとこち来い・・・・・」

「え?うっうん」

そう言って俺は、はやての頭に手を置き・・・・2日間で作った・・・アイテムを使う
どんなバグも全て消し去るようにするのには時間が足りなかった。
だが取り除く
事の出来るものは作れた・・・・

(リインフォースだっけ?聞こえてるか?)

(はっはい・・・何か?)

(お前に残っているバグを完全に取り除く)

(な!?そんな事が!)

(出来る・・・これでお前消えなくていい分かったか?)

(・・・・ありがとうございます。)

(如何いたしまして♪じゃぁやるぞ!)

《ピカーン!!》

よっし成功！だが如何しようかこのバグの塊

「え？何や・・・」

「リインフォースのバグを完璧になくした・・・・」

「え？まだ・・・バグが残っとったんか？」

「ああ・・・これでお別れはしなくて良い」

「ほんまか！？ありがとうな兄ちゃん」

「妹の為だ・・・・！？なんだ」

ケンイチの右手にあったバグの塊がケンイチを取り込んでいく！

「ぐっくそミスったか！？」

「兄ちゃん！？」

「近づくな！はやて！」

「！？」

「どうやら・・・バグがまだ完全に止まって無かったみたいだ・・・」

「兄ちゃん！」

「悪いな・・・・シエル・・・はやての事を見ていてくれ・・・・
皆も頼む」

「ケンイチ任せるのじゃ！」

「ああ！」

「我らヴォルケンリッター命に代えても守り抜きます！」

「いやや！兄ちゃん！一緒やろ！ずっと」

「悪いな・・・だがこれはさよならじゃない・・・またねだ・・・
俺は戻って来る
絶対にな！それにお前は一人じゃない」

「兄ちゃん！」

「もう無理みたいだ・・・・わ・・・・る・・・・いな・・・・」

この瞬間俺は・・・この世界から消えた・・・・

～～～～はやてｓｉｄｅ～～～～

いつも一緒に居てくれた・・・私の兄ちゃんが

いつも笑っていて私が悲しい時も慰めてくれた兄ちゃんが

今までで一番私の事を考えてくれていた・・・兄ちゃんが・・・・・

・・・・・・・・・・消えた・・・・・・・・・

「うわぁぁあああん」

「はやて！」

「くっ」

「こんなのってないよ・・・」

私が調子を取り戻すのには・・・・一週間掛かった

夜天の書（後書き）

まさかの展開！次回「闇の世界」！よろしく！

感想まってます

闇の世界（前書き）

書き方変えてみました！

闇の世界

何も無い・・・・・何処を見ても真っ暗な世界・・・・

（俺は・・・）

賢一は一人闇の世界で孤独に生きている・・・・

（皆・・・あれから何年・・・経っただろうか・・・）

全ての・・・・人の欲望・・・・憎しみ・・・・・嫉妬・・・・・
が流れ込む・・・・

（何で俺がこんな事に・・・・）

賢一は闇の世界で・・・・孤独に・・・生きている・・・・約束
を果たすために・・・・

（絶対に・・・・帰る・・・・・・何処に・・・だっけ・・・
ハハッ忘れちゃった・・・・）

そして・・・・一つの光が・・・・賢一の目の前に現れる・・・

・

（暖かい・・・・・・帰る・・・・俺は・・・・・俺は・・・・・）

「はやての所へ！！」

賢一の周りから魔力が溢れ出す・・・・それは闇の世界を侵食して行く・・・・

そして・・・・・闇の世界は・・・賢一に取り込まれた・・・・・

～～～～はやてｓｉｄｅ～～～～

兄ちゃんがいなくなって１０年の月日が経った・・・・私は機動六課って言うのを新設した

ロストロギア関連の危険な任務を扱うのがこの組織の任務やまぁいわゆる古代遺物管理部

ってやつや・・・・

「兄ちゃん、今何処に居るんやろ？」

はやては、まっていた兄の帰りをずっと・・・・

「はやてちゃん、如何したの？早く行こうよ？」

「あ、うん！」

はやては部隊の挨拶をしにいく

（兄ちゃん待っとるからな！）

「機動六課、課長そしてこの本部大社の総部隊長！八神はやてです！」

《パチパチパチパチ》

「時空管理局の部隊として人々を守っていく事が私達の使命であり・・・」

《ドガーーーン！！》

はやてが話していった時目の前の上の壁から突然・・・人が落ち

て来た・・
突然の事で目を丸くしているもの・・・・身構えてるもの・・・
武器を構えるものと様々に別れる・・・・そして落ちって来たもの
が起き上がる

「痛ぇー!!くぅうう・・・・・」

そこには懐かしい声が・・・・・・

～～～賢一ｓｉｄｅ～～～

（どうも・・・・皆さん・・・・・・賢一です・・・・・・お元気で
すか?
私は元気です。無事闇の世界から出て?きて・・・・外に出たのは
良いですが・・・・・）

《ゴゴゴゴゴー》

（落ちてます・・・ええ盛大に落ちてます・・・・出たらそこには青い空ですよ?
不幸過ぎるでしょ・・・・・しかも・・・魔力の出しすぎで・・・・・コントロールが利きません・・・・）

《ゴゴゴゴゴ》

（あ!地面が見え始めた・・・・・ん?あれは施設かな?・・・・・地球変わったな~
てか死んだ・・・・俺死んだ・・・・戻ってきたのに・・・・・はぁ）

どんどん近づいてくる・・・・地面・・・・

（あれー?もしかして?あの施設に落ちる?・・・・・施設の人御免なさい・・・・
今から人間ミサイルが行きます・・・・真っ赤なお花をさかせに行きます・・・・）

施設まで後5分でぶつかる・・・・

（皆さん・・・・今までありがとうございました・・・・八神賢一・・・・最後は綺麗に
散ります!・・・・）

そして・・・賢一は落ちた・・・・建物に・・・・

《ドガーーン》

「痛ぇー!!くぅうう・・・・」

（皆さんやりました!僕生きてます!・・・・・生きてますよ!）

「生きてるって!素晴らしいーーーーー!!」

突然吠え出すバカ・・・・・・・・・周りの人が見ているのを知らず・・・・

「え?あっあどうも・・・・・え～と・・・・すいませ「兄ちゃん!」へ?」

突然・・・・抱きついてくる・・・・女の人・・・・

（何この人!?・・・・え・・・・兄ちゃん!?・・・・え?・・・・兄ちゃん?）

「はやてか・・・・・・?」

「うん!やっぱ!兄ちゃんや!」

「とっとりあえず・・・・降ろしてくれ・・・・苦しい・・・・」

今・・・賢一の姿はあの時と【変わらない】・・・・そう１０歳のままなのだ・・・・

「はやてかーーー老けたな！」

「誰が老けとんねん！」

《バシッ》

「この突っ込み・・・・やっぱりはやてだ！」

「このボケはやっぱ兄ちゃん・・・・・」

変な所で・・・・確信している二人であった・・・・

「ケンイチさん！」

「ん？おお！なのはちゃん・・・・美人になったな！」

「あっありがとうございます／／／」

「何この私との扱いの差！？」

「妹だから？」

「ひどっ妹やからえんか!?」

「ハハハハハ・・・・・・」

漫才を始める・・・・ふたり・・・・周りは付いていけていない・・・・

「はやて・・・・・今・・・・挨拶の途中・・・・」

「あ!そうやった!」

「フェイト嬢もお久!アリシア元気?」

「はい!元気にしてます」

懐かしい顔が此処にはいっぱいあった・・・・

賢一は心の中で・・・・帰ってきたと実感した

「えーとんだハプニングが起きましたが・・・・これから・・・・・

機動六課を共に支えていきましょう!これで終わりにします!質問はありますか?」

「はい」

一人の子が手を上げて・・・・・質問をしてくる・・・・

「その人はいったい・・・・・」

「ああ・・・この人は私の兄ちゃんで・・・・」

「八神賢一だ！・・・・事情があって帰れなくなっていた・・・・・・」

「え！？お兄さん！？でも年が・・・・・」

「ん？ああ・・・俺はある所に封印されていたからな・・・・・・」

「封印！？」

信じられない・・・・事を聞かされ驚く少女・・・・

「まぁ・・・その説明はその内・・・・・あ！敵ではないから！・・・・・」

「はっはぁ」

そう言って・・・・・弁解をする・・・・・

「さ～て帰るかな・・・・・？」

「ん？兄ちゃん何処いくん？」

「え？家に・・・・・」

「え？此処地球じゃないよ？」

「・・・おいおい冗談は・・・・・（ってそうだったー此処ミッドチルダだ！）」

急に地面にｏｒｚしてブツブツ呟いている・・・賢一

「まてよ！？という事はお前って此処の隊長！？」

「え？何で分かったん？」

「・・・・・無いな・・・・・」

「ひどっ！」

ぎゃあぎゃあ騒ぎ出す・・・二人・・・その二人ほっといて・・・他の人たちは帰り始める・・・・そして残ったのは・・・フォワードとなのは達だけ・・・・

「あれ？皆は？」

「帰ったよはやてちゃん・・・・・」

「うそ!?はぁ兄ちゃん!のせいや!」

「は!?何でだ!・・・・・まぁいいや・・・・取りあえず俺は帰るわ・・・・」

「え?どうやって?」

「普通に転移して・・・・ってそういやシエルとクロわ?」

「いや・・・・転移って・・・・二人?二人ならこの大社に居るけど?」

「あ?マジ?なら・・・・・来い!シエル&クロ!」

《ブーーーン》

目の前に形成される魔法陣そこから美少女と黒い雛が出てくる

「なっなんじゃ!?」

≪ぎゅ?≫

「よ!久しぶり!」

「ケンイチ!!」

≪ぎゅうー≫

「よし！じゃぁ行くか！」

そういってケンイチは、転移の準備に取り掛かる

「ってちょいまち！やっと帰って来たのにもう違うとこいくんかい！」

「え？うん・・・・約束果たしたし・・・・・」

「なんやねん！もうちょい話そうや！」

「えーーー・・・・」

「女装させるで・・・・」

「謹んで承ります。」

「それでいいんや！」

「うううう・・・・苛めだ・・・・・」

妹に苛められる兄・・・・・・・シュールだ・・・・

「でも、どうせやし？女装させよか？」

《ダっー》

賢一は逃げ出した！

「逃がさんで？」

だが回り込まれた！

《ダっー》

後ろへ逃げた！

「あ！なのは！捕まえて！」

「え！？ごめんなさい！」

しかし、囲まれてしまった！

「いやだ！・・・・もう！あの屈辱は！」

「そんなに嫌か？」

「ああ！」

「なら！私達と戦って勝ったらやらん事にして上げよ！」

「まじか！？」

「ちょっはやて！」

「無茶だよ～」

「フフフフ負けられない・・・負けられないぞー！！さぁやるぞー！」

賢一の周りから魔力が飛び出す！

「バーニング！！「ちょい待ち！！」・・・なんだよ～戦うんだろ～」

「誰が此処でするって言うた！」

「え？じゃあ外？」

「まあ、行った時のお楽しみや！」

「いや良いよ・・・今すぐやろ？すぐ終わらせるから・・・・・」

「失礼やな！？」

「そうだよ・・・・虐殺させてやるの・・・・・」

「そうね・・・・・」

「なのは!?フェイト!?」

賢一の言葉に二人がやる気を出す・・・・どす黒いオーラが部屋を包み込む・・・・

「ひっ」

「フェイトさん・・・・怖い・・・・・」

「そっそんなに・・・・凄んでも・・・・まっ負けないからな!」

いろいろと負けた賢一・・・・・

《ダッ》

「ぐっううわあああああああんん」

賢一は逃げ出した・・・・

「逃がさへんで？」

「助けてーーーー！！」

「フフフ私達も綺麗にしてあげますから」

「そうです・・・・」

「いやーーーーーーーーー！！」

しかしはやてに捕まった！そして女装しにＧＯ－！

「シエルー助けてー！」

「我も手伝うぞ♪」

「裏切り者ー！！」

（帰ってきたそうそうこれですか？ねぇ・・・・）

闇の世界（後書き）

書き方戻した方が良いね！

賢一の年齢そのままで　Ｓｔｒｉｋｅｒｓへ！

なぜかって？面白そうだったから！

帰って来た日常？（前書き）

本気でネタが思いつかないｏｒｚ

帰って来た日常？

どうも・・・・皆さん・・・・賢一です・・・・・え？元気が無い？・・・・・

「ぐすん・・・・ううううう」

「涙目がまた・・・・」

「恐ろしい程似合ってる・・・・・」

「やっぱかわいい！」

「ケンイチ・・・・GOOD！」

「哀れ・・・・」

「ハハッハハハッハハ！」

フフフッフ・・・・終わった・・シエル鼻血出てるぞ・・・・・

ああ・・・空が青い・・・・・

この空を・・・・真っ赤に染めたい・・・・・・・

「兄ちゃん？窓に近づいて何しよるん？」

「いや・・・この空を真っ赤に染めようと思って・・・・」

「「「「「「「「「!?」」」」」」」」」

「いかんで!そんな事させへん!」

「HA☆NA☆SE!!俺は・・・俺は!俺はーーーー!!」

俺ははやてに抱きかかえられる・・・

・くそーー!!こんな世界こんな世界!

「落ち着き!」

「そっそうですよ!」

「抑えて!」

「クズが・・・・」

「orz・・・・・」

シエルのかいしんの一撃・・・・・クズじゃないもん・・・・・

「あのーはやて隊長?」

「何や？」

「賢一さんのランクって？」

「ん？・・・！じゃあ戦って見る？（ニヤニヤ」

「え！？」

「大丈夫や！私達も手伝う！」

「はやてちゃん、私達はもう行かないと・・・・」

「え！？ちょっ・・・・久々の再会やのに！・・・・・」

フェイトに引きづられ・・・・出かけるはやて・・・・

「兄ちゃん！ちゃんと此処に居るんやで！シグナム！ヴィータ！見といてや！」

「はっはい！？」

「はやて！？」

こっこれは！？チャンスなのでは！？

「クロ！行くぞ！」

《ぎゅ！》

「ちょっケンイチ我は！？」

「裏切り者なんか知るか！」

そう言って逃げる俺・・・・だが

「すまんな・・・・・」

《カシャッ》

「シグナム・・・・・何をした？（汗）」

「はやてに逃げられそうになった・・・写真を撮って脅せと・・・・・」

「撮って・・・？俺の格好は・・・・・」

さぁ此処で状況把握！・・・・・今俺は女装をしている・・・・それを写真で撮られた・・・・つまり

女装している俺↓撮られる↓ネットなので流通させる↓俺＝変態↓皆から冷ややかな目

駄目だーー！！逃げられないｏｒｚ

「くっ何が望みだ！」

「此処に居ろ・・・」

「さいですか・・・・はぁ・・・・」

此処に居たら・・・・平凡が中々来ないよね？・・・・俺の平凡がーーーーー！！

「じゃあ私達は行こうか？」

「「「はい！」」」

「私達も用事があるので・・・・」

「じゃあな♪」

あれ？俺、放置？

「シエル（泣）」

「我をほって行こうとしたじゃろ？」

そう言って何処かへ行ってしまう・・・・え？ちょw放置プレ

イ？・・・・

「マジかよ・・・・・」

《ぎゅう？》

「クロ・・・・お前だけだ・・・俺の味方は・・・・・・」

ああ・・・クロ、モフモフだ～癒される・・・・

「着替えよ・・・・・」

模擬戦観賞（前書き）

話が思いつかない～♪どうしよｏｒｚ

模擬戦観賞

どうもこの頃、女装をさせられて・・・・男のプライドをボロボロに壊されている
ケンイチです・・・言ってて悲しい・・・・今わた・・・・俺は訓練の見学をする為に
訓練場を探しています。

「・・・・迷った・・・・もう盛大に・・・・迷った・・・・」

《ぎゅう?》

「ん?」

《ぎゅぎゅ!》

「何!?場所を知っている!?それを先に言ってくれｏｒｚ」

《ぎゅう?》

「あーもうかわいい!!じゃない!何処にあるか教えてくれ」

《ぎゅ!》

俺はクロを抱きかかえ・・・場所を教えてもらう・・・・

そしてクロが指した方向は・・・・・・・右・・・・・

「え！？ここ？」

《ぎゅ！》

すぐ横かよｏｒｚ・・・・何だかな～

「お邪魔しま～す」

《ぎゅー》

「外か・・・・？」

≪ボガーン≫

「おお！？・・・・やってる！やってる！」

《ぎゅう》

「むしゃむしゃ・・・バリボリ」

創造で菓子を出して見学！完璧だぜ！

《ぎゃ！》

「ん？欲しいのか？」

《ぎゃう！》

「そうか・・・ほれ・・・」

《むしゃむしゃ》

≪ドガーン！ボーン！≫

「やってるな～・・・本当魔法じゃないよな・・・これ・・・」

俺の目の前で広げられる・・・ビームやら爆発・・・

「科学って素晴らしい！って・・・え！？ちょっ≪ボーン≫ぐばらっ！」

フフフフ・・・

「ってあ！ケンイチじゃん・・・如何したんだ？ボロボロじゃん」

「ん？賢一殿？どうした？」

何で今日は・・・・こんなにこんなに・・・・

「おい？」

「賢一殿？」

不幸なのかな？（怒）

≪ゴゴゴゴゴゴッ≫

「な！？」

「やばい！なのは！皆を非難させろ！」

「え！？なんで？」

「賢一が馬鹿でかい魔力をぶっ放そうとしてる！」

「うそ！？皆！訓練中止！逃げるよ！」

「え？何でですか？」

「いいから！早く！」

「「「「はっはい！」」」」

「そうだ・・・全部消えちまえば良いんだ・・・そうだそうに

違いない」

そう言って俺は・・・魔力の塊を訓練場に打ち込む・・・・

≪ドガーーーン≫

「ヒャハッヒャハハハハッハ！もう一発喰らえや！」

「！？やめろ！賢一！」

「抑えるんだ！」

「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ！」

こんな世界！こんな世界！・・・・・あれ？デジャブ？

「賢一さん？（怒）」

「あぁ？なんじゃ・・こ・・・・・・・ひぃぃぃ・・・・」

「お話しよっか？」

「やっやめ・・・・ぎゃあああああ」

「なのはさん・・・・怖い・・・・・」

「いやそっちより賢一さんでしょ！？」

「フィールド事・・・・破壊って・・・・」

「敵にしたくない人・・・・ナンバーワンだね・・・・」

「くそーーーーーーー！！不幸だーーー！！」

この台詞っておきまりだよね？ね？・・・・・

模擬戦観賞（後書き）

皆さんに質問です！賢一は！管理局側が良いですかすか？
それともナンバーズ側が良いですか？どっちが良いか感想まってます！
もう管理局だろ？いやまだ！管理局には入ってない！

新たなデバイス（前書き）

皆さん投票ありがとうございます！5対0でナンバーズ側に決定です！

早い？ふっ管理局側のネタが無いんだよ・・・・・

新たなデバイス

今日は皆に新しいデバイスが渡される日です・・・・もうそろそろ・・・
シエルＶｅｒＵＰさせようかな？・・・・・まぁいいか・・・・・
その内しようと

「わあ！」

「これが私達の新デバイスですか？」

「ストラーダとケリケイオンは変化無しかな？」

「うん・・・そうなのかな」

「違います！この子達はエリオ、キャロ、スバル、ティアナに個性に合わせて作られた文句なしの最高の機体です！ただし！武器や道具と思わず大切に性能の限り全快に使って欲しいです！」

「「「「はい！」」」」

へー実際に凄いな・・・・やっぱ生で見るのは違うわ！
ツヴァイも実際見ると小さいな・・・・

「所でケンイチさんのデバイスは？」

「え？俺の？皆もう会ってるじゃん・・・・」

「会ってる？」

「如何いうことですか？」

「シエルだよシエルあいつが俺のユニゾンデバイス」

「へぇーってシエルさんが！？」

「シエルさんユニゾンデバイスだったんだ・・・・」

「あれ？知らなかったの？」

「でも訓練の時シエルさん居ませんでしたよね他のデバイスでもあるんですか？」

「ん～？ないよ？」

「え！？じゃあどうやって？」

「普通に？デバイス無しで・・・・」

「「「「「え！？」」」」」

驚愕する皆・・・中々面白い・・・・・

「ごめんごめんお待たせ！って如何したの皆？」

「ケンイチさんの規則外に驚愕しています・・・・」

「ハハハハハッ」

「とっとりあえず・・・機能説明するわね？」

「「「「はっはい！」」」」

えーもう少し・・・見ていたかったのに・・・・

「まずその子達、皆何段階に分けて質力リミッターを掛けてるわね
だから最初にそんなにびっくりするほど
威力が出るわけじゃないから・・・安心してね」

「皆が今の質力を扱えるようになったら
私達が段々解除していくから」

「ちょうど一緒にＬｖＵＰしていく感じですね♪」

「あ、質力リミッターって言うとなのはさん達にも付いてますよね？」

「ああ・・・私達はデバイスだけじゃなく・・・本人にもだけどね」

「「「え!?」」」

「リミッターがですか?」

「能力限定って言ってね・・・・うちの隊長、副隊長みんなだよ?」

そこまで一緒に居たいかね~・・・・本当に甘ちゃんだね・・・・・

・こいつら

反吐が出る・・・・・

「へぇー」

「ケンイチさんは?リミッター掛けてるんですか?」

「帰って来たばかりのやつにそれを聞くか・・・・・?」

「あっすいません」

「まぁいい・・・・付けてるちゃぁ付けてる・・・・・」

「そうなんですか!?」

「どれ位ですか?」

「聞かないほうが良い・・・・」

「そっそうですか」

この時皆の心が一つになった・・・・・気になる・・・・・

「じゃあ今は何ランクですか？」

「E」

「「「「！？」」」」

あれ？これって答え言ってるようなものなんじゃ・・・・・まぁいいか・・・・

≪ビービービー≫

「このアラームは！？」

「皆大変や！」

「はやて部隊長！」

「レリックが見つかった！場所はエイリム三角丘陵地区！対象はリニアレールで移動中！皆！急いでや！」

「皆！行くよ！」

「いってら～」

［兄ちゃん！？］

「俺これから行くとこあるから・・・またな！」

［そうなんか・・・まぁええわ］

今度会う時は敵かもしれないけどね・・・・・フフフ

「クロ！シエル行くぞ・・・・」

《ぎゃ！》

『分かったのじゃ！』

さぁ原作ブレイクの始まりだ・・・・・・

新たなデバイス（後書き）

裏切りの始まり！

ケ「仲間だとは一言も言ってない」

うわ・・・・・感じ悪・・・・・

３０万アクセス記念（前書き）

来ましたね・・・・とうとう

３０万アクセス記念

「皆さん！とうとう３０万アクセスきました！！」

《ぎゃうー！》

「やっと！やっと！此処まで来ましたのじゃ・・・・・・」

「そして今日は！何をするかというと・・・・・特にありません・・・」

《ぎゃ！？》

「何も無いのか！？」

「それでは！さよなら～♪」

「えええ！！？？」

《ぎゅうう！？》

「冗談ですよ♪びっくりした？ねぇ？ビっくりしたでしょ？（ニヤニヤ」

「ケンイチそれ位にした方がよいぞ？」

「え？なんで？・・・ちょっ・・・・包丁下ろして！
そうそう！振りかぶって・・・・・って違う！・・・
・・・投げないで？ね？やっやめやめてーーーーーーーーーー」

千を超える包丁が賢一を襲う・・・≪ぐささささぐささささぐささ
！≫

「兄ちゃん？ってうわ！？どうしたん！？なんかめっちゃ刺さっとるで？」

はやてが部屋の中に入ってくる・・・・・

「玩具だ・・・・・」

「嘘や・・・・・」

「玩具だ！」

「でも・・・・血が・・・・」

「ケッチャプだ・・・・」

「そうなんか?」

「ああ・・・悪い・・・一人にしてくれないか?」

「え?わっわかった・・・・・」

痛いよ・・・・超ーーーー痛い・・・・・不死身でも・・・・・・
痛みはあるんだぞ・・・・

「賢一が悪い・・・・」

「くそ!少しふざけただけじゃないか!」

「読者は神以上じゃ!」

「ぐっ・・・・・俺が悪かったですよ!ええ!悪ぅございました!」

≪ぐささささ!≫

「本当すいません・・・・・もう勘弁してください・・・・・流石に死ぬ・・・死ねるからこれ・・・・・」

「それで今日は?何をするのじゃ?」

「ちょい待ち包丁抜くから・・・・」

～～～少しの間お待ちください！！～～～～

「これで！最後！っと・・・ふぅ終わった・・・・」

「ハリネズミの次は・・・・赤だるま・・・・」

「赤だるま言うな！」

「全身真っ赤で言われても説得力ない・・・・」

「ってクロ！？誕たらしてこっちに来るな！？俺は食い物じゃ無い！」

《ぎゃーー！》

「ぐっくそ！少し待ってろ！」

～～～少しの間お待ちください！！～～～～

「どうだ！」

「ミイラか・・・・・」

「違ぇよ！？」

「全身包帯はミイラじゃろ・・・・・」

「好きで成ったんじゃねぇよ！ってクロ舐めるな！？」

《ぎゅう♪》

「くっもういい！本題入るぞ！」

「なにをするのじゃ？」

「ふふふ！それは！」

「それは？」

「ずばり！ドキドキ！バクバク！うわん！」

「まっまさか！？」

「男だらけのホイホイ祭り！！」

≪グササグサグササササ≫

「ぎゃあああああああああああああ！！」

さっきの何百倍もの包丁が賢一を襲う

「食事中の方申し訳ございません・・・・・」

やりませんよ？By作者！

「あたりまえじゃ・・・・・」

ジェイル・スカリエッティ（前書き）

短いけど勘弁してください・・・・

ジェイル・スカリエッティ

今日も今日とて悪人殺し～♪・・・ん？何してるかって？
管理局の裏側を破壊してます♪まぁそのおかげクレーターが
出来まくってるけど・・・・いいよね？

「さぁ♪逃げろ逃げろ！逃げないと死ぬぞ！ハハハハハハ！」

『傍から見たら賢一の方が悪人じゃな・・・・』

「まぁ・・・悪人じゃないの？次元犯罪者になっちゃたし・・・・」

『星破壊の仮面じゃろ？』

「星なんか壊してないのになぁ～」

『いや充分壊しとるぞ・・・・』

なんだよ～・・・はぁ～て言うか～マジしんどいんですけど～
管理局～裏あり過ぎるんですけど～マジで～

「あ～あ～・・・・めんど～」

≪ドギャーン≫

『愚痴を言いながら・・・施設を破壊・・・何とも・・・・』

「あーーーー!!めんどくせー!クロ!!一気にやっちゃえ!」

《グギャアア》

クロが元の姿に戻りエネルギーを溜める・・・それを施設に撃ち出す・・・

≪ドガガガッガガガ≫

《グギャーーー》

「うぉ!山が・・・・・」

『新しい通り名が出来そうじゃな』

「どんな?」

『化け物』

「直球!?はぁ・・・・・何か俺疲れてきたよ・・・・クロラッシュ・・・・」

《ぎゅ?》

『次行くぞ・・・賢一・・・・・』

「無視ですか・・・」

～～～～？？？？～～～～

「実に素晴らしい！」

ああ！素晴らしい！如何にかしてあの男を手に入れたい！

「ウーノ！」

「はい・・・なんでしょう？」

「如何にかして彼を此処に連れて来てくれないか？」

「いえ・・・その必要は無いかと」

「？なぜだい？」

「此処に向かってきてるからです・・・・」

～～～賢一で～す～～～～

「何処にあるんだ？シエル？」

『ここら辺じゃ・・・』

いやここら辺て・・・・・

「めんどくさいから・・・ここら辺・・・・・全部潰す？」

『ケンイチ・・・正確変わとらんか？』

「は？ちょっとした冗談じゃん・・・・」

確かにこの頃・・・なんかいらいらするけど・・・・・ま！気のせいでしょ！

《ぎゅ！》

「ん？どうした？・・・・あら？誰か居ますね？」

『此処は「先手必勝!!喰らえーーーーー!!」人の話を最後まで聞け・・・・』

「!?」

ケンイチの手から無数の魔力の刃が飛んいく・・・・

「この前のハリネズミで思いつきました!」

『誰にいっとるんじゃ?』

「さぁ?」

『・・・・はぁもういい』

「お!あれ避けたの!すげー・・・」

煙が晴れた所から無傷で立ってる女性・・・・

「ん?」

『如何した?賢一?』

「いや・・・・どっかで見たこと・・・・あるような?」

[どうも!星破壊の仮面よ!]

「うお！？ジェイル・スカリエッティ！？」

［私の名前をしてくれているとわ・・・・光栄だね］

「まぁ同じ次元犯罪者だし？」

［ははははっは・・・それで君に相談があるんだけど・・・・］

「何だ？」

真剣の表情で俺に話しかけてくるスカリエッティ・・・・

［如何かね？仲間に成らないかね？］

「良いよ」

［早！？］

「相談したのそっちじゃん・・・・」

『いや・・・早すぎるぞ・・・』

［まぁ良い・・・それじゃ此方へ来てくれ］

「どうやって？」

［君の目の前に居ると思うけど？案内人が？］

「ああ・・・・なるへそ・・・・・」

これが俺とスカリエッティとの出会いだった

ジェイル・スカリエッティ（後書き）

いよいよナンバーズ側！さぁ如何なる？賢一！？

感想・評価お待ちしてマース！

ナンバーズ（前書き）

ナンバーズ達の性格がｗからねぇ～～～～

おっす！おら賢一！今日はジェイル・スカリエッティに仲間に誘われたぞ！
楽しくなりそうだ！

「此方でドクターがお待ちです・・・」

この人はウーノだ、本物だぜ！おら感動！・・・・まっ警戒されてるけど・・・・・・
当たり前か・・・・・別に悲しくなんか・・・・≪グサササ≫・・・・ないん・・・・だからね・・・・・

「待っていたよ・・・・・どうしたんだい？その包丁は？」

「ドッキリで・・・す・・」

「いや、血が・・・・」

「ドッキ・・・・リ・・・・・です」

「そっそうかい・・・・・もう一度確認するけど・・・・仲間に成ってくれるんだね？」

「おう！」

「フフフまぁ、信じようか（回復が早いな・・・・）」

あ～あっこれでＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩフラグ多分立つな～

・・・逆にＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩしてやるぜ！・・・・出来るよな？

「君に紹介をしたい子達がいるんだがいいかね？」

「ん？そいつらか？」

「ああ・・・私が作り出した、戦闘機人ナンバーズだよ」

「へぇーこの子達が・・・・」

「ん？知っているのかね？」

「まぁ少しだけね」

アニメ見てたからです。とは言えない・・・・・

「この子達の名前は？」

「右からクアットロ、セイン、チンク、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ、トーレだよ」

「ふーん・・・・俺は八がゴホゴホ・・・・・・ペルソナって言うんだ！
気安くペルって呼んでね！」

はい！誰も反応無しです！無視ですね、分かります・・・・・ぐすん・・・・え？
名前が気に入らない？だって・・・・・思いつかなかったのに・・・・・

「ペル？仲間に成った早々悪いんだが・・・君の力を見せてくれないかい？」

「・・・・・」

「ペル？」

「・・・・・」

「ペル！！」

「あ！俺か・・・・・」

（（（（（（（（（（絶対偽名だ））））））））））

この時、この場に居た全員がそう思った・・・・・・・・・

ナンバーズ（後書き）

短いですね・・・・あっ後投票も遅れます！なぜかって？フフフ魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳを見直すんですよ・・・・ｏｒｚ

圧倒的力の差（前書き）

さぁミンチミンチ！

圧倒的力の差

「君の力を見るから訓練室に行くよ」

「ああ、良いよ」

っと言うわけで、やって来ました！ナンバーズとの対戦！
ワクワクがトマラネェ・・・どうやって料理しようか・・・・・クククククク

「で？誰が相手なんだ？」

「ん？ナンバーズ、全員だよ？」

「ふ～ん・・・・・は！？」

ナンバーズ全員・・・・とか・・・・・・・え？何苛め？・・・・・・・逆に苛めてやる・・・・・・完膚なきまでに・・・・・・

「良いだろう・・・・・後ハンデをやる・・・・・・」

「ハンデとは？」

「魔法無し・・・・・素手で戦ってやる・・・・・・」

「「「「「「「「「!?」」」」」」」」」

「てぇめぇ!なめてんのか!!」

「ん?君は確かノーヴェだったかな?」

「そんな事はどうでもいいんだよ!てめぇ如何いうつもりだ!」

「力の差を教えてやるんだよ・・・・」

「ああ!!」

「止めたまえ、ノーヴェ・・・・」

「ちっ」

おお・・・怖っ・・・・・いや~本物だねぇ~本物・・・・・・

あ~バトル楽しみ~

ん?何故素手かって?勝てるの?フフフ皆さん忘れちゃいけない・・・

身体能力も超!チートなんだよ・・・・・

「おっとその前にユニゾンを解かないとな・・・・」

『やっと・・・・やっと出番がキターーーーーー』

「ユニゾンアウト」

「シエル参上じゃ！」

「ペル・・・君、ユニゾンデバイスだったのか？」

「え？知らなかったの？」

わぉ、気付いてなかったとは・・・・・・予想外！

「ま！そんな事より・・・バトルバトル！」

「そっそうだね・・・・・」

フフフ・・・ボコボコぜよ・・・・あれ？何か本当に性格変わってね？

「それじゃ始めるよ？」

「おう！こいや！」

「始め！！」

「行くぜ！」

まず誰を狙おうか？番号順に・・・・うん、そうしよ

「まずは・・・？3（トーレ）」

≪バギッ≫

「ぐはっ」

「「「「「「「！？」」」」」」」

「油断大敵だぜ・・・？」

一瞬でトーレに近づき腹に一撃を入れる

「さぁ次だ・・・・」

また消える・・・・

「？4（クアットロ）」

≪ボガーン≫

「？5（チンク）」

≪グサァ≫

次々とナンバーズを倒す・・・・

「さぁ次は・・・？6（セイン）」

「くっ！」

「遅いよ？」

≪ドスッ≫

「ガハッ！？」

弱いな・・・ん？お前が強すぎるだけ？それ程でも～
・・・・・何かもうめんどいな・・・・ん？ナンバーズの出番？
さぁw？

「一気に行く・・・・」

「「「「クッ」」」」

「？9（ノーヴェ）、？10（ディエチ）、？11（ウェンディ）・
・・・」

≪ドガガッガガガガ≫

「はい、終わりw」

～～～～スカリエッティ～～～～

最初は何が起きたかまったく分からなかった
・・・気付いた時にはトーレが腹を殴られ、気絶をしている所だった・・・
高速機動型のトーレさえ反応出来ずに倒される、それからは一方的
名前が呼ばれたものが何時の間にか吹き飛び、壁に叩き付けられる。

「素晴らしい」

その言葉しか出てこなかった・・・・・

「はい、終わりw」

規格外だな・・・・・

～～～～賢一～～～～

いや～・・・・・やりすぎた・・・・・過ぎた事はしょうがない！ないよね？

「おーい・・・スカっち・・・もう良いか？」

「スカっち！？・・・・ああ良いよ・・・・行き成りだけど君に言って欲しいとこがあるんだが良いかね？」

「いいよ？別にだってこの状況じゃぁ俺だけっしょ行けるの・・・・」

「ハハハハッそうだね」

「で？何処に行けば良いんだ？」

「ホテル・アグスタ・・・ちょっと敵の戦力が予想外でね・・・・」

「へー・・・・分かった」

「向こうに協力者がいる筈だから落ち合ってくれ・・・・」

「ＯＫ」

原作と変わってきてるね～まっいいや・・・機動六課

・・・どれくらい強いか試させてもらうよ?・・・ククク

圧倒的力の差（後書き）

誰か！ナンバーズの性格教えてくれーーーーーーーー！！

編集完了　＾ー）

チートライダー（前書き）

ライダー系多くなってきましたね・・・・・

転移してきたは、良いものの・・・ここは何処だーーーーー!!

・・・・・・≪ヒュ～≫・・・・・・・・・・寂しくなんかないんだからね!

ただ!突っ込んでくれる人がいないだけなんだから!え?シエル?

今日は留守番です!え?なぜかって、ばれる可能せいがあるのと・・・スカっちが興味を持ったからです!あっ後クロもです!

理由は同じ・・・・・

「それにしても協力者は何処にいるんだ?」

≪ヒュ～≫

「何か突っ込む人がいないとあれだな・・・

・・・うん、真面目にしよ・・・・・・・」

という事で・・・・あの御方の力を!その名は!ドラ○もん!

創造開始・・・・・・・

≪たったらたら～♪≫

「どこでもドア～♪ルテーシア嬢の居る所!」

≪ガチャ≫

ドラえ○んってチートロボットだよね・・・・・・・・

「・・・・誰?」

「どうも~スカっちからの助っ人です!」

「・・・・・・・」

あら無視・・・・・・・

「・・・・でっで?レリックは」

「相手に取られた・・・・・・・」

「誰に?」

「金髪の女だ」

うお!渋い・・・・漢だ・・・え?此処は・・・ウホッいい男?

何それ?おいしいの?

「金髪の女ね～」

フェイトかな？いや確か中にいたよな？原作では・・・・・

「まぁいいや・・・・此処から俺だけでやるから、帰っていいよ？」

「どういう意味だ？」

「いや、あんたはまだばれない方がいいだろ？」

「む・・・・だが・・・・・」

「大丈夫、大丈夫・・・俺は一人でいいから・・・・・」

そっちの方がやりやすいし・・・・・

「・・・・わかった、後は頼む・・・・・」

「よっしゃ！任された！」

「ルテーシア帰るぞ・・・・・」

「うん、ガリュー・・・・・」

そう言ってその場から消える

「しまった・・・・場所聞いてない・・・・・」

≪ヒュ～≫

だが！どこでもドアがあるから大丈夫っとその前に

≪たったらたら～♪≫

「チートベルト！」

ん？これ？ガリューを見てて仮面ライダーが思いついたから作った・・・・え？なぜ？いやこの前、大人バージョン＆仮面でバレたからじゃ～全体隠せばよくね？って思ったわけよ・・・・あっ後声も変わるから

「とりあえず・・・返信！じゃなかった・・・・変身！」

≪ピカー≫

格好は５５５と一緒だと思ってくれ・・・・能力は【俺様主義】どんな能力？くくく・・・・・まぁ全てが思い道理いくと思ってくれ・・・・チート？だからチートベルトなのだよ・・・・だが・・・・

これは一回使ったら砂になって壊れるしかも！魔力と生命力さらに寿命を殆ど持っていかれる・・・・・まっ俺には関係ないけど

「『さて・・・・・行くかな・・・・・・』」

仮面ライダーが何処でもドアをくぐって行く・・・・・シュールだ

～～～～機動六課～～～～

「皆！大丈夫！」

「はい！なのはさん」

「アリシア！？」

「話は後！今は目の前の敵！」

そう言って目の前に居る人型の召喚獣を見据える

「・・・ギ」

「？」

「なんだ？」

目の前に居た人型の召喚獣が消えていく、ガジェットも引き返していく・・・・

「諦めたのかな・・・・」

「そうみたいですね・・・・・」

皆がようやく終わったと思ってその場に座り込む・・・スバルはティアナの所へ向かう

「アリシア・・・何でここに・・・・？」

「いやちょっとね此処に用事があったんだけど・・・・運良くさっきの奴を見つけてね」

「そうなんだ・・・・」

「はいこれ・・・レリック」

「あ、うん」

レリックを受け取ろうするだが何時の間にか目の前にピンク色の扉が現れる・・・・・

「「「「「「「「「！？」」」」」」」」」

「『フフフそれを貰うよ？』」

～～～～チートライダー（賢一）～～～～

フフフ、レリックはっけ～ん・・・・

「『フフフそれを貰うよ？』」

「な！？」

「【動くな】」

「体が・・・・」

どうだ！これが俺様主義！俺が動くなっと言ったら動くな！
全てが俺の思うがまま！金髪の女ってアリシアだったのね・・・・・
・

「てめぇ！喰らえ！」

「【時は止まる】」

世界が止まる・・・・この世界で動くのは俺だけ・・・・・

「・・・・ふむ・・・・このベルトは面白くないな・・・・・・」

レリック回収完了！う～ん・・・・でも面白くないな・・・・・・
とりあえず・・・レリックを転送・・・・

「任務完了！・・・・え？終わり？え？ちょ・・・・・そうだ！
どうせだし遊んで帰っていいよね？」

そうだ！読者もそれを望んでいるはず！

「とりあえず、全員のでこに・・・・肉っと・・・・・・っぷ」

やべ・・・滅茶苦茶おもしれぇ・・・・え?ティアナとスバル?
もちろん、書いたよ?そうだ!レリックの代わりに
この石を・・・・創造開始・・・・フフフ、レプリカ作成・・・・
んでもって
手紙を（おいしくいただきました）よしＯＫ!能力は機動六課に戻
ったら
石に戻る一度使ったら戻せない・・・・ＯＫ・・・・ククク

「【時よ動け】」

「な!?」

大いに空振りをしてこけるヴィータ・・・・

「何処を見ている?」

「何時の間に!」

「さぁ・・・・戦おうか・・・・・・っぷ」

ちょ・・・でこに肉って書いてあるのに真面目な顔しないで!
やばい・・・・無理!戦いどころじゃない!読者の皆!すいません!

でもでもしょうがないんです！でこに肉って書いてこっち見てくるんですよ！しかも皆美人だから、ギャップが・・・・

「ップククむっ無理・・・・かっ帰る・・・・・（ちら）ップ」

「「「「「「「？？？？」」」」」」」

しっしかも、きっ気付いてないし・・・・てっ転移・・・・・・っぷククク

≪ブン≫

「ヒャハハッハハッひッヒヒ駄目！」

「鬼だね君・・・・」

機動六課に怨みを買ったのは言うまでもない・・・・・

「そっそういえばまっ魔王フラグだ・・・・・ぷくく」

チートライダー（後書き）

戦ってない・・・・・・まぁいいか

その後

「筋肉六課を倒したぞ！」

「間違えてるよ？」

「え？筋肉六課でしょ？え？違うの？」

「機動六課」

「うっそだ～筋肉六課だよ～」

「機動」

「筋肉」

「はぁーもういいよそれで・・・・」

ハハハ！俺様最強！

「それより君のさっきの格好は何なんだい？」

「チートライダーさ☆」

「そっそうかい・・・・・」

でも面白くなかったから封印かな?

「そういやシエルとクロは?」

「ん?・・・・・・あそこで寝ているよ?」

何か間があったぞ・・・・・・・

「・・・・・・」

「そっそんな事より、飯にしようじゃないか!」

「お!マジか!いや~腹へってたんだよな~」

実は朝から何も食ってないんだよ・・・・・・

「・・・・・・・これは何だ?」

「飯だよ?」

え?カプセル?え?飯?え?え?え?え?

「ふざけるな！！！」

「！？」

「俺が作るからまってろ！」

「え？うん？」

たくよーふざけるなよ・・・・飯がカプセルって・・・・

冷蔵庫は・・・・うん無いよね・・・・何も無いよね・・・・・

・

「不幸だ・・・・」

創造開始・・・とりあえず・・・・オモライスでいいよね？

「はぁー（もぐもぐ）・・・うめぇ」

「それはどうやったんだい！？」

「俺のレアスキル・・・」

「そうなのかい？（何でもありだな）」

「そんな事より！食事の材料買っとけよ！」

「??なぜだい」

「い・い・か・ら買っとけ！」

「はっはい・・・・・・」

本当ふざけんなよ・・・・何で俺がやべ眠い・・

「俺、寝るわ」

「ん？もうかい？」

「俺の部屋何処？」

「君の部屋ね・・・・それじゃ此処にしてもらおうかな？」

俺の目の前に地図がでて場所を示す

「遠い・・・まぁいいか・・・じゃぁお休み・・・・・ふぁぁ」

「うんお休み」

あ・・・・シエルとクロ忘れた・・・・まぁいいや

着替えなきゃ・・・・・もういいや・・・・・

俺適当だな～・・・・・ＺＺＺ。ＺＺＺ。

その後（後書き）

５０話までには、次の世界へ行こうと思ってます。あくまで予定で次の世界は何処がいいですか？これお約束覚えといてね？
５０話からは番外編のほう書こうかな？まぁいいや
感想、指摘、まってまーす

５０万アクセス記念（前書き）

最新遅くてすいません！！

５０万アクセス記念

５０万アクセス達成！

「５０万キタよ・・・・・」

「５０万じゃな・・・・」

うおおおおおおおおおおおおおおおおお！！

「感激で涙が・・・・・・でない」

「出んのかい！」

「うん」

「うわ、きっぱり言うのー」

清々しい顔で言う賢一

「今日はこの前、言っていた男だらけの「作者！出て来い！今すぐ殺してやる！」

冗談だよ～♪」

「クズの癖に冗談とは」

「ひど！？」

この頃シエルが厳しいです。反抗期でしょうか・・・・

「まっそんなどうでも良い事はさて置き！」

「何気に酷くないか賢一」

「冗☆談☆さ☆」

「死ねばいいのに」

やはり反抗期か？

「今日はこの俺、賢一の力をゲームのステータスぽく教えるぜ！」

○八神賢一　♂

Ｌｖ？？？　　もちもの　チートベルト

ＨＰ／ＭＰ　∞／∞　ずかんＮｏ．？？？

創造　　ＨＰ　１０億／１０億
こうげき　∞　　なまえ　ヤガミケンイチ
ぼうぎょ　∞　　タイプ　闇（特に得意な属性）　魔力変化
ＨＰ／ＭＰ　０　　とくこう　∞　　おや　　？？？　　次元
とくぼう　∞　　ＩＤＮｏ．？？？
移動　　ＭＰ　１億／１億
すばやさ　∞　　げんざいの　けいけんち
９９９９９９９９９　　謎
の眼　　ＭＰ　５０００／５０００
つぎのレベルまで
？？？？？？？？？

とくせい　規則外（何をするにも軽々やってのけてしまう）

「まさかのポケ○ン風！？」

「面白いじゃろ？」

「分かりやすくて、逆に怖い」

「絵は、作者の力では無理じゃった」

「絵まで用意しようとしたのかよ！」

「何じゃ不服か？」

「いや別に「そうか不服か！」」

「ならこれじゃ！」

全てが規則外だと思えばいい

「これもうステータスでも何でも無いよね！？
ただの説明でしょ！？しかもひど！？」

「完璧じゃ！」

「何処が！？もういやｏｒｚ」

５０万アクセス記念（後書き）

これからはがんばりたいと思います。（たぶん）

新しい一日

「ふぁ～」

・・・・・よく寝た、此処は・・・ああ思い出した。
そういやスカっちの仲間になったんだ

《ぎゅー》

「ん？何時のまに此処に来たんだ？」

《ぎゅぐー》

「寝てる間に？へぇーあれ？何で言ってる言葉が分かるんだ？」

《ぎゅ？》

「ん？いやなんでもない・・・・・（まぁいいか）」

それにしても、息苦しいな、あっ仮面付けたままだ・・・・・てへ☆
・・・・・元の姿に戻ろ・・・・・・

仮面を取りマントも取る、そして自分の姿が１０歳の体に戻る
皆さん忘れてはいけません、私子供・・・ね？

「一気に視界が低く・・・・」

《ぎゅうい！》

「ん？こちの方がいい？ありがとう・・・」

クロを抱きかかえ、スカっちのところへ行く≪ぐぎゅる～≫

その前に飯だな・・・・・

クロを抱きかかえて移動する賢一は、そっち向けの人に受けそうだ

「（ブルル）なんだ！？不愉快な言葉が！」

『賢一五月蝿いぞ』

「シエル俺の中に戻ってたんだ」

『そうじゃ、もうあんな思いはいやじゃしな！』

何があったんだ・・・・・てか中に戻れたのね

「飯～♪飯～♪今日の朝ご飯～♪」

『変な歌じゃ』

《ぎゅ》

「あ～突っ込みだ、これぞ突っ込みだ」

『とうとう壊れたか』

《ぎゅ》

あれ、目から汗が・・・・

「飯の材料がもうそろってる」

どうなってんだろ??

「まぁいいや、さて！オムライスを作るかな」

え?それしか作れないのか?ハハハハ、ソンナコトナイヨ?
玉子焼きとか目玉焼きとかね?とりあえず好きなの、
そういうことにしといて

「うん、美味」

《ぎゅ～》

「ん？ほれ」

《ぎゅ（むぐむぐ）》

クロがオムライス一生懸命食べる

・・・・癒される

「どちら様でしょうか？」

「ん？」

おお～ウーノさんだ、何時見ても綺麗ですね・・・・・
でも一日で忘れるって酷くないですか？

「何処から入ったの？」

「うえ？」

「上？」

何か上から目線てっ言うか子供相手に聞いてる感じが・・・・
ああ、俺今、子供の姿だ。

「ペルソナです。」

「ああ、ペルさんでしたか・・・・・・ええ！？」

おお～ウーノさんの驚き顔、プレミアムだ

「子供だったんですか・・・・」

「うん」

『軽い』

《（むぎゅむぎゅ）》

あ～癒される

他の人から見たら賢一の食事姿も癒されると思う

それはない、談じてない！認めんぞ

「カワィイ」

聞こえない、あーーー何も聞こえない！

「ウーノどうしたんだ？」

「チンクですか、いえペルさんに常識は無いんだなっと思いまして」

「？所でその子供は誰だ？」

「ペルさんです・・・」

「そうか・・・・・なに！？」

おお！さらに驚き顔いただきました！

「ごちそうさま、スカっちの所行こうかな」

《ぎゅー》

「え？何？いやだ？」

何をされたんだ・・・・・・これはおしおきかな？

「ウーノさん？スカっち、クロとシエルに何をしたんですか？」

「え？それは・・・・」

「それは？」

「言葉では表せないことを・・・・・」

「よし、殺す」

「え、ちょ・・・・」

「ああ、ごめんごめん半殺しにする」

「はっはぁ」

え、いいの？とりあえず・・・ぶっころ

「フフフ・・・待っていろスカっち今魔王が行くよ」

ゆっくりと歩いて食堂を出って行く、
そこにちょうど残りのナンバーズが戻ってくる

「チンク姉、さっきの子供誰？」

「ペルソナだ・・・」

「「「「「なにーーーーーーー！！」」」」」

何か騒いでる何かあったんだろうか？
まっそんなことより・・・・

「スカっち♪」

「ん？なんだい？ペ・・・誰？」

「ペルだよ？」

「びっくり人間だね君は・・・・・」

「ハハハハ、そんなことより」

「そんなことより？」

「クロとシエルに何やってんだごらーー！」

「ぎゃーーーーーーー！！」

もう一つの叫びが基地内に轟いた

新しい一日（後書き）

がんばります！

部下の失敗は上司の責任～部下じゃないけどね？～

「ひゃはははっはは！！」

どうも、今現在爆笑している賢一です。え？なぜかって？
それは・・・・・・

「＜借りは返しました＞だって・・・っぷ」

ん？どういうこと？あれだよ、ナンバーズが
ヴィヴィオとレリックを取りに行ったんだけど
原作道理、失敗して中に入っていたのは一枚の紙
それに＜借りは返しました＞って書いてるのよ
爆笑だぜ？まじで

「ククククっ」

「ペル、笑いすぎだよ？」

「だって、だってそんなに悔しかったのかってッぷフッフウ」

「はぁ～それにしても、してやられたね」

「すいません、ドクター」

悔しそうに顔を伏せるナンバーズ達

「別にいいさ、取り返せばいいのだしね」

「俺、挨拶してこようか？筋肉六課に」

「筋肉って、はぁー何故だい？」

「何となく？」

「敵にばれないようにしてくれ」

「ああそれなら大丈夫、俺八神はやての義兄だし」

「は！？」

ドッキリ大成功！

「じゃあ君は八神賢一？」

「あれ？知ってたの？」

何で知ってんの？ヤダ怖い

「不愉快な事考えてないかい？」

「メッソウモナイ」

「片言になってるよ、闇の書事件を殆ど一人で片付けた人間兵器有名だよ？」

おっとやばいやばい、人間兵器って遠まわしに化け物って言ってるよね

「そうなんだ・・・まあ行ってくる」

「今から行くのかい？」

「ああ、後ナンバーズに言っといて帰ってきたら鍛えてやるって」

「あっああ、まかしたまえ（皆がんばれ）」

それでは行きますかね、【転移】

「さぁ！やって来ました筋肉六課！・・・・の真上」

なんでさ・・・またこのパターンですか！？？？？

「だが！今日は飛べるのだよ！」

『賢一、封印解除しておらんぞ』

「え？っちょそれ先に言ってぇぇぇ」

くっこうなったら！

「変身！」

≪ビカー≫

「チートライダー！Ｖｅｒ２」

ふふふっチートライダー再び参上！ん？何がｖｅｒ２？フフフフ
なんと！クロと合体が可能！俺＋クロ＝無敵！だぜ

「それでは早速クロ！ってあれ？」

『クロは食堂で食事中じゃぞ？』

「ハハハハハハ・・・・・笑えねぇ」

≪ドギャーン≫

また同じところに落ちているのは作者と読者だけが知っている

「痛くはないな・・・・」

≪ザザザザ≫

「うわぁ手洗い歓迎」

ティアナ達とか特に殺気が出てるし・・・・此処は

「あっ額肉星人」

「だれが！」

「額肉！」

「「星人かー！！」」

上から俺、ティアナ、スバル、そしてエリオ、キャロね

「うぉ！危ないな～」

「何をしにきた！」

「レリック回収と様子見かな？」

「「「「！？」」」」

「それじゃ【レリックを寄こせ】」

能力を使うこの場に居る全員が
動かなくなり、ティアナ達は何処か行く

「このベルト面白くないな・・・・・」

そんなことを思っているとティアナ達が
戻ってきたその手にはレリックがある

「ご苦労様・・・・そうだ、どうせだし悪戯して行こう【時は止まる】」

レリックの偽者を作ってそれで紙に＜筋肉六課へ借りをもう一個作っておきました。Ｂｙペル＞

「【転送】【時は動き出す】」

全ての時間が動き出す・・・・

「皆！大丈夫！？」

あれ？なぜ、魔王（なのは）が？

「あ！貴方は！」

何か禍々しいオーラが・・・・

「ほれっ」

偽レリックを投げる

「え！？」

「逃げるが勝ち！」

転移で逃げる

「何だったの？」

その後なのはのＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆フラグが立ったのは言うまでも無い

特訓特訓！！

「ペル、早かったね？」

「ん？ああ、案外簡単だったほれレリック」

「ハハハハ・・・・レリックまで（汗）」

「ナンバーズは？」

「訓練場で待っているよ？」

「それじゃ行ってくるかな」

さ～てどうやって鍛えてやろうか

「程ほどに頼むよ？」

「・・・・・・分かった」

やなっこた！ボコボコだぜ！

「分かってないよね？」

スカっちが俺の思考を読み取れるようになって来てる・・・・

「そんなことないよ？」

「完璧に読んだよね？」

「顔に出てたんだよ」

「はぁ～しょうがない、手加減するよ」

心底残念そうに部屋から出る賢一

『（賢一の性格が変わっとる）』

「【転移】」

「よし！皆そろってるね？」

「早くしてくれ」

機嫌が悪いですね・・・トーレさん

『この前ボコボコにされたからじゃろ』

あ、俺のせいですか・・・・

「じゃあまず皆にこれを付けて貰う」

手の上にあるリストバンドを見せる

「何だそれは？」

「ん？重り」

「何？？」

「１００？」

「「「「「「「「「はぁ！？」」」」」」」」」」

うぉ息ピッタリ！

「これを腕と足に付けて貰う、合わせて４００ｋｇだ」

「無理だ」

「え？」

「無茶っすね」

「え～そうかな～」

『賢一視点で考えん方がいい』

はぁ～じゃぁ

「全部合わせて１００？なら行けるでしょ？」

「それでも殆ど動けない」

「無茶言うんじゃね！バカ！」

え～・・・我がままだな～

『我がままとかそう言うレベルじゃ無いぞ』

「たく、文句言うな！」

≪パチンッ≫

転移で全員にリストバンドを付ける

「うぉ！？」

「てめぇ何しやがる！」

「動け無いですわ」

「しゃあない５０？にしてやる」

≪パチン≫

指を鳴らしてリストバンドの重さを変える

「その状態で俺の攻撃を避けろ」

武器を創造する刃は勿論、潰してある

「ほら行くぞ？」

「「「「「「「「「！？」」」」」」」」」」

「ドッガガガガ」

「ＬＶ１だからな？これ」

それで避けれるように成ってきたら
重りを増やす最大ＬＶ５だ

～～～～スカリエッティ（スカっち）～～～～

「（スカっち）は要らないよ」

「ドクター？」

「いや何でもないこちの話だよ」

「？？」

それにしてもペル、ハード過ぎるよ君・・・・・・

「地獄の特訓って言うんだろうねこれを・・・・・」

「そうですね・・・・（戦闘用でなくて良かった）」

ナンバーズの長い長い地獄の一日

特訓特訓！！（後書き）

感想、評価、指摘待ってます！

聖王の器～前編～（前書き）

別けました・・・・

聖王の器～前編～

殺せ・・・・殺・・・・せ・・・・全てを・・・・殺せ・・・・殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ

殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ！！

「！！？？」

頭が痛ぇ・・・何か変な夢を見た気がするんだが・・・・・

賢一の精神は限界が来ていた・・・

『賢一、凄い汗じゃぞ？』

「あ？そうか？やっぱ変な夢を見たかな」

《ぎゅ～？》

「ん？大丈夫、大丈夫」

『・・・・・・』

ベットから立ち上がり着替えってスカっちの所へ行く

「ふぁ～眠い・・・・・」

「寝ていればいいじゃないか・・・・・」

「眼が覚めたんだからしょうがないだろ」

「君は・・・・・はぁ～まぁいい」

「溜め息ばかりしていると幸せが逃げるぞ？」

「君のせいなんだが？」

失礼な・・・・・・あながち間違えないか・・・いや完璧に俺か

「まぁ良いじゃないかw」

「本当に君は・・・・」

「で？ナンバーズはどうだ？」

「君のおかげでかなり強くなってるよ？」

「そうか！よかった、よかった」

うわぁ、適当だったんだけど強くなったんだ・・・・・・
これ言ったら殺されるな・・・主に精神が（もう壊れかかってます）
!?なんだ!?変な電波が!?

「今日は何も無いのか?」

「ん?今日は聖王の器を手に入れに行くよ?」

「聖王の器?」

「フフフ、まぁゆりかごの動力だと思ってくれたまえ・・・・」

ヴィヴィオですね、分かります・・・流石原作知識!!

「俺は何をすればいいんだ?」

「管理局の足止めをしてくれれば良いよ」

「ＯＫ～・・・別に倒してしまっても構わんのだろ?」

きゃーー言っちゃた!言ってみたかったランキング５!
アーチャーさん!きっと俺は無限のへたれで出来ていた!

「ああ、構わないよ」

そして、華麗なるスルーもしくは知らない！
まぁ後者だろうが・・・

「よし！何時だ！」

「夕方頃だよ、その時は連絡する」

「ＯＫ！（今日こそクロっと合体だぜ☆）」

あれ？でもヴィヴィオを連れて来るんだよね？
筋肉六課へ→ヴィヴィオ発見→嫌がってる
→無理やり連れ去る→誘拐→俺変態

「・・・・・・」

「どうしたんだい？ペル」

でも、俺が誘拐するわけじゃないし・・・・

『だが共犯』

「・・・・・・」

『良かったの！新しい通り名が出来るぞ！』

どんなの？

『ロリコン』

ｏｒｚ

「だっ大丈夫かい？」

「ブツブツ、ロリ・・・ンじゃ・・・い・・・で・・・誘拐・・・変・・・・・俺が・・・・笑・・・・」

「ペルー？」

「やってやる！ああ！やってやるさ！もう、何にでも成ってやる！」

『変態（ボソ）』

やっぱり、きついです・・・・・

「じゃあ、俺用意してくる・・・・・」

「あ、ああ分かったよ」

ま、今回は俺は足止めだけだからそんなに活躍しないかな？それにしても聖王ねぇ～俺とまったく逆の存在・・・・・

「殺したくなるねぇ～」

『・・・・ケンイチ』

悲劇が刻一刻と近づいている

賢一の最後はＨＡＰＰＹ　ＥＮＤかそれとも・・・・・・

聖王の器～前編～（後書き）

次の世界、介入ではなくオリジナルストーリーで行こうかと思ってます。
まぁ皆さんが原作ブレイクがいいと言うなら、そちらへいきますが・・・
とりあえず、感想待ってます！

「ペル時間だ頼むよ？」

「ああ、任せろ・・・・クロ」

《ぎゅ》

「モードキメラ」

クロと賢一が融合する、そして現れたのは黒い鎧を身に付け後ろには長い尻尾がある、全身が黒一色で出来た悪魔

「行ってくる」

「ああ、存分に暴れたまえ」

「【転移】」

広がる真っ赤な火の大地

「派手にやってるね・・・・」

『如何するのじゃ？』

「とりあえず」

チンクを助けに行くかな・・・

『何故じゃ？』

「暴走しているスバルと戦いたいだけ」

『好きにしろ』

ククク・・・行くぜ、俺を楽しませろよ人間

「【転移】」

～～～～スバル～～～～

ギン姉の所に到着した私が見たのは、ボロボロになった姉の姿、意識が無く箱の中に入れられ連れて行かれる・・・・

その時私の中の何かが切れた・・・・

「返せ・・・ギン姉を返せーーーーーーーー！！」

相手にぶつける全力の一撃を魔力弾が飛んでくる
だが気にしない、ただギン姉を取り返すだけ
相手をつぶすために一撃を！

≪ガンッ≫

「強いな・・・お前？」

受け止められた、目の前に突然現れた黒い鎧を着た男に
自分の全力を素手で受け止められる

～～～～賢一～～～～

スバルが駆け出しチンク達に一撃を喰らわせようとする
それを受け止める

「お前・・・強いな？」

「誰だ！お前！？」

ノーヴェが俺に聞いてくる・・・・・忘れんなよ、
てか空気読め・・・・

「おいおい、ペルだって忘れんなよ」

「そんな姿してたら誰だってわからねぇよ！」

「まぁいい此処は俺に任せて行け」

「！？そこを退けーーー！！」

「おっと、危ない」

≪ゴス≫

スバルの攻撃を避け腹に一撃を当てる

「ほら、さっさと行け」

「分かったよ！」

「すまん」

「行くっすよ」

「ギン姉を返せーーー！！」

スバルがチンク達に駆け寄る

「よそ見してるしてる場合か？」

「ッくそーーーー邪魔するなー！」

≪ガガガガッガ≫

「甘い、」

スバルによる攻撃の連打それを全て避ける
そしてまた腹に一撃を入れ更に蹴りを入れる
スバルは壁に激突する

「こんなものか？お前は」

「くそーーーーーーー！」

ロードをカートリッジして更に攻撃を仕掛けてくる

それを片手で受け止め、魔力のエネルギーをぶつけようとするが避けられた、いや機動を変えられた

「スバル！」

「仲間のご登場か・・・・・」

［ペルもう良いよ準備は整った］

「そうか・・・・」

この場から立ち去ろうとするだがピンク色の砲撃が行くってを拒む

「逃がしません！」

「・・・貴様と戦うのは次あった時だ【転移】」

「待ちなさい！」

無視してその場から消える

「何してるんだ？スカリエッティ」

「ん？ああ、丁度いい管理局に紹介しよう

私の協力者の一人、星破壊の仮面ペルソナだ」

ああ原作のあの部分か・・・・

「紹介されたペルだ、運命から抗えそして
俺を楽しませろ・・・・」

そう言ってこの場を後にする

「クククククックク」

悲劇はまだ始まったばかり

ゆりかご（前書き）

疲れた・・・・・

ゆりかご

「ぐぁあああああ！」

『賢一！』

流れ込んでくる憎しみ、絶望、嫉妬、欲望、人の不の部分が賢一を蝕んでいく、聖王との接触で更に闇への抵抗が消える

「もう少し、もう少しで・・・・」

［ペル、すまな・・・・大丈夫かね？］

「すまんが、これから俺は別行動を取る
助けが必要な時は知らせてくれ・・・・グ」

［わっ分かった、必要な時は連絡するよ・・・］

「すまない、【転移】」

その場から消え、森へと出る・・・
まだ、まだ飲み込まれるわけにはいけない

「くっシエル・・・・クロ、はやての所へ行け・・・・
俺が飲み込まれたとき、はやて達と力を合わせて俺を殺せ」

『賢一！？』

《ぎゅ！？》

「仕方が無いんだ、もう闇を抑え込むのは限界だ
一度死んで体の再生を一からやり直すだけだ」

『じゃが！！』

「いいから行け！俺を倒せるのはあいつ等とお前等だけなんだよ
・・・・安心しろ一週間は大丈夫だからよ。その間に直ったら一
件落着だ」

体からシエルを強制的に出す

「賢一！？」

そして無理やり転移する

「賢一！」

《ぎゃ！》

≪ブウン≫

これで舞台は整った、後はＪＳ事件だけ・・・・

「少し疲れた休ませてもらう」

～～～～はやて～～～～

まだや、まだスカリエッティの思い道理にはさせへん！

≪ブウン≫

「！？」

突如目の前に現れる魔法陣

なんや!?敵か!?

だが目の前に現れたのは見知った顔

「シエル!?クロ!?」

「はやて・・・・」

「今まで何処いっとたんや?それに兄ちゃんわ?」

「賢一は無事じゃ、じゃが・・・・」

「なんや?」

「次ぎあった時は敵だと思え」

如何いうことや?敵?兄ちゃんが、なんでや?

「抑え込んでいた闇に限界が来たのじゃ」

「闇?」

「夜天の書の闇がまだ賢一の中に残っていたんじゃ」

「そんな!?」

嘘や、何で・・・

「飲み込まれるまで、まだ一週間は耐えられると言っとた」

「そうか」

「じゃから今は目の前の事に集中してくれ」

「分かった、でも終わったら兄ちゃんを助けるけんな！」

「ああ、もちろんじゃ・・・・・」

シエルは、言ってない事が二つある、賢一が
スカリエッティ側に付いている事、そして
もう一つがはやて達と力を合わせて賢一を殺せと言うもの

「賢一、本当にいいのか・・・・」

～～～～賢一～～～～

「ヘクションッ」

風か・・・・・？

「寝たから疲れが取れたかな？」

俺様復活！

≪ひゅ～～～≫

「シエル達送ったの失敗したかな・・・・・・・・」

まっ久々の平凡楽しみますかね・・・・・って入たら良いのにな～
さぁって脳味噌くん今魔王が行くよ、君の人生を終らせに・・・
ククククク

「さぁ原作ブレイクだ・・・・・」

どうやら、もう始まってるみたいだしな

「【転移】」

三つの脳味噌が俺の目の前に現れる

「どうも♪管理局さん♪」

《貴様何者だ！？》

《どうやって此処に入り込んだ》

「そう慌てなさんな♪」

《何が目的だ・・・・》

「お前らの・・・・死・・・・だよ♪」

そう言って奴らを凍り付けにする
そして転移で舞台の場に送る

「さぁて後は、ゆりかごのほうか・・・・」

え？ドゥーエ？ああアイツは、スカリエッティの
ところに戻ってるよ、こいつらの事は任せてもらったからな・・・・

「さて、援護に行くかね・・・・【転移】」

って!?ナンバーズ殆どやられてる!?
え、ちょっあれ俺の出番は・・・・

「ゆりかご暴走中ね・・・・ｏｒｚ」

「貴様!次元犯罪者の星破壊の仮面だな!?」

「ああっ!?なんだお前ら」

「管理局だ大人しく此方へ来てもらう!」

「はっ弱者が何をいいやがる?」

右手に魔力を集結させ撃ちはなつ

≪ぼぎゃーーーん≫

「「「「「「ぐあああ」」」」」」

「はっザコが・・・・・グッ時間が足りないか・・・・」

だがまだ、やることがある

「ゆりかごの力を貰うぞ・・・・」

ゆりかごの中からなのは達が出てくる
そして、ゆりかごへの砲撃が始まる・・・・

「させないよ・・・・その力は俺が有効に使わせてもらう【転移】」

流石に砲撃全てを防ぐと体の原型がなくなり兼ねないから

ゆりかごの下に巨大な転送魔法が現れる

「場所・・・滅びの星・・・・」

～～～～はやて～～～～

［ゆりかご・・・ロスト・・・・］

「ほっ」

［完璧にこの星から消えました・・・・・］

「これで終わりなんですね？」

［違います消滅したんじゃないんです・・・・転移魔法で違う星に・・・・・］

「「「な！？」」」

嘘やろ・・・ならゆりかごはどこに！？

［緊急放送来ます！示現場所・・・ゆりかご！？］

「な！？」

［どうも、管理局の皆さん・・・・私は破滅の星・・・・ロストワールドにいます、場所は、管理局本部に送っているのでそこで本当の悲劇を始めましょう待っていますよ？正・義・の・管・理・局さんｗククククククッハハハッハハハ］

「星破壊の仮面・・・・・」

「・・・・・賢一（ボソ）」

戦いは始まったばかり・・・・・

ゆりかご（後書き）

この空気無理！早く終ってくれーーーー！

最後の戦い？

俺の目の前に広がる人の波と戦艦、これら全てが
俺を殺しに来ているいや一部は捕まえに来ている
・・・そして俺の横にある、３つの凍った脳味噌

「１対無数って所ですか、フフフ面白くなってきた・・・」

［次元犯罪者に告げる、武器を捨て我らに大人しく捕まりなさい］

何言ってやがる、何のためにお前らに俺の居場所
を教えたと思っていやがる。一発かましてやる・・・

俺の目の前にある、幾つものプログラム全てを
謎の眼で理解し、操作する

「ゆりかご機動、狙い管理局戦艦、非殺生、撃て」

≪ドギャーン≫

ゆりかごの目の前に居た戦艦が打ち落とされる

［くっ全軍！撃ち方始めーーー！］

≪ドドドギャヤヤーーン≫

無数物砲撃がゆりかごを襲う、だが俺は全てを魔力変化でゆりかごの動力にする

［な!?］

「さぁ、始めようか戦争をって行きたいけどその前に君達に紹介したいのが居るんだ」

指を鳴らして映像を切り替える、

［なんだ!?これは?］

「おや?知らないのかね?この人?たちを・・・酷いな~君達の上司じゃないか・・・・」

脳味噌を見て、驚愕する管理局

［何を言っている?］

「最高評議会だよ・・・・バカだよね~体を無くしてでも生きようとする

自分の権力を手放せばいバカ・・・・」

［なに！？］

いい終わった後ポットを砕くボロボロに

「そして、こんな奴らに動かされてる君達・・・・・滑稽だね～～♪」

［そんな物が最高評議会のわけがない！］

「もう一つ面白い事を教えてあげるよ、
ジェイル・スカリエッティを作ったのもこいつら、最高評議会」

［そんな、嘘信じられるか！］

「だったらこの戦いが終わったら最高評議会のこと
調べてみなよ・・・・いろいろ出てくるよ？まっ生きて帰れたらの話だけど」

星全域に結界を張る中に入れば出る事が出来ない結界を
出るためには、使用者を殺すか使用者以上の力で結界を壊す

［！？］

「これで貴様らは俺を殺すしか方法は無くなった・・・・・」

［貴様！］

「非殺生とか甘いんだよ・・・・偽善者！」

ゆりかごの非殺生を切り殺生モードにする・・・・・・

「さぁ・・・・俺を憎め、怨め・・・そして・・・俺を殺しに来い！」

≪ズギャギャーーーーーーーン≫

相手戦艦の半数を壊す

「ククク・・・」

≪ドガーーン≫

「！？」

ゆりかご内部に爆発が起こる・・・・・・

目の前に映像が現れ、‘あいつ等’が現れる

「来たか・・・・」

≪ドガガーーーン≫

破壊されていく、ゆりかご

「沈むか・・・・・なら」

赤いボタンが俺の目の前にあるそれを・・・・それを、それを！
押しちゃうんだな♪これが♪

「おっと♪手が滑った！ｗ」

分かる人は分かる、分からない人は覚えてね？自爆スイッチ

《ビービー、デリートを開始します。爆発まであと４時間４４分４４秒です》

ハハハハ！やってみたかった、自爆スイッチ！時間？俺の趣味

《半径５０００億ｋｍを破壊します》

あれ?５０００・・・億?億?・・・・・億ーーーーーーー!?
ハハハハやっちまたぜ!・・・・・どうしよ、
本当に死のカウントダウンだよ・・・

［貴様!卑怯だぞ!］

「あれ・・・・千?え?・・・・億・・・・・・やば・・・・・計画・・・・
・・パー?・・・・・うそ・・・・ろ」

［・・・・・総員!退避ーーーーーーーーーー!!］

「とっ取りあえず、結界解こう」

張られていた結界が解かれるそこから管理局が転移していく・・・

「管理局です!」

わぉ!来ちゃったよ、この人!?

「逃げなくていいのかい?（てか逃げてくれよ・・・・）」

「貴方も連れて行きます!」

「フフフ・・・・面白い事を言うね君?」

「人を助けるのが私の仕事ですから！」

「ハハハハハハハハ！」

≪後一時間で爆発を開始します≫

鳴り響く警報

「！？早く！」

「だから」

「！？」

「だからお前らを殺せないんだよ、【転移】」

俺はなのはに転移を開始させる

「これは！？」

「フフフ、また会おう・・・・不屈のエース高町なのは・・・・・・はやてによろしく」

「賢一さん！」

≪ブウン≫

丁度いいや・・・ここで終らせよ・・・まだ言ってない事がたくさん
あるけど、いいやもう次ぎ会う日までのお楽しみって事で

≪カウントを始めます≫

≪5≫

いろいろあったな～

≪4≫

でも、楽しかったかな・・・・

≪3≫

これで死ぬのは3回目か・・・・

≪2≫

今度は何処へ行くのやら

≪1≫

でも、これだけは言える・・・俺に、俺に

≪0≫

平凡をーーーーーーーーーー!!

≪ボガギャガガーーーーン≫

この日星が一個丸々消えた・・・この時俺は、

【本当の星破壊】になった・・・・

「あれ?生きてる・・・・・・」

あれーーーーーーー?

最後の戦い？（後書き）

続行！すこし違うけど・・・・だが！これだけは言おう！戻ると！

謎の世界（前書き）

とりあえずオリジナルストーリー

謎の世界

「此処は何処？私は誰？」

いやいやいや！落ち着け俺の名前は風間賢一！此処は・・・・・・
何処だ？

「此処は何処？」

≪ヒュ～≫

「寂しいな・・・・よし！来い！シエル、クロ！」

≪ヒュ～≫

「・・・・・・」

長い沈黙・・・・・・

≪ヒュ～≫

「あれ？」

おかしいな？

「来い！」

あれ？なんでだろ？

「召喚！でってこいや！」

≪ヒュ～≫

でっ出ない・・・・orz

「どっどうなってんだーーー！」

そっそうだ！ステータスを！

ＨＰ：∞／∞
ＭＰ：使えません
ＡＴＫ：∞
ＤＥＦ：∞
ＳＰＤ：∞

あれ?魔力が?

能力：創造（武器、防具、アイテム、食べ物、自分が考えた物を作り出す。
　　能力を付け加える事も可能　生命を生み出せるようになった！）使用不可

　魔力変化（魔力を自由自在に操り変化させる　魔力を吸収出来るようになった！）使用不可

　次元移動（異世界へ飛ぶ事が出来る。扱える用になれば好きな所への
　　移動が可能　時空を飛べるようになった）使用不可

　謎の眼（相手の能力、ステータスを見ることが出来、見たものすべてを理解できる。
　　相手の技をコピー出来る）コピーは使えません！

　自然の力（全ての属性を操れる）　使用可能

　不老不死（年齢操作が可能２５才から発動できます）　不老と年齢操作が無いです

　固有結界（闇の世界≪ダークネスワールド≫、相手の闇を増幅させ自分の力にする
　　闇を自由自在に操れる）使用可能

わお！物凄い事になってる、何か一個増えてるし・・・・創造

が使えないだと!?

「飯が食えないだと!?・・・・そんなバカな!」

≪グギュル≫

鳴り響く腹・・・・噂をすれば何とやらだ・・・・

「誰か助けてくださーーーーーーーーーい!」

とりあえず・・・・此処がどこか調べよう

「あれ?そういや、闇が溢れて来ない??あれ?まぁ・・・いいか♪」

いいよね?

「どうやって、調べようか・・・」

俺の周りには・・・・ゲーム!ベット!パソコン!マンガ!

・・・・家ですね・・・・分かります。

「は！まさか、拉致！？」

でも俺なんか拉致しても得はないな・・・・・・

「如何やらここは普通の世界の用だが・・・・・・」

外を見る・・・・青い空、謎のタワー、白い雲、真っ赤な太陽、
空飛ぶ人、
普通の朝だな・・・・・え？現実逃避？なにそれ？おいしいの？
だが、これだけ言える

「知らない世界だ・・・・・・」

謎の世界（後書き）

この世界は一体！？そして賢一が居る家は！？

新しい家族（前書き）

一度は書いといたほうが良いかなっと思って学園での日々が次話から始まります！

新しい家族

「あ！起きたんだ！」

一人の少女が部屋の中に入ってくる

「君は誰だ？」

「私？私は鈴川静菜よろしくね！」

「俺はや・・風間賢一よろしく！」

「うん！賢一ね！覚えた」

「所で外にある、あの塔は何？」

窓から見える謎の塔を指差す

「ん？知らないの？あれはダンジョンターミナル」

「ダンジョンターミナル？」

まんまだな・・・・・

「うん！あの塔の上には神様の楽園があって
そこに行ったものは、超絶の力を手に入れることが出来るの！」

「へぇ～、でもそんなに簡単じゃないんだろ？」

「そうだよ♪中には魔物やら竜がいっぱい入るんだよ♪」

まっ俺には関係ないな・・・今でも最強なのにこれ以上強くなっても
仕方ないしな、それ以前に強くなれるかどうかが問題だし・・・・

「それにしても君って不思議だよね？」

「なんで？」

「髪の色が黒だし、それに何より空から降ってきたし・・・しかも裸で／／／」

「え！？マジか？」

「あれ？覚えてないの？」

空から降ってくるって何処のラピュ○だよ、てか裸！？

俺もしかして宇宙から落ちてきたんじゃ・・・・ありえる

「静菜ー？何やってるの？」

「あ！お姉ちゃん、落ちてきた子眼覚めたんだよ！」

「え！？そうなの！？」

女性が扉を開けて中に入ってくる、歳は１２～３だと思う

「どうも・・・」

「お母さん！お父さん！あの子、眼覚めたよ！」

大声で両親達に呼びかける

「本当かい？それは良かった！」

「あらあら、最初は裸の男の子を背寄ってきた時はビックリしたけどそれは良かったわ」

部屋の中に入ってくる両親と思われる人達、

「助けてくれてありがとうございます・・・・」

「いやいや良いんだよ、」

「それにしても本当に男の子？」

「如何いうことですか？」

「女の子の服着てても違和感がないから」

「確かに・・・・」

「へ？」

自分の服を見る・・・・気付いてたよ？本当だよ？自然だったから
気付かなかったんじゃないよ？本当だよ？

「ブツブツ・・・・や・・・り・・・・のう・・・・な」

部屋の隅でブツブツ言い出す賢一

「ははは・・・・（汗）」

「きゃーかわいい！」

「男して哀れだ・・・・」
「似合ってるわよ？」
うれしくないッス・・・・
「君は何処から来たんだい？」
「お父さん！だから空からだって！」
「静菜、まだ言ってんの？」
「お姉ちゃんまで、本当だよ！」
騒ぎ出す鈴川家・・・・何か取り残された？
「とっ取り合えず、君の出身は？」
「日本の・・・・（どれを言えばいいんだ？取り合えず）鳴海市です」
「鳴海？聞いたこと無いな？」
「此処は日本なんですか？」
「ん？日本だよ？日本だから日本語を喋ってるんじゃないか」

「そっそうですよね」

日本？でも日本にはあんな塔は無いし・・・それに人は空を飛ばない

「取り合えず、これ以上迷惑に成るわけにはいけないので僕はこれで、お世話になりました」

「そんなこと無いよ！ね？お父さん！」

「そうだな、それに行く当てはあるのかい？」

「いえ、無いですけど・・・」

「それじゃ此処に住まないかい？」

「え・・・でも」

「気にする事は無い、今頃家族が一人増えたところで何も変わりやしないよそれに男の子が欲しかったところだ」

「いいんですか？」

「ああ」

優しく迎え入れてくれる静菜の家族

「ありがとうございます！」

「私の名前は鈴川彰吾」

「私は鈴川香苗、よろしくね」

「私は静菜の姉、鈴川薫よ」

「俺は風間賢一よろしくお願いします！」

暖かいです、この人達・・・・

「それじゃ今日は新しい家族の歓迎会をしようか？」

「そうですね」

「うん！」

「やろう！」

本当にいい家族です・・・これから楽しくなりそうです

平凡は着そうにありませんが、なぜ？あの塔ですよ・・・・・

絶対！何かある

「で、俺の服はこのままなんでしょうか？」

「「「「・・・・・」」」」

「あれ？何で沈黙ですか？」

「そんな事より、歓迎会しようか！」

「そうですね！」

「「うんうん！」」

「え？え？ちょっ・・・・ちょっと待ってくださいよ～！」

ずっとこのままじゃないよね？ね？作者？

……作者

作者ーーーーーーーーーーーーーー！！

新しい家族（後書き）

はい、とりあえず寝所確保

世界覧は、ほとんど現代の日本と一緒

違うのは魔法があり化学もあるそして、あの謎の塔ってくらいです

75万アクセス記念

「どうもーーーーーーー！皆のアイドル、賢一だよーーーーーー！」

忘れてください・・・・・

「今回は何と！シエルとクロが居ないので！一人での進行となります！
正直言って不安です！」

≪ヒューーー～≫

「何しよ・・・・・作者！」

＜呼ばれて飛び出ない、作者です。何？＞

「ネタが無い！」

＜次回をお楽しみに～＞

「軽く流すな！そして終らせるな！」

＜ネタが無いなら良いじゃん・・・・＞

「読者に殺されるだろうが！」

＜めんど・・・・＞

「貴様ーーー！」

＜それでは皆さんにアンケートです。＞

「軽くスルーですか、そうですか」

＜賢一の学園生活は暴れまわって欲しい、それとも賢一に平凡を！投票待ってます＞

「平凡に一票！平凡に清き一票を！」

＜ま、どっちかは分かりきってるけど・・・・＞

「平凡に一票ーーーーーーーーーーーーーーーー！」

75万アクセス記念（後書き）

投票待ってます！

学園生活～入って早々これかよ～（前書き）

始まる学園生活！

学園生活～入って早々これかよ～

「ケン！行くよ！」

「静菜まってくれ！」

どうもあれから、2年今日から学校生活が始まります。
俺が今から行く学園は、塔の回りに作られている。
そこでは、魔法科と化学科で別れている魔法科では、
その名の通り集中的に魔法を習う、化学科では簡単に言うと
普通の授業だ。
そして魔法科では1～3年間魔法や戦いをある程度できるようになれば
あの塔ダンジョンターミナルにチャレンジする事が出来る、もちろんチャレンジするにはそれだけの努力が必要だが・・・・

「遅い！」

「悪かったて！」

「本当に今日は入学式なんだよ？ちゃんとしてよ！」

「だから悪いって」

「って！もうこんな時間！早くいこ！」

風間賢一・・・・二度目の学園生活・・・・・え？お前はどっちに入ったんだ？
フフフフフフ・・・・もちろん！化学科さ♪っていたら良かったんだけどね～
静菜が魔法科に入るから俺は、その見張り役・・・・ん？何で見張り役？フフフ
こいつ静菜は、究極の問題児なんだよ、え？どこら辺が？早く言うと戦闘狂？
ｏｒｚ

「ケン！早く行くよ！」

「おっおう！」

まっ何だかんだ言ってがんばってます。

・・・・・・・

「着いたーーー！」

静菜さんすこし自重して下さい、皆さんそんな眼で見ないでください
私は関係ないですよ～・・・
少しづつ静菜から距離を離していく

「ほら、ケン！クラス見に行こう！って何でそんなに離れてるの？」

「知り合いと思われたくなかったから？」

「殺すよ」

「すいません」

ね？問題児でしょ？・・・・・・いやわかんねぇよ、と思った人後で
私のところに来なさい、俺の不幸分けてあげるから！

「あ、ケンとクラスが違う・・・」

普通にしてたら、かわいいのに普通にしてたら

「お、本当だ俺はGクラスか・・・・」

「私はAクラス」

「まっしょうがない俺は魔法が使えないんだから」

「うん・・・・」

この学校は実力でクラス分けされている、魔力が高いものや技術が高いものが上位クラスへ低い者は下位クラス、全部で7クラス、A、B、C、D、E、F、Gと分かれているで、俺は魔法が使えないから最下位クラス・・・・

「ケンなんか喜んでない？」

「そっそんなこと無いよ？」

「本当～？」

「そんな事より時間がねぇから自分のクラスに行こうぜ？」

「やばい！っじゃ！また後でね！」

「おう！」

嘘です最高に喜んでます！最下位クラスですよ？最下位！最下位ってことは危険な事が無い＝平凡な毎日！

フフフフハハハハハーーハッハハ

「っと思っている時期が僕にもありました。」

「風間君?何をブツブツ言ってるんですか?」

「何でもありません」

このクラス柄が悪いのが多すぎます・・・・・

「ああ!?何見とんじゃ我!」

「けつの穴から手え突っ込んで、奥歯がたがた言わせたろか!」

何ですかこの人達・・・・

「何無視しとるんじゃ我!!」

「いや無視なんかしてませんって!」

「ああ!口答えか?」

何故そうなる・・・・・

「口答えの次はだんまりか?ああ!?」

もう如何にでもなれ・・・・・

「だから無視してんじゃねーーーー!!クズが!」

殴りかかってくる、不良A

「誰がクズじゃ!ボケーーーー!」

≪ボグシャ≫

不良に蹴りを入れる、壁に自分の型を作って外にぶっ飛んでいく

「やっちまった・・・・・」

「なっ頭がやられた・・・・」

え!?あいつ頭なの!?番長なの!?やばいよ・・・

「番長!」

「はっ?」

「新しい頭が出来たぞ!」

「え？」

「「「番長！」」」

「え？ちょっま」

「番長！ジュース買って来ました！」

「ありがとう・・・じゃな「机と椅子用意しました！」」

「いや、だから」

「番長！今日からよろしくお願いします！」

ハハハハハッ・・・如何してこうなったｏｒｚ

「しんどいから寝るわ・・・・」

「「「「はい！」」」」

もう、如何にでもなれや・・・・（泣）

やっぱ無理、平凡がーーーーーーーーーーーーー！しかも番長・・・・・・orz

学園生活～入って早々これかよ～（後書き）

まさかの番長！さぁって如何なる賢一！面白くなりそう・・・・

「面白くネーーーーーーーーーーーー！」

チート番長（前書き）

チート番長

どうも、賢一です。入学式早々あだ名が出来ました、いや～うれしいですね～
友達もいっぱい出来たんですよ？本当ですよ？ってあだ名が【番長】
いや～うれしいですね～・・・・友達の見た目？・・・・不良？

「何故こうなったｏｒｚ」

「番長！次、入学式ですからばっくれましょうよ！」

「駄目だ、入学式には出ないと」

後で静菜に何て言われるか分かったもんじゃない・・・

「番長・・・・」

「ん？どうした？」

「流石です！初日からこの学園治めるんですね！」

「え？いや、そう言う事じゃ「流石です！番長！」」

あれ？もしかして、もう非凡？

「このクラスに1年も、耐えないといけないのか・・・・」

てか、こいら１２歳？本当に１２歳？

「お前ら本当に１２歳かよ・・・・」

「え？何言ってんですか？番長？」

「俺らの年齢は１５～１６っすよ？」

「は？」

「知らないんっすか？Ｇクラスは、学年全てが同じクラス何スよ？」

「マジで？」

「マジッス」

て、事は・・・・

「この中で１２歳の人～？」

誰も居ない・・・・・・

「ハハハハハハハ・・・・・・・この学園恐怖に包み込んでやる・・・・」

「おお！流石、番長！」

「「「「「「番長、番長！」」」」」」

「番長？否！魔王っと呼べ！」

「「「「「「魔王！魔王！魔王」」」」」」

騒がしくなる、Ｇクラス、止まない魔王コーラス・・・・・・
やり過ぎちゃった♪テヘ♪

「マジどうしよ・・・・」

「「「「「「魔王！魔王、魔王！」」」」」」

開き直っちゃえば？・・・駄目だそんな事したら俺の平凡が・・・
それじゃ此処に居る奴らを殺す？・・・・それでも俺の平凡が無くなるだろ！
じゃあ諦めろ！・・・・やっぱり？

「とりあえず入学式に行こう・・・・」

「番長待ってください！」

「おめぇら行くぞ！」

「「「「おお！」」」」

ああ、太陽がまぶしい・・・・

「これより入学式を始めます」

生徒や先生がこちらをじっと見てくる・・・・そんなに見ても何も変わりませんよ～

「・・・あれが新しい頭？ひ弱そうね・・・・・」

聞こえてますよ～・・・・

「問題児のGクラスが入学式に出るなんて・・・・」

なんかあの先生、泣いてるよ・・・どんだけだよこのクラス

「新入生の皆さんこれから頑張ってください」

無理です挫けそうです

「在校生代表の歓迎の挨拶、生徒会長お願いします」

やばっ眠くなってきた・・・・

「ｚｚｚ・・・。ｚｚｚ・・・。」

「番長がお眠りになったぞ！」

「かわいいですね・・・・」

「バカ！番長に聞かれたら殺されるぞ！」

「だが」

「「「「「かわいいですね」」」」」

生徒達の心が一つに成った

ブルっなんだ！？寒気が

「これで入学式を終ります」

ん？・・・終った？

「番長！これから如何します！？」

「とりあえず寮、見に行く」

「じゃあ俺達も！」

「いや、一人で良いよ」

「分かりやした！」

はぁ・・・しんど、え～と確か寮はあったあった

「すいません、この寮に住むことに成った風間賢一なんですが・・・」

「あ、はいはい風間君ね」

中からお婆さんが出てくる・・・優しそうな人だな

「これが部屋の鍵ね、荷物は中に入れといてあげたから」

「ありがとうございます」

「部屋は４階の１３０４号室だから」

「はい、すいません」

・・・・・・・・・・

≪ガチャ≫

「いや～此処が俺の新たな住処か～」

とりあえず、部屋の整理かな

「【自然の力】風よ」

この能力使い勝手が良いな・・・・

「いやーしんどかった、まさか初日から平凡が崩されるとわ」

悲しくなんか無いよ?本当だよ?泣いてないよ?本当だよ?
不幸だな～なんて思ってないよ?本当だよ?何で俺だけなんて思ってないよ?
本当だよ?・・・・・・・・・・（無限ループ）

「ブツブツブツブツ・・・・・ぐすん」

これからどうしよ?

?番長として暴れまわる

?抗う

?学園を乗っ取る

?ダンジョンターミナルに登り魔力の戻し方を調べてみる

?Aクラスに喧嘩を売る

?とりあえず流れに任せて、今は寝る

「?にしよ・・・・お休み」

Gクラス

「ふぁああ～・・・・ここは何処だ・・・・・」

眼を薄めながら周りを見渡す

「思い出した寮だっけ・・・・」

ベットから降り服を着替え朝食の用意をする

「パンで良いか」

パンを口に銜えて時間を見る・・・時間は８時２９分

「おい！遅刻じゃねぇか！いや俺の全力を使えば１０秒で！」

時間が刻一刻と過ぎていく

「くそ！急げ！」

≪シャ≫

音速で走る賢一

「後３０秒！？」

教室まで後５００m

「何で教室が５階なんだよ！！」

残り５秒

「こうなりゃショートカットだ！」

≪ダッ≫

地面を蹴り５階まで飛ぶ、そして窓を開けて中に入る
そして丁度チャイムが鳴る

「ふー間に合ったー！」

「番長！流石です！5階まで脚力だけで登るなんて！」

やべ、見られた・・・・って当たり前か、ここは

「ハハッハハ」

笑ってごまかせ！

「先生は？」

「このクラスに先生なんて居ないスッよ？」

「は？」

「このクラスから上のクラスに上がるためには
自分で努力しろって事ス！」

「滅茶苦茶だな・・・・」

「あれ？でも最初に来た時居なかった？先生」

「ああ、あの人っすか？あれは先生じゃなくて
このクラスのストッパーですよ。」

何でも無い様に言う不良A

「じゃあ俺達はずっと自由時間？」

「そういう事ッス！」

え・・・・何それ・・・・素晴らしい

「ずっと寝れるって事？」

「まぁそう言う事っすね」

え・・・・何それ・・・・素晴らしい

「じゃあ毎日が平凡？」

「まぁほとんど、そうっすね」

え・・・・何それ・・・・素晴らしい

「Gクラス最高？」

「そっそうっすね？」

「イエーーーーーーイ！」

平凡最高ーーーーーーーーー！！

「番長！大変です！」

慌てて入ってきた不良Ｂ

「ん？何？」

「生徒会の奴が教室の前に居ます！」

「それが如何したんだ？」

「しかも、風間賢一をだせ！と。」

「え？俺？」

俺なんかしたかな～

しまくりである

「そいつの名前は？」

「いえ、分かりませんけど番長と同じ新入生見たいです、しかも女子！」

ふむ、同じ新入生で女子・・・全然分からん！

「クラスは？」

「バッチを見た所Ａです！」

女子でＡクラスで同い年・・・んん？

「ケン！！」

ドアを開けて此方までやって来る、女子

「あ～静菜か、生徒会に入ったんだ・・・・しかも二日目で」

「いろいろあってね・・・じゃなくて！ケン、Ｇクラスの頭って如何言う事なの！」

「いろいろあったんだよ・・・・いろいろ・・・」

遠くを見る眼で明後日の方向を向く・・・・

「番長、誰っすか？」

「ん？俺の家族の鈴川静菜」

「そうなんっすか！？・・・・あれ？でも苗字が・・・・」

「あ、俺養子なんだ（人生二度目のね・・・・ｏｒｚ）」

「！？、すいません！知らずとは言え！」

「いやいや別に良いよ・・・」

あ、この不良Ａいい子だ・・・・

「ケン！」

「あっごめん、忘れてた」

「殺すよ？」

「スイマセン」

暴力的で困る・・・・

「Aクラスは、如何？楽しいか？」

「ん～、楽しいのかな？」

「いや、聞かれても・・・」

「でも、友達はいっぱい出来たよ！ケンは？」

「ん？俺？俺も出来たぜ、なぁお前ら！」

「「「「「おおお！！」」」」」

「な？」

「ハハハハハ・・・・・」

何だ勘だ言って、慣れてきている賢一。

「あ！ケン、知ってる？「知らない」・・・・・」

「6月に大会が開かれるんだって！」

わぉ見事なまでの無視

「へ～、ルールは？」

「個人と団体とで別れていて、団体ではチームを好きに組んでいいの！
1人～5人までででやるの！個人では、巨大なフィールドでまず戦って最後まで生き残った4人が準決勝に進めるの！」

「へ～面白そうだな」

てか、団体なのに1～5人って一人でも良いのかよ！もう団体じゃねえだろ！

「どう？やって見ない？」

「うん！やらない！」

「なんでよ～」

「めんどいから？」

平凡を崩すわけには行かん！Gクラスは、俺・・・・いや俺達にとって楽園なんだ！

「はぁ～どうしよあと3人チームが足りないんだけど」

「ん？もう一人は誰なんだ？」

「Aクラスの友達」

「ふ～ん、まっがんばれ！ｂ」

「優勝すれば、賞金１０００万円何だけどな～」

一千万・・・・・一千万・・・・・・・一千万？

「あ～そこの君？やっぱり出て上げても構わないよ？」

「（ニヤリ）え～でもめんどくさいんでしょう？」

「それはさっきの話、今は今！」

「じゃチーム結成ね！後二人はこっちが誘っとくから！今日の放課後、Ａクラスね！」

「ＯＫ」

ん？何でやる気になったか？金が無いんだよ

・・・飯が食えないんだよ、創造が使えないのは辛いｏｒｚ

ＰＳ感想で？と答えた人、後で体育館の裏に来なさい！

Gクラス（後書き）

感想、評価待ってまーーースw

チーム結成（前書き）

がんばって最新！

チーム結成

俺は思った・・・・・

「Aクラス何処だ?」

賢一、またもや絶賛迷子中・・・・・

「やっぱ俺方向音痴かな~」

今頃である・・・・

「すいません~」

近くに居た、女生徒にAクラスの場所を聞く

「はい?」

「Aクラスって何処にあるか分かりますか?」

「Aクラスですか?奥の階段を上って、左に曲がって更に奥に進ん

で右に曲がったら
Aクラスですよ？」

「ありがとうございます！」

よ～し・・・・・

その場に立ち止まる賢一、女生徒が何か察してくれたのか

「あの～良かったら案内しましょうか？ちょうどAクラスに用事があるし」

「まじっすか！有り難う御座います！」

優しい人でよかった～（泣）

「貴方Gクラスですよね？Aクラスに何か用でも？」

「あ～、チーム組む事になったんですよ」

「あ～あの6月の？」

「そうっす」

6月に開催される大会の話題で盛り上がる

「そうなんだ～私もそれに出場するんだ」

「へー団体ですか？」

「そう！同じ生徒会の子に誘われてね♪」

「そうなんですか・・・って！？生徒会の人だったんですか！？」

「あれ気付いて無かったんですか？」

よく見ると生徒会のバッジがしてある、Ａクラスなんだ～

「あ、付きましたよ？」

「え・・・な！？」

目の前に広がるのは最高設備が広がる教室、Ｇクラスと比べると月と鼈

「羨ましくなんか無いぞ？本当だぞ？」

「如何したんですか？」

「いえ、別に何でも無いです」

「そうですか？」

頭を傾げる女生徒・・・かわいいと思ったのは俺の心の奥底にしまって置こう

「ケン！遅い！」

Aクラスの奥から静菜が歩いてくる

「悪い悪い、道に迷ってさ」

「何やってるの・・・・」

「あははは・・・・」

「はぁ～・・・ん？あ！零さん！来てくれたんだ！」

案内してくれた女生徒に話しかける静菜

「ええ、興味が出てね♪」

「え？知り合いなのか？」

「そうだよ、同じ生徒会だし」

ああそういやそうだった・・・・

「それに、此れから同じチームよ？」

「え！？まじで！？」

「マジよ、此れからチームの自己紹介するから行くよ！」

「へいへい」

しぶしぶ、後を付いていく賢一

「驚いたね♪まさか同じチームだったなんて♪」

「そうっすね、改めて俺は風間賢一まぁこれからよろしくお願いします。」

「私は須賀零よろしくね♪」

お互いの自己紹介をしながら、静菜に付いて行く

付いて行った先には2人の女生徒がいる・・・・・あれ？男俺だけ？

いや！まだ分からんぞ！俺の勘違いかもしれないしな！うん、そう

だよね？

「全員そろったわね？それじゃあこの５人でチームを組むからよろしくね」

「え？男、俺だけ？」

「そういえば、そうだね？」

気のせいじゃなかったｏｒｚ

「取り合えず！名前、クラス、得意な戦闘方法を言ってもらおうかな？」

あれ？もう男が一人だけ事件終わり？ねぇ？ねぇってば？

「じゃまず私から、私は鈴川静菜、１年、Ａクラス、近距離と中距離魔法が得意ねこれからよろしく♪」

聞いてってばーーーーーー！！

「次私ね？須賀零、２年、Ａクラス、遠距離魔法が得意よろしくね♪」

もういいよ・・・・・どうせ俺は災難の塊だよ

「次は僕だね？瀬戸川鏡花、１年、Ｂクラス、中距離の弓魔法が得意だね」

僕ッ子キターーーーーーーー！キタよ？キタね？来ましたよーーーーー！！

「葛葉・・・木下葛葉・・・・１年・・・・・Ａクラス・・・・遠距離魔法が得意・・・・」

うん・・・・クールですね、そこに痺れる憧れるーーー！会ったばっかだけど

「ケン！あんたの番よ！」

「ああ、俺か・・・風間賢一、１年、Ｇクラス、戦闘は～近距離で良いかな？」

「聞かないでくれる？」

「スイヤセン」

禍々しいオーラで俺を睨んでくる・・・・

「自己紹介も終ったから、取り合えず外で力試し、しようか？」

「そうだね♪」

「はい！」

「・・・うん」

「めんどくせ～」

上から静菜、零、鏡花、葛葉の順番

「それじゃ行こうか♪」

軽くスルーされた、悲しく何か無いぞ？本当だぞ？

・　・　・　・　・

「得意な魔法をあの的に当てようか？」

「分かったよ♪」

「OKです！」

「・・・・了解」

「・・・・・」

俺魔法使えないし・・・・・

「私から行くね、炎よ我が力を示せ！エクスプロージョン！」

静菜の目の前に会った人形が炎に包まれこんがりと焼ける・・・・

「やりすぎだろ・・・・」

「次・・・私が行く・・・氷よ全てを包みこめアイスウォール」

焦げた人形が氷の壁に包み込まれる

「やりたい放題だな・・・・」

「次、僕ね！雷よ我の下に集まれライトニングアーチャー！」

鏡花の手元に電気が集まり弓の形を模様す、そして雷の弓を打ち出し
氷の壁ごと貫く

「お前本当にＢクラスかよ・・・・」

「私の番ね！風よ我の障害になるものを吹き飛ばせ！トルネード！」

人形を中心に竜巻が起こり、人形を何処かへ飛ばす・・・・
的が無くなった・・・・

「よし！終わり帰るか！」

「ケン！あんたもなんかしなさい！」

「え～・・・・」

他の奴らがジッと見てくる・・・・そんな眼で見るなーーーーー！！

「わっわかった・・・・やればいいんだろ、やれば」

「最初からしなさい！」

「じゃあ的が無いから・・・皆、離れてくれない？５００ｍぐらい」

静菜たちが不満そうだが離れていく

「よし、それじゃやりますか！慎重に・・・・・よっと」

≪ドギャ≫

俺を中心に地面が凹む、まぁ簡単に言うとクレーターを作った

「静菜ーーこれでいいか？」

「「「「規格外」」」」

それ久々に聞いた、

チーム結成（後書き）

感想、評価待ってます！

やっぱ俺って番長なんだな・・・

「番長ーーーー!!」

不良Bが血相を変えて俺のところまでやって来る

「どうした?」

「優が!優が!他校の野郎にやられました!」

「なんだって!?」

そんな優が・・・優が・・・優・・・・・優?・・・・・優って誰?

「番長!優の仇をとりましょう!」

仇か・・・・・う~~~んいい響き・・・・なんて思ってないよ?

「分かった、行くか・・・・・って何処にやられた?」

「髑校の奴らです!」

「何年だ?」

「すいません!そこまでは分かりません」

「そうか・・・・」

ふむ、如何しよう・・・・え?髑校って何だって?あれだよ、頭が悪くて魔力も
そこまで高くない奴の溜まり場、まぁ不良学校だ・・・Gクラス以上のな

「よし!取り合えずそこにいる奴ら一人一人に聞くか!」

O☆HA☆NA☆SHI☆の時間だぜw

禍々しいオーラが賢一の周から浮き出てくる

「番長・・・・・怖ぇ」

賢一だけは、怒らせないようにしようと誓う不良が此処に一人誕生した・・・

「よし!行くか!」

「え!?一人で行くんですか!?」

「ああ、まぁ皆連れて後で来てくれ・・・な?」

「分かりました!」

そう言ってやったらGクラスまで走っていく不良B・・・後で名前聞こう

「さてと・・・・・行きますか」

≪シャ≫

その場から神速で動き髑校まで一瞬で行く

「うわ~見た目がもう・・・・・」

眼に映るのは、ボロボロに壊れた校門に落書きでいっぱいの校舎そして・・・不良が目の前にたくさん

「待ってたよ~星光校の番長さん?まさか一人で来るとはね~」

「手厚い歓迎で・・・・」

「さぁ殺り合おうか！」

相手の頭らしき者が言うと不良共が襲い掛かってくる

「はぁ～一人相手にそこまでするか？普通・・・・・」

頭を抱え唸る賢一

「死ねやーーー！」

「うるせい！」

≪ドギャ≫

「プギッ！？」

殴り掛かって来た不良を一発殴り吹き飛ばす

「ああもう！こうなれば自棄だ！」

≪ドギャッメキャッドガーン≫

不良達をなぎ払い頭のところまで行く

「どけ！どけ！魔王様のお通りだーーーーーー！！」

ある者は、空を飛び、ある者は顔を地面に刺し、
またある者は壁に突き刺さる、これを言葉で表現するなら地獄絵図

「フハハハ！！人がゴミの用だ！！」

「ひぃい！？逃げろーーーー！」

逃げさていく不良達そして残ったのは頭と気絶している不良

「さぁ御仕置きだべ～w」

「ひっ！？くっ来るな！？来るなーーーーーーーー！！」

≪ボギャッ≫

最高の笑顔で顔面を殴る・・・・

「ふぅ～スッキリした・・・」

「番長！加勢しに来ｍ・・・・・」

不良達は見た！賢一の恐ろしさを！そしてこう思った！この人に一生付いていこう

≪タ～♪ターラララ♪≫

賢一は、番長としての威嚇が上がった！仲間から尊敬されるようになった！

「何かもう番長から抜け出せなくなったような・・・・・」

賢一の災難は続く・・・・

聞き捨てならねぇぞ！その台詞！

彼の眼には何が映り、何を生み出すのだろうか・・・・

ディケ○ド風にするな！！

「っとそんな事が昨日ありました・・・賢一です」

「ねぇねぇあれじゃない噂の髑校を一人で潰したって言う不良」

「え？嘘あの人が！？全然そんな風見えない」

「人は見掛けに寄らないわね・・・・・」

一日で昨日の出来事が流れました・・・俺有名人！超ーーーーー！

うれしくないｏｒｚ

「誰か助けてください・・・・・」

この台詞も久々・・・・・

やっぱ俺って番長なんだな・・・（後書き）

久々に無双・・・感想、評価待ってます！「

賢一の日常（前書き）

最新です！

賢一の日常

無双から2週間・・・あれからよく起こる事があります

「おめぇが星光校の番長、風間賢一だな！」

不良さん達に狙われます・・・毎日毎日、殴ったり蹴ったりある時は、山の様にでかい人と戦ったり、ある時は１０００を超える不良だったり
挙句の果てには殺し屋が来たり、物凄いハードな毎日を過ごしています
悲しくなんか無いんだからな！！

「てめぇを倒して！俺が最強に「だまれ」・・プギャ」

顔面を殴って即終了

「たく、毎日毎日疲れるんだっての・・・・」

はぁ～本当に疲れるしかも俺を倒す＝最強って言う構図が出来てるし・・・・
まぁ間違いではないんだけど・・・・

「番長！お疲れ様です！」

「「「「「お疲れ様です！」」」」」

一人の部下がタオルと飲み物を渡してくる、
それを受け取り一気に飲み干す

「ふぅ生き返る～～」

あー後部下が増えました・・・・・え？何人ぐらい？１０００人ぐらい

「めっちゃ目立つ・・・・」

俺の朝は１０００人を超える部下達と学校へ向かう事から始まるえ？大会？何それ？食えんの？冗談です！冗談だから、包丁を下ろして！
って！？そこの人それ包丁とちゃう！約束された勝利の剣（エクスカリバー）！！！

「番長！如何したんですか！？真っ青になって！」

「いや、久々に命の危機に晒されそうで・・・・」

心配して俺に声をかける不良Aいや・・・・秋久優・・・ええ子や・・・・（涙）

「番長！それじゃ俺達はこれで！」

「おう！」

それぞれのクラスに戻っていく

「俺達も行きましょう」

「そうだな！」

っで話を戻すけど大会は後1ヶ月、それまで放課後に集合して練習する事にしてるんだ、ん？部下達？説明はしてあるからそこら辺は問題なし！

「待ちなさい！」

「ん？」

一人の女生徒が道を塞ぐ

「貴方が風間賢一ね！」

「え？そうですけど・・・・」

「風紀委員！２年Ａ名前は覚えなくて良いです！これ以上風紀を壊す貴方をほっとく訳には行きません！覚悟してください！」

そう言って刀で襲い掛かってくる女性・・・とりあえず風紀委員

「ちょ！？」

≪ブン≫

ぎりぎりで避けるが髪の毛が少し切れる

「あぶねーーーー！！」

「まだまだーーー！！」

≪ブン、ブワンブオン≫

高速で襲い掛かる刀

「うお！うわ！ひえ！」

それを叫びながら避ける

「当たれーーー！」

≪ブン！！≫

「いい加減にしろ！」

≪ガスッ！≫

腹を殴り風紀委員を気絶させる

「やっちまった・・・・・」

やっちまったーーーーーーーーーーーーーーーーー！！

等々風紀委員まで敵に回しちまった・・・生徒会まで敵にならないよね？

「取り合えず！逃げろ！」

「待ってくださいよ！番長！」

その場から物凄い速さで去る

「最悪だ・・・・」

机に突っ伏しながら言う

「番長・・・・元気出してください！」

「そうっすよ！此れからなんか良い事ありますって！」

「グスン・・・・そうかな？」

「そうです（っす）」

やっぱこいつ等良い奴だ・・・・・（涙）

≪1年G組、風間賢一君、至急生徒会室に来てください≫

元気を取り戻して来た時に丁度、放送で呼ばれる・・・・・・

「きっと来ますよ良い事」

「負けないでください！番長！」

「ああ、ありがとう・・・・・」

慰めてくれる二人・・・・・でもな、時にその慰めの言葉は逆に傷つくんだよ・・・・・

「じゃあ、行ってくる」

「「はい！がんばってください！（っす）」」

トボトボと教室から出て行く・・・・・

「ケン！」

前から女生徒が走ってくる・・・

「やぁ、静菜じゃないか・・・・・」

「あんた！一体何したのよ！」

「風紀委員を気絶させた・・・・・」

「何してんのよ・・・・」

呆れられる・・・・・好きで気絶させたんじゃない！

「静菜・・・・」

「何よ・・・」

「俺、次ぎ生まれ変われるなら鳥になりたい・・・」

「そう」

廊下で泣きながら歩く男子生徒が居たとか居なかったとか・・・

災難？何それ・・・・食えんの・・・・・・食えるなら・・・・・・
食いたいｏｒｚ

賢一の日常（後書き）

感想・評価待ってます！

大会まで後1週間

どうも・・・・・皆さん、風紀委員を敵にした風間賢一です・・・
・え?生徒会ではどうなった?
ハハハハ、生徒会室に行ったらそこには、気絶させた女の子が居て・
・・・・

「この借り大会で返してやる!」

ですよ?泣けてきますよ・・・・・そんでもって生徒会長には、
怒られて散々ですよ・・・・
え?敵にならなかったのかって?そこら辺は、静菜や零さんが俺の
知り合いだったから
生徒会には俺の性格が分かってる人が沢山居るから何とかなった・・
・・怒られたけど

「はぁ〜」

「ケン!休んでないで特訓するよ!」

「うぃ〜」

静菜に怒鳴られる・・・・・今俺等は、大会までの特訓中

「うぃ？・・・・・」

「はい！」

静菜さんが物凄く怖いです・・・・・俺なんかしました？

「やりまくりよ・・・・」

「心読まれた！？」

「顔見れば分かるよ」

「さようですか・・・・」

経った2年で顔だけで分かるのも驚きだが

「ケンさん！僕と一緒に練習しようよ！」

鏡花が眼を輝かせながら言って来る・・・・実はというとこの子も俺の部下だったり

「ＯＫ、いいよ」

「やった！」

飛んで喜ぶ・・・・・なぜ部下になったか？カッコよかったんだって・・・一人でしかも
魔法無しで複数の敵を倒すのが

「よしゃ！行くぞ鏡花！」

「はい！」

まぁ良いんだけどね・・・・本当だよ？

「行け！」

≪シャッシャッシャッシャ≫

雷の矢が何百と襲ってくる・・・・・一発一発の威力が高い

「本当に、何でお前がＡクラスじゃないんだか！」

≪ガガガガッガガガガ≫

矢をその場を動かず避け続け、矢が止んだとこで

「次は俺の番だ」

一瞬で鏡花の目の前まで、近づき拳を入れる

「くっ！」

≪キンッ≫

だが、電気の薄い障壁で防がれる

「まだまだ！」

≪バギ≫

更にもう一撃障壁にぶつける

≪ガシャン≫

障壁が壊れ鏡花の目の前で拳が止まる

「俺の勝ち」

「参りました・・・・」

勝負が付く

「はぁ～待った負けた～！攻撃が全然当たらない！」

「そんなに落ち込むなって、かなり強くなってるぜ？」

「そうですか～？」

疑いの目で俺を見てくる

「本当だって」

「それにしては、全然勝てる見込みが無いんですけど」

「俺が規格外なだけだ・・・・」

言ってて虚しい・・・・・

「レン・・・・・今度は私と・・・・・・」

「もうちょい、休まして」

「・・・・無理」

俺の裾を掴み連れて行く・・・・・・

「ちょっマジ勘弁！」

「・・・・・・行く」

「ちょ！行き成り！」

≪パキパキキキッ≫

氷が足元を伝って俺の動きを塞ごうとする

「そうはいかねぇ！」

それを跳んで避け、木の枝に乗る

「・・・・まだ」

≪ブオオオッ≫

次は吹雪・・・・・一１００℃位だろうか一瞬で木が凍り付けになる

「・・・・・勝った？」

「残念」

後ろに回り込んで背後に木の枝を付ける

「・・・・負けた」

木を一瞬で凍り付けとか・・・・まぁ俺は１００℃位じゃ全然平気だけど

「ケン！次は私とよ！」

「え～疲れた」

「大会まで後１週間よ！最後まできちんとしないと！」

そう、大会まで１週間、１０００万円まで１週間なのだ！

「よしやるか！」

「急にやる気が出たわね・・・・」

「最高にハイってやつだぜ！」

「まぁいいよ・・・・」

やるぞーーーーーー！

・　・　・　・　・　・　・

やり過ぎちゃった♪テヘ♪・・・・・・すみません

俺の目の前に見えるのは・・・・・破壊された自然・・・・

「誰がこんなことを・・・・！！」

「あんたでしょうが！！」

≪バシッ≫

「ヒデブ！」

いや～まさかこんな事に成るとわ・・・・予想外！

「どっかの誰かさんのせいでこれ以上特訓は出来ないわ」

「誰だ？」

「お前だ！・・・・・大会までの一週間は体を休む事に専念して」

「まじで！！」

いやーーー何しようかな・・・・やっぱ寝るだろ、更に寝るだろ
そして寝るだろ、最後に寝るかな！

「あんたは反省しなさい！」

≪ボギャ、グシャ！≫

「ヒデブデブ！」

アーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

初戦

やって来ました！大会！今日で金が！金が！・・・・フフフフフフフフ

「番長！頑張ってください！」

「おう！応援よろしく！」

「「「「「「「はい！」」」」」」」

千人以上が声を合わせて返事をする・・・・・うるせ～

「相変わらず凄いわね・・・・」

「フフフフフ、もう如何でもいいことさ・・・・・」

「賢一君も大変ね」

「もう良いでしょ・・・・」

「ケンさん！頑張りましょうね！」

「ああ！金の為に！」

「ケン、本音が漏れてるよ」

おっと思わず・・・・

「・・・・私達の番」

「皆!行くわよ!」

静菜が号令を出す・・・・あれ?デジャブ?

「さぁて、パパッと終らせるかね・・・」

[さぁ!次の戦いは皆さん注目の番長が入っているチーム
番長と愉快な仲間達チームだ!」

《番長!番長!番長!》

誰だ・・・こんな名前付けたのは・・・・そして物凄い声援・・
・・

「誰?この名前付けたの」

「あ!僕、気に入ってくれた?」

「あんた何してんのよ・・・・・」

「そして！その相手をするのは凶暴で有名な人間が集まって出来た打倒番長チーム！」

「相手も相手ね・・・・」

「あれ？あいつ等って俺が今まで戦ってきた奴らじゃね？」

殺し屋の奴だろ、山のような男に・・・・完璧に俺に復讐するきじゃん・・・・・

「番長！あの時の借り今日この日に返す！」

相手チームの一人が殺気を飛ばしながら言ってくる

「さぁ！試合を開始します！１回戦に戦う人は前へ！」

「じゃあ俺が最初に行って最後までやってくるわ・・・・」

「なんで？」

「ん？いや相手はしてやらないとね？」

この戦闘のルールは簡単まず最初に出る人を決め戦うそして戦いに勝った場合その選手はそのまま続行して戦う・・・・・まぁポケモ○のゲームと同じ戦闘方法だ

「分かった」

「え～ずるい・・・・」

「次の戦い俺最後で良いから」

「まぁそれなら良いけど・・・・」

「おーと!?行き成り番長が出てきた!相手は如何する!」

「如何もしない!このまま行くだけだ!」

そう言って奴らの中の一人が前へ出てくる

「まっよろしく」

「ふんっ」

まっ当たり前の反応だな

［それでは開始します！］

≪ピーーーー≫

闘技場に音が鳴り響く

「悪いが一瞬で終らせる・・・」

≪ブウン≫

その場から消え相手に一撃を当て場外までぶち飛ばす

≪ドガーーーン≫

［・・・・・］

「おい！審判」

［風間選手！勝利！一瞬、一瞬にして相手を沈黙させたーーー！］

≪おおおお！！番長ーーーーーー！≫

［それでは二回戦目開始します！］

・・・・・・・

ってその後も全て一撃で終らせて勝利・・・・何と言うか・・・・・
楽勝？

「すぐ終っちゃったね・・・・・」

「・・・・面白くない」

「ケンさん！流石です！」

「ケン！早すぎよ！」

一名以外が不満をぶつけてくる

「しょうがねぇじゃん終っちまったもんわよ！」

「次は！アンタ最後だからね！絶対」

「良いって別に」

後3試合勝てば・・・・1000万円・・・・・いや4百万円、ああ早く決勝来ないかな～

あ～～～～～早く来ないかな～～～～～～

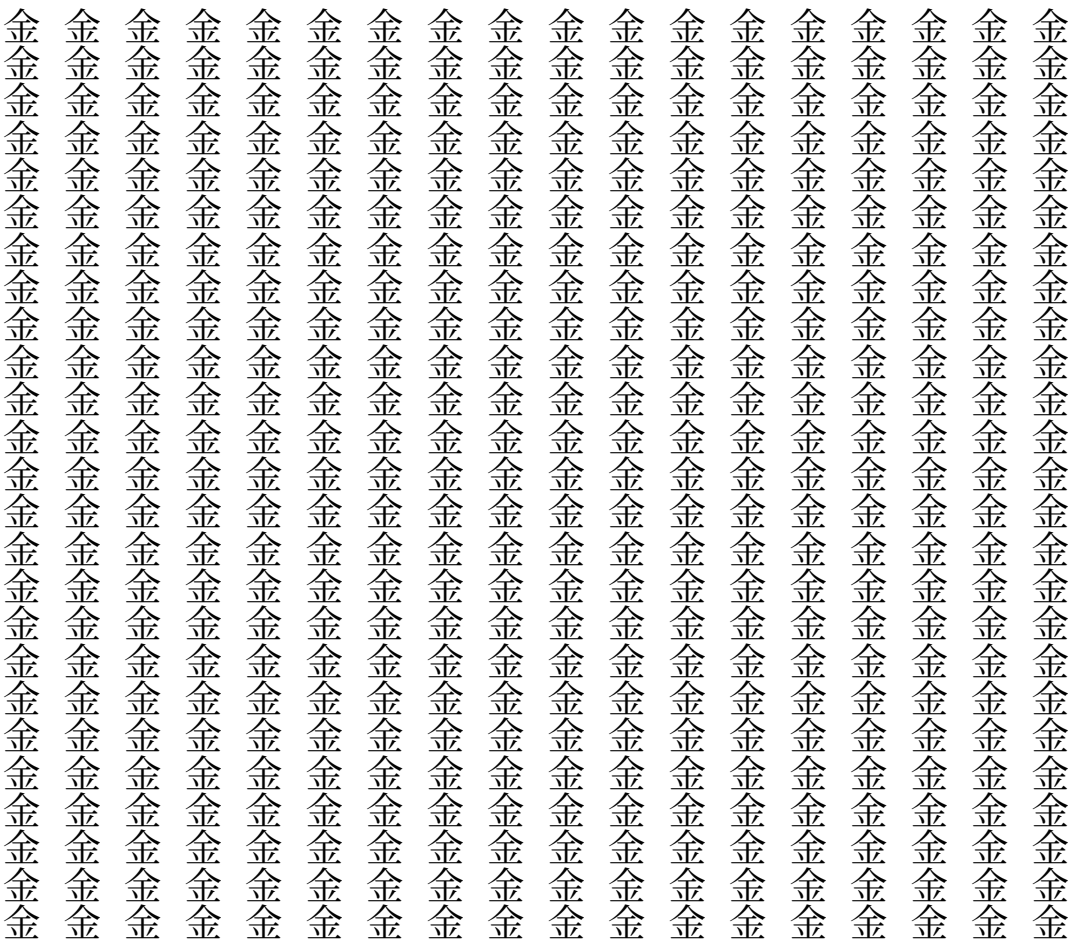
準決勝（前書き）

準決勝

二回戦も無事・・・・いや楽勝で勝った

「あと二勝♪後二勝♪」

「物凄い浮かれてるわね」



金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金
金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金
金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金
金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金
金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金
＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼
＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼

「ケン！」

「はっ！」

いかんいかん、欲望が・・・これも闇の影響か？

「ケン！」

「ハイ、ナンデショウカ？」

「もうすぐ準決勝よ！」

あれ？もうそんな時間？

「早く行くわよ！」

「ＯＫ～」

まぁいいさこれで・・・・金

「番長！頑張って下さいね！」

「金！」

「掛け声が金になってるよ・・・・」

「っは！」

こうなったら、心を無にするんだ！！・・・無に、無に・・・・無

「よし、行くか・・・・」

「早くしてよね」

「ケンさ～～ん！」

前から鏡花がやって来る・・・・

「何だ・・・・」

「次、勝ったら決勝ですね！」

「そうだな・・・・」

「何か遭ったんですか?」

「別に・・・・」

反応の薄い賢一に疑問を問いかけるが興味が無いように返される・・・賢一の心の中はッというと

・・・・・・・・・・・・・・

本当に何も考えていない馬鹿・・・・・

「静菜さん、ケンさん何か遭ったんですか?」

「さぁ?」

「・・・・静菜たち・・・・遅れる・・・・」

葛葉が後ろから声を掛けて来る、そして賢一と眼が合う

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・何だ・・・」

「・・・何でも・・・・・」

「「・・・・・・」」

クール×クール＝カオスだ・・・・

「いいから早く行くわよ！」

「皆～もう始まるよ！」

零がスタジアム前で此方に大きく手を振って呼びかけてくる

「やばい！行くよ！」

「うん！」

「「・・・・了解」」

「「・・・・真似するな」」

「「・・・・む」」

「何してんのよあんた達・・・・」

二人のやり取りを見て頭を抱える静菜・・・・

「さぁ！やって来ました！準決勝！やはり勝ち残る！番長チーム、
そして
それに立ち向かうのは！３年で構成されたチーム！レイヤチーム！！
名前の由来は！適当・・・良いのかそれで！？３年！」

「・・・・・」

「ねぇ、賢一本当に如何したの？静菜」

「分かんないわ・・・・」

「怖いよね、あそこまでクールだと」

「・・・・・かぶる」

ほかの事で頭がいっぱいの４人

「静菜ー」

相手チームの女性が静菜を呼ぶ

「此処に来る途中までは普通だったよ？」

「分かんないね・・・・賢一って」

だが、賢一の話題で気付かない

「静菜～～～」

「昔からよくわかんない性格だった」

「静菜ーーー！！」

等々痺れを切らせたのか相手が怒鳴る

「きゃっ！」

「静菜、無視とわ良い度胸ね？」

「お姉ちゃん！？」

「「「お姉ちゃん？」」」

そう怒鳴っていた女性は静菜の姉、薫だった（覚えてない人は‘新しい家族’を見てね）

「静菜久しぶり、そして賢ちゃんも！」

「・・・・久しぶり薫さん・・・・」

「お姉ちゃんも大会に出場してたの！？」

「ええ、静菜が心配でね・・・それより賢ちゃん如何したの？」

「分からない」

やはり、クールな賢一は不気味だそうだ・・・・

「まぁ何より手加減はしないからよろしくね静菜！」

「うん！手加減なんかしたら怒ってる！」

「ハハッハハ」

「さぁ、準決勝を始めたいと思います！これに勝てば決勝！決勝で勝てば１０００万円と・・・」

「・・・・（ピク）」

１０００万と言う数字に反応する賢一、それを見逃さない静菜

「・・・・１０００万円」

「（ピク、ピク）」

賢一の耳元で呟き続ける

「やるぞーーーー!!全ては金のためーーーー!!」

単純である・・・・

「「「「「「番長ーーーー!!」」」」」」

賢一の復活と共に湧き上がる何万と言う声援・・・・え?増えてる?

ええ増えましたよ?大会で、何か問題でも?

「戻ったね・・・」

「そうだね・・・」

「馬鹿だわ・・・」

「・・・・・・単純」

フッ何とでも言いたまえ、今の俺様は最高にハイだぜ！何も考えなかった分

「それじゃ！俺一番に行くわ！・・・って薫さんじゃん！」

「さっき挨拶に来てただしょ・・・」

「覚えてない！」

どっきパリに言い切る賢一

[行き成りの大声でビックリしましたが！試合を開始します！]

「じゃ、行って来る！」

「あ、ちょ・・・早」

止める前に既に闘技場の上へ上がっている賢一

「さぁ！殺りましょうか！先輩！」

「字が違うよ？って・・・え」

突然目の前から消えうせる

「何処見てるんですか？先・輩？（ニヤリ）」

「ック！炎よ相手を燃やし尽くせ！フレア！」

後方に下がりながら魔法を放ってくる、それを素手ではじき返す

≪バキ≫

「な！？」

「ハイ、終了」

≪ガスッ≫

背後に回り蹴りを入れって相手を気絶させる

「「「「「「うおおおお！！番長ーーーー！！」」」」」」

「強い！強すぎるぞ！魔法を素手で返すとは！？

そして驚異的スピード！流石！番長！そこに痺れる！憧れる！」

あれ?何かまた部下が増えそうな予感・・・・

「ケン、お姉ちゃんの相手ワタシガスルカラネ?」

「っげ」

戦闘狂モードに成ってる・・・・零さん達なんか端っこで怯えてるよ・・・

「はぁ～分かりましたよ・・・・」

触らぬものに祟り無しってね・・・・逃げるんじゃないよ?譲るだけ

「さぁ!二回戦目に行きましょう!」

「よろしくね?番長さん?」

「はぁ、あの～」

「なに?」

「薫さん出ます?次?」

「私に勝ったら出ると思うよ？」

よし決まり一瞬で終らす！戦闘狂モードの相手はしたくないってのが本音

［それでは開始します！］

「さぁ！行くわよ！」

「すみません」

「はっ？」

≪ドンッ≫

「ッガ！？」

始まった瞬間に相手の近くまで行き殴るそして終了

［・・・・・っは！？一瞬！一瞬！で相手を沈黙させたーーー！

詰まらない！

詰まらな過ぎるぞ！番長ーーーーー！！だがそこに痺れる・・・・］

いやもう良いから・・・

「よし！終了！」

「ケン、次ぎ私行くわよ？」

「ハイ！モチロンデス！」

コワイデス！

「ケンさん！静菜さん如何したんですか！？」

「あれは静菜の戦闘狂モード！通称ウラモード！怒らせたりするとああなるのだ！」

「・・・恐ろしい」

「同意ですね」

［おおっと！？番長はもう出ないのか！？］

「問題でも？（ギロッ）」

［・・・ありません］

「うっ静菜が裏に成ってる、勘弁したいな～」

「さぁやりましょうか？お姉ちゃん♪」

音符が怖いです・・・こんなに音符に恐怖を覚えたのはこれが初めてです

「ハハハハハ、賢ちゃん助けて」

無理です！

「そんなに強いんですか？」

「いや強いとかじゃなくて狂うんだよね」

「狂う？」

「血を流しても逆にその血を見て笑い出したり舐めたり」

「戦いたくないですね・・・・」

「「「「激しく同意」」」」

ああ、初めてウラモードと戦った時は思わず本気でやっちゃったな

「さぁ行きますよ？」

剣を振りかぶり薫に襲い掛かる

「勘弁して！」

「ヒャハハハハハハ」

踊るように戦う静菜・・・・いや悪魔

「怖すぎます」

「何か人に見えないんだけど？」

「・・・・人？」

「人だって！たぶん」

此れからの戦闘描写は再現できませんので音だけお楽しみください

「お姉ちゃん！最高だね♪」

「もう！アイスクロニクル！！」

≪ガシャン！≫

「ヒヒヒヒヒ！ブラッドフレア！」

≪ジュウッ≫

「ック！アイスニードル！」

≪ザンッ≫

「ッキャ・・・・・（ペロ）ククククヒヒヒヒ！！」

少しの間お待ちください・・・・・

「怖すぎませんか？本物の戦闘狂って・・・・タイトル戦闘狂に変

えた方がよくね？」

準決勝（後書き）

感想評価待ってます！

決勝（前書き）

最後の方適当って思わないでください！！

決勝

無事、準決勝も勝ち、次は決勝です！え？戦闘狂？何それおいしいの？
夢でも見てたんじゃないの？

「ケンー！」

「ナンデショウカ？」

「何って時間！」

「ああ、本当だ」

「それにしても皆なんだか昨日の事が思い出せないのよね」

「ハハハハハッハ」

思い出さなくていいです・・・戦闘狂？何それ？まだいってんの？

「皆さん！お待ちかねの決勝です！ですが私昨日の準決勝を覚えてないのですが

友達に聞いても覚えてないの一転詰まり何があったんでしょうか？」

そうだれも覚えてない、昨日の地獄の日を一人を除いて

いや、覚えてないよ？本当だよ？そう言う事にしといて！！

「まぁなにはともあれ！決勝です！そして圧倒的力でねじ伏せてきた番長チーム！！

決勝も一瞬で終らせるのかーーーー！！」

「「「「「「「「「番長、番長、番長！」」」」」」」」」

「行くぞーーーー！！」

「「「「「「「「「うおおおおお」」」」」」」」」

完璧に番長に成りきっている

「あんた、相変わらず凄いわね」

「貴方ほどでは・・・・んんッそうか？」

「？だって最初よりかなり増えてるじゃない」

「ハハハハハハ、笑うしかないね」

本当に成りたくて成ったわけじゃ無いのにね

「番長！あの時の借りは返す！」

相手側の一人がこっちにやって来てそう言う

「きっ君は！？・・・・・・だれ？」

≪ドテッ≫

周りの人がこける・・・乗りいいねこの人達

「私よ！私！」

「俺俺詐欺？いや私私詐欺？」

「違うわよ！」

この子おもしれーー滅茶苦茶弄り害がある・・・・

「あの時アンタを指導しようとした！」

「あの時って何時？」

「ッッ貴様ーーー！！」

あら、やりすぎちゃった・・・・ってその刀は・・・

「思い出した！風紀委員の刀ッ子！」

「誰が刀ッ子じゃーーー！！」

[試合前の戦闘はお止めになってくださーーーい！！]

「ッチ」

舌打ちかよ・・・良いのか風紀委員・・・

「叩きのめしてやるから覚悟しなさいよ！」

「おお、怖い怖い」

「ッ・・・」

あれ？怒っちゃたw？怒っちゃたw？怒った感じw？

「なんだ、その眼は・・・・」

「いんやー別に（ニヤニヤ）」

「・・・・殺す（ボソ）」

殺すってあんた・・・・まぁ殺されないけどね

［それでは、試合を開始したいと思います！］

「誰が出る？」

「・・・・私が行く」

「じゃあその次僕が行く！」

「その次は私ね♪」

「４番目は「俺が行く」・・・・じゃあ最後で」

阻止したぜ！

［それでは！始めます！］

「よろしく、お嬢さん？」

「・・・・・」

相手から物凄いナルシストが出てくる・・・・何が凄いって？

そりゃ

・・・口に薔薇銜えてて、服は全身白で、そして何かキラキラしてる

まぁこれ見て皆が思うことは

「物凄い殴りたい」

「我慢しなさい」

うおおお！体が勝手に動く！？俺の心が奴を殴れと轟き叫ぶ！？

「今！必殺のーーーー！「やめなさい！」」

≪チーンッ≫

うごおおおお！？そこは駄目でしょ！？やっちゃいけねえよ！？

それは・・・・

「・・・行く」

「フッ来たまえ、お嬢さん」

余裕な表情で挑発しているナルシスト・・・・殺してーー

「・・・アイストルネード」

「な!?」

ナルシの周りに吹雪が立ち上がり身動きが出来なくなる、
そして段々と近づいてくる－１００℃の吹雪・・・・・ざまぁ

「まだだ!ファイヤウォール!」

炎の壁を作り防ごうとするが火力が足りずに消える・・・よし!
死ね!今すぐ死ね!

「ぐあああああ!!」

≪パキパキバキッ≫

そして凍りついたナルシスト

「勝利！葛葉選手、一撃で終らせたーーーー！！流石にうざかったのかーーーー！？」

「よしゃ！！今からあの氷粉々にしてくる！」

「やめなさい！」

冗談じゃないか・・・・半分

「半分は本気なんでしょ・・・・・」

「また読まれた！？」

「分かりやすいのよ・・・・・」

そんな事無いよ・・・・ねぇ～？

「続けていくか？葛葉？」

「・・・・疲れた」

流石にあれはきつかったみたいです・・・・

「じゃあ次僕だね！」

「おう！逝って来い！」

「字違うわよ・・・・」

「おっと・・・・んんッ行って来い！」

［さぁ！第二試合を始めたいと思います！］

向こうから出てくるのは青髪の女性・・・・・うん、まともそうな人だ！

「真っ赤な血で染めてあげるよ♪」

すいません・・・ごめんなさい、静菜の同類でした・・・・・

「がんばれよ・・・鏡花、お前の事は忘れない・・・・」

「それじゃ、僕が死ぬみたいじゃないですか！？」

だってお前、静菜のあれを見たせいで足ががくぶるじゃん・・・・・

記憶に無くても心が覚えているか？

「くっ哀れすぎる・・・・」

「何がですが！？」

「喋ってないでさっさと始めるわよ♪」

そう言って相手が二刀の武器で襲い掛かってくる、武器は如何やら氷で出来ているようだ

「っく！？体が動かない！？何かの魔法！？」

動けずに居る鏡花・・・魔法じゃないよ、トラウマだよ（涙）

「ヒャハハハ！！如何したの！？そんなもの貴方は？」

「くそーーー！サンダーニードル！」

≪ズガガガッガガッ≫

何千ともいえる雷の槍が上から襲い掛かる

「な！？キャーーーーーッ」

避けきれずに全てを直で喰らう・・・何と言うか、ラッキー？

「勝者！鏡花選手！やはり強い！ですが何故でしょうか？
先程の戦いを見ていると震えが止まりません！」

トラウマだよ・・・・そう皆の

「勝った？」

「やったな！鏡花！良くやったぞ（涙）」

「何で泣いてるんですか？賢さん？」

「やったわね！鏡花！」

「お前は謝れ！」

「何でよ！？」

お前がトラウマを植えつけなければ楽勝の戦いだったのに！

「次ぎ出れるか？鏡花？」

「無理そう・・・（バタン）」

「鏡花！？鏡花！鏡花ーーーーーーー！！」

「次は私ですね」

ボケを無視された！？

［それでは！第三試合を始めたいと思います！］

次の相手は誰かな～・・・うんお腹一杯・・・・え？いやだからお腹一杯

「次僕なんだな～ささっと終らせるんだな～」

うんデブ、そして周りにはお菓子の山・・・お腹一杯

「よ～しやるぞ～♪」

「ふん、余裕なんだな～こんなへなちょこ女」

物凄く余裕で言うデブン・・・デブンいいね、デブン之からそう行こう

「（ピキ）アハハハ・・・地獄を見せてやる（ボソ）」

黒いオーラが!?久々に見た、あの黒いオーラ!?ああ、デブンよ去らば君のことは忘れない

「お前らーーーー!勇者デブンに敬礼!」

「「「「「「「「ハッ」」」」」」」」

≪ビシッ≫

部下達がデブンに敬礼する

「意味が分からないんだな~・・・それに僕はデブンじゃないんだな~」

「審判始めてください・・・・・」

[はいいい!!それでは、始め!!]

「風よ・・・我を侮辱するものに死をデッドウインド!」

≪ブオオオオオッ≫

黒い風が何処からともなく現れ・・・デブンを包み込む

「ブヒッ!?何なんだなーーー!?ぎゃーーーーーー!?」

≪ブシャシャシャシャシャッ≫

何かを切り刻むような音が鳴り、最後にデブンが吹き飛ぶ

「もう一度勇者デブンに敬礼!!」

「「「「「「「「「ビシッ」」」」」」」」」

[勝者!零選手!触らぬものに祟りなし!]

「スッキリしました!」

笑顔で此方へ帰ってくる零さん・・・・女の人を怒らせるとこう唸る、いい教訓だ!

「零さん次もいけますか?」

「うん♪余裕だね♪」

結構凄い魔法使ってませんでした?貴方・・・・・

「それじゃ次もよろしく！」

「分かった♪」

次で４試合目か～残り２試合がんばりましょうか・・・・４００百万！

「さて！いよいよ終盤です！３勝無敗で断然有利な番長チーム！奇跡の勝利にかける、風紀委員！勝つのはどっちだーーー！？」

「秩序を守るために負けるわけには、いかない！」

相手側から出てきた、真面目、堅物、眼鏡の三段構えの人が出てくる・・・おお！風紀委員ぽい！

「行ってくるね♪」

「おう！」

「頑張ってきてね！」

他の３人は端の方で休憩している・・・・

［それでは、４回戦目を始めたいと思います！！］

≪ビーーーーーーー≫

「トルネード！」

始まると一緒に魔法を行使し竜巻を作る

「残念だが、君の魔法は研究してある・・・・ライトニング」

≪バチチッ≫

だが、零の攻撃が当たるより先に雷の魔法で零へと攻撃をする

「な！？」

雷は零には当たらず、杖へと向かい破壊する、それにより竜巻が何も無かったかのように消える

「君の弱点は杖での魔法行使、杖さえ破壊すれば君に勝ち目は無い・・・・」

確かに、零さんだけだ杖で魔法を使ってるのは・・・・・

他の人は剣だったり指輪だったり、まぁその分威力が落ちるけどね

「続けますか？」

「参りました・・・・」

［おーーーと！番長チーム初めての敗北！まだ分かりませんよーこの戦い！］

皆さん・・・・僕もう限界です・・・・

「金が！金が！後二回勝てば、金がーーーーーー！！」

「静菜さん！賢一君が！」

「あーほっとけ・・・」

「やるぞーーーーー！！」

［いよいよ、番長の登場です！！皆が待っていたーーー！］

≪うおおおおおお！≫

一気に熱気が高くなる・・・・

「お前らーーーー！！やるぞーーーー！！全ては金のためーーーー！！」

≪番長！番長！番長！≫

「騒がしいですね・・・・少し静かにしてほしいものです・・・・」

金がもう少しで金が！え？もういい？何を言っている！大切な事だぞ！

「審判！早くーーー！！」

［それでは始めたいと思います！］

「君の弱点は魔法が使えない事・・・・以上喰らえランドサンダー」

無数の雷が闘技場全体に降り注ぐ

「少しだけ面白いことしてやるぜ！」

≪ブンッ≫

一発が賢一に当たるが雷は透き抜ける・・・

「な！？」

眼の前に賢一が大量に出現する

「分身の術なんてなwただの残像だよ！」

「っく！」

残像全てが襲い掛かる・・・

「こんな非現実的な事が！！」

「ははははは！光になーーーれ！」

アッパーを喰らわせ相手は吹っ飛んで行く・・・・やばい死ぬかも、まぁいいか

「４００百万！」

［やはり！強いこの男に勝てる奴はいるのか！？］

「次ぎさっさとしようぜ！ハリーハリーハリー！」

［さぁ！いよいよ最後の戦いです！みな「ハリー！ハリー！ハリー

！」・・・・試合開始です」

そして出てくるこの前気絶させた女生徒・・・・・・

「この前の借り換えしてくれる！」

「４００百万ーーーーー！！」

≪ドガーーーーン≫

６分の一の一撃を闘技場にぶつける

「へ？」

そして闘技場が・・・・いや地球が少し割れる、場外負けしないように思いっきり跳ぶ！

相手は呆気に取られて場外負け・・・・４百万！

［勝利！勝利！番長地球を割ってしまった！！恐ろしすぎる！！

そして、今年度の優勝は番長チームだーーーーー！！」

これで生活費は安心だーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！

１０００万円！！と・・・・それはいらない（前書き）

短いですが勘弁してください！

１０００万円！！と・・・・それはいらない

「それでは、優勝者には賞金１０００万円とダンジョンターミナルへの挑戦券が贈られます！」

へ？挑戦券？へ？いやいやいや

「静菜？如何言う事？」

「何が？」

「挑戦券」

「あれ言ってなかった？」

いや、聞いてないし・・・・いらねぇよ、めんどくせぇよ、フラグだよ・・・・

「だが！４００万！」

「おめでとう、賢一君・・・・」

フフフフフ金が生活費が（涙）

「っと言いたいところなんだが・・・・」

「へ？」

「この修理代でざっと４０００万払ってもらえないかな？」

「へ？」

４０００万！？俺の賞金の１０倍！？・・・・

「冗談ですよね？」

「まさか此処までされるとは驚きだったよ、お金よろしくね？」

「俺は！俺はーーーーーーーーーー！」

フフフフフ・・・・どうせ俺は災難の塊だよ・・・・ああ、空が青いなー真っ青だ俺のように！

「ケン、私達の賞金も上げるから元気出して・・・・」

「グスン、いいの・・・・？」

「ええ／／／（っぐ、かわいい男なのか！？）」

やったー！借金が３０００万に成った！・・・・・ｏｒｚ

「ケン、気晴らしに挑戦しようよダンションターミナル！」

「あ、それは無理」

「即答！？」

誰が自分から、非凡フラグに突っ込むものか！

「バイト探してくる・・・・・・」

「「「「がんばって」」」」

俺の平和～何処へ～・・・今日からバイト！バイト！

・・・・・

「・・・・ｏｒｚ」

何処も雇ってくれないーーーーーーーーーーーー！！

「はぁ～・・・・ん？」

一枚の紙が俺の足元に飛んできた・・・・・

「なになに？ダンジョンターミナル３５階のデビルオーブ１００体狩り報酬５０００万！？期限は６月１０日！これだ・・・・やるぞ！何が非凡だ！何が平凡だ！俺はやるぞーーー！」

フラグなんて幻想！ぶっ壊してやる！

報酬５０００万・・・２００９年６月１０日まで・・・・去年である正に滑稽である

１００万アクセス記念（前書き）

突破だと・・・！？

１００万アクセス記念

１００万キターーーー！！

「最初はどうなるかと思ったが・・・・１００万も行くとわ」

１００万記念のついでに次の世界のアンケートをとりたいと思います！

？ネギま！？（進み方幾分決まってます）

？Ｆａｔｅ（最初の方しか考えてません！）

？ＮＡＲＵＴＯ（何となく・・・・）

？オリジナルで行け！（はい、分かりました！）

？その他（続行とか、※リリなの・・はもう少し待ってください！！）

のどれか選んでください！作者的にはネギま！？かな・・・・

「ならアンケートするなよ・・・・」

聞いときたいじゃん！読者の意見！！

「まぁいいけど・・・」

それでは！此れからもよろしくお願いします！

「よろしく！！」

１００万アクセス記念（後書き）

アンケートは感想に書いてください！！よろしくお願いします！

ダンジョンターミナル（前書き）

今日の最新は此処まで！

ダンジョンターミナル

夜、今日俺は非凡フラグへと向かう・・・・そう、全ては生活費のため

「誰も居ないな?」

よし!行けるぞ!ん?何でコソコソしてるのかって?
いやーあの依頼書実はというと・・・・・・・・学生お断り!だったんですよ
・・・・え?それだけ?ええ、それだけですけど?他に何かありますか?

「やっと入り口が見えた・・・・」

だから、学生じゃなくて一般で来た訳ですよ!まぁ早い事脱走ですね

≪ガサガサ≫

「!?」

≪シュバッ≫

後方から物音なる、そこから急いで離れ木の上に隠れる、現れたのは野うさぎ

「なんだ・・・・ウサギか」

気を取り直して、入り口へ向かう・・・・

「それにしてもデカイなーーーー」

塔を見上げる・・・・上のほうは雲で隠れてよく見えない

「３６階か・・・・頑張りますか！」

扉に手を突こうとするが

≪バッチッ≫

「つッ・・・は？何で？挑戦券はあるぞ？」

そう言い挑戦券の証である青い水晶を出す

「故障か？」

もう一度触れようとするが≪バチッ≫やはり入ることが出来ない

「此処まで来て、帰れるか！ボケーーー！！」

水晶を全力で扉へ投げつける

≪ボガーーーン≫

「・・・・・過ぎた事はしょうがない♪」

壊れた扉を無視し進む

「ファンタジー！！」

はっ！？思わず叫んでしまった！

「えーと階段は・・・・」

≪ギーー≫

魔物が現れた！

↓戦う
魔法
アイテム
防御
逃げる

戦うを選択！賢一の攻撃！

「チェストーーーーー！！」

≪グギャーー≫

賢一の改心の一撃！！魔物Ａは死んだ！賢一は経験値１５を貰ったお金を５００円手に入れた！

「・・・・虚しいや」

３６階まで道のりは長い！

・

・・・・・・

「ねぇ皆知ってる?ゲームと現実の違い・・・・いやＣＧとかじゃなくて、いや機械でもなくて
・・・・やりたい放題なんだよ?現実は」

賢一の後ろにはモンスターたちの残骸・・・・・お金が１００万貯まりました!

「足りないけどね・・・・・」

いっその事、このまま上の階までぶち破ろうか・・・・・・

≪グギャーーー!!≫

モンスターが目の前に現れる・・・・・・

「でも、それじゃあ掟破りだし・・・・・」

だが賢一は気付かない・・・

《シャーーーー》

モンスターが賢一に襲い掛かる

≪ブシャーーー≫

賢一の胸に鎌みたいな物が突き刺さる

「ガっ！？・・・・人が考えてる時に攻撃してるんじゃねーーー」

≪バキッ≫

鎌が刺さった状態で殴り飛ばし殺す

「あーー糞！いてぇーー！！」

徐々に傷がふさがっていく・・・一様、俺不老不死なんで覚えといてね？

「もう良いや・・・・うん」

傷がふさがった所で上の階を見る・・・・そしてそのまま跳び上がり
壁を壊す！壊す！壊す！

「掟破りがなんだーーーー！！」

３０階程壊しようやく、目的地につく・・・・そこにはデビルオーブがうようよ

「１００体どころじゃねぇだろ・・・・」

ざっと１０００体程いる・・・他にも違うモンスターも混じっている

「やってやろうじゃねか！！」

覚悟を決めた瞬間、敵が襲い掛かる

《グオオオ》

「おりゃあああ！！」

≪ドスッ≫

一気に大量の魔物を殺すが奥からうようよと出てくる

「たくよーーーー！！」

≪ボフーーーーーン≫

拳を全力で前へ突き出し衝撃波を生み出し更に斬滅する・・・・

「きりがねぇよ・・・・風よ火よ水よ土よ雷よ！全ての自然の源よ！我の下に集まれ！！」

自然の力を使い属性を1箇所に集める・・・・そして出来上がる黒い塊

「喰らえ！そして朽ちろ！」

≪ブオーーーーン≫

塊は魔物を包み込み消える・・・そして静寂に包み込まれる

「終ったか？」

≪カツカツカツ≫

遠くから聞こえる足音、徐々に此方へと近づいてくる

「誰だ！！」

「異端者よ君には消えてもらう・・・・」

現れたのは、白い翼に白い鎧その姿はまるで・・・・

「天使・・・・？」

ダンジョンターミナル（後書き）

日曜日には次の世界へ！出来れば土曜日・・・・アンケートは、土曜日の3時まで
早い？知らないそんなこと！！

神の刺客（前書き）

神の刺客

前回のあらすじ！天使が出てきました！以上

「あんた、誰？」

「我は神に仕える者」

「紙？」

「・・・・・」

あら、無視まぁいいけどね・・・それにしても神に仕えるものね～
逃げようか？え？戦え？でもさ～用事は済んだし・・・

「消えてもらう」

考え事をしている隙に天使が攻撃を仕掛けてくる

≪シャッ≫

「うぉ！？」

「避けられた・・・・・？」

避けた事に驚く天使・・・光の速さで迫る剣って
もうちょっとで右と左が別れるとこだったぞ！？

「偶然か・・・！」

≪ズシャシャシャシャシャッ≫

更にやって来る剣、早すぎて人から見ると剣が見えない・・・・

「うおおお！？」

「見えている・・・？貴様本当に人間か」

「さぁ？どうだろうっね！」

≪バキッ≫

「ッ！？」

油断をしている隙に腹に1撃を当てる吹き飛ぶ天使

「油断大敵！ってね♪」

「よっと！」

背後から攻撃を受ける・・・・そしてそこにいるのは、今戦っていた奴と違う赤毛の天使

「たくお前人一人殺すのにどんだけ時間かけてんだよ？」

「だまれ、奴は普通の人間ではない・・・・」

天使が二体・・・・このまま行くともう一人くらい出てきそう・・・

「増えられると困るんで！一人は死んでもらうよ！！」

≪グシャッ≫

出てきた赤毛の天使に神速で近づき・・・・下半身を吹き飛ばす

「いてぇ～、確かに普通じゃないね・・・・・」

「な！？」

吹き飛ばした下半身が徐々に再生していく・・・・・

「不老不死か・・・・・」

「正解～」

「遊んでないで殺るぞ」

「へいへい」

「っく！」

分が悪い・・・向こうは不老不死しかも二人今の俺には倒す方法が・・・あるちゃあるけどどんな事が起きるか分からないし・・・・

「へへ消えうせな！！」

青い炎が襲ってくる

「っち！」

避け、壁に着弾した青い炎を能力を使い操る

「うお！？マジかよ！」

「何をしている・・・・光に浄化されろ」

次は巨大な光の剣が俺に振り落とされる

「っち！」

青い炎能力を使い相手の剣と同じ大きさにする・・・

≪ズガガガッガガッガ≫

二つがぶつかり合い爆風が飛び散る・・・そして賢一のポケットからある一枚の
紙が飛び出す

「！？うおおおお！！俺の依頼書ーーーーーー！！」

勝負そっちのけで、依頼書に向かってダイビングする

「何が知らんが隙が出来た殺るぞ」

「へいへい」

光のエネルギーと青い炎が融合し巨大なエネルギーの塊が出来る

「消えろ異端者」

「何かつまんね～」

そして放たれる・・・巨大なレーザー

「ふぅゲット・・・・ん?うおおおおおお!?」

≪ボギャギャギャギャ≫

迫ってくるレーザー・・・・避けれませんね～はぁ折角依頼書成功したのに

そう思っておもむろに依頼書を見る

「ん?」

≪ボギャギャギャギャッ≫

そして眼に入る２００９年という文字

「これ去年だ・・・・」

≪ボギャギャギャギャギャ≫

そして、レーザーに直撃する・・・・

「そんな馬鹿なーーーアーーーーーーッ」

≪ドガーーーーーーーーン≫

「死んだか・・・・」

「生きてたら怖いでしょ・・・・」

天使達が消える・・・・そして聞こえてくる啜り声

「シクシクシク・・・・」

神の刺客（後書き）

アンケートまで後４時間！！

八つ当たりと言うなの復讐（前書き）

最新遅れました０ー！！すいません！

八つ当たりと言うなの復讐

「ブツブツブツブツ」

ふざけんなよ・・・・俺の苦労

「くそーーー！！何故だ！何故こんなことに！！」

依頼書→去年→意味無い→無駄足→痛い思い→平凡ＮＯ非凡ＹＥＳ！→災難

「フフフフフフフフ」

そうだ、全部天使が悪いんだ、そうに違いない！

「まっていろ、天使！魔王様再降臨じゃーーーーーーーーーー！！
フハハハハハハハーーーーハッハッハ」

貴様らのその白い翼を真っ赤に染めてやる・・・・・・ククククク

「さぁてそうと決まれば・・・上を目指すか」

え?何故上かって?天使って上にいるってイメージだから・・・・悪魔だったら下って感じだけど

「よし!」

拳を天井に向ける

「俺のこの手が真っ黒に染まる!!お前を貫けととどろき叫ぶ!!ダークネス!!ゴッド!!フィンガーーーーーーーーーー!!」

魔力が使えないのでただの拳で天井を破壊していく

「てか気って使えるんじゃね?」

そんな考えが頭をよぎる

「ま使えるわけ無いか!ハハハハハハ・・・・試しに」

壁を壊すのをやめる・・・・・・うん、別に期待はしてないか

らね？

「かーめーはーめー波ーーー！！」

王道だよね、これも・・・・・・やっぱ出ないか・・・

「だよなーーー！」

別に落ち込んでないよ？本当だよ？

≪ボギャーーーーン≫

「へ？」

気を抜いた瞬間に手の平から黒いエネルギー弾が飛び出す・・・・

「わぉ・・・コレナンテチート？」

だがこれで少し楽になった！！

賢一は気が使えるようになった！！

「それでは、改めて・・・俺のこの手が真っ黒に染まる!!お前を貫けととどろき叫ぶ!!
ダークネス!!ゴッド!!フィンガーーーーーーーーーー!!」

賢一の手が真っ黒に染まり天井へと進む

≪ドガガガガガ≫

≪ガシッ≫

ん?何かを掴んだようだ・・・・

?ネタに走る
?確かめる
?とりあえず笑う

?ばんだ!!

「ふはははは!!」

何も起こらない・・・・当たり前か

?ネタに走る
?確かめる

?番・・・・お前は本当にそれで良いのか?

?ネタに走る

それでこそ俺だ!!

「ヒートエンド!!」

≪ボーーーーン≫

掴んだものが爆発する

「ん?何か生暖かい・・・血?」

上を見上げる如何やら何か生物の頭をぶちまけたようだ・・・・

取り合えず上に上がるかな

「よっと・・・なんだこれ」

目の前に広がる真っ白な世界・・・・方向感覚おかしくなるほど

白い

「貴様、生きていたのか・・・・」

「ぐぉぉぉおお、いてぇーーー！！」

「お前らしくじったな！！」

そして眼の前には天使がざっと１０体いる・・・１体は頭を抱え唸っている

「借りを返しに来てやったぞ！！」

そうは言った物の・・・どうやって倒そう？

「へ！威勢が良いね！！」

「次は殺す」

「先手必勝！！」

「「「「「「「な！？」」」」」」」

気を使いエネルギー弾を放つ・・・魔砲じゃないぞ！！

「お前人間かよ！？」

≪ズガガガッガガ≫

「まだまだー！！」

立ち込めた煙に向かって放つ放つ放つ放つ！！

≪ドガガガッガガッガ≫

「これで最後だーーー！！」

巨大な気の塊、元〇玉のそれに近いものを作る

「吹き飛べーーーー！！」

≪ドガーーーーン≫

「正義は勝つ！！・・・でもその内再生するだろうし」

何かいい方法は無いか、無いか？・・・・・無い事は無いが・・・

・

煙が晴れていく、そこには天使だったものの肉片があちらこちらにだが少しづつだが再生を始めている

「ああーーー!!使うか?嫌だがしかし!!」

そうだ!!謎の眼を使ってみよう!!覚えてて良かった!!

「【謎の眼】発動!!」

種族：天使×１０
ＨＰ：∞／∞
ＭＰ：９９９９／９９９９
ＡＴＫ：５０００
ＤＥＦ：４５００
ＳＰＤ：１００００

ふむ、ここら辺は確かにボスって感じだな・・・・

能力：不死身、神の加護、

見てみたものの意味無いじゃん・・・・

「うがあああ!!如何する!?」

相手側を見ると体まで再生している

「もう少し待って！！」

「「「「「「「ッ！？」」」」」」」

≪ドガーーーン≫

もう一撃エネルギー弾をぶつける・・・・何か体が動いたような気がしたけど、気のせいだよね？

そしてまた、肉片になった天使・・・・哀れすぎる

「あああああ！！創造が使えれば！こんなに苦労しないのに！！」

そう言い、肉片に眼を移す

「これもそれも全部お前らのせいだ！！」

そこから始まるのは、ただ動けないものに攻撃を仕掛ける・・・・いじめ、いや八つ当たり

「オラオラオラオラオラオラ！！」

≪ドガガガガガッガガガ≫

（（（（（（（（（（理不尽だーー！！））））））））））

「何が天使だ！！何が神だ！！俺は・・・・魔王様だぞ！！」

壊れかかっている、賢一

「フハハッハハ壊れろ！壊れえろ！！」

いや、壊れた賢一

八つ当たりと言うなの復讐（後書き）

ふむ、天使の扱いが酷いような・・・ま！いっか！

神ＶＳ魔神（前書き）

最初の方は一緒です！！

神ＶＳ魔神

落ち着け俺！ＣＯＯＫじゃない・・・・ＣＯＯＬになるんだ！！

「ふぅ、だが如何したものか・・・・」

使うか？いやいっその事神を脅しに・・・・嫌その前に勝てるか？

「うむむむ！！」

「貴様！」

「ん？」

声のする方向を向くと復活している天使

「あ、いたんだ」

「ッ！？貴様！」

「てかお前何もんだよ？俺らを一方的に殺すとか」

「魔王」

「は？魔王」

「いやいや！魔王ってＬｖじゃないだろ！？」

五月蝿いな～・・・もう一つは認めたくないんだよ

「兎も角、異端者よ続きを始めるぞ！」

天使の一人が迫ってくる

『待て！』

「「「「「「「！？」」」」」」」

天使達がその場にひざを付く

「は？」

『異端者よ、悪いな』

「いや別に良いけどよ・・・」

『お主、どうやってこの世界に入り込んだ?』

行き成り何いってんだ?このおっさん

「宇宙(そら)からだろ」

『それはあり得ん』

「なぜ?」

『この世界は我々が破壊するために結界が張られておるからな・・・』

「は?」

この世界は破壊されるために結界を張られている??

『そう、我らが決めた星にこの塔が現れる、それによって巨大な結界が出来る
そしてその世界は我らによって破壊される』

「テメェ、それでも神か!」

ふざけんな!!此処に住んでいる奴らは生きてるんだぞ!!

『ハハハハお主もやはり人の子か・・・・』

「何がおかしい！！」

『人と言うのは何故此処まで感情的な者、そして何より下種な生き物なんだと思ってね』

「確かにそうかも知れねぇが！俺は好きだぜ！そう言うの！なによりおめぇよりかマシだ！！」

『フハハハハハ、我が人間よりマシ？ふざけた事を言うな！雑魚が！！』

「雑魚？雑魚はどっちだろうね！！」

巨大なエネルギー弾を飛ばす！！

『そんな者、我には効かんわ！！』

だが当たる寸前で何事も無かったようにエネルギー弾が消える

「貴様！！神になんて事を！！」

天使達が一斉に襲い掛かる

「今俺は、かなり切れてんだテメェ等の相手なんかしてられるか」

≪ボギャーーン≫

一瞬で天使達を殺す・・・神だか何だか知らんが、俺の知り合いは殺させねぇ

「だから、貴様を殺してこの世界を守ってやる!!」

『フハハハハ、人間ごときが何を言う?』

「俺は人間じゃねーー!!魔王だ!!」

エネルギー弾を撃ちまくる・・・だがそれも途中で消えてしまう

「っち!如何なっていやがる」

『無駄だ!この空間は我の世界だ、貴様に勝ち目は無い!!』

「はっ!こんな白い世界が?趣味が悪いな!!」

『如何とでも言え!』

白い世界から腕が生えて俺を捕らえようとする

「く！何だこりゃ！！」

『貴様にも我の配下に成って貰う』

「配下！？何だそれ！」

『貴様が戦っていた天使と一緒になるのだよ』

「くっふざけんな！！」

徐々に捕まっていく体、

「あんな！白い格好して溜まるか！！」

『フフフ、次ぎ会うときは我の手駒だ！』

そして、白い世界に引きずり込まれる・・・・

「くそがーーー！！」

『また会おう、次は我の犬として』

体中に入り込んでくる光、体に刻まれていく神への忠誠
賢一の背中に翼が構成されていく

俺が光になる？天使になる？ふざけんな、俺は魔王だ！闇だ俺は
闇・・・・そう闇
闇なんだよ・・・・ククククク

「《闇の世界（ダークネスワールド）》」

光の世界が闇に染まっていく・・・・

『なんじゃ！？我の世界が！！』

≪バギ、ビギ、ミシ≫

「クククク、そう簡単にヤラレネェ」

≪ドガンッ≫

そして世界が黒く染まる・・・そして現れる、黒い翼を持った賢一

「ドウダ？これが俺の世界」

『お主の方が趣味が悪い』

「フフフフ、さぁ続きを始めヨウカ？」

闇が神を包み込もうとする

『こんな者ではやられん！』

「クハハハ！！」

『！？グ』

避けようとするが・・・腕を闇に奪われる

『貴様！我の腕を！！』

「ソウダ、憎めその闇は俺を強くスル！」

相手が憎しみや不の感情を持つと賢一の力が増幅する

「それより、腕治ってナイゼ？」

『な！？』

「クククク」

『何をした!?』

「俺はお前の腕を消滅させたんじゃない・・・・奪っタンダ!!」

『貴様!!お前のような危険分子は此処で破壊する!!』

「ククククできるか?お前ゴトキニ?」

神の光が増幅されていく・・・・・

「クカカカカ、やるねー♪そうじゃないと!!」

賢一の闇も増幅される

『滅びろ!!危険分子!!』

「ハハハハ!お前が消えろ!!」

ぶつかり合う、闇と光

≪ドドッドドドガガガガガッガ≫

そして、この世界の神は死んだ・・・・塔は消え、賢一も消えた

神ＶＳ魔神（後書き）

ふむ、書き直す完了！！どっちが悪役？って感じになったけどいいか？賢一悪役みたいなものだし

森（前書き）

賢一の行った世界とは！？

森

眼が覚める・・・如何やら山の中にいるようだ

「はぁ～此処何処だ・・・・」

体を動かそうとするが・・・・ありゃ？足が無い？

「うおおおお！？体が消えて言ってる！？」

そう、賢一の体は徐々に消えていっている・・・・どうなってんだ？

「取り合えず・・・調べてみますか」

ＨＰ：∞／∞
ＭＰ：∞／∞
ＡＴＫ：∞
ＤＥＦ：∞
ＳＰＤ：∞

おっ魔力が戻ってる

能力：創造（武器、防具、アイテム、食べ物、自分が考えた物を作り出す。
　能力を付け加える事も可能　生命を生み出せるようになった！）使用可能

魔力変化（魔力を自由自在に操り変化させる　魔力を吸収出来るようになった！）使用可能

次元移動（異世界へ飛ぶ事が出来る。扱える用になれば好きな所への
　移動が可能　時空を飛べるようになった）異世界へ飛べない

謎の眼（相手の能力、ステータスを見ることが出来、見たものすべてを理解できる。
　相手の技をコピー出来る）コピーは使えません！

自然の力（全ての属性を操れる）　使用不可

不老不死（年齢操作が可能２５才から発動できます）使用可能

固有結界（闇の世界≪ダークネスワールド≫、相手の闇を増幅させ自分の力にする
　闇を自由自在に操れる）使用可能

体の消去、及び新たな体を構成中：宿主を探さなければ記憶が消えます

ブッ記憶が消えるって!!ちょ!宿主って!!ここ誰もいねぇ!!

≪ガサガサ≫

「!?」

～～～??～～～

どうしよ、物凄い山奥まで来ちゃった

「グスッ・・・お父さん」

「うおおお!!・・・だ・・・消え・・・る!!」

「ビクっ!?」

森の奥から人の声が聞こえる

「誰かいるの?」

僕は徐に声のする方向へ行く・・・・そこには黒い翼が生え体が消えている男の人が居ました

～～～賢一～～～

「子供？」

音がする方向に顔を向ければ赤髪の子供がいた・・・・どっかで見たような～？

「大・・・丈夫ですか？」

少し怖がっているようだが心配してくれている子供・・・・得え子や（泣）

「少し、危ないかもな・・・・」

「！？死ぬの？」

「ん～死にはしないけど・・・・いや死ぬのか？」

記憶が消えるから・・・死ぬっちゃ死ぬのか?

「助ける方法ある?」

「ん?ははは、あるけど君には頼めないかな・・・・」

「そんなこと無い!!」

うぉ剥きになって言ってくる・・・もう一回言うけど得え子や(泣)

「じゃぁ君に資格があるか見ても良いかな?」

「うん!」

「じゃあ手を・・・」

子供の手を握り精神世界に入り込む子供の中は綺麗な色の世界、だが少し黒いいや濃い闇の世界もあるそれは子供を徐々に蝕んでいる

「ありがと」

「こんなので分かるの？天使さん？」

「天使！？」

「だって翼が生えてるし、それに優しいから！」

無邪気に微笑む子供・・・・得え子や（泣）

「フッ君には資格があるよ・・・でも君の体を宿主にさせてもらうよ？良いかい？」

「宿主？」

「君の中に住むって事・・・まぁ不憫は無いよ？」

「うん！いいよ！」

「ありがとう・・・・お礼に君の願いを一つだけ叶えてあげるまっ言っても出来る範囲だけどね」

この子の闇を抑え付けて上げようこの子の人生を守るため・・・・・・俺みたいにはさせん！！

「じゃあ！お父さんに会わせて！！」

「お父さん？」

「うん！」

ふむ・・・・死んだと言う事か？じゃあ魂を呼ぶ杖で

「お父さんの名前は？」

「ナギ・スプリングフィールド！」

「ＯＫ・・・ナギ？スプリングフィールド？・・・・・まっいっか！」

嬉しそうに俺の方を見て待っている・・・・

「死者の魂を我の呼ぶ答えに答えたまえ・・・・我が呼ぶのはナギ・スプリングフィールド！！」

≪シーーーン≫

ありゃ？・・・・え？

「君のお父さんって死んでるんだよね？」

「え・・・・うん！」

あれ～？おかしいな？故障か？いやいや先作ったばっかだぞ！？

「本当に死んでるの？」

「そう言ってたよ、ネカネお姉ちゃんが」

ふむ・・・ネカネ？あれ？何か頭に引っ掛かるな？

「お父さん生きてるんじゃないのか？」

「でも・・・！？天使さん！体が！！」

「あ？」

体のへそまで消えていっている

「あ～・・・悪いけど他の願い事無い？」

「じゃあ！僕の友達になって！」

「そんなので良いのか？」

「うん！」

ううう（泣）得え子や！得え子が居る！！

「俺は風間賢一、ケンって呼んでくれ」

「僕はネギ・スプリングフィールド！！」

「これで俺達は友達だ！」

「うん！よろしくねケンさん！」

「ケンでいいよ」

「！！うん！ケン」

俺は手をネギの頭に載せ・・・魂を移動させる

「悪いが、数年寝かしてもらう・・・・」

「うん！」

此れが俺とネギの出会い・・・あれ？ネギ？ネギ？グググ思いだせん！！後もう少しなのに！！

森（後書き）

と言う事で！ネギま！？にしました！ネギの中に入れました！！
何故って？面白そうだからさ！

修行の地（前書き）

気まぐれ最新

修行の地

あれから6年今日はネギの卒業式

「卒業証書授与――ネギ・スプリングフィールド君！」

「ハイ！」

ネギもいよいよ、修行の地へ！・・・・早かった！

『ネギも卒業か～おめでとう！』

「（うん！ありがとう、ケン！）」

『で？修行の場所は？』

「（もうすぐ「ネギー！」・・・アーニャとお姉ちゃんだ！）」

後ろから赤髪の少女と金髪の女性がやって来る。

「修行の地何処だったの？」

「私はロンドンで占い師よ」

「今、浮かびあがるとこ」

紙に修行場所が浮かび上がる

「お・・・・どう？」

「えーと・・・・日本で――――先生をやること」

「「ええーーーーっ！？」」

『プハハハハッ！』

先生だって！１０歳の少年が先生だって・・・・あれ？何か頭に引っかかる？

「こ、校長，先生，ってどーゆーことですか！？」

「ほう・・・・・，先生，か・・・・・」

「何かのマチガイではないのですか！？」

ここら辺は抗議なので省きます！そんで持って修行の地は日本で先生に決まりました

おお、懐かしの故郷・・・・

『しかし、ネギが先生ね～』

「（ハハハハハ）」

『で？何処で先生するんだ？』

「（ん？ちょっと待って・・・麻帆良学園だって）」

『ふ～ん、麻帆良ね～・・・・・ん？麻帆良？んん？』

「（如何したの？ケン？）」

『いや、たぶん気のせいだ・・・・』

んんん？もう少しで思い出せそうなんだが・・・・くーーーイライラする！！

・・・・・・・

「わーすごいや！」

『おー！！懐かしの日本ーーー！！』

「（そう言えば、ケンって日本人？なんだね）」

『何故、人と字に？をつける』

「（いやー人なのかな～って思って・・・・）」

『ひどい！？昔はあんなに優しかったのに（泣）』

「（あわわわ、ごめん～！！）」

俺が嘘泣きをするだけで慌てだすネギ・・・・フッ坊やだな・・・・

え？マジ泣きじゃないよ？

いや本当だって！

『そんじゃ、麻帆良にＧＯ－－－』

「はぁ～」

溜め息をする、ネギ・・・・

「ニッポンは人が多いなーー」

『いや、お前のところが田舎だっただけだろ・・・・』

「それに女の人が一杯だ」

『お？発情したか？え？え？（にやにや）』

「（そっそんな事ないよー！）」

慌てだすネギ、電車が大きく揺れる

≪むぎゅう～～≫

「あうう～」

女の人に挟まれるネギ・・・羨ましくないんだからな！！

「僕何処行くのかな？」

「ここから先は中学、高校だよ」

「いえ、その・・・」

行き成り話しかけられるので困るネギ、その時

「ハ・・・ハハ・・・ハックション！」

神風は吹いた！！

≪ぶわぁっ≫

「「「「きゃあ」」」」

『ナイスだネギ!!』

「な、何なの今の?」

「つむじ風?」

[次は麻帆良学園中央駅――]

「あ、着くよ」

そして目的地に着く、そこからは人の波、波、波!

「わわわ何コレ!?スゴイ人!コレが日本の学校かー」

『此処が特別なんだと思うぞ?俺は・・・それより時間は大丈夫なのか?』

「え?・・・わ、いけない!遅刻する!」

≪ダッ≫

麻帆良に向かって急いで走り出す

『ん?人間じゃない気配もするな・・・・ま、いっか』

「あ、あの人すごい早さだ・・・・」

『あ?』

ネギの見ている方向には、人間離れした速さで走るオレンジ色のツインテールの少女
どうやら占いの話をしているようだ・・・どっかで見たような?

「あ・・・・・よし!」

『如何した?ネギ』

「あのー・・・あなた失恋の相が出てますよ?」

「え”・・・・・」

『・・・・・・』

アホだ・・・アホの子がいる・・・・

『ネギ、悪いけど俺そこら辺ブラブラしてくる・・・・強く生きろ

！』

「（え？うん！分かった！・・・・・最後の如何いう意味？）」

『じゃあな』

俺はネギの陰を利用して誰もいないところで体を作り移動する

・・・向こうの方で「なんですってーー！」って聞こえたが気にしない

「久々の外だ・・・・結界がしてあるな？何故だ？」

ちなみに俺の外見はネギの容姿で髪が黒、眼が薄い赤だ！

「そこら辺ブラブラするかね～・・・・しかし此処・・・・デカイな」

そこ！迷子フラグ立ったて言わない！！

修行の地（後書き）

さぁ！麻帆良へ！！

麻帆良学園（前書き）

最新！

ふっこれも定めさ・・・・・・

「迷った・・・・・」

そこ！予想道理って言わない！！

「はぁ～・・・探検はやめてネギのところに戻るかな」

俺は闇に溶け込みネギの精神に戻る

「（よーーし頑張るぞーー！）」

『何をだ？』

「ひゃ！？」

「如何したんですか？ネギ君？」

行き成り話しかけた事でビックリするネギ、それを心配する女性、

多分この学校の教師だろう

「い、いえ！何でもありません！（行き成り話しかけないでよ！）」

『ハハ、悪い悪い』

「（で？如何だった？ここら辺は？）」

『迷ったから分からん・・・・』

「（ハハハハ・・・・・）」

何だよ！悪いかよ！迷って悪いかよ！

「ネギ君？入らないんですか？」

「あ、はい！」

『ネギ上に黒板消しが置いてあるぞ、気をつけろ』

「あ、（本当だ・・・ありがとう、ケン！）」

『どうやら、まだいろいろ仕掛けてるみたいだな』

「え？」

「如何しました？」

「いえ！（本当？）」

『ああ、此れから俺が言う行動をしろ良いな？』

「（うん、分かった）」

ネギに行動の支持を出す

『まず最初に開けた瞬間クラス名簿を落とせ』

「（分かった）」

≪ガラ、ヒュウ≫

「おっと名簿が・・・」

≪ボトン≫

黒板消しはネギの頭の上を通り過ぎる

『まず第一喚問クリア、次はその状態で紐が見えるだろ？それを引っ張れコレで終わりのはずだ』

「（分かった）・・・あれ？こんな所に紐が」

≪グイ、ガボン、パスパスパス≫

「」「「「「ちっ」」」」

紐が引っ張られた事によって仕掛けが作動する、それによって何人かの生徒が舌打ちする

「ハハハハ・・・・（乞ってるな～）」

『周りに罠の反応無し、ミッションクリア！進んで良いぞ』

「（うん）・・・失礼します」

「「「「「「子供ーーーー！？」」」」」」

「うひゃ！？」

『元気なクラスだなーー吸血鬼いるし・・・・あれ？麻帆良？ネギ？ネカネ？
アーニャ？明日菜？魔法？先生？吸血鬼？』

ネギ＋魔法＋吸血鬼＋先生＝？？？・・・・あれ？何かこんなマンガ遭ったような・・・・

「ネギ君、自己紹介を」

「あ、はい！」

『ムムムム・・・・あと少し！あと少しなのに！！』

「えっと・・・今日からこの学校のまほ・・・・・英語を教える事になりましたネギ・スプリングフィールドです、３学期の間でだけですけどよろしくお願いします！」

『あ！何か来る！何か来たぞ！もう少しだ！』

≪キャアアッかわいいい～～！！≫

『耳が！耳がーーー！？』

教室中に轟く叫び声、そこからはネギへの質問攻め・・・・鼓膜がーーーーー！！

『ネギ、俺疲れたからまた外ぶらぶらしてくる』

「（え！？ちょっと！置いてかないで！？）」

『元気でな～～』

「（ケンーーーーーー！！）」

・　・
・

・・・・・

黒髪赤眼のネギ＝黒ネギ＝俺なんでよろしく！

「ああ～今日はいい天気～・・・・・何か忘れてるような？」

あ！そうだそうだ、此処が何かのマンガの世界だった・・・・よね？

「む～思いだせん何だっけ・・・・・・！？妖怪！ぬらりひょん！？」

「む？」

やばっ・・・隠れろ！！

≪シャ≫

「気のせいかの～？」

ぱねぇーマジぱねぇー！ぬらりひょんだよ！マジもんだよ！

「ぬらりひょんでわない！・・・ん？気のせいか？」

此方ケン、今からミッションを開始する・・・・名づけて！ぬらりひょんを追え！！

≪カツカツカツカツカツ≫

暇だ・・・何も起こらない・・・お！ぬらりひょんが部屋に入ったぞ！

「学園長室？・・・・って事は、人間？嘘だっ！！」

あの頭で人間！？ありえん！・・・・あれ？ぬらりひょんの学園長？あれ？え？ネギま・・・え？

あれ？ネギま・・・うおおおおおおおおお！？思い出した！ネギまだ！ネギま！

「えっと言う事は・・・もうすぐ平凡が終る・・・・？」

うおおおおおお！？まさかだろ！？油断してた！何で早く思い出さない！！俺！

「やべぇよ・・・・orz」

逃げるか?いや!ネギを裏切るわけには!だが・・・

「はぁ～もう、どうにでもなれ・・・さてとそこら辺ブラブラするかね～」

学園の外に出て森の中に入る

「此処、本当に学校かよ・・・」

自然がいっぱい!、動物がいっぱい!、怪物がいっぱい!って怪物!?

「何だコレ!?」

「な!子供!?」

え?なんでこんな時間に鬼が!?あれ?夜じゃないの?

「悪いけど死んでもらうで～！」

「え？ちょっ！？」

鬼の一体が襲い掛かる・・・ネギまって分かった瞬間コレかよーーーー！？

「ちっ！悪いけどこっちも死ねないんでね！（いろんな意味で）」

「な！？」

≪ドガー！≫

一体を殴り粉々にする・・・フッ久々に魔法使ってやる

「封印1～5開放！闇よ、我の敵を飲み込め！」

≪ギュオーン≫

「なんや！？コレ！」

鬼達の足元に黒い渦ができ鬼を飲み込んで行く・・・え？どうせならネギまの魔法を使え？

フっ魔法の使い方忘れちまったのさ・・・すいません

「よし！終了！・・・ッ！誰か来るな、退散退散っと」

魔力を封印し、闇の中に潜る・・・もうねこうなったらネギをサポートしまくってやる！

「フフフフ、裏からの原作ブレイクだ・・・・」

麻帆良学園（後書き）

今の内に次の世界Ｆａｔｅのアンケート
？サーヴァントとして賢一を移動させる
？サーヴァントではなくマスター！！
？その両方でも無く唯邪魔をするだけ！

最初のアンケートはコレです！次の話で新たにアンケートするのでよろしくお願いします！

図書館島（前書き）

図書館島

原作を思い出したケンです！今はネギの最終課題が出ました！
・・・図書館島、最初の方だから危ない事とは起こらない筈・・・

「簡単だよね？最下位脱出なんて・・・・」

『それは如何だろう・・・』

「え？如何言う事？」

『それは、後のお楽しみ～』

なんせあのクラスにはバカレンジャーが入るからな・・・

「皆さん！次の期末テストは、もうすぐそこまで迫ってきてます！
最下位脱出の為にＨＲは勉強会にしたいと思います！！」

「ネギ先生、素晴らしい提案ですわ」

「はーい、提案提案！」

１７番椎名桜子が手を上げる・・・絶対何かたくらんでいるに

違いない！！

「お題は【英単語野球拳】がいーと思いまーす！」

≪おお～～！！≫

アホだ・・・・アホの子がいる・・・

「（むむ・・・・野球を取り入れた勉強方なのかな・・・・何となく面白そうだぞ！）」

ネギはネギで何か勘違いをしている・・・・・違うぞーネギー・・・・だが面白そうだ・・・・フフフフ

「じゃあそれで行きましょう」

≪いえーい！≫

採用される案・・・・フフフフフフフ、そこ！変態って言わない！！コレは男の性なのだよ！！

「ちょっとネギ！あんた野球拳って何か知ってんの！？」

「（そう言えば２－Ａの成績表があったっけそれも参照にしておこう）」

「ほらアスナこっちこっち」

「いやー！？アタシ脱がされる役に決まってるじゃん！！」

アスナが抗議をするがネギは考え事をしていて気付かない・・・・・ちょ！？ネギ！見えない！！

『ネギ！！後ろ向け！！』

「（う～～～ん・・・他の人はわりと難しいかも・・・特に５人）」

『おい！！ネギ！！・・・・ああ！！幻想卿が後ろに広がっていると言うのに！！』

「（い、意外とやばいかも・・・・・・）うぷ」

≪パサ≫

「え？」

ネギの頭に引っ掛かる・・・・ブッブラジャーーー！？

「な、何やってるんですかーーー！？」

『おおおお!!此処が幻想卿・・・・・・・』

後ろで繰り広げられる野球拳・・・・・ふっ俺の生涯に一片の悔い無し

「（こ・・・これは・・・・本気でマズいのかも・・・・・？）」

今頃気付くネギ・・・・はぁ～

「はっ！そうだ三日間だけとても頭がよくなる【禁断の魔法】があったんだ、それを使えば・・・・・」

『ネギくん？な、なにを考えている？』

「副作用で1ヶ月パーになるけど仕方ない!!ラス・テルマ・キスステル・・・・」

ネギが魔法を発動しようとする・・・・って!?アホか!

「コラーーーッ!!やめやめーーーーッ」

アスナが止める・・・・一瞬だがあっそれも面白そう・・・・と

思ったのは内緒

「でも・・・・このまま最下位（ビリ）だったら僕先生になれないし立派な魔法使い（マギステル・マギ）にも・・・・・・」

「・・・・ほらコレ見なさい」

「ボロボロのノート？」

アスナがノートを見せる、そこには点数が上がっているテストが書いてある・・・・その後注意を受けたネギは、トボトボと外を歩いている

『本当にやるのか？』

「うん、もう決めたから！！」

『止めた方がいいと思うぞ、俺は・・・・・・』

「大丈夫だって！たった三日間の間なんだから！」

ネギは自分に封印の魔法を掛ける・・・・ああ～やっちまった

『はぁ～俺今から昨日の続き行って来る・・・・』

「散歩？迷子に為らないようにね？」

『お前・・・っまぁいい、何か遭ったらこの紙を破れ』

「うん、分かった！」

『気を付けろよ・・・・』

一旦ネギから離れ先に図書館島に行く

「って場所が分からなかった！」

ッと言うわけで・・・またしても森の中をブラブラ

「森～森～・・・・ん？」

適当に歩いていたら、目の前を何かが横ぎる・・・忍者だ！楓だ！顔隠さないと！！

「取り合えずこの布で・・・・よし！」

布で眼を隠す・・・まっ髪の色も違うしばれないだろう！たぶん

「こんな所に子供が来たら危ないでござるよ？」

眼を隠した瞬間に、楓が戻ってきて話しかけてくる・・・・ギリギリセーフ？

「うお！？」

取り合えずビックリしてみたり・・・・・

「ん？お主何処かで・・・・？」

「え？何処で合った事ある？」

「いや、気のせいでござった」

セーフ！セーフ！頭の中で響き渡るセーフの渦

「ねぇ、姉ちゃんって忍者？」

「何のことやら？」

この人隠すきないよね・・・・・

「まぁ、いいや図書館島って何処にあるか分かる？迷子に為っちゃって・・・・」

「図書館島はこの道を真っ直ぐ行けば見えるはず」

「え！本当！」

おぅ、気付かずに目的地に行くなんて流石俺！！・・・・※たまたまです！

「よーし！行くぞーーー！！」

その場から人間離れした速さでその場から消える・・・・

「只者ではないでござるな・・・・」

そんな事を呟いてたりいなかったり

「付いたーーー！！」

あれから6時間、奇跡的に図書館島に到着するケンイチそう奇跡

的に・・・二度も言わんでいい！！

大切な事なので・・・・

「それでは、冒険にG「おー、これが図書館島・・・・」ジーザス・・・・・orz」

そしてやって来る、ネギ御一行・・・・フフフフ神よ何時か殺す・・・・て殺したか、てへ♪

≪ブササササッ≫

「フっ・・・久々に読者の攻撃を受けたぜ・・・」

血達磨になるケンイチ・・・挫けないもん！だって≪ドガーーーン≫

「なっなに！？」

「さぁ？中のものが崩れただけじゃないんですか？」

「そうかな～？」

そのまま気にせずに中に入っていくネギ達・・・・

約束された勝利の剣（エクスカリバー）は洒落にならんよマジで・・・・

「おっ俺も・・・い、行こう・・グフ」

ケンイチもその後を追いかける

「此処は・・・・・何だ」

目の前に広がる本！本！本！本！の山

「やっぱり、帰ろうかな・・・・・」

「うん！そうしよー・・・・・え？」

実は勉強が嫌いなケンイチ・・・・・

戻ろうとした時ケンイチの足元の床がなくなる・・・・

「ハハハハハ、皆さんご一緒に・・・・不幸だーーーーーーーーー！！」

そのまま闇の中へ・・・・

≪ドーーンッ≫

「グペッ!?」

頭から床に落ち言葉にならない痛みがケンイチを襲う

「ぐぅぅぅうっぉぉおおっ!?!?!?!!」

痛い!頭が割れる!てか何で頭がつぶれなかった!?・・・・・・仕様です・・・・そうっすか

「くぅ・・・・此処は・・・・何だ?」

あれ?デジャビュ?

「それよりまだ頭がいてぇ~・・・あそこで冷やそう・・・」

湖へ行って頭を冷やしにいく・・・・・此処図書館?いや島だから良いのか?

≪ドガーーンッ≫

「あああああ!?」

「ん?」

上から何かが降って来る・・・いや落ちてきている

「え?ちょっと!?」

ネギとアスナが抱き合って落ちてきてる

・・・ネギお前・・・とうとう、ってそんな事言ってる場合じゃない!!

「あ、コレもう駄目だ・・・・」

≪ザバーーン≫

「あり?助かった・・・?」

ネギは俺の真横に落ちる

「ハハハハ！ビックリ≪ガンッ≫したよ・・・・・・」

そして岩がケンイチの頭に当たる

「クリーンヒットってね・・・・ガクッ」

そのままケンイチはネギの精神世界に戻っていく・・・・災難だーーーーーー！！

図書館島（後書き）

【アンケートその2】　アンケートその1は今のところサーヴァントです

？サーヴァントだった場合、マスターは誰がいい？

？マスターだった場合、サーヴァントは誰がいい？

？マスターだった場合オリジナルのサーヴァントを出して欲しい！（アニメキャラでも可）

？そこは任せる・・・・

魔法の本

二日間気絶していたケンイチです！流石に精神がどうにか為りそうでした！！

『コレが二日酔いか～』

違います、唯の頭痛です・・・・・

「（あれ？ケン何時の間に帰ってたの？）」

『二日前～』

「（え！？何してたの！？）」

『え？そりゃ・・・・・寝てた』

「はぁ～」

え？何で溜め息？

「キャーーー！！」

『ん？何だ、何だ？』

「あの時のゴーレム!?」

「ネギ君助けてーー」

《フォフォフォ》

ゴーレムが佐々木まき絵を捕まえている・・・あれって学園町だよな?

「光の精霊11柱(ウンデキノ・スピーリトウス・ルーキス)!集い来たりて(コエウンテース)!敵を射て(サギテント・イニミクム)!!」

『おいネギ・・・お前魔法・・・・』

「魔法の射手(サギタ・マギカ)!!」

『使えないだろ・・・』

《フォ!?》

≪しーー・・・ん≫

場に沈黙が流れる・・・痛いぜネギ、今のお前物凄く痛いぜ!

「(そうだったーーー!?)」

「あっ！あれはメル何とかの魔法の書！？」

ゴーレムの肩に魔法の書がある・・・・・そんな所置いてんじゃねーよ

「まき絵さんクーフェさん楓さん！」

「「「OK！バカリーダー」」」

まずクーフェがゴーレムの動きを止めまき絵を掴んでいる手を離させる
そして空中にいるのを楓が救出、そして最後にまき絵が本を盗る

「皆逃げるわよー！」

『ネギ向こうに非常口があるぞ？』

「（本当！？）皆さん向こうに非常口がありますから早く！」

「流石！ネギ先生！」

非常口のところまで行くだがそこには問題を解いていかなければ行けない扉がある

「え！？嘘」

「ワタシ、コレわかるアルよ！」

「「「「え！？」」」」

「答えはｒｅｄアルね！」

≪ピンポーン≫

バカレンジャーの古が答えを当てる

「「「「「おおっ！？」」」」」

「もしかしてこの本のパワーで！？」

「持ってるだけで頭がよくなったアル！」

そして次々と問題を解きエレベーターまでたどり着く

「「「「「やったー！！」」」」」

［重量オーバーです」

「「「「「（いっいやぁあああ）」」」」」

「みんな！着てるもの全部脱ぐわよ！」

「ちょっえ！？アスナさん！？」

『うぉぉおおお！幻想が広がるーーーー！！』

荷物や服を全て捨てるが重量オーバーは変わらない

「僕が降ります！」

「ちょっとネギ！」

「アスナさん！？」

ネギが飛び出そうとするのを止め、手に持っていた本をゴーレムに投げる

・・・ついでに重力魔法１００倍だ！頭かち割れろ！

≪ドガンッ≫

《フゴッ》

［重量ＯＫ］

「やった！動いたー！！」

此処から先は原作道理に進み・・・・ネギは正式にA組の先生になったとさ、
変わったといえばぬらりひょんの頭が原作より酷かった・・・・ｗｗ

『あれ？俺の活躍最後の重力魔法だけ？』

え？俺主人公だよね？主人公だよねーーーーーー！？

魔法の本（後書き）

アンケーツ！

？ネギま！？に出すオリキャラなんですが・・・吸血鬼にしたのはいいのですが
どんな技を覚えているのか決めていません！だれか！我に知恵を！！（ちなみに女です）理由は何となく・・・・これ以上聞くな！

出来ればコレを答えて欲しい、作者

吸血鬼（前書き）

吸血鬼

前話で出番が最後だけだった賢一です・・・別に悲しくなんか無いんだからね！

『あれ？何も飛んでこない？』

「（どうしたのケン？）」

『いや，何でもないよ・・・・・』

あれ？何か同情の眼で見られてる気がする・・・・orz

「（一年間真面目に頑張ってマギステル・マギを目指すぞー！）」

『まぁ頑張れや・・・・』

「（ケンも手伝ってよ～）」

『いや、自分で頑張れじゃないと意味無いだろ・・・・』

「（それもそうだね・・・・）」

ふむ、頭が良いのか悪いのか分からんな～・・・・

『む？吸血鬼の気配が増えた？・・・・かなり強い・・・あれ？』

「（如何したのケン？）」

『いや、たぶん気のせいだ・・・・』

吸血鬼はどうやらそのまま学園長室に行ったようだ・・・・

「ネギ先生、明日から新しい副担任の先生が来ますんでよろしくお願いしますね？」

「え！？本当ですか！」

「はい」

「（どんな人だろう？もしかして魔法関係者かな？）」

しずな先生に新しく入る先生のことを言われ少しワクワクしながら教室に行くネギ

『あれ？副担任？吸血鬼が？あれ？そんなの原作に居たかな～？』

少しづつ原作から離れていく

「「「3年！A組！！」」」

≪ネギ先生ーっ！≫

「（バカどもが・・・・）」

「（アホばっかです・・・・）」

『元気が良いな～』

「アハハハハ（汗）」

教室に入るとクラスが湧き上がっる

『吸血鬼もとい、エヴァンジェリンが睨んでるね～・・・・ああー！思い出した』

「（ん？何を？）」

『いや何でも無いよ？（汗）』

あぶね～、もうすぐでしたね・・・・バトルも・・・・如何しよう？暴れようかな？

「ネギ先生今日は身体測定ですよ3－Aのみんなもすぐ準備してくださいね」

「あ！そうでした！でっでは皆さん身体測定ですので・・・・・」

『今すぐ脱いでくださいとか言うなよ？・・・いや俺は別にいいんだが？』

「・・・・出て行くのですぐ準備してください！」

『・・・あ～やっぱミスったかも・・・・』

「（危なかった～）」

ネギのちょっとした所を原作ブレイク・・・・やっぱり此処は原作道理にすればよかった！！

「（あれ？なんだろうこの感じ？）」

『あ！そうだ、ネギ！ちょっとだけ体貸し手くれないか？』

「（え？別に良いけど？何するの？）」

『ちょっとした遊びだよ遊び！』

ネギと俺の体の主導権が切り替わる

「おー久々の体～」

『遊びって何する気？』

「へへ～それは見てのお楽しみ～」

そう言って俺は３－Ａの扉と窓に創造で作った強力なボンドを付ける

『何してるの？ケン？（汗）』

「へへーコレでこの部屋からは１０分程出られない！」

このボンドは１０分間だけ塗った所をどんな事があろうとも剥がれなくするのだ！

『そんな事して何か意味があるの？』

「ふふふっすぐ分かるさ・・・・ほら」

「先生ーっ大変やーっまき絵が・・・・まき絵がーーー！」

血相を変えて廊下を走ってくる和泉亜子・・・・廊下を走っちゃ行かんぞー・・なんてな

「フフフそして・・・・」

「「「「「「何！ま・・・」」」」」」

≪ガッ≫

「「「「「「開かない！？」」」」」」

≪ガッガッ≫

「フフフ計画どうり！」

『ケン地味すぎるよ・・・・』

アスナ達が扉を開けようとするが俺が付けたボンドのせいで出られない・・・・ははははは

「はっ！先生そんな事より、まき絵が！」

「あっそうでしたね・・・・ちっ良いとこなのに（ボソ）」

『ケン！』

「（はいはい・・・・ちぇ）」

ネギとケンの体の主導権が戻る・・・・ネギよ、コレで終りではないんだよ？

『フフフフフフ』

「早く行きましょうか！（まだ何か悪巧みがあるの？）」

「はい！」

～～～～１０分後～～～～

「まき絵さん如何したんですか？」

「桜通りで寝てるところ見つかったらしいのよ・・・・」

「（桜通りで・・・・？）」

≪ガラ≫

「ネギ～～！」

まき絵の容体を聞いていたネギの所に鬼の面相でやってくるアスナ

「あれ？アスナさん？」

「あれ？アスナさん？・・・・じゃなーーーい！」

≪ガン≫

「へブ！？」

『計画通り！！（ニヤリ）』

「（ケンーーー！）」

全ては俺の手の内にある・・・・なんてね

「（ともかく、微かに感じるこの魔力は・・・・・・？もしかして）」

『魔法使いだな・・・・』

「（でも・・・・なぜ？）」

『あれ～？ネギ～、ネギ君～ネギ・スプリングフィールド～？』

「（とりあえず今日、桜通りに言ってみよう・・・・）」

『ごめん！俺が悪かった、だから無視しないでくれ～（泣）』

今日の教訓、調子に乗っちゃあ行けない！

「（次からはしないでよ・・・・）」

『善処する・・・・』

「はぁ～」

若いのに溜め息なんかしてると老けるぞ・・・・

「アスナさん今日僕帰りが遅くなるので晩御飯いりませんから」

「え？・・・・うん・・・分かった」

アスナにそう言って桜通りで待ち癖をするネギ

『今からするのか～？』

「うん、用心に越した事は無いからね・・・・」

『まぁ～別に良いけどさ』

とりあえず今日は乱入は止めとこ～

「っきた！」

『ファイト！ネギ！』

「茶化さないでよ！」

『すまそん・・・・』

怒られちった・・・御免なさい、誤りますんでその刃物をどうか、どうか！降ろしくださいい！

「まてーー！僕の生徒に何をするんですかーっ」

『そりゃあ吸血だろ？』

「（ケンはだまってて！）ラス・テルマ・スキル・・・・【風の精霊１１人縛鎖になりて敵を捕まえろ魔法の射手・戒めの風矢！！】」

「もう気付いたか【氷楯】・・・・・・」

≪バキキキキンッ≫

ネギの魔法は謎の魔法使いによってすべて防がれる

「僕の呪文を全部跳ね返した!?」

「凄まじい魔力だな・・・・・・」

「き、君はウチのクラスの・・・・・エ・・・・エヴァンジェリンさん!?」

「１０歳にしてこの力、流石に奴の息子だけはある」

謎の魔法使いの正体はエヴァンジェリンであった・・・・・俺は知っていましたよ?

「僕と同じ魔法使いのくせに何故こんなことを!?」

「この世には・・・・いい魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよネギ先生

【氷結武装解除】!!」

魔法薬を触媒として氷の魔法を放つ

≪パキンッ≫

「うあっ」

「やはり抵抗したか・・・・」

「あっネギ！」

そこに丁度アスナたちがやって来る

「あんたそれ・・・・！？」

「ネギ君が吸血鬼やったんか～～～！？」

「ち、違います誤解です！・・・・あ、待て！！」

その場から逃げようとするエヴァンジェリン・・・・・

「アスナさん！このかさん！僕は事件の犯人を追うのでのどかさんを！」

「え、ちょっとネギ！！」

「それでは！」

のどかをアスナ達に渡しその場から離れる

『ネギ～別に今追いかけなくてもいいんじゃね？』

「今の内に捕まえとかなきゃ！まだ何かするかもしれないし・・・・それに」

『へいへい～ま、今回は力貸さないから』

「うん分かった」

話をしているうちにエヴァンジェリンに追いつく、だが空を飛んで逃げる

「あ！」

ネギもその後を追う

「先生、奴の事が知りたいんだろ？奴の話を聞きたければ私を捕まえてみろ！」

そこから始まるの魔法使い同士の戦闘

『何でコレだけやって、誰も気付かないんだろう・・・・・』

「追い詰めた！これで終わりです！【風花　武装解除】」

エヴァンジェリンを追い詰め屋根裏に降りる

「・・・・これで勝ったつもりなのか？」

『ネギ～上になんかいるぞ～』

「えっ！？新手の敵！？」

呪文を唱えようとするが途中で乱入者に邪魔をされる

「えっあれ！？君はウチのクラスの・・・・・・」

そこには３－Ａの茶々丸がいる

「茶々丸さんが貴方のパートナー！？」

「パートナーのいないお前では私には勝てんぞ？」

「な・・・パートナーなんかいなくたって！」

もう一度呪文を唱えようとするがやはり茶々丸に邪魔される・・・

・いいな～ロボット俺も作ろうかな～

「うぐぐぐ」

≪ギリギリギリ・・・≫

茶々丸に捕まるネギ・・・・あれ？血飲まれるんだっけ？それはまずいな・・・・

「・・・悪いが死ぬまで吸わせてもらう・・・・・」

「うわぁ～～～～ん誰か助けて～～～～っ」

『ネギ！変われ！此処で俺の存在がばれるのはまずい！』

「（わ、分かった！）」

裏と表（ケンとネギ）が変わる・・・・ここでばれたら、面白くないだろーー！！

「悪いが吸わせる訳にはいかないよ・・・・」

「な！？」

茶々丸の拘束を解きエヴァの手を握る

「飛んでけ・・・・・」

「マスター！」

そのまま投げ飛ばそうとした時に・・・・

「ウチの居候に何してんのよーーーっ」

≪ガンッ≫

アスナが登場・・・・ちっ後ちょっとだたのに・・・・ネギに体を返す

「よくも私の顔を足蹴りしてくれたな神楽坂明日菜・・・・覚えておけよ～～」

『分かります、逃げる時の決め台詞ですね・・・・』

そのまま屋根から飛び降りる、そしてネギは・・・・

「うわーーんアスナさーーーん」

アスナに抱きつく・・・・ちょっお前変われ！

これで長い一日は終った・・・・確か明日はネギが登校拒否するんだったよな・・・・（ニヤリ）

そして此処には悪巧みをする自称魔王

吸血鬼（後書き）

アンケートはネギまが終るまで投票ＯＫです！

賢一の先生としての一日・・・・フフフフ

「（明日学校行きたくないよ～・・・・）」

『何故だ？』

「（きっとエヴァンジェリンさんに・・・・！）」

相当怖かったのか明日学校に行くのを嫌がるネギ・・・・フフフフ

『俺が変わりに行ってやろうか？』

「（本当！？）」

『ああ（ニヤリ）』

こうして俺のネギの代わりに先生をすることになった・・・・

「（じゃあ頼んだよ！）」

『おう！』

表と裏が変わる・・・・今は5時誰も起きていない時間に学校に行く

『こんな時間に行くの?』

「感づかれると厄介だろ?」

『ああ、なるほど・・・・・』

「それよりネギ簡単な小テストを頭の中で考えてくれないか?」

『え、良いけど』

「出来たら呼んでくれ」

学校に付き中に入る・・・誰もいない学校というのは面白いな

『出来たよ・・・』

「ん?よし!じゃあ創造開始!」

クラス分の小テストが俺の手に出てくる

『ケンそんな事も出来るんだ・・・・』

「まあな・・・よしこれで準備はＯＫ」

『そういえば今日新しい副担任の先生が来るって行ってたよ?』

「ああ～行ってたな今の時間は・・・・」

時計を見るがまだ６時

「う～ん時間飛ばすか?」

『そんなこと出来るの!?』

「ハハハハハ」

笑ってごまかし、自分の手にあのタイムマシンを出す

「7時半くらいでいいかなポッチとな・・・・」

≪ブン≫

「よし、ワープ完了」

『ケンって何でも出来るんだね・・・・』

「ネギ先生学園町がお呼びですよ?副担任の紹介を」

「あっ分かりました・・・・めんどくせ（ボソッ）」

そのまま学園長室に行く・・・・吸血鬼がね～誰だろ？

「か・・・ネギ・スプリングフィールド入ります・・・」

「ネギ君此方が今日から君の副担任をするアクール・ＤＡ・マクダウェル君だ」

「よろしく、ネギ君（ニコッ）」

紹介されたほうを見ると金髪の顔が整っているいわゆる美形が・・・

「はい！よろしくお願いします・・・・・・イケメンなんか死ねばいいのに（ボソ）」

『この人もしかしてエヴァンジェリンさんの・・・・（ガクブル）』

「それでは案内しますね！（考えすぎだ・・・・）」

アクールを３－Ａまで案内する

「アクールさんはエヴァンジェリンさんの・・・・」

「うん、兄だよ」

「（よかったなネギ当たってて・・・・）」

『よくないよ～～（泣）』

そんな事をしている間に３－Ａの教室に付く

「それではここで待っていてください・・・・」

『エヴァンジェリンさんが・・・・！嫌だーー！！』

「（お前が会う訳じゃないんだからいいだろ！少し静かにしろ）」

教室に入るがエヴァンジェリンの姿はない

「あっ！ネギ何処、行ってたのよ！」

「アハハハ、少し散歩を・・・・」

『よかった～居ないよ～でも茶々丸さんがーー！』

「皆さんＳＨＲを始めるので席についてください

・・・・その前に今日から新しい副担任の先生が来ます！」

≪おおおーー！！≫

「なっ！？私の情報にないだと！？」

「アクールさん入ってきてください」

扉を開け、クラスの中に入ってくる

「「「「かっかっこいいーーーー！！」」」」

やっぱイケメン死ねばいいのに・・・ネギと同じようにアクールに飛びかう質問
そしてＳＨＲが終り授業が始まる・・・・

「今日は小テストをしたいと思います・・・・」

「「「「「えーーー！！」」」」」

「それでは問題を配るので後ろに回してください（無視）」

適当にやりゃいいだろ・・・・

「ネギ先生？私は何をすれば」

「あ、そこで座っておけばいいんじゃナインスカ？」

「あ、はぁ・・・・（このガキ！）」

≪（今日のネギ先生おかしい・・・・）≫

クラスの心が一つに成った・・・・・

「それでは始め！」

「今日のネギ先生可笑しくない？（ボソ）」

「私も思ったそれ・・・・（ボソ）」

《ボソボソボソボソ》

「静かにしてくださいね～」

≪ダン≫

チョークを物凄い速さで後ろの壁にぶつけ粉々にする・・・・

《ハイ！（ネギ先生に何が～～）》

『ケンやり過ぎだよ～～』

「（くぅ～最高）」

３０分が経過する

「それでは回答を集めてください」

『ケンも余計な事は・・・・』

「（分かってるってｗ！）」

「ハイこれ先生」

「ありがとうございます・・・・」

≪パラパラパラパラ≫

解答用紙を一つ一つパラパラめくり見終わる

「フッｗ」

≪（本当に昨日何があったのー！？）≫

『分かってないじゃないかーー！！もぅ変わって！』

「（えー良い所なのに・・・・『早く！』へいへい）」

裏と表がまた切り替わる・・・・っち此れから面白くなるというのに

「ネギ先生?最後に笑うのはどうかと?」

「は、はい!そうですよね!皆さんすみません!フっw（ケン～！！）」

ネギが誤る・・・だが最後は俺が体を動かし笑う

「今日の授業はこれで終りたいと思います!それでは!フッw」

最後の最後まで俺は面白く生きるぜ・・・・

「あ、ちょっ!ネギ!待ちなさい!」

賢一の先生としての一日・・・・フフフフ（後書き）

感想・評価まってまーす！

決闘（前書き）

賢一が始めてこの世界での戦闘をします！
顔は隠してあります！

決闘

どうも今日は決闘です・・・・え?ああ・・・あの後ネギは忍者に励まされたりしてエヴァンジェリンに決闘を申し込みました・・・・え?元気が無い?ははは・・・あの後少しやりすぎてね・・・ネギが切れたんですよ・・・ええ盛大にあの時は生涯初めての恐怖を味わいました、優しい奴ほど怒らせると怖いってのは本当ですね・・・

「(ケン?如何したの?)」

『ビクッ)何でもありません!』

「(?そう)」

しかも本人は切れた事を覚えてないし・・・散々ですよ・・・それとあのアクールって言うエヴァの兄貴がタカミチと戦いました結果は圧勝でした

『アークルは俺が相手してるから頑張ってエヴァを倒しな・・・・』

「(アークルさんの相手してくれるの!?)」

『出血大サービスだ・・・・（反省も込めて）』

「（問題が一つ消えたぞーでも後は茶々丸さんを如何するか・・・・）」

『アスナに頼めば？』

「（うんうんそれは出来ないよこれは僕の問題だから・・・・）」

『そうか・・・・？』

ネギは一人で戦うようだ・・・・大丈夫か？

まぁいいや久々の戦闘頑張るぞー（これが本音だったり）

「それじゃ行こう！」

『うーい』

「兄貴！やっぱりアスナの姉さんに助けてもらいましょうよ！」

「カモくんそれは出来ないよ・・・・」

「ケンの兄貴も聞いてんでしょ！？何かいってやってくださいよ！」

カモがネギにアスナに助けてもらうのを進めている・・・

・カモは俺の事を知っています、カモを助けた時ネギが口を滑らしたそれだけ・・・・

「こうなったらネギは聞かないからな～・・・無理だ」

「そんな～」

俺は闇で体を作り外に出てくる・・・勿論顔は黒い布で隠している

「・・・まっお前が勝手に呼べばいいじゃないか？（ボソ）」

「！分かりやしたぜケンの兄貴（ボソ）」

「如何したの二人とも？」

「何でも無いぜ！兄貴」

そう言ってカモはアスナのところに行く・・・・

「如何したんだろ？カモくん？」

「さぁ～？下着泥でもしに行くんじゃないのか？」

遠くからそんな言い訳無いっすよ！ケンの兄貴～って聞こえたが気にしない

「エヴァンジェリンさん！決闘をしに来ました！」

「フフフッよく来たな坊や・・・・パートナーは如何した？」

ネギの目の前に現れる三人の影・・・・・茶々丸、エヴァ、アクールだ

「君一人で、俺たち3人を相手にするつもりか？」

「いえ、貴方の相手は・・・・」

「俺がする！」

≪ドガッ≫

アクールに近づき蹴りを入れながら返事をする

「ぐっ！？貴様は・・・・！？」

「どうも、ネギの親友・・・・ペルだ、よろしく！」

「くっ！」

そのまま、アクールに攻撃をしてネギ達から距離をとる

「なんだ!?あいつは!アクールの奴が簡単に攻撃を許すとは!」

「これで2対1です!」

～～～賢一～～～～

「貴様何者だ?」

「だから、ネギの親友だって～♪」

≪ドガーーン≫

どうやらネギ達の戦いが始まったようだ・・・・

「ふっまぁいい俺の本気を見せてやるぜ・・・・」

アクールから物凄い魔力が吹き上がる・・・・エヴァの１００倍

くらいないか？

「お前馬鹿みたいな魔力だなー！？」

「喰らえ！斬空剣！」

て！？神鳴流！？だっけ？

「しかも気まで強いし・・・・それに何よりなんだその殺気・・・・」

「この殺気に当てられて立ってるような奴に言われたくない・・・・」

「へ・・・どうせチートだよ・・・バグキャラだよ・・・どうせどうせ」

「もえるてんくう！！」

更に無詠唱・・・こいつもバグキャラだな・・・・あ！そうだ久々にあれ使おう！

「フフフっ行くぞ！」

「ッ！？」

身構える相手・・・・俺は創造で久々にあれを取り出す

「チートベルト！変身！！」

「な！？変わった！」

相手は俺の姿を見て驚く・・・だがまだまだ此れからだぜ！

「能力発動！！【お前は魔法は使えない】！」

「？何を言っている？」

「更に！【お前は気も使えない】」

「だから何がしたいんだ！！凍る世界！！」

魔法を使おうとするが

≪プスッ≫

「な！？ならば咸卦法」

「無駄無駄、お前は魔法も気も使えないんだぜ？」

「くっならば身体能力だけで！」

相手は一般人では見えない速さで俺に近づくがまぁたかが一般人だ

≪パシッ≫

「な！？」

「残念無念また来週～」

≪ドガーン≫

相手を殴り吹き飛ばす・・・・どうやら向こうは終ったようなので

「そんじゃラスト・・・・【時は止まる】」

回りの時間が止まる・・・

「いやー久々にこれ使ったな～・・・・よっと」

≪ドンッ≫

取り合えず時間が止まっているアクールの腹に一撃を与えとく
動き出した瞬間気絶・・・・かわいそうに

「じゃあ～ネギのところに行くかな～」

変身を解き気絶をしている、アクールを支えてネギの所に向かう・
・・・

～～～～ネギ～～～～

勝った?やったー!!途中でアスナさんが来てくれたおかげで何
とか勝った!

「エヘヘ、さぁこれでほんとに僕の勝ちですよ!もうこれで悪い事
もやめて授業にしっかり出てもらいますからね!」

「坊や?忘れてるんじゃないか?アクールの存在を、
奴は私より強いそれに呪いなんて物は奴には無いからな・・・・」

「え!?嘘!エヴァちゃんより!?」

エヴァの言葉にビックリするアスナ・・・・若干2名?(匹)は驚いていないが

「あ、それなら大丈夫ですよ・・・・」

「ん?どう言う事だ?」

「だって相手がけ・・・・ペルだから」

「兄貴、ペルって誰ッスカ?(ボソ)」

「ケンイチだよ(ボソ)」

「おーい!ネギ~」

そして空を飛んで此方にやってくるケン・・・・その肩にはアクールが背を割れている

「な!?あのバグキャラがやられただと!?」

「ネギ、あの人誰?」

「え~~と僕の友達です!」

それにしても・・・ケン傷一つ付いてないや・・・・

～～～～ケン～～～～

「ネギ勝てたか？」

「うん！」

「そうか～じゃあこいつ返すわな・・・じゃ！そ言う事で」

「あ！待て貴様！」

俺はその場から消えネギの精神世界に戻る

『いやー久々に戦ったー』

戦い？いえ一方的なリンチです！

『次は修学旅行か～もうそろそろ俺も原作介入しようかな～』

「（原作介入？）」

『こっちの話～』

決闘（後書き）

Ｆａｔｅでの賢一の立ち位置はサーヴァントに決めました！
マスターは誰がいいかアンケートを取りたいと思います！
感想に書き込んでください！自分で考えたマスターでもいいですよ？

修学旅行（前書き）

投票・・・・

修学旅行

最強オリ主ぽっい立場の人間?を倒したケンイチです
いよいよ修学旅行です!京都です!・・・・だったのですが

「(悪いけどケンは此処で留守番しててね)」

『は!?ちょっ!?何で!』

「(自分の心に聴けば分かると思うよ?)」

『は!?そんな・・・あ~ありますね・・・・たくさん』

「(そう言う事で留守番よろしくね?)」

『うい・・・・』

ええ悪い事しましたよ?だが・・・・反省してます・・・・後悔もしてます・・・・

「(御見上げ買ってきてあげるから)」

『八橋・・・・』

「(分かったよ)」

『それと西賀茂チーズとチョコレート八ツ橋、マールブランシュのフレッシュプリン
クリーム五色豆、祇園小石のさくら飴、京金平糖、千寿せんべいさらに・・・・・・』

「（反省してる？）」

『すいません！八橋だけでいいです！！』

御見上げまで無しになる所だったぜ・・・・明日か修学旅行・・・・
・行きたかったぜ（涙）

「（じゃあお休み）」

『お休み・・・・』

ああ～原作介入は無しかな？・・・・修学旅行ーーーー！！

『行きテェーーーーー！！』

「（うるさい）」

『すまそん・・・・』

ふ、別に悲しくなんか・・・・悔しくなんか・・・・無い訳無いだろう!!ボケ!

『寝れませんでした・・・・・悔しさで・・・・・』

「（どうしたの？ケン）」

『とりあえず、ネギこれ・・・・・』

「（この前のカード？）」

『ああ、破いたら俺が転移するから・・・・別に向こうに付いた瞬間でも』

「（うん、それはしない）」

ああ、皆さん聞いてくれ・・・マンガではあんなにお人好しなのに俺に対してはこんなに厳しいんだ・・・・ああ

「（僕がいない間好き勝手しないでよ？）」

『学校での自由も奪うのか!?』

「（それじゃ行って来るね？）」

『行ってらっしゃい・・・・・』

俺はネギの精神世界から出て体を作りネギを見送る
ネギは駅まで走っていく

「フフフフ・・・・悪いが好き勝手やらせてもらう」

ハハハハハ!!俺の時代がやってきた!!

「ん?紙?ネギからか・・・・」

[ケンヘ・・・何か変な事が起こりでもしたら学園長から僕のところに
電話する様にしているのでくれぐれも変な事はしないように・・・・
もし、したら・・・フフフフ」

「さって、のんびりし様か・・・・」

逃げじゃないよ?最初からその気だったんだよ?本当だよ?

「暇だ~・・・・」

部屋の中をゴロゴロ、窓の外を見ると茶々丸がいる

「そういや、エヴァは出れないんだっけ・・・・」

ぼーと茶々丸を見ていると一つの案が浮かぶ・・・・ロボット作ろうかな・・・・

「うん、そうしよう・・・・きっとそれが良い！」

これが、あんな恐ろしいものを作ってしまうとは・・・・・

修学旅行（後書き）

アンケート結果・・・

凛、イリヤ同票・・・・どうしろと？

と、取り合えず第３アンケート！！

サーヴァントのクラスは？

投票まってまーす～（－０－）ノシ

そうだ！京都へ行こう！いやハワイへ行こう（前書き）

どうも、やる気が出ない作者です・・・気分転換にもう1個小説を書こうかな？なんて思ってます・・・・まぁ冗談？

そうだ！京都へ行こう！いやハワイへ行こう

「恐ろしいものを作ってしまった・・・・」

そんな一言から始まった今日この頃、俺の目の前には巨大なロボがある

「・・・・これは封印しとこう、創っておいてなんだが・・・・・」

俺が作った見た目はウイングガンダムゼロどんなにやばいかと言うと
俺があの時の自爆スイッチを押した時くらいやばい・・・・・

「このガンダムには夢が詰まってるんだ！！」

言わないといけない気がしました・・・・・

「え？このガンダムの性能？フフフ・・・・・」

これが、俺のガンダムだ！！

～～～ステータス～～～

名前：まだ決めてません

装備：ファンネル（改）、マシン・キャノン（改）、バスター・ライフル（改）、ビーム・サーベル（改）
ビームシールド（改）

特殊能力：物理攻撃、遠距離攻撃、魔法を無効・・・ＮＴ－Ｄシステム、人形モード、
武装解除（通常状態の1千万倍の速さ、手からビームソードが出る）
そして忘れてはいけないのが・・・自爆スイッチ！！（あの時の千倍の威力）ガクガクブルブ

説明：海、宇宙、大地、何処でも起動可能、まだまだ、隠された能力がいっぱいある
（ただ賢一が忘れただけ）

開発者：風間賢一

開発者から：パーツ一つ一つに能力を付けて創りました（これが原因）物凄くやばい
物が出来ましたが・・・反省はしてないし後悔もしていない！！

とっまぁ・・・こんな感じです・・・自爆スイッチはやりすぎたかも

「取り合えず・・・これは封印だ！名前は・・・・次ぎ出てきた時でいいや」

まぁもう出ないと思うがな・・・・・フッ我ナがら・・・・なんだ！？
この禍々しいオーラは・・・・何！？このガンダムからだと～！？

「とッ取り合えず！闇の中に収納っと・・・・よし！暇だ・・・・
ｏｒｚ」

ああ～まだ後二日あるよ・・・・俺も京都行きて～

「待てよ・・・・別に京都以外なら行ってもいいんじゃ・・・・・」

フフフフ我ながら頭がいい・・・・だが何処へ行こう・・・・

「奈良？何で隣なんだよ！！、北海道・・・・・いや！どうせだし海外だ！！」

海外の何処に行くか・・・・・ハワイだな・・・・・うん・・・え？適当じゃないよ？

「フフフ待っていろ！俺の素晴らしき！毎日！」

え？どうやって行くかって？泳いでだよ・・・・スリリングがあって良いだろう！

「別に荷物も要らんしこのままＧＯ－－－！！」

そして賢一の一人だけの修学旅行が開始された・・・・・

～～～とある海～～～

「うおおおおおお！！」

≪バシャバシャバシャッ≫

物凄い速さで海を進む物体・・・・賢一

「おおおおおおおおおお！！」

≪バシャバシャバシャ≫

どうも皆さん賢一です先振りですね・・・・・え？本当に泳いでるんですか？
ハイ、モチロンデス・・・・ですが今、命の危機です

「来るなーーーーー！？」

≪バシャバシャバシャッ≫

鮫に追いかけられています・・・・え？倒せばいいじゃん？ええ
最初は倒しましたよ・・・・
ですがね、その気絶した鮫の血によって更に他の鮫がそしてまた倒したら他の鮫がそれの
繰り返しをしていたら、最初の鮫が眼が覚めて鮫の数が増えるそれの∞ループです

「何かの策略かーーー！？」

って最初は叫びました・・・・え？殺せ？僕に地球の海を真っ赤

に染めろと？
ね？それは駄目でしょ？だから

「うおおおおお！！」

≪バシャバシャバシャバシャ≫

逃げてます、ハワイへ・・・・・

「待ってろよーーーー！！ワイハーーー！！」

やはり何処へ行っても災難は続く

「ハワイどっちだっけーーーー！？」

そうだ！京都へ行こう！いやハワイへ行こう（後書き）

アンケート回答どんどん募集中！！感想と評価もね！

到着～～って!?こっちかよ!～～（前書き）

気分転換をやめッと言う事でー最新～

到着～～って!?こっちかよ!～～

「やっと、やっと!島に!」

どうも、鮫と水中鬼ごっこをしていた賢一です・・・・・あの後無事、
鮫を撒いて迷子に為りつつも、無事ハワイを見つけました!

「やっと俺の素晴らしき日がやってくる・・・・・うおおおおお!!」

そう呟いた後、物凄い速さで島まで行く

～～～～～アクール～～～～～

「ちょっとちょっと!こんなのありなのーーー!?」

ネギ達が多量の鬼達に囲まれている

「ネギ！」

「アクールさん！？」

「此処は任して先に行け！」

俺は鬼達の中央に凍る世界を放つ

≪ドガーーーン≫

「速く行け！」

「はい！ありがとうございます！」

「アクール先生ありがとうございます！」

お礼を言って離れていくネギ達

「さぁて、鬼よ俺を楽しましてくれよ？」

鬼を一体一体粉々に砕いていく・・・決してあのペルとか言う奴に負けた腹いせではない

「ふはははは！これが俺の力だ【もえるてんくう】」

≪ボワアアア≫

鬼の半分ほどを消滅させるが、何処からともなくやって来る鬼

「へっ良いぜいくらでも掛かってきな！」

～～～～ネギ～～～～

アクールさんが僕達の道を開けてくれたおかげで間に合いそうだ

・・・思っていたとき一人の少女が前から歩いてくる

「月詠！？」

「フフフ・・・刹那センパイ楽しみましょう」

「刹那さん知り合いですか！？」

「ええ、私と同じ神鳴流の使い手です」

「え！？」

驚いていると後ろから更に男の子がやって来る

「姉ちゃん先行くなんて酷いで～」

「小太郎くん！？」

「よ！ネギ今度は負けんで」

更に鬼が４体ほど後ろからやって来る

「く、これは不味いですね・・・・」

「ネギ！アンタは先に行きなさい！此処は私達に任せて！」

「でも！」

その時一枚の紙がポケットから落ちる・・・・・ケンがくれた紙

「そうだ！ケンを呼べば！」

「ナイスアイデアだぜ兄貴！」

「ケン?誰ですか?」

「さぁ?」

「アスナさん、ほらこの前アクールさんを背負って来た」

「ああ!あの黒布!」

どうやら、アスナにとってケンは目を隠した黒い人と言う印象だったようだ

「取り合えず、これで!」

「ネギ!何ブツブツ言っとるんや!」

小太郎が攻撃を仕掛けていく

「うわ!?」

≪ビリ≫

小太郎によって紙が破かれる・・・・・

「ちょっと！ネギ破けちゃったわよ！？」

「大丈夫ですあれは破いて発動しますから・・・」

「え？そうなの・・・」

そして破けた紙の下に巨大な魔方陣が現れる

「なんや！？」

「なんや、やばいきーするわー・・・・」

～～～～ケンイチ～～～～

さぁ！皆さん！賢一の素晴らしき日々が始まります！！ハワイへの第一歩が！

「付いたーーーー・・・・・え？」

此れからの日々をワクワクしながらハワイへと足を着ける、

その瞬間に転移魔法が発動する

「えええええええええええええええ！！？？」

ケンイチ、ハワイ滞在期間1秒・・・・・海での鬼ごっこ1日

「マンマミーア・・・・」

そして転移が開始される・・・・

「オレ、サンジョウ・・・・」

目の前に広がる鬼と犬耳少年、二刀の刀を持った少女

「ケン！この人達を足止めして！このかさんが危ないんだよ！」

「ヤァ、ネギクン・・・・オマエノチハナニイロダイ？」

「あれ？ケン？（汗）」

ケンは一本の刀を取り出すそれは禍々しいオーラーを放っている

「ケン？何でその刀を僕に向けてるの？（汗）」

「サァ？ナンデダロウネ？・・・・と、まぁ冗談はおいといて」

刀を元に戻す

「ネギこいつ等を足止めすればいいんだな？」

「う、うん」

「本当は手助けはしないんだけど・・・・マァイイヤ！！」

やはり、怒りは消えてない賢一

「ほら行け、ネギオレの気が変わらない内に（主に狙う相手の・・・・そう“狙う相手”の）」

「うん！！（なんだろう寒気が・・・・）アスナさん達此処はケンに任せて先を急ぎましょう！」

「でも、本当に大丈夫なんですか？」

「ああ？何だお前？喧嘩売ってんの？今なら買うよ？俺ええ！！」

軽い殺気が刹那に浴びせられる

「・・・・・此処は任しても大丈夫そうですね」
「ケン?だっけ、ありがとう!此処よろしくね!」

そう言ってネギ達は先へ進む

「待てや!ネギ!」
「逃がしませんえ~センパイ」
「おっと・・・残念ながら俺を倒さない限り、ネギを追いかけることは出来ません~」
「「くっ(いつのまに!)」」

小太郎と月詠の目の前に一瞬で近づく・・・取り合えず鬼殺しとこう・・・

「よっと!」
≪ドギャーーーン≫
「「な!?」」
「さって2対1ですね・・・(ニヤニヤ)」

「「ッ！」」

気を引き締める二人・・・・・フフフ遊んでやるぜ・・・・・俺様無双！の始まりだぜ！

「喰らえや兄ちゃん！」

小太郎が黒い犬を出す・・・・あ、良いねそれ！それ貰おう！

「こうかな？っよ！！」

「な！？俺の技！？」

まったく同じ技を繰り出し相殺する・・・案外使えるな～【謎の眼】

「ククク、行くぜ・・・闇よ全てを包み込む闇黒の剣を今此処に！来い！」

俺の手に現れる魔剣・・・・久々にだした

「避けろよ・・・・・！」

「やばい！」

「あら～」

≪ドガーーン≫

一振りで地面をえぐる・・・・二人は何とか避けたようだが・・・・うん魔剣は辞めとこう

「危ないな・・・・・じゃあ唯の魔法で」

右手を上に挙げ魔力を溜めていく・・・・

「さぁ生き延びてみろ！・・・・・ッ！？新手か！」

打ち放とうとしたら、後ろに3つ程気配が現れる・・・・・

「何だ・・・ネギの生徒達か・・・」

「如何やら私達の手は要らなかったようだね・・・・」

「向こうではアクールさんが無双してたアル」

「掛け付け損でござるか？」

う～～ん・・・この人たちに任せるか・・・・俺？俺はこの後でてれくるあの鬼神をｗフフフ

「じゃあこいつらの相手任せるわ・・・・」

「「「「「「は？」」」」」」

うお！？敵味方無しにはもりやがった・・・・・・

「よろしく！」

「あ、ちょ待つアル！」

「行ってしまったね・・・・・」

「所であの子は誰でござったか？」

「「さぁ～」」

到着～～って!?こっちかよ!～～（後書き）

感想評価待ってマ～ス（＝Ｑ＝）／

鬼神・・・・エヴァの出番とってごめんなさい（前書き）

最新遅れました～ｍ（――）ｍ

鬼神・・・・エヴァの出番とってごめんなさい

小太郎たちの相手を楓達に任せ、俺はあの巨大な鬼の元に向かっている・・・・これは、あれの出番なのでは!?

「いや、駄目だあれは・・・・・あれは危険すぎる・・・・」

≪グオオオオォォォォ≫

鬼神の轟きが森全体に響き渡る

「うるせ～・・・・これはもう、あれだな俺の怒りを思いっきりぶつけろって事だよな?」

ネギ達の姿が見える・・・・・

「おーい、ネギ～」

「ケン!あの鬼如何にかできる!?」

「ん～余裕余裕、それより大丈夫か?それ」

「余裕って（汗）掠っただけだから大丈夫」

ネギはそう言うが、石化は徐々に体を蝕んでいる・・・・

「倒すのは良いけど・・・・このかだっけ？そいつを助けないとな～」

「それは、私に任せてください！」

刹那が叫ぶ、それと同時に背中から翼が生える・・・

「これが私の正体です・・・奴らと同じ・・・・・化け物」

「ふぅ～ん」

「ひゃッ！？」

アスナが刹那の翼を触り捲くる・・

「あの・・・アスナさん？」

「こんなの背中に生えてくなんてカッコイイじゃん・・・・・それに、このかがこれ位でアンタの事を嫌いに為ったりすると思う？」

「あ・・・・アスナさん・・・・」

「ほら早く行って！私達が援護するから！」

「は、はい！」

アスナの励ましにより元気を戸惑いをなくす刹那、そしてその翼を使いこのかを助けるために飛揚する

「あれ？ネギ、俺達空気？」

「あははは・・・・っ！？」

白髪の少年が刹那に攻撃を放とうとするが間一髪にネギが気付き阻止する

「取り合えずネギの石化を治すか・・・・」

≪ドンッ≫

「僕の事を無視しないでくれるかい？」

「たくよ～邪魔だッ」

「ッ！？」

≪ボギャ≫

一瞬で懐に近づき一発殴る・・・・てか、こいつあの鬼より強くね？

「まぁ、いいか」

［・・・ぼうや聞こえるか？坊や］

念話でエヴァが話しかけてくる・・・・あ～・・・・

「この声は！？」

［後一分半持ち堪えられたら私が全て「ごめん・・・必要ないわ」・・・な！？貴様は！］

エヴァの念話を途中で終わらせる・・・まだ何か言っていたが無視する

「如何やら、このかを助けたな・・・・・」

≪ドギャッ≫

≪ボーーーンッ≫

余所見をしていた俺の心臓に石で出来た杭を刺す・・・・更に鬼のビーム?
見たいな物での追い討ち、そして最後に五月蝿い雄たけび・・・・・・

「ケン!?・・・・」

「フフフフフフフ」

「ケンの兄貴が切れた・・・・(ガクガクブルブル)」

此処で俺のこの3日間で起きた災難な事故がよみがえる・・・・・・

「鮫に追いかけられて24時間海を鬼ごっこ・・・・やっと付いたと思ったら1秒でネギによって此処に召喚そして最後に不意打ちでビーム?杭?雄叫び?」

禍々しいオーラが賢一の周りから出る・・・・

「ケ、ケン?お、落ち着いて・・・・」

「落ち着け？オチツケ？フフフフハハハハハッ」

「やべぇ完璧に逝っちまった・・・・（泣）」

「ちょ、ネギ！どうなってんの！？」

「地獄です・・・・（ガクガクブルブル）」

≪グオオオオオオオオオオオオ≫

此処でまたもや鬼神が雄叫びを上げながらケンに攻撃を仕掛ける

「来い、灰色の翼（グリエール）」

≪ゴゴゴゴ≫

闇の中から出てくる、ケンが創ったガンダム・・・・グリエール

「さぁ、俺の怒りを知れ・・・・・デッドストリーム」

二丁の銃を鬼神に向けエネルギーを溜める・・・

「なんなんや！？あいつ！」

「バースト・・・・」

≪ドギャギャギャギャガガガッ≫

鬼を灰も残らない程粉々にする・・・・ビームはそれだけでは止まらず山をも巻き込む

「嘘・・・・」

「（ガクガクブルブル）・・・・・」

「さぁ次は貴様だ・・・・白髪のガキ・・・・・」

右手を上に抱える魔力、気、闇、すべての属性が混ざり合っていく

「消えてなくなれ・・・・・」

≪ドギャーーーン≫

湖の水が全て上に打ち上げられ、湖に水が無くなる

「危ないねでも最後にネギ・スプリングフィールドの命は貰うよ」

「ッ！？（間に合わない！）」

「坊やには手を出させないよ・・・」

≪ゴバッドギャギャっ≫

エヴァがネギの影から出て白髪の少年に攻撃を喰らわせるが・・・

・水になって消える

「偽者か・・・・ッ!?」

体に痛みが生じる・・・自分に外傷は無いあるとすれば・・・ネギ!

≪ドサ≫

「ネギ!?」

「兄貴!?」

「たくよ～全然大丈夫じゃね～・・・・折角お仕置きしようとオモッテタノニ」

「（ビクッ）」

体を震えさせるネギ・・・そんなに辛いのか?

「ケンの兄貴！冗談を言ってる場合じゃ・・・・」

「冗談だと？」

「イエ、ナンデモナイデス」

「ちょっ！早くネギを助けないと！エヴァちゃん！」

「い、いや私は治癒魔法は得意じゃないんだ！・・・・・・不死身だし」

戦いを終えて・・・他のメンバーも集まる・・・

「お前はペル！」

「あ～？・・・なんだ雑魚かよ・・・・」

「殺す」

アクールが攻撃を仕掛けてくる・・・・

「はい、今は君と遊んでいる時間は無いからね～」

≪ガスッ≫

「ッグ!?・・・・・」

≪ドサ≫

背後に回り気絶させる・・・・やっぱ雑魚じゃん・・え?何その眼・・・

「・・・・は!?そんな事よりネギ!」

「駄目だもう体の半分が石化しちまってる!」

「くっ!」

「そうだ!このか姉さんと仮契約をすれば!」

「でも・・・このかは・・・」

「ええよ、うちが出来るのはそのくらいやし・・・それにネギ君を助けたいしな!」

ネギとこのかがキスをする・・・・・あれ?別に俺助けられたんだけど・・・・ま、いっか

「このか・・・さん・・・?よかった・・・・無事だったんだですね・・・」

「お目覚めのところ悪いけどネギ?覚悟は出来てるか?」

「ひっ!?（涙）」

「ちょっとアンタ、ネギはまだ怪我してるのよ!」

「あ～それなら大丈夫」

≪パチンッ≫

ネギに回復魔法を掛け全快にする・・・・さ～ておしおきだべ～

「あんた、もしかして石化治せたんじゃ!?」

「ハハハハ、ナンノコトヤラ」

「兄貴今の内に・・・・（ボソ）」

「そうだね・・・（ボソ）」

ネギ達がその場から逃げようとする

「ネギ～?逃がすとでも、思ったか?」

「!?ひー!」

「ゴラッ待てや糞ガキ！！」

ネギ達を追いかけるケン・・・・フフフフ、恐怖を教えてやる

「うわーーーーーーーん！？」

「今思ったんだけどさ・・・ケンって人何者なんだろうね」

「そうやね、目元に布巻っとて顔も分からんしな・・・」

「だが、バグキャラは確かだ・・・・」

アスナたちが何かを話している・・・・バグキャラ？いえ魔王です！魔神ではないぞ！

鬼神・・・・エヴァの出番とってごめんなさい（後書き）

後一回出来るか出来ないか・・・・・・

俺は自由になる！（前書き）

よ～し頑張るぞー！！・・・・寝よ・・・・

俺は自由になる！

あの後、ネギ父の基地？見たいな所に行き手掛かりを見つけました・・・写真を撮り無事修学旅行はおしまい・・・・・俺なんか心霊写真みたいになってるんですけど！？

『駄目だ・・・飽きた・・・・・』

「（如何したの？ケン？）」

『ネギ・・・俺は姿を消す・・・・そのうち合うだろう・・・・去らば！』

「（え！？ちょっケン！？・・・・・もういない・・・・・）」

ネギの精神世界から出て、取り合えずあの学園長室に行く・・・・フフフフフ

≪コンコン≫

「誰じゃ？入って良いぞ？」

「どうも～♪」

「む？君は・・・・」

「風間賢一と言います♪」

「ああ、確かアクールを倒した・・・・（超バグキャラ・・・）」

「折り入って頼みがあるんですが・・・・・」

「何じゃ？」

俺は条件を付けある事を頼んだ・・・・フフフ待っていろネギ！

～～～ネギ～～～

あれから3日間・・・賢一の所在が全く分からなくなった・・・・

一体何をしてるんだろう？

「皆さんおはようございます！」

≪おはようございます～♪≫

「それではＳＨＲを始めたいと思います」

≪ガラガラ≫

HRを始めようとした時アクールさんが不機嫌そうに入ってくる・・・如何したんだろ?

「ネギ先生、今日から急遽新しく生徒が入る事になりました・・・・ッチ」

「は、はぁ～・・・・」

物凄く不機嫌に言うアクール・・・本当に何がって!?転入生!?

「そうなんですか!?僕何も聞いてませんよ!?」

「それが、今日決まったばかりなもので・・・」

「そうなんですか」

「先生～?如何したんですか?」

「あ、すいません!」

生徒から、質問をされ取り合えず転入生について話す・・・一部そんあ情報は・・・
とか言ってたけど気にしない

「それでは、転入生の人、入ってきてください」

≪ガラガラ≫

「「「「「「「え！？」」」」」」」

「け、ケン！？」

「どうも、新しく転入する事になった、風間賢一です夜露死苦♪」

扉から現れたのは賢一だった・・・なんでさ

～～～賢一～～～

入った瞬間ビックリする人が１０名ほど不機嫌な奴が１人・・・・

フフフフ計画通り！

「どうも、新しく転入する事になった、風間賢一です夜露死苦♪」

静まりかえる教室・・・・あれ？

「その格好は・・・・？」

ああ！そう言う事ね・・・・え？俺の格好？まず眼に黒い布を巻いてるだろ
そして黒いローブで・・・・全身真っ黒だね・・・・怪しいね

「眼が見えないのと趣味です！」

取り合えず適当に言っておく

「いいんですか？」

「学園長には許可を貰ってます！」

「それに男ですよね？」

「学園長の陰謀です！」

「なるほど・・・・」

良いんだそれで・・・・

「いろいろと慣れてないですけどよろしくお願いします！」

「って！？ケンなんで此処に入るの！？」

「はて？何処かでお会いしましたか？・・・・・フフフ」

そう言って俺は一番後ろのエヴァの横に座る・・・・

「よろしくお願いします？エヴァンジェリンさんｗ」

「何のつもりだ？」

「え？暇つぶし？」

「・・・・・・」

何かそれだけで黙ってくれた・・・・え？何で・・・・考えてるうちにＳＨＲが終わりネギが俺のところまで来て屋上まで引きずって行く他にも付いてきている・・・・痛い

「ケン！如何言う事！？何で生徒になってるのさ！」

「え～だって暇なんだもん～」

「ネギ?前から聞こうと思ってたんだけど・・・この人って?」

「ケンは僕の「ネギ~?それは言っちゃ駄目だぞ~?」・・・・親友です」

「何かとてつもなく気になるんだけど・・・・」

俺がネギの言葉を遮る・・・・余計にややこしくなった・・・

「ま、困った事があったら俺に相談しな!断ってやるから!」

「それ相談する意味ないじゃん!」

「ナイス突っ込みb」

「ケン、あんまり目立つような事はしないでよ!」

「え?・・・・う、うん、わ、分かった」

「もう何かしたの?」

「まぁ・・・でも!全然大した事ない!」

「そう?それなら良いけど」

ちょっとぬらりひょんの頭に落書きしただけだから・・・うん

俺は自由になる！（後書き）

次の投票で最終アンケートをしたいと思いますです

弟子入り！考え直せ！ネギ！（前書き）

書こうと思ったらネタが無かった・・・orz

弟子入り！考え直せ！ネギ！

「ネギ～本気か～」

「うん、もう決めた事だから！」

「考え直せよ～」

「大丈夫だよ」

如何やらエヴァに弟子入りを頼みに行くようで・・・・はぁ～絶対毒されるよ・・・

「はぁ～知らないからな・・・・」

エヴァの家へ行ってしまうネギ・・・・俺は忠告はしたからな！！

「取り合えず・・・・学園ライフ楽しみますか・・・・フフフフフ」

森の奥から叫び声が聞こえる

「元気だな～・・・」

そういや、弟子入り試験やるんだっけ？・・・・・ま、いいか

「関係無い事は無いが・・・・別に良いよね？魔王なんだから」

魔王の方が関係ない気がする・・・・・

「賢一！！この前の借りを返しに来たぞ！！」

「借りってどの借り～？多すぎて困っちゃう～♪」

「ぐっ！」

突然目の前に現れ借りを返すとか言ってくるアクール・・・・

「全部だ！！」

≪ブン≫

「うお！？」

実は、学校生活でアクールを弄ってます・・・だって面白いん

だもん！

「当たれーー！！」

≪ドガーーン≫

「おまっ！？環境破壊！自重しろ！！」

アクールの攻撃を避け続ける、森が燃えたり、凍ったり、消滅したり大変だ・・・

「死ねー！！」

≪ドガーンッ≫

「うぉ！？」

やべぇ・・・少し弄りすぎたか？

「消えろおおおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

≪ブオン≫

「いい加減に！！しろ！！」

≪グシャッ≫

麻帆良が消滅するほどの魔力を放とうとしたので本気で殴った・・・そう本気で

「ふー・・・・疲れた」

≪ぐ～～≫

「腹減った・・・・・」

後ろで肉片になっているアクールをほっといて店へ行く・・・・・これはあいつが悪い

「平凡～♪平凡～♪何処へ～♪・・・・・泣きたい・・・」

適当な店で飯を食いながら歌ったり落ち込んだりする賢一傍から見れば怪しい人だ

「ケンー！！」

「んぁ？」

「僕に武術を教えて！」

ネギが俺の所にやってきて武術を教えろと言ってくる・・・・エヴァは？

「無理」

「なんで！？」

「だって、俺武術習ってないし・・・素人だし」

「うそでしょ！？」

アスナが何時の間にかネギの横にいて驚く・・・本当に何時の間に居たんだ？

「どうしよう・・・・」

「ま、頑張れや！」

「ちょっと！待ちなさいよ」

「何だよ～」

「あんた、ネギの親友なんでしょ！？何か考えなさいよ」

「え～～」

アスナがお前も考えろと言ってくる・・・・・・

「武術で強い奴ね～・・・クーフェ？」

「くーふぇさんですか？」

「そんなに強いの？」

「じゃあ明日の朝行って見ろよ・・・どれくらい強いか分かるぜ？」

それだけ言って俺はそこを後にする

「俺も誰かに弟子入りしようかな～」

割りと本気で考えてたり、忍術とか忍術とか忍術とか

「いいよね～分身」

いいよね～忍び

「そうでござるか？」

「うぉ！？」

突然現れる楓・・・・ビックリした～・・・もうそろそろこの体も限界かな？

「修行してみるでござるか？」

「良いんでござるか！？」

は！？つい、言葉が移ってしまった・・・・

「良いでござるよ♪」

「よろしくお願いします！楓師匠！」

「うむ・・・いくでござるよ」

「え？今からですか？」

「そうでござるよ？」

ふっ・・・・・やっぱ辞めようかな？

明後日の方向を見ながらそんな事を考える

≪ガシッ≫

「さぁ、修業開始」

「ＮＯーーーーーーーーーーーーーー！？」

風間賢一・・・・忍者始めました・・・・明日で良いじゃないか

弟子入り！考え直せ！ネギ！（後書き）

最終アンケート！！

？アヴェンジャー（他でもＯＫ）でマスターが凛

？　　、、　　でマスターがイリヤ

？アンリ・マユ（聖杯）からオギャーｗ

？ふ、真っ白だぜ・・・真っ白に燃え尽きたぜ（ネタに走る）

忍術？俺は規格外だぜ？一瞬だぜ？（前書き）

忍術？俺は規格外だぜ？一瞬だぜ？

「「「「「「オラオラオラオラオラ！！」」」」」」

「むっ！？」

どうも賢一です・・・今修行中です・・・今は模擬戦をしています

「「「「「「「行くぞ！オラーー！！」」」」」」」

≪ドガーン≫

「グっ！」

分身？一瞬で覚えましたよ？そんなの・・・で今は楓師匠をフルボコにしてます

元々こっちの方が強いですしね・・・泣けるで！！

「「「「「「「やっぱこれ、使い勝手が良いですね」」」」」」」

「やはり強いでござるな・・・賢一殿は」

「「「「「「「やだな～楓師匠～師匠も強くなってるよ～」」」」」」」

「そうでござるか？」

「そうですよ」

分身を消して、会話を普通にする・・・分身して喋ると気持ち悪いんだもん！

「もうそろそろ学校の時間でござるな・・・・・」

「急ぎましょう！楓師匠！」

服を一瞬で着替える俺

「何時の間に・・・・」

「細かい事は気にしない気にしないｗ」

「そうでござるな」

何時の間にか着替える楓師匠・・・・あんたも何時の間に着替えたんだよ・・・

「それじゃ行くでござるよ」

「ＯＫ！」

学園へ急ぐ・・・・それにしてもこの瞬動とか言うの使い勝手が良いな～

「楓師匠、少しネギの様子を見てきます」

「うむ、わかった」

途中から違う道を行きネギのところまで向かう

「よ、ネギ修行の方は如何だ？」

「ケン！うん順調に行ってるよ」

確かにネギの隙がなくなっている・・・て言ってもほんの僅かだけだけどな

「頑張れよ試験」

「うん！」

言うだけ言って俺はその場を後にし学園へ向かう・・・・さて今日は
ぬらりひょんの頭にどんな落書きをしようか

「ターゲット発見、任務開始」

ぬらりひょんの後頭部に気配を殺し近づき一瞬で書く！

≪シャッ≫

「また詰まらぬ物を書いてしまった」

学園長の後頭部には「自分は妖怪です」っと書かれてある

「フォォ！？またやられた！？」

「ふっ、ミッション完了・・・」

マジックを回しながらその場から立ち去る・・・見たか、俺のマジック捌き・・・カッコよくね？
今の俺、落書きってとこ無くせばカッコよくね？

「皆さんおはようございます！」

≪おはようございま～す♪ネギ先生≫

で、授業がやって来る、落書きコレが俺の日課だ時々失敗するが、
それもまた良い
確か明日だっけ?試験

「ｚｚｚ.・・・。ｚｚｚ.・・・。」

そんな事を考えながら寝る俺・・・勉強嫌いなんだもん!

「であるから・・・・ケン!起きてください!」

「ふぁ?・・・・・もう昼飯?・・・・・そうか・・・」

そのまま教室を出ようとする

「違います!授業中ですよ!」

「ははははｗ・・・お休み・・・・・ｚｚｚ.・・・。」

「ケンーーー!?」

学校生活ではコレがほとんど・・・まれに起きて授業を受けるけど
何故か全教師が体調を心配してくる・・・約一名以外は

「ネギ先生、賢一君はこう起こすんですよ」

≪ガスッ≫

「いてっ!?」

アクールが投げたチョークが俺の額にぶつかり砕ける・・・・・
この野郎

「何しやがる!!金髪!」

「きんっ!?・・・君が授業中寝るのがいけないんでしょ?」

「「ガルルルル」」

睨みあう俺たち、おろおろするネギ、笑っているエヴァや呆れている人

「こうなったら、ボコボコにしてやる!明日決闘だ!金髪!」

「ふ、望むところだ返り討ちにしてやる」

≪おおおお≫

こうして、俺とアクールの決闘が決まった・・・・・1週間動けなくしてやる

「授業が・・・・orz」

ネギがorz状態になっているが気にしない・・・てか気にしたら負けだ

忍術？俺は規格外だぜ？一瞬だぜ？（後書き）

感想・評価待ってまーーーす！

弟子入り試験（前書き）

最新じゃーーーー！！

弟子入り試験

今日は因縁の戦い？の終止符をつける日だ・・・・

「ふ、賢一よく逃げずに来れたな」

「一度も買ったこと無いくせに何言ってやがる」

「俺の本気を見せてやるよ・・・・」

睨みあう俺たち・・・轟く声援・・・声援！？

「何故、一般人がいるんだ・・・・」

「知らん・・・」

教室で決闘っと言っておいて誰も来ないはずが無い・・・

「ふ、本気では無理そうだな・・・」

「肉対戦か？勝ったな・・・・」

「減らず口を！！」

≪ブオンッ≫

今まで以上の速さで近づいてきて俺の腹にけりを入れてくる

「当たるかよ！！オラ！！」

≪ガシッ≫

蹴りを掴み投げ飛ばそうとするが

「ふんっ！」

体を捻り俺の拘束から逃れる

「潰れろ！！」

「テメェが潰れろ！！」

≪ドガンッ≫

拳と拳がぶつかり合い衝撃波が飛び散る・・・・・

「オラオラオラオラオラオラ！！」

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄！！」

≪ガガガガガガガガッ≫

ぶつかり合う拳、周りの人には何が起きているか分からないほどの速さ

「人・・・・？」

「アスナさん・・・人じゃないですよｗ」

「そうだぜ！姉さん！」

遠くからネギ達の話し声が聞こえる・・・・いい度胸じゃねぇかネギ

「オラ！！」

≪ドンッ≫

殴ると同時にアクールから距離をとる

「さぁ、「「「「「楽しくなってきたね」」」」」

分身をして一斉にアクールを攻撃する・・・・

「そんなもの「「「「「俺も出来るわ！！」」」」」

ぶつかり合う分身・・・やべぇ、闇で作ってる体が限界だ・・・

・早く俺の体完成しないかな～

「貴様！手加減するのもいい加減にしろーー！！」

≪ドガーーン≫

吹き飛ばされる俺・・・本気出したくても出せないんだッつうの

そこから、俺の記憶はない・・・・

「いてぇ～夜か・・・・？」

「む、起きたでござるか？」

「楓師匠？あれ？戦いは？」

「賢殿の負けでござる」

うぉお・・・・負けちまった・・・・うん本当に早く体できないかな～もう限界ですよ

「はぁ～・・・て!?そういや今日ネギの試験の日だ!!」

俺は飛び上がり・・・ネギの試験場所へ急ぐ

「あ、待つでござるよ!」

楓師匠も後を追いかけてくる・・・・体が消滅したらネギの中でもう一度、魔力溜めるかな

「そうしよ・・・・」

「何がでござるか?」

「こっちの話・・・・」

試験場所に行くとボロボロのネギ・・・・あ～あまた無茶して

「よ～遅かったな？敗者君？」

「ああ？！」

アクールが俺のところまでやって来て挑発してくる

「ネギー！！こうなったら本気で行けーー！！」

「え？本気って・・・・・（もう、本気なんだけどーー！？）」

「俺を使えって言ってんだよ！！」

「え？良いの？」

「ああ許可する！」

俺は闇に溶けネギの影に入る・・・・・フフフ驚け、そして怯えろ！！

「ちょ、賢一が消えたわよ！？」

「術式発動・・・・精神融合」

ネギの髪の色が闇に染まる・・・・眼の色も赤に変わる

「『さぁ此処からが本気です茶々丸さん』」

先程とは比べ物にならない存在感を出すネギ

「えっ!?ネギ!?」

「やばくないか?エヴァ?」

「そ、そうだな」

「『痛みは一瞬です・・・・』」

≪ガンッ≫

ネギが消え後に音が鳴り茶々丸の背後に現れるそれと同時に茶々丸が倒れる

「『これで弟子入りＯＫですよね?』」

「ま・・・まぁいいだろう」

「『って事で再戦じゃー!!この金髪!!』」

「え?ネギ、如何したの?」

「『オラ行くぞーー！！』」

「くっ！？貴様、賢一か！」

≪え！？≫

俺はそのままアクールに魔力を全快にして殴りかかる

「『あ、魔力が・・・・・ＮＯ－－－－－－－－－－－－』」

ネギの髪の色目の色が元に戻る

「エヴァさん、明日からよろしくお願いしますよ？」

「ああ、それにお前に聞きたい事がいっぱい出来た」

≪うんうん≫

「え？」

『くそーーー！！こうなったら俺の体を完成させてやる！！』

待ってろーーーーーーーーーーーー！！俺を待っている何処かの誰かーーーーー！！

弟子入り試験（後書き）

感想・評価・お気に入り登録・アンケート回答待ってまーーーーーース！！

悪魔～～はぁ？俺は魔王だ！～～（前書き）

本当にすいません！！

悪魔～～はぁ？俺は魔王だ！～～

『ふふふついに・・・・ついに体が出来たぞ！！長かったネギの精神世界に入って早６年
本当に長かった』

後は俺の魂と体を接続する・・・・ハイスペックになった俺のシンボディーを見よ！！

『さて・・・接続が完了するまで・・・・後１５時間・・・・長っ！？』

「ケン・・・・？」

『いや何でもない・・・・しょうがない今日も模造品ボディーで行くか』

残りの余っている魔力で体を作る・・・・後は町を一つ消すほどの魔力しか残ってないな

「まっいいや・・・先行ってるから」

「うん、分かった」

学校へ行く・・・・だがまだ6時・・・・・そこら辺ぶらぶらするか・・・

「・・・・・・」

段々と麻帆良を歩いていく

「・・・・・・」

6時なので誰も外にいない唯独り俺だけが居る

「・・・・orz」

暇だーーー!!こんな事ならもう少しネギと喋るんだった!!

「辛いけどこれ現実なのよね・・・・orz」

はい、唯言って見ただけです!!

「悪魔・・・魔王・・・王国・・・国家・・・家庭・・・庭師・・・

師匠」

一人で漢字しりとり!!・・・・悲しい

「皆さん?知ってますか?俺、友達ネギしかいないんですよ」

今明かされる衝撃の事実!!・・・・え?知ってた?俺気付かなかったｏｒｚ

「何だかんだあって学校の時間ですね」

「何を言ってる賢殿?」

「いえ・・・気にしないでください」

今は楓師匠と話してます!!・・・・友達?何それ?おいしいの?（泣）

「てかネギがフラフラ何だが・・・」

「そうでござるな・・・・如何やら貧血のようでござるな?」

貧血?ああ!そういやエヴァに修行して貰う代償に血を飲ませる

んだったけ？

「まぁ・・・いいや、お休みｚｚｚ．．．。」

今日の学校生活は寝ただけで終ってしまた・・・・ネギ！！起こせやコラ！！

「く、悪戯するのを忘れていた・・・・一生の不覚」

こうなりゃ、エヴァの家まで乗り込んで遊んでやる！！

「無事、敵の砦へと侵入した如何やら敵はいない模様・・・・地下に魔力反応・・・任務を続行する」

いいよね～こういう侵入まがいって

「ふむ、これか～本物だぜ？それでは侵入～」

別荘の中に侵入する・・・・中には大きな魔力反応が２つ、バグキャラが１、その他９

「ネギ～」

「ケン!?どうして此処に!?」

「暇だったから・・・・」

そう、暇だったから・・・それ以外に此処に来る理由があるとでも?

「で?何やってんのお前・・・・?」

「皆に魔法を教えてるんだ」

「そうか、大変だね・・・じゃあ俺帰るわ・・・」

「待ってください、何かコツとかないんですか?」

ほら来た・・・くそ、逃げ遅れた

「コツねぇ～イメージだイメージ・・・それで何とかなる、俺はなった」

「貴方基準に言われても・・・・・」

なら聞くな・・・・

「はぁ～適当に火のイメージをして・・・・付け」

≪ボウ≫

賢一の手の平から炎が現れる

「「「「おお！」」」」

「ほら、簡単だろ？」

「ハハハ、それはケンだけだと思う・・・・しかも杖無しで・・・・」

うるせい！出来るもんはしょうがねぇだろ！！

「・・・・此処って一日が一時間だったよな？」

「え？うんそうだけど・・・・」

「寝放題じゃん！！」

「「「「「「「・・・・・・・」」」」」」」

なんだよ！何なんだよその眼は！！その眼で見るな！！俺を見るな

「俺を見るなーーーー！！」

その場から立ち去り・・・建物の中にいく・・・・・

「ｚｚｚ．．．。」

あれ？そういや、今日って何か起こったような？・・・・・・まぁいいや起きてからにしよう

「今気付いたんだが・・・・・接続が遅くなってる・・・・・」

まぁいいや・・・お休みｚｚｚ．．．。

・・・・・・

さて皆さん問題です今俺は何処にいるでしょう！！

「正解は・・・・森です」

気付いたら俺は見知らぬ境界に寝ていた・・・・わお！

「コレは主人公で言う覚醒的アレなのでは！？」

いや、これ以上俺強くなって如何するんだよ・・・・・なぁ？

「もし、覚醒的アレなら敵が出て来るんだが」

≪ズズズ≫

俺の影が人の形を作っていく・・・・・え？マジで覚醒的アレ？

『ククククッよう？俺』

「あ、どうも？・・・・所でどちら様で？」

『俺はお前の闇だ』

俺の闇とか言い出す影の人・・・・・・うん、俺って欲望とか憎しみ溜めてないんだけどな～

「てか、俺良い人？・・・・良い人って言うより自分勝手だよな？」

『何をブツブツ言ってやがる？』

「俺、闇受け入れてなかったの！？それでこの性格・・・・まぁいいか」

え？此処は「お前が俺の闇！？ふざけるな！」って言え？いや俺だよ？

「え～とじゃあ此れからよろしく！」

『は？え、ちょっそこは俺に打ち勝って闇を制御するとか・・・』

「いや、制御って今頃？って感じなんだけど」

『え、いやそうだけど・・・・もう少しなんか、こうあるじゃん？』

「いや、俺正義じゃないし？勇者じゃないし？魔王だし？」

『まぁ・・・・そうだよな・・・・・・うん』

闇の俺が体に溶け込む・・・・・違和感が全然ない・・・・まぁ俺だし？

職業がＬｖＵＰした！魔王（仮）から大魔王（仮）になった！！

「あり？何か変わった？」

・・・・・・・

「っと言う夢を見たんだ」

だが、前より闇を操りやすくなっている・・・・覚醒的アレ？か分からんが
闇が扱いやすくなったし良いか！

「ネギ達がいない・・・・・ｏｒｚ」

そういや、今日って悪魔が来る日だっけ？何で覚えてる？
フフフ謎の眼の効力なめんなよ？過去を振り返ることもできるんだぞ？
すんばらしいだろ！

「うわっ雨じゃん！結構降ってるな～」

≪ザーザー≫

悪魔の反応が４つ・・・・・・３つはスライムで１つが高位悪魔

「ん？・・・あれ？もう一つ馬鹿デカイ力が・・・・って！？ネギ！？」

如何やらネギが暴走をしているようだ・・・俺の力をどんどん吸い取っていく

「あんのバカ！！俺の力なんか使いすぎったら死ぬぞ！！」

俺は急いでネギのところまで行く・・・でもどうやって止めよう？

「全力全快！！スターライトブレイカーで邪魔するとか？お話聞かせてもらうもん！

って言って攻撃仕掛けまくるとか？少し頭冷そっか、て言ってネギに魔力をぶつけるとか？」

え？なんでなのは何だ？だって？いや俺より早く魔王やってるから

少し参考にさせてもらおうかと・・・・ここは「少し頭冷そっか？」だね！

「うん！そこに痺れる憧れるー！！」

何てバカな事を考えていると目的地に付く・・・・

「うあああああ！！」

≪バキ≫

そこには、髪の色が黒に変わり人より魔物に近くなっているネギが・・・・

悪魔の方は空に逃げている模様

「はぁ・・・・マジで頭冷やせ・・・・」

≪ドガーーン≫

右手をネギに向けて気を放つ

「うぐっ！？」

「「「「「「ネギ（先生）！？」」」」」」

ネギは俺の攻撃により気絶する・・・・如何やら体がもう付いて行ってなかったようだ

「はぁー・・・」

「ケン！あんた、ネギに何て事「死んでたかも知れないんだ、しょうがないだろ」・・！？」

「まったく・・・俺の力を無理やり使おうとするとは」

「ふむ？君は誰かね？」

「さぁ？誰だろうね？悪魔さん」

俺はネギを抱えアスナのほうへ行くが悪魔に邪魔をされる

「ふ、まぁいい・・・その少年をこちらに渡してもらおうか？」

「は？何で？」

「その少年は危険だからだ」

殺気を飛ばしてくる悪魔

「おお、怖い怖い・・・受け取れ小太郎！」

「は！？ちょっ待ちぃ！！」

ネギを小太郎のところまで投げ飛ばす

「さぁて・・・殺り合おうか？」

「ふ・・・君ごときが如何にかできるかな？」

「悪魔ごときが調子に乗るなよ？」

悪魔と魔王の戦いが始まった・・・・

悪魔～～はぁ？俺は魔王だ！～～（後書き）

本当にすいません！！

アンケート回答まだまだ受付てま－－す！！

？アヴェンジャー（他でもＯＫ）でマスターが凛

？　　、、　　でマスターがイリヤ

？アンリ・マユ（聖杯）からオギャーｗ

？？？→？

完全復活！！（前書き）

休憩をしていました・・・・すまそん

完全復活！！

「それでは行くぞ？」

「はっ来いよ三下！！」

悪魔が俺に向かってくる・・・・・勝てる気がしねぇ～やばいよ・・・接続まで後一時間
持たないよ！！・・・・ネギは気絶してるし・・・アスナたちは捕まってる・・・エヴァは助けてくれないだろうし

「喰らえ・・・」

「っち！！」

いくつもの拳が飛んでくるそれをぎりぎり避け続けるがいずれは当たってしまう

「糞が・・・っ！何か良い方法は！？」

「最初の威勢は如何した？」

「っく！」

何時の間にか後ろに回りこまれ蹴りを入れられる、更に追い討ちに魔法をはなってくる

「・・・容赦ねぇ・・・」

「ふむ、そう言えば君は鬼神を一撃で殺したと聞いたが・・・聞き間違いだったかな？」

「！！・・・それだーーーーーーーーー！！」

俺は叫び、召喚の準備をする・・・来い・・・・・・・・来いよ、俺は此処に入る・・・・・・
スケィッ・・・じゃなかった、来い！！

「グリエーーーール！！」

「何だ！？」

地面が闇に覆われそこから現れるロボ・・・・・作っててよかった！！ガン◯ム

「さぁ・・・・貴様に恐怖を教えてやる」

「くっ！？」

銃口を悪魔に合わせる・・・・え？学園壊れる？アハハハハ、だから？

「滅びな・・・・おっさん」

「見つけましたよ、風間賢一」

「ああ？」

空から降りてくる女性、その女性には翼が生えている・・・・天使？

「天使か・・・・？」

「いえ違います・・・・ですが貴方を消しに来ました・・・・」

そいつから解き放たれる威圧

「ちっ・・・・やばいな」

「ケン！！」

「ネギ、起きたか！その悪魔の相手は任せた！！・・・・今度は間違えるなよ！！」

「う、うん・・・・ケンは？」

「俺は少し殺し合い（デート）に行ってくる」

そう言って俺はその場から離れ宇宙（そら）へ・・・その後を追ってくる天使

「何故あの場から離れたのですか？」

「は？・・・そりゃあいつ等を巻き込むわけにはいかないだろ」

「悪では無いようですね・・・・」

「ん？もしかして見逃してくれるわけ？」

「それは無いです・・・貴方は神を殺した・・・・その罪は重い」

そう言って戦闘体勢に入る

「後一つ聞くけどお前何者だ？」

「人から言えば女神です・・・」

≪ドガーーン≫

答えたと一緒に魔力、気どちらでもない力を使い攻撃を仕掛けてくる

・・・天使じゃなくて女神でしたか！！

「ちっ！！うぜぇ」

≪ブオン≫

「・・・・・・」

畜生・・・動きが遅くて当たらねぇ！！・・・・・

「破壊する・・・・」

女神の右手に剣が現れる・・・美しく光に満ちている剣を・・・

「浄化・・・・」

剣の光が増し・・・・俺を、グリエールを襲う

「ちくしょ・・・う」

≪ドガーーーンッ≫

女神の前には機械兵器だったものの残骸・・・・

「目標の駆逐完了・・・・呆気なかったわね・・・・」

[接続・・・・１００％・・・・・」

何処からともなく聞こえる・・・声・・・そして残骸の中心から闇がもれる

「なるほど・・・此処からが本番てこと?」

禍々しいオーラがその場を包み込む

「この世とのお別れは済んだか女神?」

完全復活！！（後書き）

アンケートの現在の状況！！

？アヴェンジャー（他でもＯＫ）でマスターが凛　２票

？　　、、　　でマスターがイリヤ　７票

？アンリ・マユ（聖杯）からオギャーｗ　６票

？→？　１票

感想評価アンケート待ってまーーーす！！

女神・・・転生させてもらうとかじゃないからな？（前書き）

女神・・・転生させてもらうとかじゃないからな？

どうも皆さん先振りです・・・やっと、やっと俺の体が完成しました・・・フフフフフ

「・・・【闇の世界】」

「なに！？」

空間が歪み俺色に染まる・・・・・さぁショータイムだ

「さぁ・・・闇に呑まれな」

「くっ！？」

女神は剣を振り被る・・・すると何処からともなく光の剣が現れ闇を浄化する

「残念だったな宇宙（ここ）では俺に勝つことは出来ない・・・・貴様では」

「ぐあああああああ！！」

だが宇宙にある全ての闇が女神を襲う

「まだよ・・・・光翼」

「あ？」

光の翼が闇を打ち消し女神を守る

「うぁ～何それ～」

「全ての傷害を打ち消す光の盾よ・・・・」

「へ～・・・・なら」

右手に闇を圧縮し魔力、気を掻き混ぜる

「俺の全力打ち消してみな？」

女神の正面に近づき自分の全力の力をぶつける

≪ドガガガッガガガドドド≫

「おらぁぁぁあああああああ！！」

「なっ！？」

空間、時空、宇宙が悲鳴を上げる・・・・そして

「うそ！？」

「ぶち抜けや！！」

光の盾をぶち抜き、固有結界が消え、女神に一撃を当てながら地球へと落ちる

～～～～ｓｉｄｅネギ～～～～

ケンが居なくなったあの後、悪魔との決着が付いた

「フフフ、負けてしまうとはね・・・さぁ君達の勝ちだ止めを刺したまえ」

「止めは刺しません」

「ふ・・・君は面白いな・・・」

悪魔は笑いながら姿を消していく

「また、会おう・・・次君に会うときはもっと強くなっておけよ」

そう言って姿が見えなくなる

「ふぅう・・・ケンやったよ僕」

僕は空を見つめ戦っている人の名を呼ぶ

「ネギ!!危ない」

「え?」

アスナさんが僕を抱えてその場から離れる・・・そしてそこには
黒い翼を生やしたあの時のケンが居る

「く・・・・さす・・・・だ・・・・・」

「ふ・・・・・い・・・・く・・・・;」

遠くて何を話しているかは分からない・・・女性の方が光になって消える

「終った・・・はぁ・・・何かめんどくさい事に・・・ん?ネギ勝ったのか?」

「うん!!」

「ネギ?その人は?」

「え?ケンだよ?」

「「「「「「「「「ええええええええええ!!」」」」」」」」」

~~~賢一~~~

≪ドガーーーンッ≫

「なるほど・・・確かに神を殺せるわけだ・・・ガハッ」

「好きでなった訳じゃないけどな・・・・とりあえず消えな」

「ふ、私を倒してもまた刺客が現れるがな」
~~~

「は、全部破壊してやるよ」

≪グシャ≫

女神の首をへし折る

「後お前の力貰っといてやる」

光に為った女神だったものを体の中に取り込む

「終った・・・はぁ・・・何かめんどくさい事に・・・ん?ネギ勝ったのか?」

「うん!!」

元気に答えるネギ・・・うん、よかったよかった

「ネギ?その人は?」

アスナがネギに訪ねる・・・・・忘れるなよ・・・おじさんショックだなって・・・・・・

俺変装してないじゃん・・・・まぁいいか別にネギの顔じゃないし

「え?ケンだよ?」

「「「「「「「えええええええええええええ!?」」」」」」」

盛大な驚きありがとうございます

「改めてよろしく♪風間賢一、たぶん人間?だ!」

いいえ、魔王・・・・魔神です・・・・・邪神?・・・・・邪悪デハナイカナ?

うるせぇぞ!!作者!!てめぇの臓器引きずり出すぞ!!

スマセン・・・・・

女神・・・転生させてもらうとかじゃないからな？（後書き）

まだまだアンケート回答待ってます！！感想評価もね！

ゆ・・幽霊・・・怖くなんか・・・・・ないぞ？（前書き）

最新〜

ゆ・・幽霊・・・怖くなんか・・・・ないぞ?

本当だぞ!?・・・・・あり・・・・?

「どうしたの?ケン」

「いや、何でも・・・ないと思う」

「??」

言わないといけない気がしたが何故だ?

「それにしても文化祭か~」

「うん、楽しみだね♪」

「久々に思いっきり羽伸ばそうかな~」

「え!?・・・一般人に翼見せるの?」

「・・・・ちげぇよ」

この子、バカなの?天才なの?どっちなの?

「そういえばケン、例の新聞見た？」

「新聞？」

「うん、心霊写真の新聞」

「・・・非科学的な」

眼を反らし帰り道を急ぐ

「その幽霊、僕のクラスの子かもしれないんだ、相坂さよさん」

「ん？あの窓際の？」

「え？」

「え？」

「見えてるの？」

「は・・・？何が？」

「幽霊・・・・」

「ははははは・・・・まじか？」

そういえば、原作だと、さよは幽霊だった気がするｏｒｚ

「まっまぁ、そんな事より今日の夜一緒にどうかな」

「そんな事なのか？・・・・まぁいいか今日の夜？」

「うん、幽霊退治！！」

「はははははははは・・・・・おっと用事を思い出した」

俺はそう言ってその場から退散しようとしたが

「あれ～？ケンの兄貴もしかして怖いんですか？（にやにや）」

エロガモ・・・もといカモはそれを逃さなかった

「はっはぁ？何言ってんだ？余裕だし、別に夜に出る幽霊がリアルで怖いとかそんな事ねぇし！！」

「本当ですか～？（ニヤニヤ）」

「当たり前だろ！！」

「それじゃあ今日の夜来てくださいよ？（ニヤニヤ）」

「余裕だし！！」

「夜、持ってますよ～ケンの兄貴♪（キラン）」

「・・・・・・ｏｒｚ」

ベッ別に、怖くないんだからな！！・・・・・ああ、怖くなんか・・・

～～～～そして～～～～

「夜～に出る幽～霊って怖くない・・・・？」

「誰に言ってるの？」

「きっ気にするな・・・おっおれっ俺は気にしない・・・・」

「そ、そう？（汗）」

夜に幽霊！？、しかも悪霊かもしれない！？↑（カモに騙された）

・・・悪霊とかむ、無理

「「「ポルターガイストだーーっ!?」」」

「（ビク）悪霊じゃない・・・・悪霊じゃない悪霊じゃない悪霊じゃないブツブツブツ」

「ひぃぃぃ血文字だ!?」

「5回ＤＥＡＴＨ!?五回殺す!?」

悪霊～じゃな～～い・・・・え?何故そんなに幽霊が怖いかって?
・・・・・・着信ありの世界にいったんですよ、しかも最弱状態で・
・・

異世界に到着!!→何時の間にか有った携帯→あの独特な音楽が流れる→着信ありのことを忘れていた
→電話に出る→突然何かに引きづられる→ＢＡＤＥＮＤ

ひきづられた跡何が有ったかは・・・・・ご想像に・・・・・・ガクガクブルブル
如何やら霊は成仏した模様・・・・ふう

「ヒヒヒっ」↑※カモ

カモが自分サイズのこんにゃくを糸で吊り賢一の首筋に当てる・・

・

「ハハハハハハアはッはアハハハハハハハハアハアハハアハハハハハハアh」

≪ゴゴゴゴ≫

「なっなに！？」

「更なる悪霊！？」

「アハハハハhshシャッハハアッハハハア」

≪ッゴゴゴゴゴゴゴオゴオゴオオ≫

「あ、ヤバイ・・・・」

「けっケン落ち着いて！？」

逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ

逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ

逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ

逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ

逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げ

ちゃ駄目だ
逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げ
ちゃ駄目だ

「ぶっ壊れろーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーー！！」

「ちょ！？」

「アホガモーーーーー！？」

「「「「「キャアアアアア」」」」」

教室は作者がご都合主義で直しましたb

ゆ・・幽霊・・・怖くなんか・・・・・ないぞ？（後書き）

感想評価まってま～す

祭りの前日（前書き）

調子が戻ってきたかな？

祭りの前日

「明日はいよいよ祭りだ！！」

フフフフフフフフ・・・さぁて何をしようか・・・・

「ん？何か忘れてるような？」

まぁいいや、まず何時もどうり学園長の頭に悪戯だろ、それから
この格闘技大会に出て
フルボコだぜ！！↑※いろいろとストレスが溜まってます

「フフフハハハハハーーーハッハッハッ」

「何あの子・・・・」

「さぁ」

≪ヒソヒソ≫

うん／／／騒ぎすぎた・・・・逃げろ！

「ん？あれ、人が居ない？」

広場まで逃げてきたがそこには人の気配がない

「結界？・・・・でもなんで」

中央にネギ達と学園長たちがいる・・・・・ああ、そういやこんなイベント有ったわ

「如何する？考えろ俺！！」

？普通に会話に入る

？襲い掛かる→倒す→ＥＮＤ

？横を素通り

？さよと一緒に横で盗み聞き

「？は無いだろ！？・・・・此処は？・・・・いや」

？襲い掛かる→倒す→ＥＮＤ

?横を素通り

?さよの横で盗み聞き

「だからなんで!?:?がある!?・・・・?で行くか?」

?襲い掛かる→倒す→ＥＮＤ

?横を素通り

「あれ?何かフラグ立ってない!?やばいフラグ立ってるよ!?」

?襲い・・・やらせねぇよ!?

「横を素通りしよ・・・ああ襲ったりなんかしないぞ・・・」

立った!!フラグが立った!!

「ハ○ジ見たいに言わないの!!」

冗談はこの辺にして・・・普通に横を素通りする俺

「～♪～♪」

「「「「「「「・・・・・・・」」」」」」」」

皆がジッと見てくる・・・ちょそんなに見るなよ照れるじゃねぇか／／／／

「ってじゃ、この六ヶ所で告白が起きないよう、見張って欲しいんじゃ」

俺を無視して話を進める、がく・・・ぬらりひょん

べ、べつに悲しくなんか・・・・

「あの・・・学園長？あの子は・・・「言うな！」ですが・・・」

「見なかったほうが良いという事もこの世の中あるのじゃ！」

アンタの頭の中で俺が如何いう風になってるのか見てみたいよ・・・

「話しかけたら、災害を持ち込む悪ガキじゃ・・・・はっ！？しまった」

「何が「しまった」だ、後心読むな」

それとお前の頭の中での俺の位置が良く分かったよ

「学園長、そのこは一体？」

「うっうむ、言いたくは無いが・・・絶対に敵にしてはいけない人間？風間賢一君じゃ」

「絶対敵にしてはいけない？・・・この子供が？」

何だよこの黒い人・・・後悪かったな子供で

「ケン、何で此処に？」

「歩いてたら、見掛けただから近づいてみた」

「結界張ってたはずなんじゃが・・・・」

ふ、対人用だろ？・・・・何か言ってて悲しくなってきた・・・

「誰かに見られてます」

「何？」

「あ～本当だ～機械がある～」

「ケン見えるの？」

「え？見えないの？」

話してるうち一人のサングラスを着けた男が無詠唱で攻撃を仕掛ける・・・・勿体無い！！

≪ボヒュン≫

「おお！？」

だが魔法は何にも当たらず通り過ぎる

「？」

「勿体無いだろ～コレぐらい素手で捕まえろよ？」

何時の間にか手に偵察用の機械を持っている賢一

「「「「「「「「「「「「！？！？！」」」」」」」」」」」」

「流石ケンの兄貴だぜ・・・・」

「あはははは・・・」

「くっグリエール!!」

戦闘によって破壊された、なんちゃってガンダ〇を思い出す

・・・作り直そうかな、グリエール改!!どう?

「ともかく、俺が追いかけるから話進めていいよ?」

「そ、そうか?」

「おう!【謎の眼】そこね・・・フフフ鬼ごっこの始まり」

その場から消えるケン

「学園長「言うな」・・・・はい」

さぁてどっち側の味方しようかな~・・・ククククっと見つけた、

もう一人は隠れてるな

まぁいいか

「やぁ、超さん？」

「何ネ？賢一さん」

「誤魔化しても無駄だぜ？」

「はぁー・・・・私を如何するネ？」

・・・・・・如何しよ

「さぁな」

「考えてなかったあるネ」

≪ザク≫

「ぐっそんな事は・・・・無いぞ？」

ジッと見てくる超・・・・・ふっ・・・・・

「まっ取り合えずぬらりひょんに渡すかな・・・・・」

「逃がしてくれないカ？」

「ん～？・・・・俺に得が無いな」

「ならコレを上げるアル」

超から時計を渡される・・・あ～タイムマシンだっけ?俺作れるし、ネギにでも上げるか

「ふ～ん、こりゃ面白い、いいよ逃げて」

「本当あるか?」

「本当～本当～あっても仲間はちゃんとの連れて行けよ?」

「!?流石あるネ・・・・・一つ提案があるネ」

「何だ?」

「私達の仲間に成らないか?」

超からの誘いが来た・・・・ふむ取り合えず

「・・・・考えといてやる」

「いい答えを待ってるネ」

本当如何しようかな～・・・・まっ明日は祭りだ楽しもう

祭りの前日（後書き）

?アヴェンジャー（他でもＯＫ）でマスターが凛　２票

?　　、、　　でマスターがイリヤ　８票

?アンリ・マユ（聖杯）からオギャーｗ　８票

?→?　１票

感想評価アンケート待ってまーーーす！！

１７０万アクセス記念（前書き）

～番外編～

最弱不老不死×恐怖

１７０万アクセス記念

やぁ！皆、毎度おなじみ風間賢一だ！今は新しい世界に着たんだ！！ちなみに何処かの部屋の中だ！

「何か体が重い・・・・」

コノ世界に着てから調子が悪い、え？バカは風引かないんじゃねぇの？・・・殺すよ？君

「万能薬っと・・・・・あれ？」

能力が発動しない・・・・あれ？

「黒龍！」

魔法も使えない・・・・・え？

「謎の眼！」

ステータスも見れない・・・・おい

「まさか・・・・っ！」

電柱に向かって本気で殴りかかる

≪ゴキ≫

鈍い音を立てて折れる・・・・・俺の腕が・・・・・・

「イテェェェェェ！？」

だが、痛みが直ぐに無くなる・・・・・あれ？

「え～と、もしかして・・・・最弱で不老不死？」

能力使えない、身体能力人並み、魔力、気、共にゼロだけど死ねない

「うわぁ～コレって罰ゲーム？」

≪テンッテン♪テンッテン♪テンッ・・・・・・・≫

俺の目の前に何時の間にか置いてある携帯電話・・・あれ？この曲何処かで？

≪テンッテテン♪テンッテテン♪テンッテテン♪テンッテテン♪テテテテテテテ・・・・・≫

鳴り続ける携帯・・・・取り合えず出たほうが言いのかな？

≪テンテン・・・ピッ≫

「もしもし～？」

≪プープープー≫

「は？・・・・・のぁ！？」

突然物凄い力で引きずられる・・・・・・足を見るが誰も居ない・・・だが確かに引っ張られている

≪ズザザアザザアザアッ≫

「のぁぁぁあぁぁあぁぁあ！？」

そして、そばにあったベットの中に引きずり込まれる・・・・かっ体が・・・・

≪ボギャドギャメタッ≫

「アーーーッ」

体が折られ切り裂かれバラバラにされる・・・・・そして再生・・・・

≪ボギャドギャメタッ≫

「マタアーーーッ！？」

再生した所がまた折られ切り裂かれバラバラ・・・・そ・し・て☆再生☆

≪ボギャドギャメタッメキョッバキッ≫

「フッコレも運命アーーーーーッ」

再生した所が（以下略）そ・し・て☆再生☆

≪ボギャドギャメタッメキョッバキッ≫

「も、もう・・・や、やめ」

そ・し・て☆再生☆

≪ボギャドギャメタッメキョッバキッ≫

「・・・・・・」

そ・し・て☆再生☆

～～～数時間後～～～

いい加減疲れたらしく（精神的に）開放されました・・・・・ですが俺は・・・

「悪霊退散、悪霊退散、悪霊退散、悪霊退散・・・・・・・・・」

☆ト・ラ・ウ・マ☆

１７０万アクセス記念（後書き）

本編も頑張ります！！

奴が来る・・・よっよせ、やめろやめろーーー（前書き）

俺様復活ーーーーーー！！最新の速度が戻ります！・・・・・・たぶん

奴が来る・・・よっよせ、やめろやめろーーー

「～♪～♪」

平凡だ～～

「おっ！あれ旨そう！！」

どうも、皆さん賢一です！いや～祭り！祭りですよ？皆さん！最高にハイですね～

「ん？・・・ネギとの・・・の、のど飴？・・・・・あれ？」

兎も角！ネギとのど・・・・が！逃げるように屋根の上を走っていっている・・・・

「何だっけ？このイベント・・・・・お！旨そうなもの発見！」

ま、たぶんフラグだろ・・・・恋愛フラグ・・・・何故俺には立たないんでしょか？

他のはいっぱい立ってるのに・・・・・・まぁいいや

「あれ？・・・しょっぱいなコレ」

食べながら観光をしていると世界中が光り出す

「うぉ～なんかのイベント？」

コレが賢一である・・・何かバカにされた気がする

「あ、黒い人達が飛んでる・・・・イベントかな～」

何てね・・・気付いてますよ？あれネギですね・・・・何か物凄く嫌な予感がします

「はぁ～短かった平凡よ、さよなら」

ネギの所まで飛ぶ・・・あれ？キス？・・・・アスナにキスしようとしてる？

・・・こ、これがフラグメーカーか

※賢一もフラグメーカーです、恋愛？違いますよ？

「エターナルネギフィバー!!ミニ」

何処かのバグキャラの技を小さくして真似する・・・・・出来た・・・

≪ボーン≫

「た、助かった・・・じゃなくて!何!」

ネギを吹き飛ばしアスナの前に立つ・・・・・

「ケン、邪魔しないでくれるかな?」

あれ?結構魔力込めて撃ったんだけど・・・・気絶してない

「フラグを立てたかったら俺を倒していけ!!」

そうコレが俺の間違いだった

「分かりました、ケンからキスをします・・・・・」

「「「「「「は・・・・？」」」」」」

え、ちょ、え？・・・・何て言った？キス？ｋｉｓｓ？キッス？

「行くよ？」

ジリジリと寄ってくるネギ

「まっ待て！俺は男だ！分かってるのかネギ？」

「何を言ってるんですか？」

「だよな！冗談だよな！」

「そんな顔なのに男の訳が無い」

この瞬間世界は凍った・・・・あれ？ファーストの危機？

「コウナッタラ、ショウガナイ・・・・サヨナラ、ネギ」

「え？ちょ！待ちなさいよ！」

「そ、そうです、落ち着いてください！！」

「ハハハハ、コロシハシナイヨ？タブン」

「「「「ちょっ！」」」」

死ねぇぇぇえええええ！！！右手に魔力を込めて全力でネギに叩き込む

「危ないですよケ・ン？」

「な、なんだと・・・・！？」

俺の全力の攻撃をネギは片手で受け止める・・・・・

「さぁ、行くよ？」

≪ドガーンッ≫

ネギの髪の色が黒に変わる・・・・え、俺合体してないよ？・・・・俺の力残ってないのに？

「おいおい・・・・フラグ立ってないか？」

「フフフフ」

そして何時の間にか俺の目の前にいるネギ、
この時俺は悟った・・・・ファーストが男に奪われるのだと・・・

「な、何か打開策は!!・・・・そうだ!!アスナガーーード!!」

「え、ちょ!?」

俺とアスナの足元に転移魔法が広がる、そして位置が変わる

「すまない、アスナ男に奪われるのは嫌なんだ・・・・」

「覚えときなさいよーーーーーーーーむぐ!?んんん!?」

ふ、コレも運命さ・・・・・さて逃げるか

奴が来る・・・よっよせ、やめろやめろーーー（後書き）

感想評価待ってます！

世界が止まる（前書き）

ネギま!?の終り方を忘れてしまったので急展開で終らせます！

世界が止まる

ネギの奴、世界樹に操られるとかまじないよ・・・・なんか他の力も入ってた気がするが

「気にしたら負けかな・・・？」

視界が揺れる・・・・いや世界が揺れ始める・・・

「な、なんだ!?」

そして、人が消えていく・・・・最後に残ったのは俺だけ

「え～と・・・急展開?ま、人生旨くは動かないか」

世界に生命が消えた・・・・・いや俺が生命の無い“地球”に移動させられた

「こんな事が出来るのは・・・・・神しかいないよな・・・・」

だがこの世界に神の気配は無い

「此れから楽しくなるのって時に・・・・・・」

世界にノイズが走る・・・・・

「ハハハハ・・・・コレは予想外」

ノシズが収まると目の前には複数の神

「邪悪なる神よ・・・・・」

神の中で一番老けている爺さんが話しかけてくる

「貴様は何を望み、何のために世界を旅する」

「は?・・・・そりゃ、平凡で楽しく生きるためだろ?」

俺は普通に答える

「本当にそう思っているのか?」

「当たり前だろ？」

神は俺を見据える

「貴様は神だ・・・・しかし貴様は支配する世界を持たぬ神だ」

「は？てか俺、神では無い」

「そして自分の力への危機感も無い」

俺を無視して話が進んでいく・・・・

「貴様は人から魔へ魔から神に駆け上ってきた異分子」

「望んでなったわけじゃねぇが？」

「それも貴様が異分子の証拠・・・・だから」

「だから？」

眼を閉じる・・・そしてゆっくりと眼を開け、一言

「排除する・・・・」

「結局、神を殺したから殺すじゃなくて、異分子は世界に自分に何か影響を起こすから殺すじゃねぇか」

だが、そっちの方が

「分かりやすくて良いじゃねぇか！」

そして、複数の神と邪神の絶望的戦いが始まった・・・うん最終回？

世界が止まる（後書き）

明日にはＦａｔｅかな？　如何いう風にＦａｔｅに行くかはお楽しみ！

闇（前書き）

さぁてやってきましたーーーーーー！！Ｆａｔｅの世界

闇

「ここは・・・・」

視界に広がる闇、いや宇宙(そら)

「ああ、そうだった消えたんだっけ？」

今の俺の状況は魂だけの存在、ギリギリの所で闇をつかって生き残った

「だけど、このままじゃ時間の問題かな」

魂が闇に溶けていっている・・・・致命傷を防げなかったか・・・・

「ああ、結局俺は・・・・」

そこで意識が途切れる

“そしてある世界が一つの闇を見つけた”

“闇は憎悪、欲望、苦しみ、悲しみ、嫉妬、恐怖、嫌悪が流れる真っ黒な闇だった”

“しかしその闇は何より優しく暖かく自分の闇を取り込んでいく綺麗な闇だった”

“世界はその闇を復元するために一つの汚れた力を使った”

“聖杯、最初は人々の願いを叶える力だった、だがある戦いでそれは汚れてしまった”

“その力でたくさんの人が死にたくさんの悪夢が生まれた”

“世界はその力を使い一つの闇の魂を復元させた”

“だがその闇は増大な力を宿していた”

“そしてある戦闘で生まれた悪夢によって闇を復元させる力が溜まる”

“闇は復活した”

“そしてその闇は世界を守る英霊になった”

死んでない？ハハハハ、英霊？良いぜ蘇らせてくれたお礼だ期間限定だがやってやるぜ

闇（後書き）

短い？しょうがない、プロローグみたいなもんなんだから

英霊

おっす！恩返しに英霊になってやると言ってしまった賢一です！
ハハハハハ
平凡が無くなっちまった・・・まぁ約束だし期間限定！最強の守護霊やってやるよ！

「暇だ・・・・」

で俺は今、座に座っているわけだが・・・・・・やる事が無い無さ過ぎる・・・・

「暇～だ～」

ぐてぇと寄りかかる・・・世界を守るとは言ったが殆どやる事がない何故って？
悪意を考える悪人を退治しに行く・・・そいつの悪意を取り込む、はい終了・・・ですよ？

「あ～、こんなんなら聖杯戦争にでてぇ～」

この呟きが間違いだった・・・このままボーと過ごしていたら

俺は何も無く終れたのに

「うぃ？・・・・聖杯戦争への参加？・・・・・え、冗談ッスよ？」

俺の召喚が進んでいく・・・・・

「え～と・・・・マジで？」

俺の言葉は虚しく座に響き渡た・・・・

「まてまて！！その前に俺のクラスは！？」

その言葉に答えるように召喚が止まる

「ふぅ～・・・・ん？アベンジャー？いやいや復讐者って・・・・・誰に復讐だよ」

アベンジャーと言う単語が頭に流れ込むが拒否する・・・・それが俺クォリティ
だって何に復讐するんだよ？神？アホか・・・・もう神とは関わらん！！

「他々、ん?サタン?・・・・いや、それもう答えじゃん・・・・」

俺のクラスは魔王だ・・・・・もう、強い奴ですよ～って言ってるもんじゃん!!

「バロム?・・・・殺すぞ・・・・」

殺気が充満する・・・俺は悪くない

「次!!ジョーカー?・・・・楽しませる何てことした覚えは無い・・・・」

もっとマシなの出せよ・・・・お前の罪を数えろってか?違う?そうですか

「ハーパネント?・・・・えっと意味は・・・永久不変、いや俺変わってますよ?」

特に力とか力とか力とか・・・・後身体年齢とか?肉片に為ったり・・・・え?違う?

「兎も角！・・・・・アレだクラスは自由奔放だ」

ボヘミアン、ケアフリーどっちが言いと思う？ん～ボヘミアンでいいか・・・・

「よし！ボヘミアン！コレに決めた！！」

へ？そんなクラスはありません・・・・よってアベンジャー

「ふ、コレも運命か・・・・・ｏｒｚ」

召喚されていく・・・・・何か口癖になってねぇか？コレ

英霊（後書き）

感想評価待ってます！

マスター（前書き）

最新〜

マスター

「召喚に応じて参上した、君がマスターか？」

何てことを言いながら召喚されました賢一です・・・・・え？誰に召喚されたか？
そりゃ・・・・白い幼女？少女？美少女？美幼女？

「そうよ、私が貴方のマスター、貴方のクラスは？」

落胆した顔で俺のクラスを聞くマスター・・・・悪かったね俺で、どうせ弱そうですよ～

「俺のクラスはアベンジャー、イレギュラーだ」

「まさか、イレギュラークラスなんて・・・・で？貴方の真名は？」

本当にその顔やめって・・・・俺のライフがゼロになる・・・・
ｏｒｚ

「風間賢一」

「カザマ・ケンイチ?・・・・・聞いた事無いわね?日本の英霊?」

「う～ん・・・・・」

日本の英霊?日本を救った事は・・・・あるっちゃあるけど平行世界だし・・・・

「そうなるな・・・まぁ誰にも知られていない反英霊かな?」

「ふ～ん」

疑う眼で俺をジッと見てくる・・・・信じてませんね・・・・

「ま、此れからよろしくマスター・・・・・っでマスターの名前は?」

「あ・・・・」

忘れてたのね・・・俺が召喚されたのそんなにショックだったのね・・・泣いてないからな!!

「イリヤスフィール・フォン・アインツベルンよ、よろしくね。アベンジャー」

ニコリと笑うイリヤ・・・うん、かわいいですね。え?反応が薄い?普通でしょ?え?

「ケンでいい、どうせ真名が分かっても調べようがないからな」

「わかったわ、ケン」

「取り合えず・・・・寝るか」

「は?」

口をを半開きにしてこちらを見るマスター・・・・駄目ですか?

「駄目よ!」

「え~~」

素に戻る俺・・・・いやクールな俺って疲れる・・・・

「性格一気に変わったわね・・・・」

「こっちが素です」

何処かの弓兵真似ただけですから・・・・え?似てない?そうですか・・・

「まぁいいわ、ケンは戦闘に自信は?」

「あるかも知れない」

「・・・・・」

やめて!その本当に雑魚キャラ召喚しちゃった見たいな顔!!

「冗談だ、そこら辺にいる龍なら一撃で消滅させれる」

「・・・・・・」

え?何でその「はっワロスワロス」な顔は!!本当だよ!!

「もういいわ・・・完璧な召喚だったはずなのに・・・・」

「は、どうせモヤシだよ~女顔だよ~「え?女じゃないの?」ｏｒｚどうせどうせどうせ」

こうして俺は召喚されて一時間でマスターに心を砕かれた・・・・

2分で回復したけど

「コレも運命なのさ・・・・・ぐすん」

コレから先大丈夫だろうか・・・・・え?俺なら何とかなる?ありがとう（泣）

マスター（後書き）

感想評価待ってます！半分ぐらい進んだらアンケート取ろうかな・・・

日本（前書き）

最新～、後一話ぐらい出来るかな？

日本

雪国から日本へやって来ました・・・・・いや～

「日本じゃなかったんだ・・・・・」

「今頃何言ってるの？ケン」

いや～全く気付かなかった、道理で雪が多いわけだ

「で？マ・・・イリヤこんなに早くに来た理由は？」

「うん？ケンは役に立たなそうから、ある人物と仲良くなってもらうためよ」

「や、役に立たない・・・それとある人物は関係あるのか？」

「マスターになる確立が高い人物・・・・」

真剣な顔になるイリヤ・・・はぁ役に立た無そうか・・・・

「でも、どうやって？」

「ケンには学生になってもらうのよ！」

「は・・・・？」

俺を指差して高らかと宣言する・・・・通り過ぎる人がジッと見てくる。

恥ずかしいこの上ない・・・・

「と、ともかく！学生になってその人物と仲良くなってね！」

自分が何処で何をしたのか気付いたようで・・・・・ええと此処でオタクなら「萌え～」って奴ですね？

「サーヴァントってばれるじゃん・・・」

「・・・・そこは大丈夫でしょ」

「何で？」

「ケンだから！」

え～・・・役に立たないとか言っといて此処でそれ使います？普通・・・

「まぁ、何とかできるけど・・・」

「あ、出来るんだ」

このガキ捻り潰してやろうか・・・っと思ってしまった今日この頃

「で、転入・・・・・」

「転校生？如何した？」

「いえ、何でも有りません」

あれ～？俺まだ新しい家に行ってないよ？・・・・何で行き成り学校？

制服渡される↓いってらっしゃい（物凄い、いい笑顔で）↓俺と学校の位置を書いた紙

って、コレ？・・・なんで6時に付くようにしたんだろうっと思ってたがコレか・・・・・

「お前らー今日から転入生がやってくることになった！」

「先生、男ですか～？女ですか～？」

「ん?性別は男だ」

なんで、そこで性別を入れるんですか?先生・・・・「男だ」だけで良いじゃないですか

「それじゃ、入って来い」

教室に入る・・・・あ~だるい

「今日から、此処で一緒に勉強する事になった風間賢一です。此れからよろしく」

「先生~?男見たいな名前の間違いじゃないですか~?」

「捻り潰すぞ・・・・?あぁあ!?」

そのとき教室が凍った・・・・やっちゃったwテヘw

「と、ともかく・・・・風間は空いた席に移動してくれ」

「分かりました」

空いた横の席には赤髪の青年がいる・・・・・え～と主人公？原作覚えてたのかって？
主人公とサーヴァントぐらいしか・・・・悪いか？

「此れからよろしく」

「あっああ、俺は衛宮士郎よろしく」

ふむ優しそうな人だね流石、主人公・・・でイリヤが仲良くしろって
言うある人物って誰だ？

「士郎、教科書見せてもらっていいか？」

「ん？いいぜ」

ま、取りあえず主人公と仲良くなっとこう～

「士郎って何か部活やってるわけ？」

「前に弓道をやってたぐらいで今は帰宅部」

「ほう～」

と、適当に話してたら仲良くなった・・・取りあえずミッションクリア！
で結局イリヤの言ってた人物で誰だろ、帰ったら聞こう～

「あーーーーーーーー！！」

「どっどうしたケン！？」

「家の場所がわからねぇ（汗）」

「は？」

家の場所を聞き忘れた今日この頃・・・・・・orz野宿なのか・・・
・いや、まだだ！！

「士郎！！」

「な、なんだ？」

「泊めてくれー！！」

ダイビング土下座を決めて頼み込む・・・・フっ決まった

「わかった、分かったから顔を上げろって」

「マジで！？」

自分でも分かるキラキラした笑顔で士郎を見る

「ああ（汗）」

「心の友よ～～（涙）」

こうして俺は日本初日は友達の家に泊まった・・・・結局イリヤが言っ（以下略）

日本（後書き）

感想評価待ってます！！

衛宮士郎（前書き）

最新！！

衛宮士郎

「おお～！！旨そう！！」

「ははは・・・そう言って貰えると嬉しいかな」

リアルでこんなに旨そうな飯を見たのは久々だ！！

「それじゃ！！いただきま～す！！」

「いただきます」

≪ガツガツガツッ≫

「う・・・・・」

「う？」

「うめぇ～～～～～～～！！」

俺は顔を上に向け歓喜した・・・・・ああ、もう泣く程な

「ははははは、ありがとう」

笑顔で此方に向かって言う士郎・・・・・おおお、生天然ジゴロだ・・・・

「ガツガツッ士郎って、ガツガツッ此処で一人で暮らしてんの？ングッ」

「ん？まぁ、そうなるかな？」

「ふ～ん」

うめぇ、ああ・・・もう英霊なんて辞めて此処の子になろうか・・・

「賢一って不思議だよな～」

「ん？何が？」

「初めってあった奴にすぐに打ち溶け合ってるんだからさ」

「いや、相性が言いだけだろ俺とお前が」

「ん？そうか？」

「そうだって」

裏と表って感じでさ

「ご馳走様・・・・ふぃ～食った食ったw」

「お粗末様でした」

もうね、本気で衛宮の子になろうかと思うんだ俺

そんなマスターを裏切りそうになった今日の長い一日

衛宮士郎（後書き）

眠い・・・ＺＺＺ。。。・・・・・

「昨日はありがとうな！！士郎」

「ああ、気にすんな」

笑顔で何でもないように返してくれる・・・・・お前の笑顔が眩しいぜｗｗ

「でさ、質問なんだが・・・・・」

「ん？」

「先生が変わってね？」

昨日に変わって女性の先生に代わっている・・・・・・・あれ？性転換？

「ああ、昨日は副担任だよ」

「へ～・・・じゃあの人が担任の？」

「藤村大河先生だ」

「へ～タイガー・・・・【ランサーさんがログインしました】・・・・」

ん?何か頭に情報が・・・【ランサーさんがログインしました】・・・何コレ?

「先生～頭が痛いんで早退しま～す」

「ん?見ない顔ね転校生?まぁいいわ、気をつけて帰りなさいよ」

あ、こんなんで帰って良いんだ・・・気にしたら負けなのか?

「大丈夫なのか?賢一?」

「ん?ああ少し痛いだけだ、それに家・・・探さないといけないしな」

「ああ・・・なるほど」

納得したかのような顔で俺を見てくる・・・・取りあえず学校を出ますか

「で・・・・【ランサーさんがログインしました】コレなんだ?」

まぁステータスへ

■アベンジャー（風間賢一）

■ステータス

筋力ＥＸ

魔力Ｃ－（封印解除後ＥＸ）

耐久ＥＸ

幸運Ｂ

敏捷ＥＸ

宝具Ａ

・規格外ＥＸ

■技能（英霊独自の保有スキル）

・創造・・・物、生命を作り出す

・魔力変化・・・吸収、反射、操ることが出来る

・次元移動・・・時空、異世界への転移または移動

・謎の眼・・・コピー、戦闘能力、理解、まだまだ秘密がありそう

・自然の力・・・光以外の属性を操れる

・不老不死・・・年齢操作可能

・無限の闇≪アンリミテッドダークネス≫・・・謎

■宝具（ノウブル・ファンタズム）

・世界の情報・・・召喚されたサーヴァントまたは宝具、真名の情報が入る

おぅ、何か何時もとステータスの出方が違う・・・てか無限の闇って進化しとる

「てか宝具用意してくれたんだ世界・・・」

良い奴だ・・・でもこの宝具は一番俺に渡したらいけないと思うよ？

「って事は・・・ランサーが召喚されたんだ・・・」

う～ん・・・取りあえず、ＳＩ☆ＴＯ☆ＭＥ☆ＲＵ？

「【ランサーさんがログアウトしました】ｗてかｗｗ」

まぁ冗談だけど・・・・・う～ん

「取りあえずイリヤの所に行こうか・・・・【時空移動】コレがあったｗｗ」

後召喚されているサーヴァント見てみるか

ランサー、キャスター、アーチャー・・・・おぅ、アーチャーが一番最初か・・・・って１０年前！？

「ん～・・・・見なかったことにしよ【転移】」

【ランサーがログインしました。】もう良いから・・・

ランサーが召喚されました（後書き）

最新～感想・評価待ってまーすw

宝具（前書き）

宝具

「まったく、ケンは何してるの！早く帰ってきなさいよ！！」

「家の位置を教えてなかった君が言う事か？」

「きゃっ！？ケン！遅いわよ！」

顔を膨らませて怒るイリヤ

「家の位置教えないから昨日は野宿しかけたんだぞ！！」

何だかんだ言って此処に付くのにあれから2日も立ってしまたんだからな！！

転移したら知らない屋敷の庭に居たんだぞ、そこで気のよさそうな眼鏡をかけた青年に

迷子って言たら、「よかったら泊まっていく？」って言われた時涙がでたんだぞ！！

屋敷の中に入ったら双子のメイドが居て、そして美人の妹だぞ！？

その人達も理由を話したら

優しく持て成してくれたんだぞ！？もう、この世界優しい人多くて感激しちゃう！！

「な何よ!聞かなかったのが悪いんでしょ!」

ええ～・・・・逆ギレー・・・・まぁいいけどさ～

「はぁ～って仲良くしろって言ってた奴の名前は?」

「ぁ・・・・ごほん、衛宮士郎よ」

今、「あ」て言ったよね!?忘れてたなこの野郎・・・・て?!

「士郎!?」

「如何したの?」

「おぅ、運命とは残酷だな・・・・親友」

「如何やら仲良くなってるみたいね?」

ええ、為ってますとも・・・物凄い仲良くなりましたよ・・・・旨かったな～飯

「あ、後ランサーが召喚されたぞ?」

「そう」

「真名はクーフーリンだって」

「え!?真名も分かるの!?」

驚愕の顔で此方を見る・・・おぅ、驚いた顔一つ入りました

「ああ、俺の宝具だ」

「反則で戦闘では使えない宝具ね・・・・」

グサッと言う音が俺の何処かで鳴り響いた・・・・・酷い

「うぅぅう・・・幼女にバカにされた・・・」

「誰が幼女よ!!」

「え?・・・ああ、そうだね」

「何よその哀れみの顔は!?」

うん、イリヤの弄り方が分かってきた・・・・・フフ

「はぁ、・・・で?他に何が分かるの?」

「ん？召喚したマスターの名前、居場所サーヴァントの宝具、技能、実力他にもいっぱい」

「本当に反則ね・・・・」

呆れて顔に手を置く・・・うん、絶対俺には渡したらいけない宝具だね

「で？今後の方針は？」

「時期が来たら連絡するわ」

「うぃ～じゃあ俺は士郎と仲良くしてりゃいいのね？」

「ええ、もしサーヴァントを召喚しても攻撃は仕掛けないでね？」

「何で～？」

「どうせ倒せないでしょ？」

俺の心が抉られる音が聞こえた・・・・キッパリと言わなくても良いじゃん・・・

「戦闘になったら俺の実力見せてやるーーー！！」

≪ダッ≫

「行ちゃった・・・・絶対、受肉してるよね？ケンって」

【ライダーさんが召喚されました】

「だから如何したーーーー！！」

宝具（後書き）

感想評価待ってまーすｗｗ

バゼット・フラガ・マクレミッツ（前書き）

最新～４話最新できた～

バゼット・フラガ・マクレミッツ

「頭が痛ぇ・・・・・」

昨日から情報が入りすぎて頭が痛い・・・・・【ライダーさんのマスターが変わりました】

とか【今日のご飯はカレーがいいでしょう】とか最初は良いよ?でも何?何で途中から関係ないこと!?【今日のご飯はカレーが良いでしょう】別になんでもいいわ!?

「はぁ～・・・・・一々突っ込んでたら寝れなかったｏｒｚ」

【ランサーさんのマスターがアチャーさんのマスターに協力を頼んでいます】

「おぅ、始まる前に同盟を組むとか・・・・・頂けないねぇ?」

俺は懐から携帯を取りイリヤへ連絡・・・・・何をするかって?

フフフフ久々の戦だ

「ん、んん・・・此方スネーク、此れから同盟を組もうとしている奴らを仕留めに良く」

［はぁ～・・・何言ってるの？ケン？］

「それでは入ってくる大佐」

［大佐って・・・・てコラ！！勝手に≪ブツンッ≫］

許可？は貰った・・・・それでは弱いもの苛めに行こうかククククク

「仮面を用意・・・・さぁ行くか」

不吉を届けに行くぜ・・・・

「で・・・・如何いう状況？」

後ろから右腕を切り裂こうとしているアーチャのマスター・・・・・えっとあれ？

「取りあえず、助けたほうが良いのか？」

そんな事を考えているうちに刃物は段々と近づいていっている・・・あー！もう！

「如何にでもなれ！！」

≪ガキンッ≫

「なに！？」

驚愕をしているアーチャーの・・・めんどい！！【検索】【言峰綺礼】よし！

「貴様何者だ？」

「ククククク、烏（からす）とでも呼んでもらおうか」

「貴方は・・・・」

「今は敵ではない・・・今は」

って男じゃなかったんだ・・・・暗いから分からなかった

「バゼット！？大丈夫か！」

「ランサー・・・ええ、私は大丈夫彼が助けてくれたわ」

「くっ少し此方の部が悪いね・・・・私はコレで失礼させてもらうよ」

「待ちやがれ！！」

「ランサー！追いかけなくて良いわ」

「くそっ！」

う～ん、何ていうか・・・・不完全燃焼？

「はぁ～・・・帰るか」

「おい、おめぇ何が目的だ？」

「最初は同盟を組もうとしているクソ野郎を殺しに着たんだがね・・・・見ての通り」

「はっ、じゃあテメェも聖杯戦争のマスターか？」

「フフフ、さぁ？」

それだけを言い残し闇に溶けていく・・・・ああ！！本当に不完全燃焼！！

「待ちやがれ！！・・・・・ちっ逃げやがった」

「ランサー兎も角この場を離れるわよ・・・・」

「ああ・・・」

多きく、未来のルートが変わっていく

「言峰綺礼とバゼット・フラガ・マクレミッツか・・・・・」

う～ん、何かとてつもなく原作ブレイクした気がする暴れてないけど・・・・

「あーー！暴れたんねーーー！！」

ストレスが溜まり続ける・・・・そんなイライラした一日

バゼット・フラガ・マクレミッツ（後書き）

コレで原作道りには進まない・・・・どうしよｗｗ

感想評価まってます

久々の学校（前書き）

最新・・・修正を始めようかと思っている・・・・Ｆａｔｅが終ってから?それとも

久々の学校

【学校そこは憎き勉強と言う物をする所】

【学校それはクソ長い校長の話がある所】

【学校それは、友達そして親友を作る所それだけが行く価値がある場所】

どう?俺みたいな考えを持てる人って絶対居るよね?

「まぁ、何が言いたいかというと・・・・・授業ダリィ～」

机にぐてぇ～と持たれかかり先生の有り難～い話を聞いている

「ははは、賢一はめんどくさがりやだな」

「だってよ～」

もう５０超えたおっさんだよ?心は子供だけど・・・・・今頃高校の授業って・・・・無いな

「士郎ってもてるだろ？」

何気なく思った事を士郎に聞く

「ブッん、んな分けないだろ！！」

「おい、そこ～静かにしろよ～」

「す、すいません」

声を出しすぎて先生に怒られる士郎・・・・ああ、鈍感なんだ・・・天然なんだ

「マジで主人公だなお前・・・」

「？？？」

「はぁ～」

【ランサーがカラス（つまり俺）を捜索しています】

「何故だ・・・・」

「ん？如何した賢一？」

「んいや～此れから大変になるな～って思ってね」

【キャスターさんがアサシンを召喚しました】おお、何か凄い事になってる

「本当に大変だね～」

「？？？」

それにしても、士郎はどうやってサーヴァント召喚するんだろう？

「やっぱり」

主人公的な感じで言うと偶然が重なって・・・とか？

「ありえる・・・」

「転校生～ブツブツうるせ～ぞ～」

「すまそん」

「心から謝っていない謝罪をありがとう」

この先生面白いかも・・・・・にしてもコレで6体か～後はセイバーだけ

「今日は此処までだ～ちゃんと復讐しろよ～」

ちょうど授業も終ったようだな・・・・・てか復習の字間違えてないですか？
昔に何が会ったんですか

「じゃ、俺帰るわ士郎」

「ん？ああ！またな」

「おう！また明日」

さぁて一度戻って状況整理だな・・・・あ～早くストレス発散してー

久々の学校（後書き）

ああ～本当にどうしよ・・・・取りあえず、感想・評価待ってます

？Ｆａｔｅ終ってから修正

？今すぐ修正しろ！！読みずらいんだよ！！クズ作者

？作者の好きにすれば～

アーチャーさんが召喚されました（前書き）

最新〜

アーチャーさんが召喚されました

空が～青いな～お友達～・・・・・・

「ケン！！聞いてるの！」

「はい・・・・・」

「勝手に行動して、目的が果せなかったら如何するつもりだったの！！」

「すみません・・・・」

「すみませんで済んだら」

ガミガミガミガミ・・・・・・どうも皆さん勝手な行動したせいで怒られている賢一です

「はい、はい・・・・すみません」

「分かった！！」

「はい」

「それにねぇ！！」

ガミガミガミガミ・・・・・やめって、もう賢一のライフはゼロよ！・・・ｏｒｚ

【アーチャーさんがログインしました】

アーチャーが召喚され・・・・・た？え？あれ？アーチャーが二人？

「なぁ、イリヤ？アーチャーのクラスが二人居るんだが」

「何言ってるの！そんなわけ無いじゃない！」

え～・・・だって【検索】【アーチャーのマスター】【遠坂凛、言峰綺礼】

「いや、本当だぜ？」

「それは、おかしいわ今までの聖杯戦争で同じクラスが召喚された例は無い・・・まさか」

何か思い当たる事があるのか深刻な顔をするイリヤ

「うん？如何した？」

「片方は１０年前に召喚されてない？」

「ああ、そうだが？良くわかったな？」

「そのサーヴァント前の聖杯戦争の生き残りよ」

「って事は今回はサーヴァントは８体？」

「そのサーヴァントが介入しなければね」

絶対にするだろ・・・介入

「でさ、本当に士郎はサーヴァントを召喚するのか？後１体だぜ？」

「ええ、でも念を入れた方が良いわね・・・ケン」

「何だ？」

「明日の夜中、士郎を襲いなさい」

イリヤ・・・俺は！俺は！

「悪いが男色じゃないぞ？」

「意味が違うわよ！！」

冗談じゃん・・・・

「召喚されたら？」

「全力で逃げて・・・・・今起きたかのようにして仲間のフリをしなさい」

「え？・・・ああ顔を隠して襲うのね・・・・」

「全力で逃げるのよ？」

「ハハハハ・・・・本当に戦闘になったら見返してやるからな？」

だから何で！？「はいはいワロスワロス」見たい顔は！？もう言いじゃんそのネタ！！

「私はもう寝るわ・・・・おやすみ、ケン」

「ああ、おやすみ」

どうやって襲うかな～

？危ないマスクを被ってハァハァ言いながら襲う

?危ないマスクを被って「良いではないか」っと言いながら襲う

?黒いローブを着て無言で襲う

?仮面を被って襲う

選択肢が出た・・・・って何だよ!?上の二つ!?上の二つのせいで下も危なく見える

「ま、?か?だよな～」

男色ではないからな!!絶対に!!

アーチャーさんが召喚されました（後書き）

Ｆａｔｅが終ったら修正始めようと思います・・・・・だるい

感想評価待ってます

セイバーさんが召喚される模様です（前書き）

最新・・・・賢一・・・・

セイバーさんが召喚される模様です

「士郎」

「何だ？賢一」

「今日、泊めてくれない？」

「はぁ？」

またかっと言う顔で此方を見てくる・・・・旨い飯が食える～♪

「なっ！頼む！！この通りだ！！」

地面に顔を押し当てて頼み込む・・・・これで優しい主人公様は・・・・

「わ、分かったから！！顔上げろって！！」

落ちる・・・・・計画通りニヤリ

「よっしゃーーー！！」

「ははははは（汗）」

って、学校が終わり・・・・士郎の家

「おぅ？どちら様ですか？」

「貴方こそ誰ですか？」

ダメッ・・・・じゃなくてバゼットさんが何故！？

「士郎の彼女？」

「ブッ！？ち、違う！！」

「士郎さん此方の方は？」

バゼットさんが居るって事はランサーも居るって事だよな！？・・・・やべぇよ

「ああ、こいつは風間賢一俺の同じクラスの友達」

「はぁ、そうでしたか・・・・宜しくね？風間君・・・・・男見た

いな名前ね・・・・ボソ」

おぅ、人生で初めてじゃない？風間君って呼ばれるの・・・・・・
え？何か言った？

「ってこのお姉様は？士郎」

「ん？この人はバゼット・フラガ・マクレミッツさんだ」

「おう・・・何と呼べば？」

「バゼットで良いわ・・・」

「うぃ、宜しくお願いしますバゼットさん」

で、どうして此処にバゼットさんが？・・・その前に

「士郎ー？」

「ん？何だ？」

「腹減った・・・・」

≪ガクッ≫

俺の言葉でこけそうになる士郎

「はぁ～図々しいな？」

「それが俺！」

サムズアップ！！

「はぁ～待ってろ今作るから・・・・・」

「フフフ面白いわね君？」

「ハハハハ、それ程でも！！」

士郎のご飯を食いまくりました・・・・すっごく・・・・おいしいです

「って夜と・・・・まさかバゼットさんが此処に居るとは・・・・」

聞いたことによると・・・・士郎の家の前で行倒れてたとか・・・・

・理由がまたお腹が空いていてだからな

え？俺にもありそう？・・・・否定はしない

「さて監視は無いようだし・・・・任務開始しますか・・・」

その前に言っておく！！読者は神だ！！仏様だ！！この意味が分かるな？・・・ならば答えは簡単

「危ないマスク！！＆「ハァハァ」！！」

読者ーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！

「それでは・・・・装着・・・ｏｒｚ」

ああ、俺が変わるのが感じる・・・・変態の道へ進む俺の足音が聞こえる・・・・

「ハァハァハァ・・・・・・（泣）」

士郎は如何やら倉庫に居る模様・・・・ハァハァ

「ト・・・ス・・・ン」

倉庫の士郎の声が聞こえる・・・・ハァハァ

「【闇よ】・・・・侵入ハァハァ」

「よし、今日は・・・・言い出来だな!!」

士郎の背後に回る

「ハァハァ・・・・」

「よーし・・・・・ん?」

士郎が後ろを振り向く・・・・・俺と目が合う

「ハァハァ・・・」

「・・・・・」

「ハァハァ・・・・」

ジリジリと近づいていく

「ぎ・・・・」

「ハァハァ・・・・」

「ぎゃぁぁあああああああああああああああ!?!?!?!?!」

士郎の絶叫が・・・・轟く・・・・・し・・・・し・・・死にたいｏｒｚ

「へへへ・・・・悪いが死んでもらうぜ?ハァハァ」↑召喚させるため

「く・・・来るな!!」↑処女的な意味で

士郎はその場に会った鉄の棒を持って俺に反撃しようとする・・・・

「ふ、無駄だ・・・ハァハァ」

≪ガキンッ≫

腕でそれを受け止め弾く

「ククク、観念しな・・・・」

「待ちなさい！変態！」

ｏｒｚ・・・・好きでやってるんじゃない・・・ああ、好きでやってるわけじゃないんだ

「バゼットさん！？」

「ちっ・・・だが、サーヴァント相手に人間が勝てるかな？ハァハァ」

「な！？サーヴァント・・・ランサー・・・本当？」

「間違いねぇな・・・信じたくねぇが同じ匂いがする」

その言葉と同時に士郎がランサーから距離をとる・・・

「そういう意味じゃねぇよ！！」

「ククク、余所見をしてる場合か？ハァハァ」

「てめぇ見たいな男色には負ける気がしないんでね」

男色じゃないもん！！・・・・もう、俺の精神が・・・・

「ふ、抜かせ！！（泣）」

「はっ！！」

俺とランサーがぶつかると同時に士郎の目の前に魔法陣が完成されサーヴァントが召喚される

「何！？」

「嘘・・・・」

「――――問おう。貴方が、私のマスターか」

「任務完了・・・・脱出する・・・・今すぐ（泣）」

闇の中に消える・・・・そしてすぐに危ないマスクを焼き払う！！・・・・

「士郎・・・・うるせ・・・・ぞ」

「賢一！？」

俺はすぐに今起きたかのように装い士郎の居るところに行く・・・・そして俺の目の前に

広がる風景はコスプレをしたとしか思えない男性と女性が二人・・・・・普通はこう思う

「士郎・・・お前そういう趣味だったのか・・・・・・」

「ち、違うーーーーーーーーーー！？」

俺のストレスがかなり溜まり、そして何かを失った

セイバーさんが召喚される模様です（後書き）

うん、反省もしてるし後悔もしてる・・・・だが！！読者は神だ！！仏様だ！！

感想評価待ってます～

ケン「死・・・・あ・・・・・死・・・・・自・・・・・殺・・・・・・・ブツブツブツブツブツブツ」

遠坂凛（前書き）

最新～暇つぶしのほうがネタが切れたので新しく魔法少女リリカルなのは～3人の転生者、平凡だ～を始めました・・・まぁ気分転換の作品です

遠坂凛

「いや～それにしても・・・・・外国の親戚ね～」

「そ、そうなんだよ！！」

士郎、幾らなんでも無理があるぞ？まぁ丁度良いから乗るけど

「で？この青い人も？」

「誰が、青い人だ！！」

「ランサー！！・・・・彼は私の連れよ、少し頭のネジが・・・・・ね？」

「な！？誰が・・・・ムグッんんん！？」

「へぇ～」

ネジがってwちょwうけるw・・・この人達の誤魔化し方パネェ

「「！？・・・・バゼット（マスター）、敵だ（です）！」」

「な！？」

「「敵？」」

おっと、士郎とハモった・・・・そうか、士郎は知らないんだっけ？聖杯戦争

「アーチャー、本当に此処にランサーが居るの？」

「ああ、此処に入って行くのを先程見かけた・・・・」

おぅ、まさかのアーチャーさん・・・・そして、玄関が破壊される・・・えー、アーチャー過去とは言え此処、お前の家だろ

「な、何だ！？」

「なんでさ・・・」

士郎が家の玄関が破壊された事に呆然としている・・・・うん、どんまい！

「貴方が・・・ランサーのマスターね？」

「そういう貴方は、アーチャーのマスター？」

「ええ、そうよ」

呆然としている士郎、そして今にも戦いそうに為っている二人・・・一般人が見ている事に気付かないんでしょうか？この人は・・・・・ってアーチャーが物凄く睨んできてます！？

「士郎、士郎」

「ん、ああ！何だ？」

呆然としていたの引き戻す

「コレ、如何いう状況？」

「さぁ？」

コレが遠坂の呪い【うっかり】なのか！？

「って、もう一体サーヴァント！？」

「・・・・・あ」

遠坂がセイバーに気付き、バゼットは俺を思い出す・・・・俺っ

て影薄いですかね・・・

「士郎、俺帰るわ・・・・・」

「へ・・・？」

帰宅宣言をする・・・・そして、こう一言

「悪いな、コスプレパーティーだった何て俺知らなかった・・・（ダッ」

「え？ちょ！？待て！！勘違いだーーーー！！」

士郎の二度目の轟きが響いた・・・・

「冗談だって・・・ｗｗ帰るのもなｗｗ」

「マジで勘弁してくれ・・・・心臓に悪い」

「ははははは、実はカオス過ぎて付いて行けてないんだ」

サーヴァント（アーチャー除く）は未だに睨みあったまま・・・・

マスター（士郎のぞく）は状況を把握

「一時休戦ね・・・・何で一般人が」

「そのようね・・・・ランサー」

「分かったよ」

う～んカオスだ・・・・

「士郎？風呂借りて言いか？」

「ん？ああ」

「サンキュー」

取りあえず士郎に現場把握をして貰うために風呂場へ・・・・

「（あ、あ・・・テス、テス・・聞こえますか～イリヤ）」

（きゃっ！？な、何）

「（あ、寝てた？悪い悪い）」

（別にかまわないわ・・・・って念話できたのね・・・）

「（ああ、それと無事士郎がセイバーを召喚した・・・・）」

（そう、でっ現場は？）

「（現場？・・・・・・・・・カオスだ）」

それ以外何がある？

（カオス？）

現場に起きた事を全て話す・・・・

（カオスね・・・）

「（で？俺は如何すればいい？）」

（士郎達は教会に行くと思うから、そこで・・・・挨拶をするわ）

「（了解、マスター）」

念話を切って風呂から出る・・・・・いい湯だった

「・・・・・あれ？皆さん？何処ですかーーー？」

士郎達の姿が見えない・・・・如何やらほってかれた模様

「か、悲しく何かな無いんだからなーーーーーーー！？」

よくよく考えてみたら、一般人なんだから連れて行ってくれるわけが無い

遠坂凛（後書き）

感想評価待ってます～

最強（前書き）

今日は土曜日だったと気付いた・・・・俺ｏｒｚ

最強

「う～ん教会に入るのを襲撃？」

どうも、皆さん賢一です・・・今俺はどうやって襲撃するか考えています

「教会事ボーンｗｗ・・・・」

べ、別に面白そうだな何て思ってないからな！！

「原作通り戻って来たとこをイリヤと一緒に・・・・」

て言うかイリヤって俺＝雑魚って思ってるよね？と言う事は本当に挨拶だけ？

「それは困る！！俺のストレス発散が出来ねぇ！！」

無理やり戦ってやろう！！

「うしっ！！そんじゃ、まぁ教会へＧＯ－！！」

俺はイリヤとの合流地点へと急ぐ

「ククック、さぁて久々の戦闘だ」

少し黒い部分が出ましたが気にしないでください

町を人の目では認識できないほどの速さで走る・・・・そしてたどり着く公園

「遅いわよ、ケン・・・・」

「悪い悪い、久々の戦闘だから如何奇襲しようか考えてたんだ」

「は？戦わないわよ？」

ほら、やっぱり・・・・だが

「イリ・・・・いや、マスター俺の力を知りたくは無いのか？“最強”のな」

何時ものふざけた感を消し、真面目にイリヤを見据える

「ケン・・・・分かったわ、合図をしたら思う存分やりなさい」

「流石、マスター分かってるw！！」

何時もの調子で答える俺を見て溜め息をするイリヤ・・・・・さぁて準備は整ったぜ？

「行くわよ」

「おう！」

そして教会へと足を進める。今、最強最悪のサーヴァントが動く絶望を届けに

「俺は、イリヤの後ろにいれば良いのか？」

「ええ」

闇に体を溶け込ませ身を隠す・・・・そしてやって来る俺の最初の戦闘（しょくじ）

「こんばんわ、お兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

「今朝の・・・・」

「誰？衛宮くん」

如何やら朝に士郎と会話をしていた様だ・・・・・本当に俺が弱かったら如何する気だったんだ？マスター

「始めまして、凛？私はイリヤ、イリヤスフィール・フォン・アインツベルン・・・・て言えば分かるでしょ？」

「アインツベルン・・・・・」

「まさか・・・・」

バゼットと凛は驚く・・・・そして話に付いて行けてないのか困惑の顔をする士郎

「ケン、貴方の力見せなさい」

そして、合図が出る

「ＯＫマスター・・・・・」

「ケン！？」

闇から自分の姿を現し敵を見据える・・・・・・さぁて、簡単に死ぬなよ？

「驚いてる場合か？親友」

「「「「な・・・！？」」」」

一瞬で士郎の背後を取り耳元で呟く・・・・驚いてるw驚いてるw

「これを見ているサーヴァント、マスターに告げる・・・・・“絶望”しな」

そして、この戦いを見てるであろうサーヴァント、マスターに此れから起こる絶望への予兆を告げる

「さぁ【闇よ我らが暴れる時が来た】」

世界のあらゆる場所から“闇”が溢れ出す

「な、何よこのサーヴァント・・・・アーチャー！！」

「これは少々・・・・厄介だな」

最初の余裕な表情が消えていくマスター達

「ランサー此処は手を組んであいつを倒した方がよさそうだわ！！」

「確かにコイツは英霊ってもんじゃねぇ」

そして英霊もまた規則外な英霊と名乗る者に表情は強張る

「士郎は下がっていてください・・・・」

「ケン、お前は・・・・」

「悪いな之もマスターの命令なんだよ・・・・・・・親友」

魔力を開放する。賢一の魔力は∞しかし、イリヤへの負担を考えると5分持つか持たないか

「タイムリミットは5分だ【黒龍】」

闇の龍を魔力ではなく、本当に生み出す

「だが、お前らには之だけで十分【合成獣（キメラ）】」

賢一と生まれたばかりの闇の龍が合さる

「■■■ーーーーー！！」

そして、生まれる黒い人型の龍

「おいおい、マジかよ。更にやばくなったぜ」

「規格外だな・・・・」

「背を向けたら終わりですね」

3体のサーヴァントの5分間の恐怖が始まる

最強（後書き）

感想評価待ってます～

恐怖の5分間（前書き）

最新スピードが落ちてきた・・・だれか元気を

恐怖の5分間

≪ドガーーンッ≫

「■■■ーーーー!!」

響き渡る轟き。溢れ出す闇、恐怖の5分は、まだ始まったばかり

「ちっ!!如何なってやがるんだ!この野郎は」

「愚痴を言ってる暇はありませんよ!ランサー!」

無数の闇の針がランサーとサーヴァントに襲い掛かる

≪ガガガガッガガ≫

「ちっ、まさかこんなに早く使うことになるとわよ!!突き穿つ死翔の槍（ゲイ・ボルク）」

解き放たれる、赤い槍が一直線に黒い龍の鎧を着た男へと向かう・・・だが闇がその男を守るように盾をつくり槍を飲み込む

「なっ！？」

「■■ー！！」

呆気に取られているうちに近づき、闇の剣を振りかざす！！だが

≪ガガガガッガ≫

「くっランサー！貸し一つです！！」

セイバーによって一撃を止められる・・・・・

「セイバー、ランサー下がれ！！」

アーチャーの掛け声で二人が一気に後ろに引く

「偽・螺旋剣（カラドボルグＩＩ）」

≪ドガガガッガガガッガガッ≫

アーチャーによる。必殺ともいえる一撃が賢一を飲み込む

「やったか・・・・・？」

「・・・・いえ、まだのようです」

「やれやれ・・・・此処までとは」

まったくの無傷でたたずむソレ、まるで何事も無かったように此方へと向かってくる

「■・・・・ふぅ・・・・時間か」

「「「！？」」」

先程までの威圧と闇が綺麗に無くなる

「如何いうつもりだ？」

「ん？ああ、マスターが限界なんだよ」

後ろで倒れているイリヤ・・・・・少しやり過ぎたな・・・・・帰ったら、御仕置きかな・・・はぁ

「だがら、これで今日はおしまい」

「私達がそれを許すとでも？」

「へぇ？その状態でまだやるの？」

「くっ」

悔しそうに歯を食い縛るセイバー・・・・まぁ

「また会おう・・・・」

「まて！！」

俺はイリヤを抱きかかえ闇へと溶け込み消える

「いや～ストレス発散ー」

「ケン・・・・？」

おぅ・・・俺のしたから物凄い殺気が・・・・

「覚悟は出来てるんでしょうね？」

「てへ♪ごめんちゃい♪」

「気持ち悪いのよーーー！！」

二重の意味で俺はずたぼろになった・・・何か途中で魔砲とかスタン○とか見えたけど気のせいだよね？

恐怖の5分間（後書き）

感想評価・・・・まってますｏｒｚ

殺人鬼（前書き）

久々の最新～～イエイーー！！

殺人鬼

あれから、イリヤの説教&お仕置き（本気で死にそうになった）を受けた俺は・・・・

「やり過ぎたな・・・・うん」

反省をしている・・・ぶっちゃけ残りのサーヴァントＶＳ俺になりそうで怖いだってよ、アレだろ

士郎組サーヴァント3体（絶対に組んでいる）

その他４体（後一体は手を組むことは無さそう）

６対１になる覚悟はした方が良い・・・・・一番厄介なのはアーチャー不死殺しの武器でも使われたら終わり、いや～ギルガメシュが悪者でよかった～

「はぁ～・・・・マジで如何しよう」

闇討ちしていくか？・・・・・世界の意思（どくしゃ）に殺されそうだから止めとこ

「ケン」

「うん？何だ～マスター」

「もう一度聞くけど本当にある程度のことは出来るのね？」

「ん？まぁ・・・・そうだけど」

何故だろう、嫌な予感しかしないのは・・・・・・俺だけか？

「よし、今から“殺人鬼”を狩りに行くわよ！」

「え・・・・？」

イリヤ曰く、本家の方から俺の力を見込んである殺人鬼を捕らえて欲しいそうな

イリヤ曰く、「どうせ当分私達を倒しに来るやつ何て入ないわよ」だそうだ

いわゆる暇つぶしですね

そして、これ重要その殺人鬼はある“魔眼”を持ってるそうな

「直死の魔眼・・・・ね」

「倒せるわよね？」

「さぁ？如何だろう・・・・・」

直視の魔眼、対象の「死」を視覚情報として捉えることが出来る目ね～

「俺に死相でてないよね・・・・？」

「さぁ・・・？」

幾ら俺が人外で最強でチートでも心はガラスなんですよ？もうビクビク何ですよ？

最近、戦闘狂に成り掛けてるのは自分でも気付いてきたけど、それでも怖いものは怖いんですよ？やだな～、あっでもその人が優しい人だったら良いな～・・・・無いか殺人鬼だし

「で？此処にその殺人鬼が？」

「ええ、その筈よ・・・・」

殺人鬼よりやばいのが居るのだが触れたら駄目なのかな?え?例えば?ほらあそこに
見える金髪の美女あの人は吸血鬼、そして先程上を通り過ぎていったのが・・・うん?まぁ
何か違和感がある美女・・・・・そんでもって紫色の帽子を被ってるのが半吸血鬼で・・・・
先程通り過ぎた猫がって・・・・何この町!?怖っ!?しかも何でやばそうなのが全部女性!?
しかも多っ!?

「マスター・・・」

「如何しようかしら・・・・」

「マスター・・・・いやイリヤ様~」

「な、なに?」

「ココキケンカエロ・・ネ?カエロ、ネ?ネ?」

「あんたの方がよっぽど危険よ・・・」

仰るとおりで・・・・・って違う!

「俺の災難センサーが言っている・・・・・・逝けと!」

「はぁ？なら良いじゃない」

「良くねぇよ！？行けじゃ無くて逝けだぜ！？」

「意味分からないわよ・・・・ほら行くよ？」

やだよ～厄介事が増える気がするよ～・・・・・・“殺人鬼”絶対殺人鬼以上の奴とやるよー（泣）だって俺の災難センサーがビンビンッ何だよーー

※昨日散々暴れまわった主人公です。

昨日はアレだよストレス発散だってばよ～～～～

読者の皆さん俺、死相出てないですよね・・・・・？ね？

殺人鬼（後書き）

久々に小説書いた・・・・・

殺人鬼２（前書き）

久々だぜぇい～

１０８話の挫折～番外編～は消しますのでよろしくお願いします

殺人鬼2

人沙汰がない一本の道、そこではある戦いが始まっていた・・・・

「やっぱり、殺人鬼以外と戦う事に成ったじゃねぇか！マスター」

「ケン？殺人鬼以外と“も”でしょ？」

「そおうですねぇええ！！！」

俺たちの前には捕獲する筈の殺人鬼・・・・そして人外美女美少女ｓ

「戦ってる最中に余所見なんて余裕ねッ！！」

≪ブォンッ≫

金髪美女の鋭い爪が襲い掛かる

「当たるかよ！！」

「いえ、当たってもらいます・・・・・」

≪ザザザザッ≫

真上からシスター？から剣が何本も投影される

「だから！あたらねぇってぇの！！」

≪ガガガッ≫

投影された一本を掴み取り残りを全て弾く

「コレで終わり・・・・」

何時の間にか俺の腹部に居た少女が魔力を溜める

「唱えるのがおせぇよ！！」

拳を振り被ろうとするが・・・・腕が動かない

「なにっ！？」

「終わりといった筈です・・・・」

帽子を被った女性が一言・・・・眼を凝らしてみると薄いとんで
もなく薄い糸が
俺の腕に絡み付いている

「やべっ」

≪バキバキバキッ≫

そして氷付けにされる俺・・・・

「なんてな・・・・ククク」

≪バキーンッ≫

氷と糸何でもないかのように引き千切り壊す

「「「「!?」」」」

「まず一人・・・」

近くに居た少女に魔力の標準を合わせる

「ッ!?」

≪ボウッ≫

「油断しすぎですよ・・・」

まだ俺の腕に残っていた糸相手側から伝って燃え出す

「っち！？」

火が此方に来るのに戸惑い隙を見せてしまった。そう奴に隙を

「・・・・」

≪ブシャーーーーッ≫

気付いた時には時既に遅く俺の腕は体から切り裂かれていた

「ぐぁあああああああっ！？」

「けっけん・・・・はぁはぁ」

何故俺が此処まで追い込まれているかというと、既にイリヤの魔力は

行くほど残っていない。つまり、全力の２０％しか出せていないのである

「くっ・・・仕方ない、マスター！！今から魔力を全て使うから覚悟しろ！」

「わ、わかったわ」

相手は俺の言葉を聞いて構える

「行くぞ！！奥義！」

【一】

【目】

【散】

「うぉおおおおおおおおおおおおおお！！」

≪ゴウッ≫

そして俺は魔力が切れて倒れたイリヤを抱え背後に【一目散】に逃げる

そりゃもう光を超えた速さで

残されたのはそれを呆然と見送る殺人鬼と美女美少女達

今日の教訓、魔力は考えて使いましょう

殺人鬼2（後書き）

感想評価待ってます

ワカメ？違うシンジだ！！

賢一が殺人鬼と戦っている間、士郎達は学校に結界を張ったワカメと対峙していた

「ワ・・・シンジ！！どうしてこんな事を！？」

「ククク、聖杯を手に入れるためさ・・・ライダー殺れ！！」

≪ジャラララッ≫

無言でその手に持っていた鎖を投げつけるライダー

「くっ・・・セイバーーーー！！」

≪ブオンッ≫

「はぁあああ」

≪ガキン≫

霊呪を使いセイバーを呼び寄せる

「ちっ！ライダー、一旦「おっと逃がさねぇぜ」ランサー！？」

「バゼットさん！？」

「怪しい結界を見つけたので」

逃げ場を無くしたシンジはその場に倒れる

「ら、ライダー！！僕を守れ！！」

「・・・・」

しかしライダーは動かない

「何をしてる！？マスターの命令だぞ！・・・・っ！？」

此処でシンジは気付く・・・本が霊呪が書かれている“本が無くなっている”事を

「何処だ・・？何処に行った！？」

慌てるシンジ・・・そしてライダーに命が下される

【フフフ、その子を殺してその場から離脱しなさい】

「・・・・」

≪ザクッ≫

ライダーの鎖によってシンジの胸が貫かれる

「ガハッ!?」

「「「「なっ!?」」」」

士郎たちがシンジに気を向けている間にライダーはその場を離脱し新たな主人の所へ向かう

「待ちやがれ!」

ランサーが逸早く気付きその後を追う

「シンジっ!?」

「ガハッゴホッゴホ」

木に持たれかかり、胸から流れ出る血を止めるように
手で強く握っているシンジに近づく

「来るなっ！」

「っ！？」

だがそれを一括してその場から立ち上がりノロノロっと立ち去っていく

「・・・シンジ！」

「お前のそういう所が気に食わないんだよ・・・」

立ち去りながら士郎に話しかける

「へらへら笑って人の頼みを何でも聞きやがる・・・」

自分の中では初めてだった友に・・・

「人が良い？優しい？違う、お前は壊れてんだよ士郎。ゴホゴホッ」

目の前が霞むだが足を止めない

「俺はてめぇが大ッ嫌いなんだよ！！」

大嫌いでそして一番の親友に

「・・・・じゃあな士郎（ボソ」

別れを告げる・・・・

「良いんですか？士郎」

「・・・・ああ」

・　・　・　・　・

「ゴホゴホッ・・・はぁはぁ」

≪グサササッ≫

「ゴホァッ！？」

無数の剣がシンジの背中を突き刺す

「ふん・・・」

それを見下ろす黄金色の鎧を着たサーヴァント

【ギルガメシュ】

ワカメ？違うシンジだ！！（後書き）

まぁ取り合えずワカメの最後でした・・・次は「蟲」期待しないで待っていてください。今日中に書く！！・・・って言ったら大体書かないのが作者クオリティ

蟲（前書き）

し、死ぬ

「柳洞寺・・・」

「ええ、そこに最後のサーヴァントが居るわ」

士郎達は此れからの方針を決めていた

≪ピンポーン≫

「ん?俺が行って来るよ」

配達か?っと玄関へと足を運ぶ

「はいはい～・・・って桜か、如何した?」

「・・・・・」

俯いて何も言わない

「?まぁ上がれよ・・・」

そう後ろを向いた瞬間・・・生々しい音が背中から鳴った

≪グサッ≫

「え・・・？」

倒れる。桜の顔を見て・・・・無表情な顔を見て

≪バタンッ≫

「士郎！？」

「桜・・・・アンタ」

倒れた音に気付いてセイバーが逸早く駆けつけ、そして凛が桜の顔を見て驚愕に染まる

「・・・・」

【ふふふふ】

「「「「っ！？」」」」

桜の背後からローブで顔を隠した女性が現れる

「サーヴァント！？」

「ええ、クラスはキャスター・・・・よろしく。ふふ」

「士郎！！」

「さ、桜に何を・・・した！」

指された背中の痛みを耐え、体を起こし叫ぶ士郎

「ふふふっ少し私の計画に役立ってもらうだけよ」

「け、い・・・計画？」

「お喋りが過ぎたわね・・・・ライダー」

ライダーがセイバーの背後に現れ剣を突き刺す

「なっ！？」

「せ、セイバー！」

「てめぇ！！「おっとこの子が如何なっても構わないの？」知った

ことかー！」

槍を構え目の前の敵に槍を振りかぶる。

「ランサー！！」

「・・・・！？ちっ」

バゼットがそれを辞めさせる

「なっ！？霊呪が！？」

「・・・消えてる！？」

士郎の手甲から消えている霊呪、それもその筈セイバーに突き刺さっているのは
ルールブレイカー・・・・

「ふふふっこれで駒は揃ったわ・・・ライダー行くわよ」

「・・・・」

その場から桜と共に消えるキャスター、ライダーはセイバーを抱

え立ち去る

「セイ・・・バー・・・・≪バタッ≫」

「士郎っ!?くっアーチャー!!あの二人を追って!!」

「はぁ、やれやれだな」

・・・・・・・

「・・・んっ」

何時もの自分の部屋で眼が覚めるそして周りを見渡すと同時に倒れる前に起きたことを思いだす

「セイバー!?」

「士郎、起きたわね・・・・」

部屋の扉から凛がお湯とタオルを持って入ってくる

「凛、セイバーたちは！？」

「・・・連れて行かれたわ」

「助けに・・・っ！？」

体を起こそうとすると同時に鋭い痛みが生じる

「その体じゃ無茶だわ・・・私たちだけでいくわ」

「いや、俺も行く」

その言葉をキッパリと断る

「なっ！？アンタ「辞めとけ嬢ちゃん」・・・ランサー！」

「ありがと・・・ランサー」

「へ・・・」

目指すわ柳洞寺

～～～敵は柳洞寺にあり！！～～～

「くっ作者に限界が来たか・・・」

「何行ってるの？アンタ」

「いや、何でもない」

士郎たちは長い階段の前に来ていた

「此処にセイバー達が・・・・」

「ええ、行くわよ」

セイバーと桜の奪還が始まった

「此処は通さぬ」

「なっもう一体サーヴァント！？」

現れる古風な格好をした侍のサーヴァント

「嬢ちゃん達、先に行きな！」

「ランサー？！」

「む・・・槍使いか・・ふっ此れも一興か」

侍のサーヴァントが刀に手をつける

「此処任せて早く行け！！」

「・・・分かったわ！」

「バッゼトさん！？」

頷き先に行くバゼット

「ランサーは此れぐらいじゃやられないわ！！」

「っ・・・わかった」

柳洞寺の中に入っていく士郎たち

「何だ、ずいぶん簡単に入れさせるんだな？」
「ふっ“魔術師を3人”入れた所で困りはしない
それに女狐の言う事を全て聞くつもりは無い」

両者が構える

「アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎」
「真名なんぞ行って良いのか？」
「ふっ知られて困ることなど無いのでな」
「へっなら」

ランサーはよりいっそう槍を強く握る

「ランサーのサーヴァント、クーフー・リン！！」
「「参る／行くぜ！！」」

槍と刀の戦いが始まる

・・・・・・

「なっ此れは・・・」

「結界ですね」

中に入った瞬間に世界が変わる・・・

「どうやらあの中心の建物に魔力が集まっているわね」

「じゃあ、あそこに桜とセイバーが」

「その確立は高いでしょう」

その場へ行こうとすると地中から無数の魔物が現れる

「くっ!?」

「このまま突っ切るわよ!!」

現れた敵を関係無しに倒して進む

「此処から先は行かせません・・・・」

「・・・・・」

「ライダーと葛木宗一郎・・・っ」

立ちふさがる。二人

「士郎、先に行きなさい・・・・」

「此処は私たちが引き受けます」

「・・・っ」

歯を食い縛り奥へとすすむ

「いかせない・・・≪ドガンッ≫っ！？」

「それはこっちの台詞よ」

「さぁ、始めましょうか」

・・・・・・・

「はぁはぁはぁ・・・！！」

奥に入ると中央に桜に黒い禍々しい物がウネウネと動き回り、
その横にセイバーが鎖に拘束されている

「セイバー！！桜！」

「せ・・・んぱい」

「士郎、来てはダメです！！」

士郎の居る場所に無数の光の弾が飛んでくる

「っ！？」

≪ドガガガッガ≫

「一人で来るとはいい度胸ね・・・」

空から士郎を見下ろすキャスター

「せん・・・あああああああああっ！？」

「桜！？」

急に苦しみだす桜、それに反応するかのように黒い物が激しく動く

「余所見をしていいのかしら？」

「くっ！？」

≪ドガーーンッ≫

突然横の壁が破壊され、二つの影が飛び出してくる

「バゼットさん、凛！？」

「くっ流石にサーヴァント相手はきついですね」

「ちっこんな時に“あの馬鹿”は何処に行ったのよ」

壁の向こうから更に二つの影が歩いてくる

≪シャーッ≫

「っ！？」

一つの影によって鎖がバゼットに向かって飛ばされる

「（やられる！？）」

≪ガキンッ≫

「はっ悪いがマスターはやらさねぇぜ」

だがそれは何者かによってはじき返される

「ランサー！！」

・・・・・

・

「ふっ・・・・部が悪かったか・・・・・」

「はっ久々に良い戦いだったぜ」

光の粒になって消えるアサシン、佐々木小次郎

勝ったのはランサー、やはり足場の悪さで宝具ともとれる技、ツバメ返しは最高潮とは行かず、それに対しランサーの宝具ゲイボルクは
相手の心臓を刺し殺す槍・・・・そして遠距離からの攻撃には打つ手が無かった

「次はちゃんとした所で戦いたい物だな」

「ああ」

そして完全に消えたアサシンを見送り士郎達の後を追う

≪シャーッ≫

「・・・・っ!?」

追い付いてみれば自分のマスターの危機

≪ガキンッ≫

「はっ悪いがマスターはやらさねぇぜ」

「ランサー！！」

だが自体はあまり変わらない・・・何故なら

「くっランサー！？セイバー！！霊呪を持って命じる」

【敵を殺せ】

既にセイバーはキャスターとの契約を果していた

「なっ！？」

「くっまずいわね・・・私はキャスターを何とかするわ」

「それでは私はライダーを借りを返します」

「セイバーは任せな」

必然的に士郎の相手は葛木宗一郎となる・・・・目の前の男は無言でこちらを見詰める

「・・・ふっ！」

≪ドゴッ≫

「・・・！？」

振りかぶられた拳を難なく避ける

「うそだろ・・・」

そして破壊された床を見て絶句する

「ちぃ、同調開始（トレースオン）」

その手に持っていた二本の棒に強化をかける

≪ガガッガガガガガガ≫

睨みあう二人

「ふっ！！」

「はぁあああ！！」

≪ガガッ≫

・・・・・・・

「唯の魔術師の癖に私とやりあう気？」

「ふっ」

その言葉を無視しガントを飛ばす凛

「そんな魔術効かないわよ？」

「はぁあああ！！！」

≪ガガガッガガガッガッガッガア≫

ガントを飛ばし続けキャスターの目の前を見えなくする

「だからっ！？」

「ふっ接近戦はそんなに得意じゃないでしょ？キャスター」

腹部に迫った凛が言葉を発する・・・そして

「くっ！？魔術師が接近戦なんて！？」

≪ドスッボガッバキ≫

「此れで終りよーーー！！」

拳に魔力を乗せ思いっきり殴る

≪ドガーーン≫

「ガ・・・ハッ！？」

そしてキャスター達の上にあったシャンデリアが先程の衝撃により落ちる

「な・・・んで宗一郎さん」

「・・・!?」

危機一髪、避けた凛が眼にしたのはキャスターを守るようにシャンデリアに潰された葛木宗一郎

「そ・・・い・・ち」

倒れる宗一郎そして光になって消えるキャスター

「っ・・・!」

「凛っ!」

「あああああああああああああああ!?」

同時に桜の悲痛な叫びが轟く

・　・　・

・・・

～～～赤い外套～～～

一つの家に向って弓を突き立てる

「・・・同調開始（トレースオン）」

その手に握られていた剣が捻れて、弓の形になる

「間桐・・・桜は返してもらうぞ」

【カラドボルク】

≪ドガガガッガガーーーン≫

一軒の家が跡形も無く吹き飛ぶ

「【ブロークンファンタズム】」

≪ドガー――ンッ≫

そしてこの世から一つの家と老人が消滅した

「さて、用事も済んだことだ凛の所へ向うか」

・・・・・・・

「あああああああああ!!」

「「桜!?」」

桜の髪の色が白く変わり赤黒い線が肌に浮かび上がる

「なっ!?」

「これは・・・」

「し、士郎・・・」

「セイバー!?」

セイバーがランサーに担がれて来る

「ああ嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼・・・・・」

「何アレ・・・」

「蟲・・・？」

そして悪夢は始まる・・・・事は無かった

≪グサッ≫

「っ！？・・・・せ・・ん・・・ぱい」

桜の胸に剣が突き刺さる

「やれやれ、追いついてみれば何だね？この状況は？」

「アーチャー、あんた！！」

凛が怒りに任せてアーチャーのところへ行く

「そんなに怒るな、それに良く見ろ」

「・・・なにをっ！？」

そう、桜に突き刺さっているのは普通の剣ではない。
破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）

そして士郎達の長い夜は幕を閉じた

～～～おまけ～～～

「先輩！！ライダー共々これからお世話になります！！」

「おう！！」

ライダーの本当のマスターが桜と言う事が発覚したり

「ラインを繋ぐにはあれよ」

「・・・・／／／」

「？」

セイバーとの再度ラインを繋ぐ方法を聞いたり

≪ゴゴゴゴゴ≫

「さっ桜・・・（あわわ」

「なに？ライダー？（ニッコリ」

桜が感情が豊かになり・・・・というより危険？

「だから・・・・アレよ・・・ゴニョゴニョ」

「・・・・／／／」

「？？？」

まぁ最後ガッツンっと行って下さい兄貴

「カオスだな」

そういうこと

蟲（後書き）

か、感想評価待ってます・・・

次こそＦＡＴＥラスト

希望のほうもよろしくお願いします・・・ガク

強襲「黄金」（前書き）

反省はしていない後悔もしていない

強襲「黄金」

「右手を持ってかれるとは・・・・はぁ・・・」

直視の魔眼によって再生が出来なくなった腕を見て溜め息を一つ

「ケ・・・・ン？」

「起きたか、マスター」

眼を擦りながらベットから体を上げ此方を向くイリヤ

「敵は・・・・倒したの？」

「はぁ・・・・逃げたに決まってんだろ」

「そうね」

不甲斐無いのか顔を伏せてしまう・・・・

「あ～もう！気にするなって、俺に魔力供給を出来てるだけで十分

凄いんだから」

「・・・・」

顔を上げ俺の腕を無言で見る。どうやら俺の腕を持ってかれた事を気にしてるみたいだ

「あ～コレか？大丈夫だ。こうすれば・・・・」

闇で腕を構築していく・・・・そして出来上がる禍々しい義手

「・・・・・な？」

「ごめん」

うぁおおおおおおおおおおお、俺人に謝れ慣れてないから如何したら

「あーーーもう！！マスターらしくねぇ！！
そこは「やっぱり雑魚ね、ケン」だろーーーーー！？」

「ぷっ・・・・そうだね。」

ほっ・・・・何時も通りに戻ってよかった

≪ドガッガッガガーーンッ≫

「「!?」」

部屋に響き渡る破壊音

「くっ敵か!?油断した」

「ケン!行くわよ」

「・・・・wおう!」

どうやら吹っ切れた様子のマスターを追う

「ふっ聖杯の器を貰い受けに来てやったぞ雑種」

「ケン、あのサーヴァントのクラスそして真名は?」

「クラス・アーチャー、真名・ギルガメシュ・・・・こりゃまた大物だな」

広間に出た俺たちの前には黄金の鎧を着たサーヴァント、ギルガ

メシュ

「ケン・・・・やれる？」

「やれる？じゃ無くて、やらないといけないだろ？」

「そうね・・・・やっちゃえ！ケン」

「ＯＫ～マスター！」

≪シュー≫

俺は作り上げた義手をそのまま糸のように薄く伸ばす

「ふっ雑種ごときが我に刃向かうか」

≪ズズズズッｓ≫

無数の武器がギルガメシュの後ろに展開される

「俺は雑種じゃねぇ・・・・【魔王】だ」

≪シャシャシャシャッ≫

薄く延びた義手が相手を貫くように四法八方から襲い掛かる

「ふんっ！」

≪ガガガガガッ≫

だが糸は相手にたどり着く前に打ち落とされる

「まだまだぁ！！【影糸】」

≪シュルッ≫

あらゆる影から黒い糸が飛び出しギルガメシュに追撃する

「ちっ」

≪ザザザザッ≫

後方に飛び上がり糸を避け、そのまま宝具たちで打ち抜く

≪ドガーーーン≫

「（っく、やっぱりイリヤの魔力供給が何時もより少ない・・・）」

「ククク中々楽しかったぞ雑種・・・・褒美だ受け取れ」

手の甲を後ろに向け一つの剣を引き抜く

「エヌマ・・・・・エリッシュ！！」

「ちぃ！？【闇よ我を守れ】」

≪バタッ≫

俺が闇で盾を作ったと同時に後ろにいたイリヤが倒れる

≪ドガガガッガガガガガガッ≫

「ちぃ！？・・・・イリヤだけでも！！【転移】」

そして、完全に魔力供給が無くなった俺の盾は破壊される

「ほぅ？アレを受けてまだ立っていられるか雑種」

「はぁはぁ・・・・雑種じゃねぇ【魔王】だって言ってんだ・・・・ろう・・・・が」

そのまま地面に倒れる俺、体が光の粒に変わっていく

「主人を逃がしたか・・・まぁ良い」

消えていく俺に背を向け去っていくギルガメシュに言う

「次は殺す・・・覚悟しやがれ」

「ふんっ」

≪ザシュッ≫

止めといわんばかりに一本の剣が俺の頭を貫く

強襲「黄金」（後書き）

終わりでは無いのであしからず

感想評価待ってま～す・・・もうそろそろアンケート取っとくか

次の世界希望があれば感想に投票お願いします

最終決戦「起」

「ここは・・・・」

最初に見たのは見覚えの無い天井だった。身を起こし周りを見渡す

「・・・・ケン？」

自分の相棒の名を呼ぶが帰ってくるのは静寂

「まさか！？」

ラインが繋がっていない、つまりサーヴァントの消滅と敗北

「・・・・・また1人」

≪ガラガラ≫

「！？」

「ん？起きたか、イリヤ」

そして部屋の戸が開く、そこから入ってきたのは
自分の兄であり弟の衛宮士郎

「なんでお兄ちゃんが・・・・」

「何でって此処一様、俺ん家なんだけど」

自分の頬を掻き苦笑いで私を見つめる

「・・・・何で助けたの」

「そりゃ家の前で人が倒れてたら助けないわけには行かないだろ？」

当然のようにそう答える・・・・そして思い出したかのように聞いてくる

「・・・・お腹すいたろ？」

「空いて≪クー≫・・・・／／／／」

断ろうとしても体は正直だったようで小さくお腹が鳴る

「ほら、食事できてるから」

「うん／／／」

そのまま士郎の後ろを付いて行き一つの部屋にたどり着く

「士郎！遅いで・・・・っ！？」

「起きたようね、イリヤスフィール」

中に入った瞬間その場の空気が重くなる

「ちょっ落ち着けって！皆」

「士郎は黙ってなさい！」

「・・・・っ」

士郎を黙らせ私を睨む凛

「そんなに睨まなくても私にはもう戦う力は無いわよ」

「「「「「「「！？」」」」」」」

その場に居た全員が驚愕に染まった。それもその筈3人のサーヴァントが力をあわせても勝てなかった規格外な英雄がやられたのだから

「私の魔力が弱っている時に奇襲されたのよ・・・・」

「誰にやられたのよ・・・・」

“誰”にやられたか・・・・それもその筈全てのサーヴァントは賢一以外全て此処に揃っているのだから・・・アーチャー、セイバー、ランサー、ライダー
生き残っているのはこの4体と賢一だけだった筈であった。

「アーチャー・・・・」

「・・・・」

その場に居た全員が赤い外装を着た一人のサーヴァントを見る

「そのアーチャーじゃ無いわ・・・10年前の生き残り」

「「「「「!?」」」」」

「まさか・・・・っ」

セイバーは見覚えがあるのか息を呑む

「ギル「我の事だ雑種ども」！？」

「っち！？伏せろ！！」

≪ドガガガッガガッガガ≫

同時に武器の雨が降り注ぐ

「・・・・8体目のサーヴァント」

「生きていたのか・・・・！！」

「フンっ・・・こいつは貰っていくぞ」

何時の間にかその手に担がれているイリヤ

「セイバー！「ランサー！「アーチャー！」「ライダーお願い」」」

「了解した「おう！「ふっ「はぁ！！」」」」

その場に居たサーヴァントが攻撃に掛かる・・・・だが

「ふっ・・・丁度良い、新たに手に入れた力験させて貰うぞ雑種」

ギルガメシュの王の財宝から延びる黒い手・・・・

「なっ!?」

≪ザザザザッ≫

その手が触れた物が全て腐敗して行く

「くっ」

「おいおいっ!?」

そして腐敗し終わると同時にその場から消える手

「っち」

「逃げられたか・・・」

「それにしてもあの手」

その場には既に金色のサーヴァントの姿は無い

「厄介ね・・・」

「でも何でイリヤを」

「それはイリヤスフィールが聖杯の器だからです」

「・・・・っ!?」

「なるほどね・・・桜、詳しく話してくれる?」

「はい」

此処でのイレギュラーの発生そして戦いは終わりを告げようとする

「なんでさ・・・・・orz」

士郎の家が大惨事に成っていたのはお約束

最終決戦「起」（後書き）

感想評価待ってま～す！

賢一が次に行って欲しい世界などがあれば感想に投票してください

なければ、作者が自動的に考えますので

最終決戦「集」（前書き）

久々の連・・・・疲れる

最終決戦「集」

「・・・よっと、久々の座ですな」

久々に戻って来た座

「さぁてと帰ってきてなんだけど・・・・・」

そして賢一は行動を起こす

「もう、“行かせて貰うぜ”」

≪ゴゴゴゴゴゴゴゴ≫

その言葉と同時にあらゆる場所から鎖が飛び出し賢一を拘束する

「うお!?・・・・はははwそんなに行かせたくねぇか?世界」

≪ジャラララッ≫

肯定だと言わんばかりに増え続ける、鎖

「だがな～俺は人に飼われる気はねぇんだ」

【だから】

【さよならだ】

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

≪バギッビギギギギイッ≫

破壊される鎖、そして空間が裂ける

「さぁ、まずは仮を返しに行くか・・・・ククク」

【魔王】は自由を手に入れ復活を果す

～～士郎～～

「士郎、行くのですか・・・・？」

「ああ、イリヤを【姉さん】を助けに行く」

桜から全てを聞き、決意を新たにし【正義の味方（ゆうしゃ）】は動き出す

「ふん、あんた一人で行く気？」

「先輩、私も手助けします」

「言峰には仮が有りますしね」

集う仲間達

「皆・・・・行こう！！」

「ええ／はい！！」

聖杯戦争の終わりへと進む

～～～終わりの始まり～～～

「クハハハハッ！！雑種ごときが我に逆らうとは」

「ギルガメシュ！！」

その場には無数の黒い手が生えている。その手に持たれている全てが宝具

「士郎達はイリヤを此処は私たちが何とかします！」

「・・・だけどっ！」

「良いから行け小僧！！」

アーチャーに掴まれそのまま飛ばされる

「なにっ「忘れるな、貴様がイメージするのは最強の自分、外敵などいらぬ、
貴様が戦うのは自身に他ならない・・・・行け！！」」

アーチャーの攻撃で闇に飲まれた英雄王との戦いが始まる

「ふっフェイカーめ」

「ふん、英雄ともあろうものが腑に落ちたな」

「4対1ってのは気にくわねぇな」

「ですが・・・・」

「気は抜けない」

ウネウネと動いていた手が動きを止め持っていた剣を一斉にこちらに向ける

「ははははっ冗談じゃねぇぞ」

「くははははハハh死ネェ雑種ュウウ！！」

≪ドガァアーーーンッ≫

・・・・・・・・・

「言峰！！」

「フフ来たか少年」

あれが聖杯と疑問を持つほど禍々しいものが言峰の後ろにあった

「だが一足遅かった」

「イリヤ!?」

イリヤを中心にその禍々しいものが纏わり付いている

「きさまぁああ!!」

「士郎!?」

「ふんっ落ち着きたまえ」

≪パチン≫

言峰が指を鳴らすと同時に黒い手が士郎達の足を掴む

「コレはギルガメシュの!?」

「ギルガメシュ?・・・いやコレは元々聖杯から作り出したもの

だ」

≪ズルズルッ≫

黒い手が闇に土郎達を引きづる

「くっ！？」

「ちぃ！」

I am bone of my sword.
体は剣で出来ている。

Steel is my body, and fire is my blood
血潮は鉄で、心は硝子。

I have created over a thousand blades.
幾たびの戦場を越えて不敗。

Unknown to Death.
ただ一度の敗走もなく、

Nor known to Life.
ただ一度の理解もされない。

Ｈａｖｅ　ｗｉｔｈｓｔｏｏｄ　ｐａｉｎ　ｔｏ　ｃｒｅａｔｅ
ｍａｎｙ　ｗｅａｐｏｎｓ.
　彼の者は常に独り　剣の丘で勝利に酔う。
Ｙｅｔ，ｔｈｏｓｅ　ｈａｎｄｓ　ｗｉｌｌ　ｎｅｖｅｒ　ｈ
ｏｌｄ　ａｎｙｔｈｉｎｇ.
　故に、生涯に意味はなく。
Ｓｏ　ａｓ　Ｉ　ｐｒａｙ，ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｂｌａｄｅ
ｗｏｒｋｓ.
　その体は、きっと剣で出来ていた。

「っ！？」

士郎に響いてくる赤い外装を着た男の声、そして何処か悲しい詩

「先輩っ！？」

「想像するのは最強の自分・・・・同調開始（トレースオン）」

想像する。最強の剣を

「エクス・・・カリバーーー！！」

≪ドガガガッガガガガっ≫

そしてその場に居た黒い手は全て消えうせる

「士郎それ・・・」

「話は後だ・・・来る」

先程とは比にならない黒い手がこちらへと迫ってくる

「ふー」

大きく深呼吸・・・そして自分の詩を語る

Ｉ　ａｍ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ.
体は剣で出来ている。

Ｓｔｅｅｌｉｓ　ｍｙ　ｂｏｄｙ,　ａｎｄ　ｆｉｒｅｉｓ　ｍｙ　ｂｌｏｏｄ
血潮は鉄で、心は硝子。

Ｉ　ｈａｖｅ　ｃｒｅａｔｅｄ　ｏｖｅｒ　ａｔｈｏｕｓａｎｄ　ｂｌａｄｅｓ.
幾たびの戦場を越えて不敗。

Ｕｎａｗａｒｅ　ｏｆ　ｌｏｓｓ.
ただ一度の敗走もなく、

Ｎｏｒ　ａｗａｒｅ　ｏｆ　ｇａｉｎ.
ただ一度の勝利もなし。

Ｗｉｔｈｓｔｏｏｄ　ｐａｉｎ　ｔｏ　ｃｒｅａｔｅ　ｗｅａｐｏｎｓｗａｉｔｉｎｇ　ｆｏｒ　ｏｎｅ'ｓ　ａｒｒｉｖａｌ.
担い手はここに独り剣の丘で鉄を鍛つ。

Ｉ　ｈａｖｅ　ｎｏ　ｒｅｇｒｅｔｓ.Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｏｎｌｙ　ｐａｔｈ.
ならば、我が生涯に意味は要ず。

Ｍｙｗｈｏｌｅｌｉｆｅｗａｓ”ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｂｌａｄｅ　ｗｏｒｋｓ.”
この体は、”無限の剣で出来ていた”。

「固有結界!?」

「士郎!コレ」

「はぁはぁ・・・戦う準備は十分か?」

最終決戦「集」（後書き）

感想評価待ってます

アンケートの方もどんどん募集中

@2話ぐらいでおわりそうですな

最終決戦「終」（前書き）

長かったな・・・まぁ取り合えずコレでＦａｔｅはお終い

最終決戦「終」

「うぉおおおお！！」

≪ガガガッガガアッ≫

飛び散る無数の剣

「クゥ！？」

≪ドシュドシュドッ≫

言峰の傍の黒い手が消えては再構築される

「まだまだぁあああ！！」

≪ドドドドドオドアオアオアアアアッ≫

だが、それよりも早く士郎は構築し破壊する

「ククククク実に素晴らしい！！」

コレだけの不利な状況で奴は笑う

「だが！！時は既に“遅い”！」

「っ！？」

そして、“聖杯”が出来上がる・・・・

「さぁ聖杯よ！！我の願いを！この世に混沌を！！」

「しまった！？」

≪ゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ≫

世界が揺れる・・・・そして

≪バキッ≫

「なっ！？」

聖杯がわれる・・・いや破壊される“内部”より伸びでた手により

≪バキャバキッ≫

「き、貴様は!?」

全てを取り戻し・・・・闇は【魔王】は蘇る

≪ドギャーンッ≫

「マスターが世話になったな?ああぁ!!」

「ケン・・・イ・・・チ」

さぁ始めようか・・・一方的な戦争(あそび)を

～～～賢一～～～

久々の登場だぜ!!・・・・外に出てみれば言峰?だっけが近くに居てマスターが裸だし、うんまぁ～最初にやる事は決まった

「マスターが世話になったな?ああぁ!!」

言峰の腹に一撃を叩き込む

「吹き飛べやぁああ・・っ！？」

「ククククっそう簡単には行かんよ」

≪グチュグチュッ≫

俺の腕に纏わり付く黒い手・・・・うぇ何だコレ？気持ち悪い

≪ドガーーーンッ≫

「「「「っ！？」」」」

セイバーたちの居る方向から凄まじい突風が吹く

「どうやら終ったようだな、来い【アーチャー】」

≪ブオンッ≫

「くかっかかかあああｋｋｋｋｋｋ。．あ@ｄｌふぁｌ」

霊呪によって呼び寄せられたギルガメシュは既に
原型を保っていなかった金色で輝いていた鎧は黒い手
によって漆黒に染められ、顔の半分も黒い手が張り付き赤い眼が此

方を睨む

「士郎！！」

「セイバー！無事だったのか！？」

その後を追うようにセイバー達がやって来る

「なっ！？貴様は！」

「ちょっ暴力反対！！」

ケンイチをみて驚いたセイバーが睨む

「それにそんな事より今は前の敵だろ？」

っと言い化け物染みたギルガメシュを指差す

「っと言っても俺一人で十分だがな・・・士郎！！」

「ん？うぉお！？」

士郎に向かい抱えていたイリヤを投げ渡す

「あぶないだろ！？」

「悪い悪いｗｗ」

そして今までに無く真剣に相手を睨む

「今のお前じゃあ借りを返せネェがまぁいい」

“死ね”

その一言を呟くと同時に世界が静止する・・・

「さぁ、【終わり（うたげ）】の始まりだ！！」

言峰の周りに生えていた黒い手が賢一によって飲み込まれる

「なっ！？」

「さぁあ貴様が望んだ【混沌】だ味わえ！！」

賢一の背後に集幅された黒い腕が言峰を飲み込む

「一生苦しみな・・・さて、次はお前だが」

「くｓｄぁｋ；ｆｋｓｈだ！！」

此方へともう突進してくるギルガメシュ
その手にはエアが握られている

「：ｐふぁｊｐさい：ｊさ！！」

≪ドガガガガッ≫

エアの攻撃がまともに入る

「そんな適当な魔力の込め方じゃきかねぇよ」

≪ザク≫

だが平然と立ち空きだらけのギルの腹に創り上げた剣を突き刺す

「借りはお前の本体に返してやる」

「雑種ごときが・・・・」

意識を取り戻したギルガメシュは一瞬笑い消える

「・・・さって!!終わった終わった!!」

「「「「「・・・・・」」」」」

皆さん絶句ですね分かります・・・・

「うっ・・・く・・こ・・こ・・は?」

「おっ!起きたかマスター」

「何で?ケンが・・・?」

眼を覚ましたマスターの前に顔を見せる

「ふふふ、それは俺がさいきょーだからさ」

「・・・・・」

うぐっ!?久々の「はいはいワロスワロス」な眼!

「それにしてもあの黒い手は何だったのでしょうか・・・」

「・・・・♪～」

「ケン？何か知ってるでしょ」

「ギクっ！？」

やべやべぇ！？実はアレ自分の一部でした何て言ったら殺される！！！主に精神が

「・・・・さっさぁ？」

「ジーッ」

「そ、そんな事より如何だ？セイバー達、受肉した感じは？」

「「「「「「「は？・・・はぁ！？」」」」」」」

サラッと、とんでもない事を言うケン

「あれ？気付いてなかったのか？」

「なっ本当に受肉しているだと！？」

アーチャーさんの驚きいただきました

「まぁ、受肉したんだから此れからの世界を生きるもよし嫌なら・・・まぁ我慢しろ」

「「「「勝手だな」」」」

わおっ神様もビックリな程に口が揃った

「まっコレで“さよなら”だな」

「へ・・・・？」

賢一の足が消え始める・・・※次の世界に行くための唯の演出です

「ケン!!残らないの・・・？」

「ああ、お前にはもう家族が居るだろ？俺は必要ない」

「・・・でもっ!!」

イリヤが涙目で此方を向いてくる・・・・
あれ?何でこんなに悲しそうなの?良く分からん

「泣くな泣くな、また会いに来るさ」

「・・・だったら、“さよなら”じゃない」

「あははははっそうだな!“またな”!!」

「うん、待ってる!!」

そして賢一は旅立った

最終決戦「終」（後書き）

さてはて、今の所次に行く世界で上がってるのが“とある”何ですが
最終アンケートーーー！！

？とある魔術の禁書目録（まぁ全巻買ってるので問題なく進めることは出来そう。でもそれのせいか原作ブレイクは少し躊躇する・・・）

？オリジナル（こっちの方が作者はやりやすい）

？その他（希望を書いてください）

眼を覚ますと（前書き）

とある魔術の禁書目録の世界です。どうぞ

眼を覚ますと

久々の精神世界ですな・・・・あいかわず真っ暗、次は何処の世界に行くのやら

賢一の足元に電気が流れる

「え?ちょｗ・・・アバばば場ッバババババｂｓｂｂｓバババッバア」

≪プシュウウッ≫

ケンイチが次に眼を覚ますと・・・・

「・・・・（何処だ此処）」

≪ポコ・・・ポコ・・・≫

何かのポッドの中に入れられている。そのポッドにはｍｉｓａｋａ１０３４の文字

「・・・・・（ん?）」

ポッドにはｍｉｓａｋａ１０３４の文字

「・・・・（ｍｉｓａｋａ？ミサカ？御坂？みさかぁあああ！？）」

≪ボココココッ≫

ポッドの中に空気が流れ出る

「検体番号１０３４に以上あり！？・・・うそ・・・目覚めてる」

「・・・（やべぇよ）」

何か目の前に居る女性が驚いているが無視

・・・・俺の周りには同じようにポッドに入った人が何人もって完璧に“とある”の“シスターズ”ですね。分かります

「・・・（待てよ？っと言う事は俺の“息子”は・・・・・）」

恐る恐る、自分の下を見る・・・・

「・・・・（ノォオオオオオオオオオ！！？？）」

≪ボココッ≫

風間賢一♂改め御坂賢一♀です。・・・・・よろ～ｏｒｚ

「早く、検体１０３４号を出せ！！死ぬぞ！？」

「「「「は、はい！！」」」」

「（息子～ｍｙ　ｓｕｎよ～・・・・帰ってきてくれ～（泣））」

心の中で嘆いているとポッドが開き始める

「ぐぉ！？」

そしてそのまま頭から床にぶつかる賢一・・・・痛い

「なっ！？男性児！？」

「・・・（男性児？何言ってんだ、さっきは・・・・！？）」

そしてもう一度下を向くケンイチ

「息子ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！？
って御坂は感激するぜ」

思わず大声を上げる・・・・御坂賢一♂です！！イエェイ！！

「・・・突然変異か、だがしかし」

「あれ？って御坂は男なのに可愛く首をかしげたり」

何だこの口調はぁあああ！？

「どう言う事だ！？世界意思か！？世界意思なのかぁあ！？
って御坂は頭を抱えてしまうぜ！？」

もういいや、男に戻れただけ・・・・うん

「って御坂はポジティブだったり」

「と、取り合えずこの検体を調べるぞ。連れて行け！！」

研究員らしき人達が俺を抱えて連れて行こうとする

「そう安々と連れて行かれる俺じゃないぜ!!って御坂は少しかっこつけるぜ」

「なっ!?」

≪ドガーーン≫

そこら辺に転がっていた鉄を電撃で吹き飛ばす

「おお～適当なもんで出来ちゃったぜレールガン。って御坂は呆れたり」

「くっ!?どうなっている!?」

驚いている研究員をよそに先程の攻撃で大きく開いた穴から外に出る

「なっ!?飛び降りた!?」

「はっ?」

穴を出るとそこは大空・・・・あれ?デジャビュ

「うぁあああああ!?【転移】って御坂はっ」

転移をして適当な場所へと移動する

「・・・・とある魔術の禁書目録か・・・・って御坂は少し感激する」

口調何とかしなきゃな・・・・

「ぐぇくしょいっ!!・・・・ずずずッって御坂は大きくクシャミをするぜ」

後服も・・・・・

眼を覚ますと（後書き）

後悔も反省もしていないぜ！！

感想評価待ってます！！

ミサカバリアント（前書き）

ミサカバリアント

あれから2ヶ月、賢一は学生達が通る歩道に紛れ込んでいた

「はぁ・・・濃い2ヶ月だった。って賢一は疲れを現したり」

歩道を歩きながら肩をガックと下げる。最初の1ヶ月ほどは研究員から
逃げるためにミサカネットワークからの離脱、そして自分の身分証明書の
偽装をしていた。

途中でラストオーダーが話しかけてくると言うハプニングも有ったが
何とかミサカネットワークからの離脱に成功。

そして残り1ヶ月は何だ・・・あれだ口調・・・・・をだな・・・・・
何とか「ミサカ」から「賢一」に変更する事に成功。

未だに特訓中、目標は「語尾に何もつけない」

「後は怪しまれないように学校への転入か。と賢一は少し神妙に考え込むのであった」

この２ヶ月で賢一の髪はボサボサに成り、オリジナルと瓜二つだった顔
髪の毛により隠れている。簡単に言うと１００人中７５人は根暗と言うだろう

「まぁ・・・・適当で良いだろう。と賢一は楽観的に言うんだぜ」

っと言う事でまずは転校手続きだな

「・・・・転校手続きってどうやるんだ?と賢一は顔を顰めながら言うぜ」

丁度目の前に学校がある・・・・・ふむ、もう此処で言いか！

「シクジッタ・・・・ｏｒｚと賢一は両手両膝を付いてショックを表現するぜ」

「如何したんですか?風間ちゃん?」

俺の目の前には幼女がいる。だが唯の幼女ではない大人“の”幼女である。
“な”では無いので悪しからず・・・・そして皆さんお分かりのように【月詠小萌】である

油断した普通な学校だし問題ないだろうと思って入ったが・・・まさか主人公の学校だとは
しかも、【同じクラス】だなんてｏｒｚ

「ほら、風間ちゃん！行きますよ」

「はい・・・と賢一は絞りカスの様な声を出すぜ」

「面白いですね～風間ちゃんは～～ｗ」

いえいえ貴方のクラスには負けますよソンアコトを考えながら
小萌先生の後ろをトボトボと付いていく

「それじゃ、風間ちゃんは此処で待ってて下さいね♪」

「はい。と賢一はビシッと肯定するぜ」

中へと入る小萌先生の後姿を見送り数分待っていると中から声が掛かる

「風間ちゃ～ん入ってきてください～」

「どうも、風間賢一です。と賢一は当たり障りの無い自己紹介をするぜ」

って、あれ?上条さん居ないじゃん、生上条見たかった・・・

「それじゃ、風間ちゃんは一番後ろの席に座ってください」

「わかりました。と賢一は一番隅の窓際に少し喜びながら移動するぜ」

何か視線が痛いぜ・・・あ、喋り方か

【変種(バリアント)】は動き出す

ミサカバリアント（後書き）

短いですがまぁ、こんなものでしょう

感想評価待ってます

それと今後の更新について平日は最低1話。休日は二日合わせて4話以上
で生きたいと思います。まぁ作者のやる気が無くならない様に応援よろしくお願いしますｗｗ。

この調子だと“とある”もすぐ終りそうなのでアンケート取りはもうしてしまおうと思います

?スクライド（知らない人がいるかな?）

?オリジナル

?その他（希望よろしくお願いします）

このアンケートは希望で増えていきます

最終アンケートでもっとも多かったのになります

最終は半分進んだら取りますｗ

アンケート回答よろしくお願いします

動き出す物語（前書き）

更新・・・平日に1話はきついので平日は二日で最低1話にします。

動き出す物語

「ふあぁ～よく寝た・・・と賢一は目を擦りながら起床します」

ある廃墟で賢一の朝は始まる。

「・・・・んぁ？と賢一は不意に現れた気配の方向を向きます」

ボーとしていると後ろに人の気配が現れる

「・・・・ムーブ・・・ポイント・・・と賢一は目の前の人物の二つ名を口走るぜ」

「変な喋り方をする奴ね・・・・まぁ良いわアレイスターが貴方に会いたがってるわ、付いてきてもらうわよ？」

「あら？場所がばれちまった・・・・と賢一は目の前の“敵”を見据えます」

そう口走った瞬間相手から殺気がもれる

「怖い怖いｗと賢一は怖がる振りをするぜｗ」

「たかが、Ｌｖ３の分際が調子に乗ってんじゃねー！！」

その言葉と同時に俺の居る場所の空間が歪む

「Ｌｖ３？ククク勘違いしてネェか？と賢一は不気味な笑い声を上げるぜ」

「なに・・・？」

立ってられる筈の無い空間で不気味にそれは声を上げる

「俺は、【変種（バリアント）】だぜ？他の奴等と同じにしちゃあ行けないぜぇ～と賢一は誇らしげに言います」

「【変種（バリアント）】？」

どうやら、俺がどういう存在かは聞かされていないようだ。
それを聞いて更に不気味に笑顔を作り、指を天井に向ける

「なにを・・・っ！？」

「余所見をしちゃあ駄目だよ？【転移】と賢一はこの場から離脱するぜ」

全てを言い切ると同時にその場から姿を消す

「テレポート!?」

相手の驚きの声がある廃墟に響き渡った

「むぁあ～新しい家、探さねぇと・・・・と賢一は肩をガックしと降ろします」

賢一はそのまま学校とは違う方向に歩みを進める

「はぁ～学校は何日かはお預けだな～・・・と賢一は上条を見たかったと小さく呟きます」

適当な道を歩いているとゴーグルをかけた少女が眼に入る

「・・・・（あ～そういや、もう始まってんだっけ・・・）」

その少女をジッと見つめた後道行く人に紛れ横を通る

「おはよう・・・と賢一は兄弟に挨拶をしてみたり」

「っ！？」

目覚めの言葉を言い、もう一度人にまぎれる

「検体番号（シリアルナンバー）１０３４号・・・ミサカバリアント？
とミサカは後ろを振り返りながら呟きます」

兄弟のその言葉を耳にしながら

動き出す物語（後書き）

感想・評価よろしくお願いします

アンケートで増えた項目

?リボーン（・・・・如何いう介入をしたら良いか良く分からない）

?ジョジョ（作者は原作知識皆無・・・やれと言うなら期間を貰う）

今のアンケート項目

?スクライド

?オリジナル

?リボーン

?ジョジョ

?希望

アンケート回答お待ちしています～

一方通行

「やっぱり・・・気分が悪いな」

同類が死ぬ場面というのは・・・・

「クハハハハ、弱ぇな～・・・・んぁ？」

肌が恐ろしく白い中性的な少年が此方を向く

「何だテメェ・・・？」

「君が殺した奴と同じ存在さ・・・・と賢一は目の前の死体を指差すぜ」

「同じ・・・？」

俺の言葉を聞いて同じと言う言葉に疑問を浮かべる

「まぁいい・・・で？何だ敵討ちか？」

「いやぁ唯の見学・・・・と賢一は悲しい眼で相手を見つめます」

相手はそれが気に入らなかったのか、そのまま背を向けて闇に消えていく

「不憫な奴だ・・・と賢一は小さく小さく呟きます」

そして俺もそいつとは違う方向の闇へと姿を消す。兄弟がやって来る前に

・・・・・・・

朝、賢一は新たな廃墟で朝食を取っていた

「・・・・結構いけるなコレ。と賢一は自分の料理センスに驚きます」

と電気で焼いた食パンを口にしながら言う

「にしても・・・平凡だ。と賢一は歓喜に溢れ返ります」

久々のお決まりセリフを言えて嬉しくなる。だが

「・・・・これって平凡か?と賢一は平凡って何なのか問いかけるぜ」

廃墟で暮らしている自分に疑問を持つ

「ん?あれは・・・と賢一は昨日の夜を思い出しながら少年を廃墟から見るぜ」

廃墟の真下に見えるシマシマの服に白い肌赤い眼をした少年

「これも、運命ですか。と賢一は廃墟から飛び降りながら言います」

そしてその少年の目の前に2回目の挨拶をする

「おっはよう~♪と賢一は陽気に挨拶をするぜ」

「ああ?誰だテメェ?」

此方を睨みつける少年

「あら?忘れちまった?昨日の夜。と賢一は少し顔を沈めて見ます」

「んぁ・・・ああ、昨日の根暗か」

と悪気も無いように賢一がそれなりに気にしている事を言われる

「ガーンッ!?と賢一はわざとらしく声を上げます」

「うぜぇ・・・・」

それだけを口にして俺の横を通り過ぎていく

「え、ちょ?待て、と賢一は肩を掴むぜ」

「うぜぇ、って言ったのが聞こえなかったのか?三下」

≪ドギャッ≫

何時の間にか俺は廃墟に煙を立てて倒れこんでいた

「・・・流石、【一方通行】と賢一は既にいない少年の名前を口にするぜ」

さぁてもうそろそろ、介入しようか・・・既に検体番号は１０３２号

「ククククク、楽しみだ」

【変種（バリアント）】と【最強】が交差する

一方通行（後書き）

感想評価待ってます

アンケートもねｗ

最弱と最強そして規格外（前書き）

ああああ！！やっぱり駄目だ、原作ブレイクしたくネェ！！早めに終らせよう！！
って終らせれる場所が・・・・フフフフ

最弱と最強そして規格外

人気の無い路上で鳴る金属音

「はぁ・・・はぁ・・・」

「おいおい、逃げてばっかかぁ？」

少女が向ける銃の先にいる少年がゆっくりと近づいていく

「・・・っ！」

「くははは、弱ぇえ！！弱ぇえなぁ！！お前」

引き金を引くが全ての弾は少年には当たらず周りの建物に当たる

「・・・・ガハッ！？」

少年に追いつかれ触れられると同時にやって来る痛み

【助けてやろうか・・・ｗ？と賢一は兄弟の危機に颯爽と現れます】

自分の死を覚悟したと同時に頭に響く声

「ミ「おい、この場合実験ってどうなるんだ?」・・・っ!?」

少年がある方向を向いたまま質問を問いかける。
痛みを耐え自分もそちらへと顔を曲げる

「離れろよ・・・・テメェ」

「ああ・・・・?」

そこにはツンツン頭の少年が立っていた・・・一般人のはずの少年が
【上条当麻】が

「今すぐ、御坂妹から離れろっつってんだよ!!てめぇ!!」

～～～～～

まさかの俺登場を先越された賢一です・・・てか

「パネェす。と賢一は呆然と5k離れた少年を見詰めます」

最初はボロボロだったけど途中でフルボコにするなんて

「マジパネェす。と賢一は嬉しさ半分で戦いを観戦します」

【一方通行】が風を固まりに圧縮し始めている

「あらら、ピンチ?と賢一は上条たちを見て呟きます」

じゃぁ今度こそ・・・・行きますかね

「確か風車を回すんだっけ?と賢一は転移をしながら言うぜ」

ビルから一瞬で姿を消すと遠く離れた戦闘に入り込む

「「なっ!?／ああ・・?」」

「やぁやぁ、始めまして、お久しぶり・・・・と賢一は笑いながら二人の少年とオリジナルに挨拶をします」

突然自分たちの中心に姿を現した少年に驚きの声を上げる
・・・そして少年は名乗りを上げる

「検体番号（シリアルナンバー）１０３５号・・・ミサカ【変種（バリアント）】
と賢一はカッコよく決めます」

「ミサカバリアント・・・！？」

「あぁん？」

２人は驚愕し、もう一人は睨んでくる

「それでは【最強】さん・・・やられてくださいｗと賢一は相手
を沈黙させます」

≪パチン≫

賢一が指を鳴らす、それだけ【最強】が作り出した風が消える

「なっ！？」

「「嘘／だろ・・・」」

そして次に【変種（バリアント）】が指を鳴らしたと同時に意識を失う【最強】

「はいw終わりwwと賢一は呆気なく終わった事に笑いがこみ上げてきます」

「おまえ・・・「また【明日】上条さん。と賢一は少年の名を呼びます」
なんで俺の名前を!?」

そのまま少年に背を向けその場を後にする

「あ、そうだ・・・兄弟達によろしく言っといてください。
と賢一は思い出したことを慌てて言います」

それだけを言い残し今度こそ消える

最弱と最強そして規格外（後書き）

感想評価待ってます！！

たぶん土日に終ると思うので大体５話ぐらい？

最終アンケート

？スクライド（知ってる人居るかな？）

？オリジナル（もう大体決まってます！！）

？ジョジョ（・・・がんばります！！ぶっちゃけ・・・いえ何でもないです）

？リボーン（とりあえずフルボコ）

？最終回（ネタｗｗコレ選ぶと本当にこの小説終るからねｗｗ）

魔術師（前書き）

更新が遅れた・・・まぁいい此処からが反撃だ

魔術師

久々の学校に賢一は来ていた

「・・・・ってあれ?と賢一は目の前の状況を把握します」

誰も居ない教室

「・・・・何故?と賢一は今日の日付を確認します」

今日は月曜日学校はある・・・と何気なしに黒板を見る。そこには

【明日から夏休み!!】

「な・・・んだ・・・・と!?と賢一は眼を見開きます」

気を取り直して、学校から出て当ても無く歩く事にする

「何処へ行くんだにゃ~?」

「お前は・・・と賢一はその男を見ます」

校門の前に持たれかかっている男が俺に話しかけてくる

「確か、同じクラスの“土御門”さんでしたか？とクラスメイトの名前を呼びます」

「そうだにゃ～風間賢一、いや“ミサカバリアント”」

男の口から放たれたのは俺のもう一つの名

「何処でそれを？と賢一は警戒します」

「アレイスターっと言えば分かるかにゃ～？」

なるほど、と言う事はコイツの目的は俺の捕獲と言う事

「そう言う事ですか・・・・ですが、貴方には俺を捕まえる事は出来ない。
と賢一は余裕をあらわします」

「その辺は心配ないにゃ～」

そう言いながら地面を指差す・・・・土御門の足元には大量の血、

いや問題なのは光り輝く【地面】

「なるほど【魔術】か。と賢一は冷静に状況把握をします。」

「魔術を知ってるのかにゃ～・・・何処で知った？」

最初のお気楽な感じが無くなり睨み付ける土御門

「まぁいい任務は完了だにゃ～」

「何を言ってるんだ？と賢一は相手の勘違いを訂正します」

そして、手を上に・・・！？

「やれやれ、土御門。彼は私が貰っていきますよ？」

「如何言うつもりにゃ～？姉ちん」

背後の女性のワイヤーの様な物に体を巻きつけられる

「上からの命令です・・・もし邪魔をすると言うならば」

「聖人の姉ちんとする気は無いにゃ～・・・」

刀を抜く動作をする女性それを見た土御門はそのまま路地裏へと姿を消す

「さて・・・貴方には付いてきてもらいますよ？」

「ありゃりゃ？魔術師側に捕らわれるような事をした覚えは無いんだけど
と賢一は今の状況に困惑します」

そして目の前の女性は次に口にする言動は

「いえ、私たちが用があるのは貴方の【魂】です」

「・・・・・」

驚愕、その一言に尽きる。俺は魔術師との接触をしたのは皆無あるとすれば教室で土御門と会うと言う事だけ

「兎も角・・・付いてきて・・・・・っ！？」

「どうやって知ったのかは知らないけど、そう簡単に連れて行かれるほど安くないよ
と賢一は目の前の女性の四肢の感覚を奪いながら言います」

その場に倒れる女性・・・少し闇で相手の神経系に入り込んで命令を
麻痺させてやったそれだけ

「ぐっ!?・・・何を・・・・?」

「はぁ～・・・取り合えず寝てください。と賢一はお決まりの動作をします」

≪パチンッ≫

指がなると同時に相手の意識が消える

「これは長居は出来ませんね～・・・と賢一は闇に紛れ込みます」

目指すはシスターズが作られた研究室

魔術師（後書き）

感想評価待ってます

現在の最終アンケート状況

?:スクライド　5

?:オリジナル　4

?:ジョジョ　1

?:リボーン　5

?:最終回　0

スクライドとリボーンが同表ですね・・・次がオリジナル

そしてジョジョ・・・最終回が0表か～誰もネタに走らないな

研究所（前書き）

今日で5話更新する気だったのに・・・ｏｒｚまぁしょうがないか

研究所

俺の目の前には検体番号１０３４の文字

「懐かしき生まれ故郷。と賢一は思っても居ないことを口走ります」

俺が生まれたポッド以外にもシスターズが入っていたと思われるポッドが
幾つかある。だが最初より数が圧倒的に少ない。たぶん他のポッドは違う
施設で移動され生まれたのだろう

「っと目的はそっちじゃなくて・・・・と賢一は本来の目的を思い出します」

その施設にまだ残っている大量の資料とパソコンそれを見渡す

「そんじゃ、まぁ調べますか～と賢一は虚ろな眼で喋ります」

賢一の背後から闇が広がり一つ一つ資料を飲み込み読み取っていく

「うぉ!?始めてやったけどコレはきついな。と賢一は物凄い衝撃

に驚きます」

読み取ると同時にやってくる大量の知識が頭に記憶される

「取り合えず俺はパソコンを・・・・と賢一は目の前のスパコンを起動させます」

PCの情報を読み取り、他のシスター達の生まれた場所をハッキングする

「て・・・言ってもハッキングしてるのは俺じゃないけどね～。と賢一は
想像した機械を見ながら呟きます」

PCの画面が次々と入れ替わる・・・そして全ての情報を開き終わると同時に
想像した機械が壊れる

≪ボンッ≫

「お疲れさん・・・・と賢一は機械を闇で取り込みながら言います」

そして開いてあるプログラムも資料と同じように闇に取り込む

「さてと・・・・準備も完了。さぁ兄弟達の借りは返させてもらうぞ？
と賢一は調べ上げた研究所へ移動します」

転移したと同時にみえる光景はやはり殻のポッド

「生体反応は無か・・・・【破壊】と賢一は施設の内部だけを綺麗さっぱり破壊します」

壊れていく機械と燃える資料

「さて次だ・・・と賢一は次の施設へと移動します」

何回かそれを繰り返し最後の施設へと移動する

「此処も殻か・・・？」

落胆する自分だがある物が眼に入る

「・・・検体番号２０００１【打ち止め（ラストオーダー）】に関

する資料
と賢一は何気なしにそれを手に取ろうとします」

スっとそれを手に取ろうとするが行き成り現れた人の気配にその場から姿を消す

「私としたことが忘れるところだったわ・・・」

「おい、女・・・と賢一は背後を取ります」

女性は慌てて銃を引き抜きこちらに向ける

「１０３５号ミサカバリアント！？」

「その名を知ってるって事はてめぇは関係者だな？と賢一は睨みつけます」

銃を無視しそのままその女に近づくそして女の顔が鮮明に見える

「そう言う事か・・・・と賢一は女性に背を向けます」

「・・・？どういう「行け俺の気が変わる前にな、と賢一は言います」・・・」

研究員は何も言わずに資料を持ってその場を後にする
あの研究員には兄弟の借りが有る

「・・・行ったか・・・・結局【破壊】俺がやれる事はコレだけか・・・と賢一は施設を破壊します」

そして施設を出ると外は闇で染まっていた。そこから聞こえる声

「ヨォ・・・久しぶりだな～？」

「これは【アイテム】【グループ】【スクール】【ブロック】それに【メンバー】の機械どもですか、と賢一は目の前の暗部に目を向けます」

闇から次々と現れる・・・

「どうやって、俺たちの事を調べたか聞き出したいとこだが」

「上からの命令だお前を捕獲する」

そしてその場は戦いの場・・・戦場となった

研究所（後書き）

感想評価待ってます

最終アンケート現在状況

?.5

?.5

?.1

?.5

?.0

飛び散る轟音

「流石Ｌｖ５が３人も居ると違いますね。と賢一は目の前の３人を見据えます」

「さっさと終らせてシャワー浴びたいわ・・・」

「クハハハ、私たち暗部を駆け付かせるほどなのでどんな奴かと思いきやこれは、役不足ですね～？」

「・・・・」

Ｌｖ５の３人を前に後の奴等はそれを眺めているだけ、そして二人は余裕で
一人は唯無言に此方を睨みつける。

「それでは、終らせましょうか・・・と賢一は覚えたての【超能力】を使います」

「なっ！？！私の【暗黒物質（ダークマター）】！？」

「っち、如何なってんのよ！？」

目の前のありえない光景、自分達の能力が一人の男によって使われている。
そして何よりも自分達よりも遥かに超えた能力の威力

「どうかしたのか？と賢一は嘲笑います」

「キサマァアアアアアアアア」

Ｌｖ５の一人が雄たけびを上げながら突っ込んでくる・・・“一人”だけが

「まず一人・・・と賢一は一人で突っ込んできたバカを沈黙させます」

「ガハァッ！？」

Ｌｖ５の一人【暗黒物質（ダークマター）】は気絶する。それを見たほかの奴等の誰かが唾を飲む音が聞こえる

「さぁ・・・ショータイムだ。と賢一は言います」

始まる一方的な戦い・・・

「【沈め】。とこの一言で全てが終ります」

「「「「「「「「「!?」」」」」」」」」

その場に居た人間が闇に飲み込まれていく

「なっ何だコレは!?」

「ちぃっ!?」

闇から逃れようと暴れまわり能力を放つ

「お前らの敗因はただ戦う相手を間違えただけそれだけだ。
と賢一は絶対的力の差を見せ付けます」

そして最後の一人が飲み込まれ終わる

「終わりですね。と賢一は・・・・っ?」

「クカカカＫＫＫＫ@：；%$・¥」

一人だけが闇の中から這い上がってくるその背に黒い翼を生やしながら

「・・・そう言う事ですか。と賢一は現状を把握します」

「死ネェエエエエエェエエ，％，％＆＄」

黒い翼を手足のように扱い俺を襲う【一方通行】

「だけど、まだ不完全・・・っ！？」

「アアアア＃＆％（，９，＆％」

突如として自分の体に現れる負荷、これはアクセラレーターからのよるものではないでは誰が？・・・そして自分の目に映し出される扉も窓も無いビル

「アレイスター貴様か・・・と賢一は睨みつけます」

「グアアアアア＃％＃，＃”Ｚ９８＆＄」

その隙にアクセラレーターの攻撃が当たり廃墟へと轟音を立ててぶつかる

「・・・まずはテメェを倒してやる。と賢一は立ち上がりながら言います」

「#’%$）（#”””＝！」

もう意識が無いのか言動が滅茶苦茶になっている

「次は完璧な状態でこい・・・と賢一は哀れな敵を撃ち滅ぼします」

「%#$%!’」

【無限の闇（アンリミデッドダークネス）】

アレイスター（前書き）

まぁコレで“とある”は終わりです・・・もう来る事は無いでしょう！！

アレイスター

目の前の画面に映る映像は異常、それだけしか言いようがない光景

「まさか、これほどまでとはね・・・」

画面上に広がっていた闇が消えると同時に二人の少年が現れる。
一人は地面に倒れもう一人はこちらを睨み付けている。
睨みつける一人の少年はある研究で生まれた突然変異体、
体の性転換及び、超能力はｌｖ５を凌ぐ程に強力、
何よりも生まれたばかりの状況で感情を持つという異常

「計画の障害は排除するべき・…」

そして逆さまの男とも女ともとれる存在は画面に映し出されている少年
を唯一破壊し除去する装置を起動させる

～～～～～～

「ふぅ・・・・・と賢一は倒れ込む少年を見てため息をつきます」

アクセラレーターを倒し終えた俺は闇を解きビルを睨む

「っ!?ぐぁあああああああ!?!?!?と賢一ハ・・・突如ノ・・痛・・ミニ・・・苦シ・・・ミマス」

体が内側から何かに蝕まれるように悲鳴を上げる

「ぐぅうう・・・と賢一は体の異常を調べます」

体に闇を潜り込ませる。驚く事に体の一つ一つの細胞同士が喰らい合っていた。

「なんだ・・・これぁああ!!?」

賢一はその場に倒れこむ・・・そして等々体の異常は表面にも出始める

「ググウグ、マジカヨ・・・トケンイチはケンイチハ・・・・」

体の半分が裂け口となり俺を喰らう

≪グシャグチャメギュ≫

「クソガァアアアア！？」

そして全ての細胞が一つに成った球体が出来上がる。
だが異変はそれだけでは終らない。肉の球体から【闇】がもれる

「アレイスタァアアアー」

そして【変種（バリアント）】は肉体を捨て、闇の化身となる

「【覚悟】できてるんだろうなぁああ！！」

【変種（バリアント）】は【魔王（サタン）】いや【邪神】となる

「先ずはソコから引きずり出してやる！！」

賢一がビルに向って手を翳すそれだけで世界から黒という色が無くなり
賢一の手の中だけに黒い禍々しい球体が出来上がる

「消滅しろヤァアアアア！！」

放たれた球体は窓の無いビルを包み込み消滅させていく。ビルだけを綺麗に

「・・・・よう始めましてだなぁ？」

「・・・・・」

背後に現れた存在に目を向ける、

「やはり、あの個体に何かの術式が発動していたようですね」

「良いから【反省しろ】」

アレイスターが何かを言っていたがそれを無視して
頭を掴み地面に叩きつける。それと同時に出来るクレーター

「カハッ！？ゴホゴホッ・・・最後に一言貴方は何者ですか？」

「ああ？【魔王】そう聞かされてる」

地面に叩きつけられて血を吐いた後何事も無く質問をしてくる

「なるほど・・・・合点がいきました。それではサヨウナラ」

「っ！？・・・これは」

その言葉と同時に俺の体の中に埋め込まれる何か

「【幻想殺し（イマジンブレイカー）】？」

「それの未完成品です・・・ですがコレだけの量を叩き込めば貴方も消滅するでしょう？」

何時の間にか背後に居たアレイスターの周りには未完成の【幻想殺し】の効力を持った球体が数百と浮かび上がっている

「ちっ思念体に成ったのは失敗だったか・・・・」

「それでは、本当にサヨウナラ」

そう言い解釈をした瞬間に打ち出される球体が既に動く事の出来ない
体に埋め込まれていく

アレイスター（後書き）

賢一の敗北での終わりでした。まぁ仕方ないよね未完成とはいえ【幻想殺し】を百も埋め込まれたんですから

最終アンケート結果発表！！

？スクラド１１

？オリジナル１１（作者票が入って１３！！すいません調子こきました）

？ジョジョ３

？リボーン１２

？最終回１

っと言うわけで！！次回最終回！ダークマスターケンイチ！！よろしく！

と言う夢を見たんだ（前書き）

更新遅れてすいません・・・・え～取り合えず次の世界は・・・・リボーン?でしたっけ、まぁ頑張りますんで、応援・・・あ、もしかしたらアンチに成るかもしれませんので・・・え?誰を?まぁ“糞赤ん坊”をと言っときましょう。ランボ?誰それ、うざいの?・・・・おっと最後に言い忘れましたが私作者は!!リーボンはうろ覚えです

そこんとこ夜露死苦!!・・・大丈夫かな?まぁ面白く?書こうと思います?

と言う夢を見たんだ

「はっ！？」

眼を覚ますと暗闇、そして何故か体がプスプスと焦げている

「夢・・・・？」

死んでここに来たのだとしたら体がダーメージを受けているはずが無いと考えた後
俺は向こうに行く前は如何いう状況に有ったかを思い出した。行くきっかけになったのは
【電気】そう電流である・・・・何故電流が流れたかは分からないがだが今の状況からしてみてあれらの状況は夢であると結論にした。“する”ではなく“した”である。

「勉強になる夢だった・・・・幻想殺しか、対策考えとこう～」

だから、俺は負けたのはただの夢であって実際に負けたわけではないのであしからず

「さてと・・・改めて～次の世界にＧＯ－！！」

賢一の目の前に白い扉が現れる

「あら？魔方陣じゃないの？・・・って事は魔法が無い世界？」

と適当に考えながら扉を開くと同時に中から光が漏れ出す

「と、溶ける！？溶けるーーーーー！？うがぁあああああ・・・なんってね♪」

光の中を先へ先へと進み続ける・・・そして光が一層強くなったと同時に

「あう（またかよ）」

赤ん坊になっちゃいました♪

「あらあら♪起きちゃったの“ツナ”」

「あうあぅうう？（ツナ？いや俺は卵の方が・・・って名前か）」

ふむ、ツナ?どっかで聞いた事あるような～?

「沢田さ～んお届け物で～す！」

「はーい！」

沢田?ツナ?・・・・う～ん・・・やばいな思いだせん

「あうううう（まぁ一言）」

「此処にハンコお願いしま～す」

「はいはい♪」

「あうううううううあああ!!（ツナ!!美味しそうな名前ですね!!!）」

ふぅ、なんかスッキリした・・・・え?いや別にツナって名前が嫌なわけじゃないよ?
何で魚?っとか思ってないよ?ふざけた名前付けてんじゃねぇよ!!とか思ってませんよ?ええ

「うぁあ（久々の赤ん坊ライフ楽しみますか～）」

「あう！あうううう（おっと！最後に一言）」

「あぅううう！！（平凡最高ーーーーーーーーーー！！）」

なぜ?言っただて?フフフフフ、どうやら此処は一般家庭のようだぜ?母親は普通だし
家も普通、完璧無欠の一般家庭だぜ!!ヒャホウ!!

と言う夢を見たんだ（後書き）

感想評価まってます。フフフフ、ツナに憑依これで原作ブレイクし放題、まず
赤ん坊を死なす！フフフフフフフフ、ハハハハハッハハフハハハハ！！

沢田綱吉（わら・・・いや爆笑）（前書き）

リボーン偏は読まないことをオススメします・・・黒歴史です。
え?消さないのか?めん・・・あははは何となくですよｗｗ

沢田綱吉（わら・・・いや爆笑）

どうも、沢田綱吉6歳です！！いや～最初はツナが名前かと思いましたが綱吉と言う名前だったので安心しましたよ～。え？嫌だったのかって？いや別にそんなこ（ｒｙ

おっと失礼でだ俺は今公園でブランコをこいでいるのだが・・・・

「おい、ブランコは俺様が使うかんだからソコどけよな！！」

「「そうだそうだ！」」

「あ～はいはい・・・・」

ガキ大将ぽい奴が子供を引き連れソコをどけと脅してくる。

まぁ俺は大人だから黙って退くけどね～

「さっさと退けよな、」

「「退けよな！！」」

「・・・・うぜぇ」

ガキ大将達には聞こえないようにボソリと呟き次は滑り台へと向

う事にする。
さぁてと～、空でも見ながら寝ますかね～

「おい、此処は俺様が使うんだから違うところへ行けよな！！」

「「行けよな！！」」

「・・・・・・」

先程のガキ大将が俺が寝転んでいた滑り台へとやって来てまた同じ事を言ってくる
まぁ、ここは大人の広い心で許そうか、黙ってそこから離れ次はジャングルジムに行く

「はぁ次こそは邪魔されずに・・・・「おい、此処は俺様が使うんだから違う所へ行けよな！！」」

「「行けよな！！」」

え～とつまり簡単に言えばコノ公園から出て行けとな？そう言う事かな？

「フフフフフフ」

「な、なんだよ？」

「「な、なんだよ?」」

さぁ、教育と行こうか

～～～～子供の喧嘩なので割合させてもらいます。～～～～

「「「ふぇえぇ～～～んお母さぁあああん」」」

「教育終了」

泣きながら去っていくガキ共を見送りながら腕を組む・・・一言で言うなら
大人気ない。

「さてと今度こそゆっくりと寝る「ツナ～帰るわよ～」・・・のはまた今度か」

～～～翌日、同じ公園にて～～～

「昨日は弟が世話になったな！」

「何このテンプレ・・・・」

P．S．もちろんボコボコにしました。

沢田綱吉（わら・・・いや爆笑）（後書き）

今年最後の更新かもしれない
感想評価待ってます。できれば原作開始年齢を

鉄則そして中学（前書き）

おそくなりました。

鉄則そして中学

沢田綱吉こと俺は自重する事を此処に宣言する!!

行き成りすまないと思っている何故俺がこんな事を行っているのかと言うと・・・・・・

小学校を教室を破壊してしまった。え?何で、「あ~、なるほど」って顔なの!?聞かないの!?理由!?ねぇ!!・・・・もう良い!!勝手に喋るから!!

・　・　・

・　・　・（回想入りマース）

・　・　・

そうあれは4年生の雪の降る肌寒い日だった

「茶がうまい・・・・」

炬燵に入りながらお茶をすすり、一息する。そんな平凡な一時に終わりを告げる母

「こら、ツナ遅刻するわよ。」

「・・・・はい」

お茶を全部飲み干し、カバンを持ち登校する

「気をつけていくのよ～♪」

「分かってる～（ランドセル邪魔だ・・・・）」

母に見送られ気だるく足を進める。その足どりを遮るように目の前に数人の子供が立ちはだかる

「ようツナ！！今日こそ土下座させてやるからな！！」

「「「「「やるからな！！」」」」」

分かった人も居ると思うがあの公園で返り討ちにした少年達（若干増えている）だ

「・・・・ああ、そうすか」

「なめてんじゃネェーー！」

（（（（（今日もボコられるのか～））））））

なんか一瞬心の声が聞こえた気がするがとりあえず適当にボコして登校を再開する

「ふー・・・寝るか」

学校に付いたそうそう睡眠を始める俺、次に眼が覚めるのは給食(認識阻害って便利ですよね～)

「・・・・・なんだこれ」

寝すぎたのか外はもう夕暮れに成っていた・・・・じゃなくて!?

「Ｏｈ―・・・・ｍｅ?」

そこには俺を中心に破壊されている教室・・・・ん～～

「とんずらだぜ!!」

家に光の速さで帰った俺は何故教室が破壊された（した）のかを考える

「まさかテロ!?・・・・そうだ認識阻害で確認されなかっただけで（ブツブツ）」

その時狙ったかのようにテレビに緊急ニュースが流れる。

[○○小学校で４年３組の教室が突然爆破したそうで・・・・幸い教室には子供は誰・・・]

「ふむ、やはり爆破テロか・・・・」

[教室には爆発物は見つからず・・・・謎の爆破・・・]

「・・・・・・・・・・・・（俺だーーーやべぇよもう言い訳みつからねぇよ!?）ｏｒｚ」

だが何故・・・・と俺は思考錯誤する。そして俺はあることを思い出す。

「まさか・・・・あの夢・・・いや、それだと・・・・寝ｂいや・・・・だが・・・・しかし」

[・・・・証言からこの教室が爆破される前に子供の叫び声が上が

ったことが確認されています・・」

「俺だ・・・完璧に」

「少年は「ちょｗｗお前等なんで居んのｗｗギャーーー」と語っていたそうで」

「・・・・ｏｒｚ」

俺だ・・・・って何で最初の方も聞こえてンの・・・・え?結局何が原因かって?

「・・・・・・／／／／寝ぼけてました／／／／」

・・・・だって!!夢に出てきた今まで出会ってきた人達なんだぜ!?
しかも行き成り戦うような雰囲気だし!!だから・・・思わず現実でも力を・・・・はい、すいません

・・・・・・・・

とまぁこんな感じだ・・・・テヘ♪で俺は鉄則を取り組めた

「第一条!!人様に迷惑をかけない!!」

これは基本だね

「第2条!!無闇に人を殴ったり蹴ったりしない!!」

これも基本だね・・・・斬ったり・・・はい、シマセン、シマセンヨ？

「第3条!!此れからは人並み以下に暮らそう!!」

これは自分への罰みたいなもの・・・・エ？バツダヨ？ホントウダヨ？

コレが駄目ツナ（爆笑）が誕生した瞬間である

そして中学校

「駄目ツナ～パン買って来てくれよ～」

「うん！良いよ！（あ～？調子乗ってんじゃねぇぞ？）」

「何だ？」

「う、ううん、何でもない（ちっ、さっさと行くか）」

これでも何気に楽しく過ごしてます

え？絡んでた少年達ですか？記憶消しました・・・え？何か問題でも（黒い笑み）

鉄則そして中学（後書き）

七尾志乃さん、原作開始日教えていただき本当にありがとうございます！！

感想評価待ってます！

今回の件に付いて反論は求めない！何故ならこの方が面白いからだ！！

赤ん坊（前書き）

ネタが思いつかない・・・・えーと仲間集め→骸→指輪→未来→シモンだっけ？
自分的には指輪で終了をさせたいが、終らせることは出来ない。なので
未来偏で終了、次の世界にします。シモン？何それ、おいしいの？

赤ん坊

「・・・・誰だ？」

家に帰り自分の部屋に上がると赤ん坊が仁王立ちしていました。

「今日から、お前の家庭教師になったリボーンだ。よろしくな」

「あ、そうでしたか。よろし・・・・・・・・ん？」

家庭教師？赤ん坊が？・・・・・いやいや、ありえないから。

「手始めに、まずコレを解いてみろ」

そう言って赤ん坊の手から一つの答案用紙が机に置かれる

「今日もいい天気～」

取り合えず無視してみることに

「座れ（カチャッ」

何時の間にか銃を此方へと向けている赤ん坊・・・・・銃？ｏｈー、赤ん坊が？ｏｈー、拳銃を？
ｏｈー・・・・・夢だな

「さて・・・・取り合えず、下に降りて顔を洗うか」

「ムカッ）・・・座れ（バンッ」

銃弾が俺の額を掠める・・・・・夢じゃない・・・だとッ！？

「ひいいいいいい」

取り合えず、人並み以下なので速攻で座る事に・・・・・そうか～普通の世界じゃなかったか～

「解け（カチャ」

「は、はい！！」

机に置かれた答案用紙を見る、最初の方は中学生レベルの簡単な問題、適当に答えを書く大体

１５点を目安に（※１００点満点です）そして最後の問題で・・・・・

「（フェルマーの最終定理だとーーーーーーー!?）」

あれ?何か赤ん坊ニヤリって笑ったよ!?うわ、確信犯だよ!?
チビの癖に生意気なー
・・・・・解いてやろうか・・・・は!?駄目駄目だ!!

「ふーできた・・・・ほら」

「・・・・・駄目駄目だな」

チラッと答案を見てその後に俺の方向を向けながら紙を捨てる・・
・・・グサっと来たよ

「死ぬ気で勉強しろ（バン」

「え?」

確実に俺の額に向ってくる銃弾

「うぉ！？」

それをマトリックスの用に避ける俺

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

そして重い空気が流れた・・・・・・

赤ん坊（後書き）

感想評価待ってます

１０代目（前書き）

10代目

「なっなんだってーーー!?」

「・・・まだ何も言ってないぞ?」

「言わないといけない気がしたそれだけ・・・・」

先程の重い空気とは打って変わって、目の前の赤ん坊(リボーン)に此処に来た理由を聞かされている。

「今日からお前をマフィアのボスに育てるぞ」

「・・・・・は?」

赤曰く俺は時期マフィアのボスに選ばれたそうな

赤曰くそのためにまずダメダメな俺（笑）を鍛えなおすために赤ん坊はやってきたそうな

赤曰くとりあえず死ね

「いやいやありえ・・・・・」

「ありえ・・・？」

俺の顔の擦れ擦れに弾丸が掠れ行く

「ますね！はい！！」

「じゃ取り合えず、死ぬ気でマフィアのボスになれ」

「うぉおお！？」

そしてまた俺の額に弾丸が迫るがそれをマトリックスのようにまたまた避ける俺

「2度目はねぇ・・・・」

更に追撃と言わんばかりにリボーンが飛び上がり回避不可能な状態（一般人には）の
俺の額を打ち抜こうと弾丸が向ってくる。

「のぁ！？」

だが俺は脚に力を込めて捻じ曲げるように横に避ける

「・・・・・」

「・・・・・」

2度目の静寂と火薬臭い匂いが部屋をただよった

「と、とりあえず今日はもう寝るか・・・・」

「ああ・・・・」

そう提案した俺はそのままベットに向かい寝転ぶ、リボーンも諦めたのか
何時の間にか用意されていた小さい子供用のベットで寝る

「寝るのはやッ!?て言うか泊まるの!?」

虚しい俺の叫び部屋にほとばしった

１０代目（後書き）

さて次の話でやっと仲間集めかな・・・・え?更新が遅かった理由?
話が浮かばなかった。それだけ・・・・・はい、すいません・・・・・
はい、・・・反省してます
後悔はｒｙ　何でもないです。

感想評価待ってます！！

仲間1～ボンバーが仲間に成った！！～

色々会って何日か後

「今日から一緒に勉強する事になった獄寺隼人くんよ」

「獄寺隼人です、よろしく・・・・」

転校生がやってきました。そして物凄くにらまれましたので取り合えずビビります

「ヒっ！？」

先程から言語が可笑しい？ソンナコトナイですよ？別に現実逃避じゃないですよ？

「それじゃＨＲはコレまでだから皆、獄寺くんと仲良くするのよ」

「（無理です）」

めっちゃ睨まれてる！？睨まれてまーーーっす！？リーボンから

今日俺のクラスに
マフィア関係の人が来るって言ってたけど、別に問題ないって言ってたけど！
絶対に俺を殺すような目つきなんですけどーーー！？

「沢田・・・」

「う、うん？何かな獄寺くん？」

その後昼休みに獄寺がやって来て俺を裏庭へと付いてきて欲しいと頼まれた・・・いや脅された
知ってますよ？この展開、あれでしょ？あの良くある不良の・・・・
いや考えないでおこう

「チャオッス」

「来たよ・・・赤ん坊」

「リボーンさん！！」

変な格好をした赤ん坊（リボーン）が現れる、それと同時に獄寺の態度が少し変わる
そしてリボーン2，3会話した後俺の方向を向く

「沢田綱吉、俺はお前を10代目のボスとしてみとめねぇえええ

！！」

「（俺も認めてねぇよ・・・）ってうぉ！？」

大量のボムが俺の目の前に広がる・・・何時から此処はバトルマンガになった

※最初からです

フラグですね、分かります

「やったか！！」

「あぶねぇ～」

「何！？ならコレでどうだーーーー！！」

体中にボムを抱えそれを俺の方向へと投げようとするが一つが地面に落下してしまい、
そのせいで体制を崩す

「しまった！？」

「死ぬ気で助けな・・・」

そしてチャンスと言わんばかりに俺の額をスナイパーライフルで狙撃しようとするリボーン

「ふっ甘い！！」

そしてそれをまたもや避けきる俺

「・・・・チッ」

すこし赤ん坊と俺の間で火花が散ったのは内緒

「と、そんな事してる暇はねぇな・・・・」

獄寺をボムだらけの位置から突き飛ばし、そしてボムが起爆する

「なっ！？」

起爆したボムが俺を襲い獄寺の目の前は煙でそまる

「ていってもこの程度じゃ死なないけどね～」

「・・・・うそだろ」

呆然と此方を見ている獄寺に足をゆっくり進め近づき肩を掴む

「ふふふふ、さっき見たことは誰にも言うなよ?ボンバー」

「は、はいいぃいいい!!!」

青い顔で何度も顔を縦に振るごくdボンバー、はて?どうしたんだろうｗｗ（黒い笑み）

仲間1～ボンバーが仲間に成った！！～（後書き）

連続更新！！・・・・コレが後3回か・・・・感想評価待ってます

仲間2～野球バカが仲間に成った～（前書き）

今思ったんだが・・・仲間集め、書いたほうがいいか？・・・・・
書いたほうがいいよな

仲間2～野球バカが仲間に成った～

今日も何時もの1日が始まる・・・・・と思いたい

「10代目ーーー！！」

「・・・・はぁ」

あの後、俺の事を喋らないようにおdんん〝説得した後、「一生付いていきます！！」とキラキラした目で俺に言って来て気付いたらこのような

「風ですか！？十代目！？」

「だ、大丈夫だよ」

純情な犬みたいな奴に成りました・・・・・・・空が青い

「チャオっス」

「リボーンさん！！」

「・・・・・」

出たよ。俺の平凡を奪い去った最初の奴

「ツナ、新しい仲間候補を見つけてきたぞ」

「いや、い「よう、ツナ！」」

よく見たらリボーンは人の肩に乗っていた。その男は俺の知り合いなのか気安く話しかけてくる・・・・・山本武、俺のクラスにいるイケメン・・・・ケッ

「ああ゛!?何だテメェ!!」

「ご、獄寺くん同じクラスの山本武君だよ。それにしても何で山本くんが・・・・」

「ははははっそこでバッティング練習してたらよ。このガキンチョに俺らのファミリーに入らないかって言われたんだ」

何でもないかのように笑いながらとんでもないことを言う山本

「で、ファミリーってどんな遊びだ?」

「・・・・・」

理解してないだけのようです・・・呆れて開いた口が閉じないよ

「コレで仲間が2人だな」

「・・・え?仲間?え?」

「まぁよくわかんねぇけど、よろしくなツナ!!」

笑いながら俺に握手を求める山本・・・いや野球バカ、なぜ頭が悪くないのかわからん

「はぁ~もういいや」

「十代目!!俺は認めないッスよ!!」

いや、もういいよややこしいから、そんな事を考えながら山本の手を握り返す

「よろしく、山本くん」

「山本で良いぜ、ツナ!」

うんコイツとは仲良くやれそうだ・・・・・

仲間2～野球バカが仲間に成った～（後書き）

と言う事で山本仲間入り～・・・短い？いやだって・・・どんな風に仲間に成ったか覚えてネェンだもの、軽い？こんなもんじゃ無かったケ？まぁ取り合えず感想評価待ってます！！

ＰＶ３００万だ・・・・・っと！？（前書き）

何時の間にか３００万と言うアクセス数に・・・夢かと言う事で３００万アクセス記念になんか適当な小説を書いてみたいと思います。
面白いか面白くないかは・・・貴方しだいです。書いてみたかった。ではどぞ

ＰＶ３００万だ・・・・・っと!?

ここは・・・どこだ。俺は・・・・【ミツケタッ】【ミツケタッ】誰・・・・だ?

【サガセッ】【サガセッ】【ジブンヲ】サガス?何ヲ?

【ココロ】【チカラ】【キオク】【ソシテ■■■■】ソウ、サガス■■■■を

「ここは・・・・」

目を開けると平原が永遠と続く場所にいた

「・・・探す」

そう探さなければ・・・キオクをチカラをココロを

少年が歩き続けて何日か経った頃目の前に活気に溢れる町に付く

「・・・・」

「ん?少年、どうした?迷子か?」

筋肉質の中年の男が町の前で立ち止まっていた俺に話しかけてくる

「・・・探してる」

「親をかい？」

「違う・・・ココロを」

そう言うと中年は困ったように顔を顰める

「どうしたもんか「グー・・・」ん？」

かわいらしい腹の音が少年からなる

「腹減った・・・・」

「何か食うか？少年。」

「金・・・ない」

「がははは、奢ってやるよ」

そう言い中年の男は俺の手を引っ張りある店へと入る

「酒臭い・・・・」

「ん？ギルドは初めてか？」

中年の男に小さく頷く

「そうかそうか！そりゃ悪かったな、まぁ我慢してくれ」

「・・・・」

また小さく頷く、それと同時に小さくお腹もなる

「それよりも飯だな、何が言い？」

「何でもいい・・・」

「マスター、サンドイッチ頼む」

「ん？子連れか？」

「ちげぇよ、迷子だ」

そうか、とそれだけ言いマスターはギルドの中に入っていく
それから何分かすると手に皿を持ってマスターが戻ってくる

「ほら注文のサンドイッチだ」

「ん・・・・」

出されたサンドイッチを無言でパクパクと食いつく

「うまいか？」

「・・・うん」

無表情でただ一言言う・・・

「・・・ギルド」

「ん？」

俺はサンドイッチを食いながら目の前の男に聞く

「どうやってはいる・・・・？」

「おいおい、少年ギルドに入る気か？親は？」

「いない・・・・」

はぁ、なるほど・・・と中年の男は呟き少し考えた後

「よし、付いてきな」

「・・・・？」

「ギルドに入るんだろう？」

「うん・・・・」

中年の男の後ろを付いていくと一人の受付女の所にやって来る

「ご用件は？」

「ギルド登録だ」

「ギルド登録ですね。お名前は？」

「違う違う、俺じゃねぇコイツだコイツ」

そう言いながら俺を指差す

「その子がですが？」

「ああ」

「では、年齢と名前を」

名前・・・・少し考え思いついた名前を口にする

「クロウ、年齢１４・・・・」

「はい、クロウさんですね。それでは私に付いてきてください」

「少年、案内できるのは此処までだ。また何処かで会おう」

そう言い中年の男はそのままギルドを後にする・・・小さくありがとうと口にする
そして俺は女性の後ろを追いかける

「それではギルド登録を行います。目の前の石版に手を当ててください」

「・・・・」

触れると同時に石版が光りだす、光が収まると同時に目の前に小さな石が現れる

「ご苦労様です、これでギルド登録の終わりです」

「・・・これは？」

「それはギルド員の証であり。ランクを表示するものです」

「・・・ランク？」

「はい、クエストを受ける物にはランクというものがＥ～ＳＳＳまでありますそれを受ける資格があるかどうかをそれで調べられます」

「如何すれば・・・ランクは上がる」

「今，あなたのＬｖは１ですクエスト、モンスターを狩ることでランクが上がります。」

その後も色々と受付女に聞いた。簡単に言えばこう言う事だ

・ランクＥ～ＳＳＳまである

・ＬＶ１～５がＥ、５～１５がＤ、１５～２０がＣとレベルが上がるごとに受けられるクエストのランクが上がっていく

・後は食事、武器などが普通より安く帰るなど

「石・・・消えた」

「その石は自分が来いと念じればいつでも現れますので心配しなくても大丈夫ですよ」

「そう・・・・」

一つ頷き受付女に頭を下げ、一旦ギルドから出る

「・・・・ココロ、チカラ、キオク、■■■■」

そう呟き町を出て、森の中に入る

「狩る・・・・」

その一言と同時に少年の右手に漆黒の鎌が現れる

《グルルルルウルルッ》

「消えろ・・・・」

次々と現れる魔物を容赦なく狩り続ける・・・その日森の奥から
魔物達の雄叫びがやむ気配は無かった

ＰＶ３００万だ・・・・・っと！？（後書き）

と、言う事で適当に書いた作品でした。好評価だったら気分転換に書くかもしれない・・・まぁ書かないと思うけど

熱血が仲間に成った！！（前書き）

久々の更新・・・新しく書いてる小説は未だに執筆中・・・・
サボッテナイヨ？ホントウダヨ？ベツニオンラインゲームニハマッテナイヨ？
ホントウダヨ？・・・まぁそう言う事です・・・もう飽きたんで進むと思います。２週間で１００Ｌｖ俺頑張ったよね？

熱血が仲間に成った！！

「うぉおおおおおお！！」

「・・・・なんだこの状況」

俺は今、グローブを付けてリングに立っている・・・・

「シュッ！！」

「うわっ？！」

もう一度言いたい・・・・なんだこの状況、少し時間をさかのぼって見ようと思う

え？別に良い？予想が出来る？やだ／／／／もう／／／／だｋｂｖぎあｆｌんｖッ！？

激しいんだから／／／／うふぁｓｌヴん。ｃｍｓ。ｓｍっ！？

しゅいません・・・反省してます・・・回想ですどぞ

「何だよ・・・リボーンこんな朝早く」

「新たなボンゴレファミリーを見つけてきたぞ」

「・・・それはまさかお前」

その後ろにいるシャドウボクシングをしている短髪男のことか？・・・いや違うよな
流石にそこまで馬鹿じゃないよな・・・

「お前の思ってる通りだぞ」

「Ｏｈ・・・・」

あの人が仲間に成るの？暑いよ？何か知らないけど暑いよ？て言うか熱いよ？

「赤ん坊よ！！此処に強い奴が入ると聞いたが何処のどいつだ！！」

「お前の目の前にいる奴だ（ニヤリ」

「おい・・・・」

っと言うわけで今の状況と言うわけだ！え？分からない？なんだ分かってるじゃないかｗ
【分からない】が正解だ・・・そう何故この状況になったか分からないんだ・・・

「・・・取り合えず勝てば良いのかな」

「ウォオオオオオ！」

まぁ取り合えず顔の急所と言える場所に狙いを定め・・・・・

「死ぬ気で「うおっりゃ！！」・・・・チッ」

「な・・・に・・・を・・・」

そのまま脳震盪を起こしその場に倒れる暑い人・・・名前聞いてないな・・・

「おにぃちゃん！？」

「流石１０代目！！」

「やるなぁツナ～」

熱い人？の傍に女の子が駆け寄る・・・え～と確か同じクラスの・・・駄目だ思いだせん

っと言うわけで仲間が一人増えた・・・・何がっと言うわけかは分からないが・・・

雲雀恭弥（前書き）

アンケート回答皆さんありがとうございます！！2，3が圧倒的に多かったので
2で行きたいと思います、自分的にも此処で終らせるのもいやなのでｗｗ此れから頑張りますので応援よろしくお願いします！！・・・・今思いました
リボーン結構ながくね？ていうかキャラ多！？・・・・今心配なのはコレです

雲雀恭弥

何故だか久しぶりな気がする・・・まぁ良いか、今日も平凡な1日

「10代目ー!!学校一緒に行きましょう」

「よっツナ」

ちっ・・・まぁこうなる事は分かってましたけど、こいつ等がいる限り自分に平凡が来ることは無いことは分かってましたけど!やはり・・・【消すか】・・・あれ?グッドなアイデアじゃね?

「っ!?・・・何だ寒気が」

「ツナ・・・何か黒いぞ?」

「え?そうかな?何時モ道理ダケド・・・?(ニタァ」

「「っ!?」」

二人から表情が消え、その場から駆け出し学校方面へと逃げるあら?やり過ぎたかな?まぁ良いか・・・追いかけっこの始マリ

ダァ

「どうしたんだよ～二人トモォォ！」

「誰だアレ誰だアレ！？」

「あはははは、俺が知りてぇ！！」

徐々に近づいて行くツナ（大爆笑）に近づいてくるごとに顔が青ざめる二人
学校までの距離５００ｍツナとの距離２００ｍ

「アハハ八八ノ丶ノ丶ノ丶ノ　＼　／　＼　／　＼！！」

「「ひぃいいいいい！？」」

学校の門が見え始める。通学中の生徒が2人の後方にいる一人を見て青ざめ道を開ける
そして、何とか逃げ切り二人は学校に付く

「はぁはぁ・・・やった」

「逃げ切った・・・逃げ切ったぞ」

「何がにげきったんですかぁぁ？」

そう誰が、学校に付いたら終わりと言っただろうか・・・その時の光景は「あれこそ本当の恐怖だ」と見た生徒は体を震わせながら語ったそうだ

「「／（＾ｏ＾）／オワタ」」

「俺ノ平凡ノタメニ、キエナァア！！」

その時の事をツナはこう語る。

「反省？シテマスヨ？ウン（ニタァ」

そしてツナの手が二人に近づこうとした時それは現れた

「君？学校で騒がないでくれるかな？噛殺すよ？」

トンファーにより止められた手そして此方を見つめる尖った目付き

「あぁ？誰が誰を噛殺すってぇぇ！？」

「僕が君をだよ」

我等が生徒会長、雲雀恭弥

「「貴方が神か・・・・・」」

「違うよ、生徒会長」

「・・・・」

まずい、不味いぞ！何故此処でコイツがっ！？くっ二人を手っ取り早く消して
平凡に暮らそうと思ったのに・・・くっよりにもよって生徒会長だと！？
そして賢一は気付く雲雀恭弥の背後に黒く薄く笑う赤ん坊の姿を
キサマカァアアアア！！今思えば全て奴のせいではないか・・・
ならばターゲットを変更して

「君？聞いてるの？噛殺すよ？」

「すっすいませぇえええん！！」

取り合えず今はこの状況を如何にかしなければ、とジャンピング土下座をしながら
思考に入る。すると頭にずしりと重さが加わる

「・・・・もっと深く」

「・・・・」

（（ダメェェ！？そんな事しちゃダメェエエ！？））

・・・・我慢だよね・・・・我慢・・・・後で覚えてろよ・・・

「ひっぃいいい！！すいません」

より一層頭を地面につけるツナ、それで納得したのか雲雀は頭から足を退け
何処かに立ち去ってしまう

「・・・・」

そしてツナも黙ってその場から立ち上がる・・・どす黒いオーラを何十倍にもして

「おい、爆弾魔、野球馬鹿」

「はい！！」

「なっ何だ？」

「逝くぞ・・・」

その後学校が終るまで生きた気がしなかったそうだ

「雲雀恭弥か・・・あいつ欲しいな」

赤ん坊がそう呟いていたかどうかはどうでも良い話

【赤ん坊撲滅計画】

ツナの机の二番目の棚の中にこう書かれたノートが追加されたのを知っているのは誰もいない

雲雀恭弥（後書き）

くっ面白くかけてるかどうか自分では分からない・・・何と言うか進む気がしない
物語が・・・キャラ的な事で

感想評価よろしくお願いします

沢田綱吉（大爆笑）の休日（前書き）

作戦を変更する、リボーンの世界を早めに抜け出そう！！・・・・・
逃げですよ？
何か問題でも？ハハハハハ！！逃げるが勝ちなんだよ！！@5話で
逃げます
続けて欲しい人は感想にでも書いてください・・・・面白くなくて
良いのなら

沢田綱吉（大爆笑）の休日

此処で簡単に俺の自己紹介をしておこう・・・俺の名前は沢田綱吉、本当の名は風間賢一
表は何もかも駄目な人間、裏は魔王でちょっと人より強い怪物だ・・・あれ？目から汗が
まぁそんな俺が何をしているのかと言われれば

「お茶が美味い・・・・」

まぁ椅子に座って外を見ながらお茶を飲んでいるのだが・・・年寄り臭い？何を言っている中身は
１００歳を超えているんだぞ？まぁたかが１００歳だが・・・

「ツナ、外に出て運動しろ」

「良いよ～めんどくさい～此処でボーとしてるのが良い」

「ムッ・・・・」

赤ん坊な家庭教師が運動しろなどとめんどくさい事を言ってきたが俺はそんな事は知らない
休みの日くらいゆっくりしたいんだ・・・・

「ツナくーん」

「１０代目～」

「ツナー」

「沢田綱吉ぃいいい」

「ツナさ～ん」

玄関から聞こえる様々な人の声

「あ～・・・・・」

「ツナ」

俺の平凡を奪うんですか・・・そうですか

「・・・・寝よ」

「・・・・」

リボーンが何かすごい見てきたけど知らん・・・外に出たくな

いでござる

「俺の部屋は安心空ｋ・・・」

「キャハハハｈランボさん登場だもんね～」

「ランボ、ウルサイネ」

牛と中国ぅ・・・てめぇら俺の静寂空間をぉおおお

「駄目ツナだもんねぇー！」

「・・・・ワタシ、シタオリルネ」

「・・・・」

イーピンの方は俺の様子に気付いたのか部屋を後にする。
さて残っているこいつを如何するかだな・・・・

「きゃはははは」

「飛んでけや糞牛ぃいいいいいい！！」

「ｇｙｓｇ気あｇｄきあｓｈしゃあああああああああああああああ！？」

窓から全力でそう全力で牛を投げる・・・・牛の姿は一瞬で見えなくなる
ふぅ多分北海道まで逝ったかな・・・・後悔？何それ美味しいの？

「さて、気を取り直して寝るか・・・・」

「１０代目！？ご無事ですか！？」

牛が飛んでいく所を見た獄寺が慌てて俺の部屋へと入ってくる

「ふぅ・・・・・出て行け」

「はい？」

「出　て　行　け」

「はいっ！」

ふっちょろいぜ、甘いぜ、ちょろ甘だぜ

「さて今度こそ・・・・・」

「死ぬ気で遊んできな」

何時の間にかやって来たリボーンの拳銃により死ぬ気弾が打ち出される

「だが甘い！！」

「ニヤリ」

だが俺の避けた方向には既に死ぬ気弾が打ち出されていた・・・・

何時の間に？！

「当たるかぁあああ牛ガーーーード」

俺の手には先程北海道へ飛ばしたはずの牛が白目をむいて現れた

「ぷぎゃっ！？」

「・・・・ふっ」

「ちっ」

これで１２４戦１２４勝、まだまだ甘いなクソガキ

何だかんだ言って楽しんでいる賢一なのであった

沢田綱吉（大爆笑）の休日（後書き）

リボーンと書いて黒歴史と読む（前書き）

感想にて早く終らせろと来たので今回でリボーン偏は辞めです。
あれですね
うん、やはり自分が興味の無い漫画の2次創作を書くのは良くないですね・・・酷くなります。
小説を書いているあなた・・・・気をつけましょう
リボーンはなるべく飛ばすように前書きに書いとこう

リボーンと書いて黒歴史と読む

風間賢一？？？才、男見事に散りました・・・・・え？何があったかって？世界が崩壊した
え？意味が分からない？俺もわからない・・・・朝起きたら空が崩れ始めるんだぜ？しかも周りの人間は
ノイズが走って次々と消えていくんだから

「あれが作られた世界の成れの果てってか？」

自分の身に何が起きているのかも分からず笑いながら消える人々
あれほど怖いものは無い
死ぬなんて物じゃない消えるだ・・・・魂さえ存在さえも・・・・
長い時を生きてるけど
こう言うのは初めてだ・・・・

「何と言うか・・・・やりきれねぇな」

そして世界が完璧に消えると俺の体もノイズが走り消える・・・・
そして完璧に消えると
魂だけが残され何時もの場所・・・闇の世界に戻っていた

「・・・・はぁ」

次の世界では上手く行くように次の世界への“道”を待つ

賢一のたびはまだまだ終らない！！

リボーンと書いて黒歴史と読む（後書き）

なんて打ち切りみたいな終りかたしてみたりｗｗ

感想評価よろしくお願いします。次は新たな世界です。場所はリリなの

もうそろそろ、シエル＆ａｍｐ；クロの回収をしようと思います

開かれる次なる道（前書き）

さて、気を取り直して次の世界です。忘れろ!!昔は昔、今は今だ!!
良いか?この小説に黒歴史なんて物は無かった!!例えタグに黒歴史と書かれていてもそんな物は無かったんだ!!分かったな?分かったら忘れろ!!記憶の隅から隅まで消しさったら進んで良いぞ・・・・ああ、黒歴史なんて

開かれる次なる道

光が体を包み込む・・・

「体がぁ！？」

光は体を包み込みより一層光り輝く

「と、溶けるぅ・・・！？」

そして闇の世界が光に覆われると同時に賢一は世界へ移動する

「・・・今回はすごい大袈裟な転送ですね」

まず見えたのが青い青い清んだ綺麗な空

「ま、こう言うのは変わらないんですね・・・・」

落下中・・・・転移された場所は上空８０００ｍ物凄い悪意を感じる

「ふっコレも運命か・・・・・あれ?トベナイヨ・・・・・」

余裕の表情が徐々に焦りに変わる。魔力はあるだが飛べない

「ちょちょっ!?」

慌てて下をみる・・・・そこには青い青い清んだ青・・・・海ですね

「まぁ・・・・死なないかな?」

少し安心・・・・残り３０００mでも痛いの嫌だな、何で飛べないんだ?

「て言うかどうやって飛ぶんだっけ?」

あれ?・・・・え・・・ちょっ・・・あれ?

「・・・・・魔力の放出てどうやるんだったか」

あれ？・・・可笑しいなぁ・・・あははは

「【謎の目】ぇえええええ！」

ＨＰ：∞／∞
ＭＰ：∞／∞（体の構築時に問題が発生、魔力の巡回が上手く言っておりません。修理中）
ＡＴＫ：∞
ＤＥＦ：∞
ＳＰＤ：∞

能力：創造（武器、防具、アイテム、食べ物、自分が考えた物を作り出す。
　能力を付け加える事も可能　生命を生み出せるようになった！）使用不可

　魔力変化（魔力を自由自在に操り変化させる　魔力を吸収出来るようになった！）使用可能

　次元移動（異世界へ飛ぶ事が出来る。扱える用になれば好きな所への
　移動が可能　時空を飛べるようになった）異世界へ飛べない

ｖｅｒｕｐ謎の眼（相手の能力、ステータスを見ることが出来、見たものすべてを理解できる。
相手の技をコピー出来る）使用可能

自然の力（全ての属性を操れる）　使用不可

不老不死（年齢操作が可能２５才から発動できます）使用可能

固有結界（無限の闇≪アンリミテッドダークネス≫、相手の闇を増幅させ自分の力にする
闇を自由自在に操れる）使用不可（ｖｅｒｕｐ中により）

検索結果：使用可能能力＝転移、魔力変化
不備＝魔力の巡回の修復
現場報告＝死ぬことは無いでしょう。不老不死ですし

年齢＝２５歳

・・・まぁ死なないなら良いか・・・て転移が使えるじゃないか！！あ、魔力が
上手く作動しないんでしたね・・・

「ふっグッドラック・・・・」

ドボーンッという音ともに賢一は海に叩き落ちる

「今思ったが・・・・体がでかい・・・いや普通なんだろうけど」

そうケンイチの身長が１７５ｃｍ程の男性になっているのだ・・・

・２５歳の体になったの初めてじゃない

すげぇ新鮮な感じ

「さて・・・此処は如何いう世界だ？」

落ちた感想？・・・・聞かないでくれ

「取り合えず・・・・島を探そう」

世界を知る前に町を探そう、町を探す前に島を探そう・・・・無

かったらどうしよ

・　・　・　・　・

数十分後～

「・・・可笑しいなぁ身体能力も低下してンのかな？」

４時間後～

「アヒャ・・・・アヒャハヤハヤｈｙサヒャ」

８時間後～

「・・・・・・・」

プカプカと水面に浮かび流れる雲を見つめ続ける

「海星ですか・・・・？」

ケンイチの呟きは誰にも届かず・・・小さく小さく響き渡る

「寂しいです・・・・」

貴方は、こういう場合如何しますか？

「こうなれば無理やり魔力をっ！！」

体中に力を入れる・・・すると世界が振動し周りにあった水が割れ地面が見える

「うぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！」

足の力により地面に亀裂が走る

「はあぁあアアアアアああ」

《プ～ッ》

賢一の下半身から聞こえるその音、その音が賢一の耳元で反響する

「／／／・・・・屁が出た」

力を緩めた事により割れていた水が此方へと迫ってくる

「／／／・・・・自重自重」

そんなことも気付かず、恥ずかしさで俯いて良いわけを言っている
そして水は賢一を飲み込み星に静寂が戻った

「／／／・・・アレだよ良くあること／／／」

開かれる次なる道（後書き）

あるある・・・ねぇよ！！と言う事で今日は此処までと言う事で感想評価お待ちしております

あっ・・・・お久しぶりです（前書き）

え～今週の土日の更新はこの１話だけだと思います・・・・来週は出来るだけ多く更新しようと思います

あっ・・・・お久しぶりです

「ふぅ・・・・」

どうも皆さん、賢一です・・・オナラ?何の事ですか?キオクニゴザイマセンナ～
そんな事はともかく俺は今からこの星から出るため魔力を無理やり噴出させようと思います
え?失敗しただろ?だから何の事ですか?とりあえず行動を開始します

「うぉぉおおおお!!」

体の奥底にある咳止めされている魔力を無理やり引き出す・・・・
・ただ“ある事”に気をつけながら
その“ある事”とは“アレ”の事であり、二度と引き起こしてはいけない。災難の事である

「おぉおおおおお!!」

魔力が限界まで上がり世界がギシギシと歪み空間が裂かれる。

「よっしゃぁあああ」

そしてその裂かれた空間へと身を投げ入れる

「・・・・・あ～」

飛び込んで目に入ったのは見覚えのある破壊された戦艦

「え？この世界？またなの？」

いや別に良いんだけど・・・・・ここって俺が散々暴れた世界だしな～

「え～お久しぶりです？」

ボロボロとなりそれは原型を留めていなかったが此れから流れる魔力は俺が作りだした

“アレ”と同じ魔力が流れている。

「“ゆりかご”さん？」

“ゆりかご”それは俺が作り出したおふざけによって俺ごと吹き飛んだ戦艦
そして俺の家族がいる世界

「そういや・・・シエルとクロ忘れてたな・・・・」

あ、いや色々大変だったから・・・・ね？そう言う事にしといてくれ

「でも“ゆりかご”か使えるな」

また少しお世話になろうかな・・・・魔力が流れてるからまだ機能はしているって事だろ？
そういえばこっちで俺、賞金首だよな・・・・まぁいいか！

あっ・・・・お久しぶりです（後書き）

感想評価お待ちしておりますｗ

ゆりかご改造計画

思った通り、ゆりかごに移植した自爆ボタンは生きている現に自己再生モードが起動されている。

「アレから何年経ったかはしらないけど」

このまま順調に行けばゆりかごは元の馬鹿でかい戦艦に戻るだろう。

「それは何とかして止めないとな」

向こうに付いた瞬間捕まりかねない。なら如何するか、そんな物は簡単

「“小さく”すれば良いんだ」

それにはまず俺の魔力の巡回を元に戻さなければいけないが正直言って
直った・・・・え？いや、無理やり魔力を垂れ流したせいなのかさき程から

魔力が流れ出て止まらないんですよね・・・・あ、直っては無いのか

「まぁこの状況で自爆スイッチの核に触れると」

核に手を当てる、すると青く光輝いていた石は赤に変色して一層光を強くする

「暴走するわけで・・・・」

ゆりかごの再生スピードが上がる・・・・

「そして触れ続けると核が」

石が赤から黒へと変色し始める、そして禍々しい黒い陽気をあたりが包み込む

「俺に汚染されて」

自滅スイッチにパワーアップした！！

「ＶｅｒＵｐするんだ！」

え?それで如何するのだって?それだけだけど?・・・・・・はい、真面目にします

「まぁ、ただゆりかごに記憶されてある設計図を組みかえれば良いだけなんだけど」

今の状況でゆりかごにアクセスすると壊れそうで怖いです・・・・主に俺が

「はぁ・・・やるしかないか【謎の目】」

ゆりかごの情報が頭の中に入り込む

「魔力垂れ流しで頭が吹き飛ぶほどの情報を読み取るって如何いう状況だよ・・・・・」

正直、辛いとです・・・・あ、血管切れた・・・・・不老不死だから死なないですけどね
再生してますもん・・・・あ、脳が破裂した・・・・・・・あ、体から血が・・・・あ、目の前が真っ赤に
あ、あ、あ、あ、あ、あ、・・・・・・・・・・・・

そんなこんなで数分後

「見つけた・・・・」

設計図を発見、何でこんな奥にあるんだよ・・・精神がズタぼろだよ

「さて、いらないと思う場所を消していくか」

あ～訓練場？いらん削除、武器庫？自分で保管する削除、客間？誰を呼ぶ削除！
ほっと落ち着く空間？・・・最高だ、次、飲み場？いらん削除、ゲームセンター？
おまえは戦艦だろ！！削除、部屋３７００００？とりあえず１０でいい残りは削除！
宝庫室？だから自分で管理する削除！架空間遊戯施設？なんだそれ・・・とりあえず削除！
削除削除削除削除さくｒｙ・・・・・・・

「結構小さくなったな・・・再生までの時間は３０分か」

ふふ完璧ではないか・・・・・大きさ？まぁ俺が１０人いて丁度良い感じの広さだ

小さい？それで良いんだよ

「さぁて後は・・・・・魔力を・・・あれ？直ってる」

《魔力巡回の不備の処理が終了しました》

「・・・・・・・え」

まぁ・・・・別に良いけど・・・・あれ？でもそれなら転移したら良いって
やめよう考えるのはやめようか

「・・・・ふぅ」

ゆりかごが出来たら“ほっと落ち着く空間”に行こう、実はコレに半分の大きさは
取られているゆりかごだった

「泣いてない・・・・汗だ」

ゆりかご改造計画（後書き）

感想評価お待ちしております

《おはようございますマスター》

「・・・・喋べってるだ・・・・っと!?」

第○●回賢一の脳内会議～ゆりかごが喋る件に付いて～

バージョンアップした自爆スイッチのせい・・・・それ以外なくね?

会議終了

「まぁいいか」

《どうかしましたか?マスター?》

「いや何でもない」

会議にもならなかったがどうでもいいだろう・・・・・だって自爆スイッチだもの

《そうですか、それではマスター私に名前を》

「・・・・え？」

ソコからなの？ゆりかごで・・・・・確かに問題だな名前は変えたほうが良いな

「癒空（ゆくう）でどうだ？」

《了解しました、ユクウでの新たな名前を上書きします》

名前の由来？癒し空間・・・・ダメ？良いよね？うん

《それではマスター移動する世界をご命令ください》

「地球だ」

《了解しました。第９７管理外世界“地球”への転移を開始します》

「おっとステルスモードを忘れるなよ」

《了解、本艦は地球への転移と同時にステルスモードへと移行します。》

装甲の周りが特別な膜により覆われていく。そして完全に姿が周りと同化し終わる

《準備はよろしいですか？》

「ああ」

《それでは転移を開始します。５、４、３、２、１・・・・》

戦艦のユクウの周りに幾つもの魔方陣が展開される。カウントが終ると同時に
魔方陣が繋がり一つの強大な魔方陣へと変わり光り輝きユクウを包み込む

「さぁ・・・・帰ろうか」

あいつ等の元へ

ゆりかご改め癒し空間（後書き）

どうも、ＡＣＴです・・・・行き成りですがアンケートです

次の世界へのアンケート（１回目）

？オリジナル

？今まで行った世界のどれか

？不定期更新

最後のは気にしないで下さい。これからはそうなるだろうですから

気付けば遠くまで来たものだ・・・・え?戻って来てる?（前書き）

久々の更新ですな・・・思えば書き始めて・・・・どれくらいだ?まぁ良いか
久々の更新なんで変かも知れませんがそこはご了承ください。お願いします!!
前から気になってる事・・・一番どの世界が面白かったですかね?
自分的には・・・・アレですね・・・うん・・・え?忘れてないですよｗｗいやだなぁｗｗ
アハハハ・・・ふぅ

気にするな（ー、Дー´）キリッ

気付けば遠くまで来たものだ・・・・え？戻って来てる？

あれから何時間が経過しただろうか・・・・外はまだ暗く、地球のちの字も見当たらない。

此処は暗く

そして

「あ〝あ〝あ〝あ〝そこそこ～・・・・・・」

とても幸せな空間だ

「し、幸せぇ～・・・・」

どうもマッサージ機の上からケンイチです。今、私はとても幸せです

今なら何が起きても許せそうです

「ユクウぅお茶ぁ～」

《了解しました。マスター》

小刻みな機械の音と共に床に小さな穴が開きそこからテーブルに載った緑茶が現れる

「ふぃぃ〜」

平凡だ〜・・・

「平凡だ〜・・・」

思わず思考と被ってしまうほど今の俺は機嫌が良い、とても良い、思わずその場で踊りだすほど気分が良い。もう、絶好調だＺＥＥ

「あ〜・・・もう何か此処で一生暮らすのもアリか・・・も！？」

大きな爆発音と共にユクウが大きく傾く・・・あ〜終わりか〜

「終わりか〜・・・」

平凡終わりか〜

「ぼーっとゴロゴロ終りか〜・・・・・」

いやだな～

「しんどいな～」

はぁ～・・・・・うん

「ユクウ、何があった？」

《外部からの攻撃を受けました。目標はどうやら大型の宇宙船の模様》

「そうか？何処のどいつか分かるか？」

《目標、大型宇宙船、情報の収集を開始します、適合船判明、時空管理局》

そうかぁ～・・・・時空管理局かぁ～・・・・時空管理局ねぇ～・・・・Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆ＤＥＴＨ★ね

「ユクウ、戦闘モードへと移行」

《・・・・・》

「どうした・・・ユクウ？」

《お言葉ですがマスター、本艦には戦闘で使える武器はありません。有るにはありますが爆弾とだけ言っておきます》

「・・・・・・ふむ」

さて問題だ、俺はこの船を何のために作り出しましたか？

A：脱出のため

さて問題だ、作るとき主に何を考え作りましたか？

A：癒し空間＝ユクウ

さて問題だ、これは元々ゆりかごという馬鹿げた古代兵器なのだが、何故武器が無いのでしょうか？

A：癒し空間に必要が無かったから全部他のところで使い切りました。テヘ♪

よろしい、ならば戦争だ！

「オレェ・・・いっそ爆弾で駄目だアレは危険すぎる・・・だが！ブツブツブツ」

一人で思案してみたところ・・・此処は一旦退却で

作戦名：ガンガン退こうぜ！！

「ユクウぅぅうううううう全力後退だぁあああああああああああ」

《了解しました、本艦、癒空はただちに退却を行います》

え？お前が倒せば良い？バカ言っちゃ行けねぇ、ユクウが狙われたら如何するんだ

「ガンガン退こうぜ！！」

《全てのブースターを全快、核の魔力の全力開放、クロックモードに移行します》

「退くぜ退くぜ退くぜぇえええ・・ぇ？・・・何？クロックモードって？」

《時よ止まれ貴方は儚い》

そんな機能つけた覚えないですヨォオオオオオオおお

「何が起きたし・・・・・」

気が付けば地球らしき場所についていた

何が起きたし・・・・・

気付けば遠くまで来たものだ・・・・え?戻って来てる?（後書き）

短いですが、次の話では長くするつもりです。まぁこれは練習と言う事で

感想評価待ってま～す

アンケート

前書きで書いた質問、どの世界が面白かったですか?答えてくれたら私のやる気が上がったり下がったり、したりしなかったり。

リリカルなのは～帰って来た破壊者（仮）～（前書き）

どうもＡＣＴです。週間ユーニークアクセスの上位を目指そうと思います
何故かって？やる気が出てきたから、しか言い用が無いですね。今日から俺燃え尽きます！！まぁ２５番目ぐらいでいいかなぁ～・・・・
・皆さんよろしく頼みますよ！！

「ふぅ・・・」

ちょっとした事故？があったが無事地球へとやってこれた俺、しかし問題があった

「地球来て何するよ・・・・俺」

つまりそう言う事、地球へＧＯ！来たわ良いものの何する？わかんなぁ～い！今ここ

「取り合えず・・・鳴海へ行こう！！」

そうだ京都へ行こう並みの発想で取り合えず鳴海へと向う

「そんじゃまぁ～鳴海市沿岸までよろしくユクウ！」

《了解しました》

太平洋付近で海の上に浮かんでいた癒空は空へと浮かび上がり進

路を鳴海へと向ける

「それにしても何故管理局に狙われたんだ？」

《現状ではまだ分かりません》

「だよね～」

でも多分おそらく、アレだよね・・・この船の核、元「何ちゃって自爆スイッチ」だよね

あれたぶんロストロギアに認定される魔力だと思うし・・・・・・

いや、たぶんではなく完璧にですな

《マスター、鳴海市へと到着しました》

「ん？そうか・・・なら俺は外に出るから深海にでも潜って待っててくれ」

《了解しました・・・・・お気を付けてマスター》

「そっちも見つかるなよ～」

転移を使い鳴海市の砂浜へと足を付ける

「くはぁ～久々の外の空気！」

やっぱり、外が一番だね自然が一番だね！

「それにしても全然変わってないな～！」

うんうん、そういや俺が消えて何年ぐらい経った世界なんだ？この景色からするとそんなに経ってない気はするが・・・

「う～ん・・・まぁ確認するのが早いか」

俺は“翠屋”が有るであろう場所へと足を進める

「まぁ、無くなるわけが無いよな・・・・・」

とわ言いつつ心の中ではほっとしている俺・・・正直、何十年も立ってたら如何しようかと

「まぁ取り合えず入りますかね」

と扉に触れようとした瞬間、店の中から複数の女性の声が聞こえたため止める

「・・・・もちつけ・・・落ち着け！俺」

そうだＫＵＬじゃないＣＯＯＬに成るんだ俺

「勘違い、そうだそうに違いない」

扉へと耳を当てて店の中にいる女性の声が誰なのかを確認する

「ねぇねぇママ、あの人何してるの～？」

「しっ見ちゃいけません！」

・・・・泣いてないぞ？泣いて何かいないからな？（ぐす

てっ違う違う集中集中、俺の耳よ唸り叫べぇえええええええええ

～～～店の中～～～

「ちょっちょっと！お母さん！昔の写真・・・・「はいＯＵＴぉお
おおおおおおおお！」ひゃ！？」

やべ、まさかの行き成り過ぎる発言で思わず突っ込んでしまった・・・（汗

「だ、誰！？」

「【転移】なう！！」

「なのは！魔力反応だよ！？すごく近い！」

そりゃ扉の前にいますから・・・・・ってやばい！？人の目が、【認識阻害】発動なう！！

「ふっ完・・・ぺ・・・き・・・・・？」

アレェ～？おかしいなぁ～？・・・・・・ココドコォ～？

「気付いたら目の前は近未来的景色でした・・・・・・って此処ミッドチルダじゃね？」

フハハッハハ、我ミッドに参上！！・・・・どうしてこうなったｏｒｚ

「やべぇよ・・・ここ一番危ないよ・・・」

何か目の前で訓練してる風景が見えるよ・・・なんかセットアップとか聞こえるよ

「アハハハ・・・空が青いな・・・・」

「そこのお前!!何をしている!!」

雲ひとつ無い空を見上げていると正面から野太い声がかけられる

「空を見てます」

「そんな事を聞いているんじゃない!!」

え～・・・正直に答えたじゃまいか

「貴様は何故此処にいるのか聞いているんだ!!」

「なるほど・・・」

やばくない・・・?ちょ!?どうする!?どうする俺ぇ!?

「おい！！聞いているのか！！」

ええい！こうなったら

「明日からここで勉強させてもらうケン・マザカです！！」

「ん？・・・・そんな話は聞いていないんだが・・・」

うぉおおおおおおここで使うは我がチート能力！！【偽造】身分証明書の仮作成、そして転入手続きへの了承書！！これを全ての情報網に不正投入！！

「・・・ああ、確かに来ているなすまなかったな？」

「いえいえ・・・」

計画通り・・・・ニヤリ

「それではマザカ研修生、明日から先生として頑張ってくれよ？」

「え・・・・は、はい！！」

先生?・・・・・・・・え?・・・・ここ組織じゃないの?学校?って・・・エ?先生ぇ・・・センセイ?

風間賢一、教師・・・始めました!

リリカルなのは～帰って来た破壊者（仮）～（後書き）

感想評価待ってます～・・・う～ん？昔みたいに面白くなってますかね？分からん

どんどんアクセスよろしく！

破壊者（仮）？いいえ、先生（新）です！（前書き）

更新で～す

破壊者（仮）？いいえ、先生（新）です！

先生になった風間賢一、改めケン・マザカです・・・今日から私は“Ｓｔ．ヒルデ魔法学院”での初等科２年生を受け持つことになりましたぁ～ヤッタァーッ・・・笑えや・・・

「え～と急遽ですが今日からこのクラスを担任する事になった・・・ケン・マザカです。よろしく」

「「「「「「パチパチパチッ」」」」」」

良かった・・・普通そうなクラスだ

「え～とそれじゃ、皆さんの自己紹介と先生に対する質問などお願いしようかな？それじゃ端の子から」

「はい！セイナ・アルトです！先生の歳はいくつですか？」

「はい、元気ですね～・・・先生の歳は千を越えた頃から数えるのをやめました」

「「「「「「・・・・・・・」」」」」」

ん？空気が死んだぞ？何故だ・・・あ、いかんいかん素で返し

てしまった

「冗談ですよ、ピチピチの２０歳です（身体的には）じゃ次」

「はい！カムイ・トールです！先生の好きな食べ物は何ですか？」

「はい・・・こんがり焼けたドラゴンの肉です」

（（（（（（（変な先生が来たな・・・・・）））））））

とまぁこのぐらいで子供らしい純粋な質問がたくさん聞かれました。だが問題が

「はい、次の子」

「はい！高町ヴィヴィオです！先生の魔道師ランクはいくらですか？」

「はいはい、高町さんね」

・・・・・・・ん？高町？・・・悪魔？ん？・・・・・魔王？ん？・・・ヴィヴィオ？聖王？ん？

「先生？」

「エ、ハイ?ナンデショウカ?」

「魔道師ランクは?」

「ア、アア魔道師ランクね・・・・え～と確かBですね」

「ありがとうございます!」

あら?以外と普通な反応・・・Bって結構下のはずなんだけど・・・って!?違う高町ヴィヴィオ!?
聖王!?聖王様ですか!?・・・・そりゃなんか不愉快な感じがする筈だ。うん

「それじゃ次の人」

「はい!ミルティナ・ホーエンです。先生の特技は何ですか?」

「はい、強いて言うなら・・・・寝ることです」

(((((((やっぱり変な人だ・・・・・)))))))

まぁそれ以外は問題なく・・・いや大いに問題なんだが・・・普通の子ばかりで安心した

「さてと・・・・第●■脳内会議を始める」

（ワーワーッパチパチッ）

うはｗｗ此処何処ｗｗ→教師ってちょまｗｗ→担当のクラスに魔王の娘が（今ここ

Q：さて・・・どうする？

A：如何にでもなる

Q：高町なのはに有った場合は！？

A：大人の姿だから大丈夫だ問題ない

Q：それはフラグなのでは・・！？

A：・・・・・・（ー｜ー）ｂグッ！

Q：待て！？やばいぞ！？何か考えろ！？

A：学校辞めればよくね？

Q：できたらやっている・・・・！

A：まぁ大丈夫だ、はやてがこない限り・・・・・

Q：来たら終りってことだよな！？

A：そん時は腹くくって諦めナ

Q：これって伏線じゃないですか？

A：そーでーすねっ！

「終った・・・・何か自分で伏線立ててしまったし・・・・」

まぁ・・・・何とかなるだろう・・・・O★HA★NA★SHIは覚悟しといた方がいいよね・・・あれ？目から汗が・・・（泣

あ、授業の時間だ・・・・行かないと・・・・アレ？何か割りと平凡かも

「え～とそれでは、今回の授業は・・・・戦闘訓練初期総合体育を始めたいと思います」

何ぞこれ・・・・ま、まて取り合えず本を・・・・うん、初期的な犯人との間の詰め方交渉術、その他もろもろがかかれてますね

「え～と・・・・それでは2人1判を作ってください！！簡単な模擬戦を行い相手の弱点や自分の弱点などを見つけ実力を高めましょう！」

投げやりも感じだよね・・・・？駄目？いいじゃまいか

「先生、一人余ってしまうんですが・・・・」

「あ～・・・それじゃあ余った一人は先生とやりましょうか？」

「分かりました！」

・・・・・で？なんぞこれ？何故目の前にヴィヴィオがおるんや？可笑しいちゃうんか？

「先生よろしくお願いします！」

「あ、はいよろしくお願いします、高町さん？」

え～とこう言う戦闘方法なんて言うんだっけ？本、本っとえ～と格闘戦技（ストライクアーツ）？へ～・・・勉強になるな～

「それでは始めましょうか？」

「はい！」

まぁ、適当にパパッと終らせますかねぇ～

「はぁあああ！」

「うわっと！？」

と思ってる頃が私にもありました・・・アルェ？強くないですか？

「高町さん、何処かで訓練でも？」

「はい少々！知り合いから」

ふむふむ、なるほど・・・格闘だから・・・スバルあたりか？

「っ！そこぉおおおお！！」

「っ！？とっはい私の勝ちですね」

「へ・・・？」

一瞬で背後に回り手刀を首筋に当てる

あからさまに隙が出来てしまいましたね反省反省

「負けちゃった・・・・」

「アハハハ、まだ子供に負けるわけには行けませんからね」

いかん、思わず少し本気を出してしまった・・・・此れからは気をつけなければ

「先生、すげぇ！！どうやったんですか！？さっきの」

「どうやったんですか！！」

「アハハハ、内緒ですよ」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」

身体能力だけでなんて言えますか？言えませんよ・・・まぁ学校の先生も悪くないですね

「先生さようなら！」

「「「さようなら～！」」」

「はい、さようなら～」

「“ケンイチ”先生、今日はとても勉強になりました！また一緒にやりましょうね！」

「はい、いいですよ」

・・・・ってアレ？ケンイチ先生？・・・・賢一？アルェ・・・・・？

逃げていいですか？

破壊者（仮）？いいえ、先生（新）です！（後書き）

感想評価待ってます。今日はこのぐらいで・・・明日更新するかどうかは気分しだい

ケン先生～？あの人誰ですか～？

皆さん、こんにちわ・・・・ケンです。今私は、先生2日目を迎えてます

「皆さん、おはようございます！」

「「「「「・・・・・」」」」」

先程まで騒がしかった教室は俺が入ることによって静かに成る・・・というより唖然？

「どうかしましたか？皆さん」

それもその筈、今の私の格好は赤い流星やらの称号を貰っているあの人の仮面に髪はアフロのこの世のものとは思えない虹色なのだから・・・・・やりすぎ？ふっ・・・・俺も思う

「け・・・ケン先生？」

「はい、そうですが？」

「如何したんですか・・・？！その格好」

「あはははは、皆さん何を言っているのですか？何時も私はこの格好ですよ？」

（（（（（（駄目だこの人早く何とかしないと・・・・））））））

生徒の心が一つに成った・・・・・え？何故そんな格好をしているかって？ＡＨＡＨＡＨＡ・・・・どうやらヴィヴィオ的な人に私の正体がばれてるらしいのですよ・・・・つまり、今日中に魔王的な人か死神的な人か狸的（私は狸や無いで！）な人が来るわけですよ・・・・そのためのカモフラージュ！何ですよ？分かりましたか？

「ともかく！おはようございます」

「「「「「「「お、おはようございます？」」」」」」」

「よろしい」

ＳＨＲをパパッと終らせて職員室に行くぞ！あそこが俺の安全地帯だ！！・・・・ええ、別にこの学校に来ている２つの大きな魔力なんて気にしてませんよ？キニシテマセン

「点呼！１」

「は、はい」

「2！」

「はい！」

「３４５６７８９１０～３９！！」

「「「「「「「「はい」」」」」」」」

よし全員いるな・・・・後は職員室に立てこもるだけ・・・・

「ケンイチ先生～？」

「え、あ、はい？高町さん、何でしょうか？あと私はケンイチでは無くケンなのですが？」

「今日、お母さんが会いに行くって言ってましたよ？“職員室”に」

・・・おっとお腹が痛くなってきたなぁ～・・・・・保健室に行こうか

「ハハハ、ソウナンデスカ、スミマセン、少しお腹が痛いので職員室に行ってきます・・・・それでは次の授業で高町さん・・・・」

「はいっ！」

いい笑顔で俺を見送るヴィヴィオ・・・・・くっ何だろうか、純粋な笑顔な筈なのに裏を感じてしまう！

「ふぅ・・・・さて帰りますか・・・・明日、校長に辞表出しましょう」

っと何気なく見たグランドには何処かで見たことあるちっこい赤髪の少女が・・・・ふっグランドは駄目ですね・・・裏から・・・・と後ろを振り返ろうとすると、何故か校長と話しているどこかで見たことあるようなナイスバディな金髪の女性

「っ！？ど、どうも・・・・す、素敵な髪型ですね？」

女性はこちらを見て目開き目を俺の頭上に向ける・・・・ナイスぅうううううううう俺のアフロぉおおおお！？

「アハハハ、ありがとうございます。少し用事があるので私はこれで・・・校長先生も」

「う、うむ？」

ダッシュぅうううう・・・やばいぞ！やばい何処か逃げる場所を！！

保健室!!・・・・どこかで見たことあるポイズンなクッキング
をする金髪の女性・・・・つぎぃいいいい

体育館!!・・・・どこかで見たことある赤髪のポニーテール・・
・・・つぎぅいいいいいいい

理科室!!・・・・授業中だ・・・邪魔は出来ないな・・・・・・
・・つぎ

音楽室!!・・・・どこかで見たことある白髪の女性とユニゾン
デバイス・・・・・つぎぃいいいいい

裏庭・・・・どこかで見たことあるツインなテールと赤髪の少
年にピンクの少女更に青髪の女性

「・・・・・」

完全に包囲されているぅうううううううううううう
ううううううううううううう

「いや、まだだ!まだ空が残っている!!」

空に浮かび高度を上げていく

「さてと・・・・逃げ「どこ行くんや?」・・・・・」

そ、空も万全だったのかぁあああああああああああ!?

「い、いえちょっと家に忘れ物を・・・・」

「ふーん?どんなもん忘れたンや?」

しかもぉおおおおおおおはやてぇえええええええええええええですかぁあああああああ!?

「なぁ?“ケン兄”」

あ、終った・・・・・・・・・拝啓、まだ見ぬお父様お母様・・・・って!?まだだ!?

「ケン兄?・・・え~と誰かと間違えてませんかね?」

「そんな馬鹿みたいなアフロと仮面被るの家のケン兄しかおらへん」

アフロォオオオおお、まさかの自爆でした。

「・・・はぁ・・・え~と・・・・なんだ・・・ただいま?」

「・・・っ・・・おかえり！ケン兄！！」

まぁ・・・・良いか別に・・・・こう言うのもたまには良いかもしれない・・・・・

「さてと・・・・ケン兄、ちょっくらＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしよか？」

「え・・・・・・？」

「大丈夫や、下で皆もまっとるから・・・・なっ？」

「・・・・・ちょっと用事が・・・・」

「にがさへんで」

はやてに襟を掴まれそのまま急降下していく・・・・・・・・ＨＵＨＡＨＡＨＡ・・・サヨウナラ

おお、魔王よ死んでしまうとは情けない・・・・・・Ｃｏｎｔｉｎｕｅ？

ケン先生～？あの人誰ですか～？（後書き）

感想評価、お待ちしております・・・次からドタバタコメディ・・・か

血みどろバトル（笑）

魔王と死神と狸です。（キリッ（前書き）

更新～今日は2話だけですね～・・・・次の話は００：０１に更新予定・・・え？何故1分？

００：００は少しずれそうなのだ・・・そこら辺気にする方なので・・・

魔王と死神と狸です。（キリッ

「さ～て、ゆっくり話を聞かせてもらおうか？ケン兄ぃ～？」

「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ！！」

「「「あ？」」」

「ナンデモナイデス・・・・」

怖いよぅ・・・・なんでこの３人と個室で対面しなきゃいけないんですかぁ（涙

「そ、それより皆さん仕事で忙しいのでは・・・・？」

「今日、一日、私達、非番、だから、大丈夫」

「・・・・」

嘘だよ絶対嘘だよこの人たち・・・・絶対上司を脅して出てきてるよぉ・・・目が物語ってるもの

「それじゃ話してくれるかな？【星破壊の仮面】？」

「は、はい・・・・・（空気がぁあああ）」

誰か助けてください・・・・え？無理？何でだよ君なら出来るって！！諦めるなよ！！そこで諦めたら試合終了だよ！？ほら！立ち上がって！？僕のためにさぁ！？「きいとるん？」・・・・

「ふぁい！！」

「ささっと話してなの・・・・さもないと・・・・・」

何でセットアップしたのかな！？何でレイジングハートをこちらに向けるのかな！？

「Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩするよ？」

「ふ、ふぁぃ・・・・・」

既にＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ中ですけどぉおおおおおおおおおお！？何これ以上ひどくなるの！？

「じ、実は・・・・・」

～～～O☆HA☆・・・・お話中～～～

「と言う訳だった・・・・・箸」

「「「箸・・・・？」」」

「だったんです！！」

何で3人ともセットアップしてるんですかぁ（泣

「それじゃあ・・・私はこれで・・・・」

「行かせる思うんか？」

ですよね～

「え～と・・・・一体どこに・・・・・」

「私の家だよ？」

へ～・・・・そうなんだ・・・・なぜ？

「ケンイチさん？大事な二人忘れてない？」

「ん～・・・・？」

二人？・・・・なんか有ったっけ？・・・・ん～・・・・・・
そもそも、何故俺はこっち戻ってきたんだっけ？・・・・え～と・・・確か最初は・・・・あ～・・・・うん・・・・思い出した・・・・

「クロとシエルだ・・・・」

「わ～・・・・この人、素で忘れてたよ・・・・・・・・・」

いや～だってさ?・・・・物凄い濃い毎日だったんだよ?

「そんじゃ【転送】【任意】【召喚】来い」

「ちょっ!?ケン兄ぃ、ここ車の中!?」

あ・・・・既に時は遅く車の中に魔方陣が敷かれて行く

「まぁ・・・・二人とも大きくないから大丈夫だろ・・・・たぶん(ボソッ」

「たぶん言うたろ自分!?」

魔方陣より激しい光が飛び散り、車は急停止する

「け、ケン兄のアホォ・・・・・(ガクッ」

「こ、これは予想外・・・・な・・・の」

「エリオ、キャロ・・・・だい・・・・」

「「「「きゅぅ～・・・・」」」」

ケンイチは機動六課の面々を倒した!!

「・・・・何かスマン」

「け、ケンイチ?」

「ん?おぉ!変わってないな!!シエル!」

後ろを振り返るとあの頃と変わっていないクロを抱きかかえている白い真っ白な少女がいた

「そうじゃ・・・闇はどうなった?」

「ん~?今も俺の魂に引っ付いてるぜ?今じゃ俺の一部だな」

「そ、そうなのか・・・体のほう・・・わ?」

「今の状況で分かるだろ?」

そういうと嬉しそうにクロを抱きかかえ満面の笑みを浮かべるシエル・・・・萌え~・・・・・ハッ!?

「ん・・・・?シエル、お前は魔力がなくなりかけてるぞ?」

「それはそうじゃ・・・・今までラインが繋がっておらんかったか

らの」

「そんじゃ俺の中で休んどくか？」

そう言って俺はシエルの頭に手を置く

「すまんがそうさせてもらう・・・・」

「ああ、ゆっくり休みな」

《ぎゅ！》

「クロは俺の頭にでも乗っかりな・・・」

そう言うとクロは漆黒の翼を広げ俺の頭の上へ行き丸くなる

「さてと・・・後はこいつ等どうするかだが・・・逃げようかな」

『相変わらず、適当じゃな・・・・・』

うぉ！？久々な感触！？

『我もここは久々じゃ』

「そうかい・・・」

さてと・・・・・転移・・・・・って場所わかんねぇな・・・・シエル？座標分かるか？

『任せるのじゃ』

「よし・・・・そんじゃ【転移】」

『そうじゃそうじゃ、言い忘れておったが、お帰り』

「・・・ああ、ただいま」

魔王と死神と狸です。（キリッ（後書き）

あれ？これで連載終了してもよくね・・・？的な場面です

感想評価まってます

番外編『やめい、この虹色のアフロ気に入ってるんだぞ！？』（前書き）

何となく更新～

番外編『やめい、この虹色のアフロ気に入ってるんだぞ!?』

「それにしてもまさかこんなにも早く正体がばれるとは・・・・」

「詰めが甘いンやケン兄わ」

詰めが甘いだっと!?あの頃より成長していてしかもアフロに虹色しかも仮面だぞ!?これで詰めが甘いのか!?

「アフロをつけた時点でマイナスや」

「サーセン・・・・と言うより一番謎なのが何故ヴィヴィオに正体がばれたのかなんだが・・・・」

「それは私も気になっとたんや」

「ん~と・・・・ケン先生だから、何となくケンイチ先生!!」

「「なん・・・・・だっと!?」」

何となくだっと!?何故!?ケンからイチをつけた!?何故だ!?

「良くお母さん達の話にケンイチって名前が出てから~（ニコーッ」

「・・・・・」

「名前の時点で失敗やったなｗｗ」

ぐぉおおおおおおおおおおお!?ケン何て名前にするんじゃなかったぁー!!やはりマザカ・スフィンクス・マゼラカーン（意味不明）にすればよかったぁあああ!!

「まぁ、過ぎたものはしょうがない・・・・・」

「逃げやな」

ふっ逃げじゃない・・・・これは明後日への逃避だ・・・・アレ?逃げてる?

「ヴィヴィオ、ストライクアーツの練習は良いの?」

「え、わわ!?やばい、行ってきます。お母さん」

「気を付けてね?」

・・・ストライクアーツ・・・・あ～この前した戦闘訓練の技法だっけ?

『付いていくつもりか？』

「もちのろん！！」

「ちょっケン兄！？どこ行く気や！？」

「ヴィヴィオに付いて行くだけだ～」

で・・・来たわ・・・良いものの・・・結構、人多くね？

「あ、ケンイチさん！！」

「ん？おお、ヴィヴィオ発見！」

ふむふむ・・・ん？・・・君の後ろにいる方どこかで見た事・・・・

「ヴィヴィオ！まだ訓練は終ってないぞ！」

「あ、ノーヴェ」

「・・・・・（汗」

あれぇ～・・・なぜナンバーズが・・・まさか！？原作ブレイク

をやりすぎたのか?!（違います）

「ん?そいつは・・・・ん~?」

「ケンイチさんだよ!はや「風間賢一です。よろしく（キリッ」・・・む~」

「ん、ああ私は、ノーヴェ・ナカジマだ。よろしく」

ナカジマ?・・・え?スバルの所にでも養子にはいったの?・・・まさかね

『そうじゃぞ?・・・どうした?ケンイチ』

・・・・mjk・・・まぁ似てるからアリじゃない?うん

「そうだ、ケンイチさん!私の練習相手になってくださいよ!!」

「え・・・いや・・・」

「だめ・・・・?」

そんなウルウルした目で俺をみないでぇえええ!?

「エ・・・でも・・・ねぇ？ナカジマさん」

「良いんじゃないか？お前がこの頃ヴィヴィオが言っているケンイチ先生だろ？」

・・・・・おぉブルータス・・・お前もかっ・・・・・・・・

「よろしくお願いします！！ケンイチさん！」

「え・・・あ、うん」

どうしてこうなった・・・・アレ？なんで皆見てるの？やめろ、照れるだろ／／／／

「う～ん・・・でもリーチがありすぎるからな・・・よし、【肉体操作】」

８～９才ぐらいで良いだろう・・・お子様には少しグロイ絵だから煙幕よろしくシエル

『了解じゃ』

「ゲホゲホッ！？ケンイチさん！？」

「うん～？」

おぅ、懐かしのハスキーボイス・・・・・・

「え、え！？」

「さてやり合おうか？ヴィヴィオ」

「っておまえはぁあああああああ！？」

何ですか・・・ノーヴェさん・・・・僕の顔を指差して・・・

何？え？ペル？違いますよ・・・・

「合図よろしくお願いしますね？」

「生きてやがッたのか・・・・・・ああ、分かった」

「ふぇ！？・・・え、え！？ケンイチさん？」

「そうだけど？」

まだビックリしていたのか・・・・まぁ、そうだよな行き成り目の前の大人が子供になるんだもんな

「さてと構えて？始めるよ？」

「え、あ、はい！」

「そんじゃ、二人とも用意は良いな？」

「「はい（おう）！！」」

手が下ろされると同時にヴィヴィオが動く・・・足払い？いやいや此処は腹に一発、いや手刀？

「はぁあああああ！！」

「うぉ！？・・・っと、こうなったら適当パンチ！！」

ゴォオという音と共にヴィヴィオの顔を擦れ擦れを通り過ぎ拳によって放たれた気圧が壁を破壊する

「おぅ・・・・加減ミスった・・・・」

「へっ・・・・？（汗」

すこし練習を・・・ヨッ・・・おぅ床が・・・・もう少し弱くか？こうか？ふっ・・・・屋根が・・・・

「やめい！！」

「痛い・・・・」

何故叩かれたし・・・・

「てめぇは此処を破壊するきか！？」

「そんなわけ無いじゃないですか・・・・アルェ？」

周りを見るとボロボロになっている施設・・・・そして怯えきった顔で此方を見る子供達

「アハハハハ・・・・テヘ♪」

「テヘ♪・・・じゃねぇえええええええええ！！」

おぅソレはしゃれにならないっブベラッ！？

番外編『やめい、この虹色のアフロ気に入ってるんだぞ！？』（後書き）

感想評価待ってます

目を覚ましたらまた精神世界でした。（前書き）

ん？ドタバタって言ってもリリなのネタが分かりませんので次の世界へＧＯです
番外偏？でそちらは書きたいと思います・・・ＰＶが４００万とかね？
ユニークの上位を狙いたいんだよ！！・・・たぶん

自由行動だ

というより・・・リリなの世界での役目を果したからなんですがね・・・・
ミスッたな～・・・・シエルとクロを敵にしてぶちこ・・・ナンデモナイデス

番外編は割り込みとなります！ＰＶ０００達成となりましたら１４４話目以降をご確認くだせい

目を覚ましたらまた精神世界でした。

はっ!?ここは・・・・暗い

「どうやら、世界にまた引きづり込まれるみたいじゃの」

「・・・・って事は精神世界?」

「たぶんの」

《ぎゅぅ〜?》

あら、クロもちゃんといる・・・・・・さてはて何処に行くのやら

「・・・・・何も起きないんだが?」

「おかしいの〜?」

《ぎゅぎゅっ》

ん?何だ?クロ?足もとを見ろ?・・・・・・・あら何か穴が開いているわ?怖いわね〜

「ただの穴じゃないか・・・これが如何した?」

《ぎゅっ!?》

え・・・なんでそんなに驚くの・・・・もしかして

「シエル・・・・もしかしてコレか?入り口・・・・」

「なんじゃ・・・・?どうやらコレのようじゃな・・・・」

落ちるの?自分から?この穴に?

「覚悟を決めるのじゃ」

《ぎゅっ!》

「・・・・・ふっ」

落ちるなら・・・・どうせ落ちるなら・・・・ムダにカッコよく

落ちようじゃないか

「・・・・(キリッ」

「・・・・そんな顔で落ちんでも」

絶賛投下中なのだが・・・・・・長くね?

「今度は出口が見えないんだが・・・・」

「おかしいの~?」

《ぎゅぎゅ!》

ん?なんだ?クロ?また何か見つけたのか?なに?右にあるボタン?

「・・・・なんだこの赤いボタンはっ!?」

「ケンイチ、言っておくが押すのではないぞ?」

《ぎゅぅ・・・》

分かっている・・・・分かっている!だが・・・だが!?目の前に目の前にこんなあからさまに怪しいボタンがあったら誰だって!誰だって!!

「ふぅ・・・・分かったのじゃ、ケンイチ」

「な、なんだ？」

「押すなよ？ぜっったい押すなよ？」

《ぎゅぃーー！》

「・・・・グッ」

ポチッ・・・・何と言う開放感・・・・・

「さぁ・・・邪悪なる神よ、我等が滅ぼしてくれる」

・・・・・気付いたら天使がたくさんいました。

「お、押すんじゃなかったたぁアアアアアアアアアアアアアアア」

「何だ夢か・・・・」

「ケンイチ・・・」

「何だ？シエル？」

「押すなよ？ぜったい押すなよ？」

《ぎゅぃーー！》

「・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・うそぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

目を覚ましたらまた精神世界でした。（後書き）

と言う訳でアンケートです

1オリジナルストーリー（王道）進みは良好

2ネギま（やり直し）進みは良好＋＋二回目なので

3ＩＳ・・・長くなりそうなんだよな・・・・進みは微妙

それと適当なアニメ作品を追記してくれると嬉しいです（エロゲでも良いよ殆ど知らんがな（ドヤッ）

今日の昼までよろしく！

どんどんアクセスアクセス！！

吸血鬼幼女（前書き）

更新遅れました～！！・・・あ、番外編更新しました！朝にね

「いたかっ!?」

「いや、見当たらない・・・」

「まだそこら辺にいるはずだ!!探せ!!」

「「「「おう!!」」」」

くっまさか追い込まれようとわ・・・早くこの場を離れなくてわ

「はぁはぁ・・・・くっ「いたぞ!!」ちっ!?」

「吸血鬼めもう逃げ場は無いぞ!」

大人数人がジリジリと此方に詰め寄ってくる・・・此処までか・・・

「ぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!?」

「なっなんだ!?」

そう思ったときその男は現れた・・・・

「痛てて・・・・おう・・・何これカオス」

「き、きさま!!吸血鬼の仲間だな!?」

「ん・・・・?ああ、理解・・・・・・・この世界ね」

空から落ちてきた男は私を一度見、そして大人たちの方を向く

「さてと、悪いけど・・・手加減できねぇよ?俺」

「なっ・・・・なにを!?」

「お、おい・・・何だアレ・・・・・」

一人の男が指を上に向ける、そこには無数に浮かび上がる黒い何か・・・

「ヒッ!?」

「ほらっ・・・避けねぇと死ぬぜ?」

黒い何かが一人の男を飲み込む

「ば、化け物!?」

「「「「「ひぃいいいいい!?」」」」」

ソレを見た男たちは一斉にその場から逃げ出していく・・・・

「さてと・・・大丈夫か?」

「・・・・」

空から落ちてきた男は此方に手を伸ばし笑顔を向けてくる・・・

「な、何者だ・・・お前」

「ん?風間賢一、自称魔王だ」

これが・・・魔王と吸血鬼の初めての出会い

～～～～～～～

「なぁ、エヴァ？この前見つけた竜の鱗ってどこに置いたっけ？」

「知らんわ！！そんな物」

「ケケケ、嫌ワレテンナ旦那」

どうも、風間賢一♂です・・・・・無事穴から抜けられ数年が経ちました・・・え？その数年は何をしていた？竜を倒したり、賞金首を狩ったり、寝たり、お茶飲んだり、いろいろなことをしました・・・

「シエルぅぅうエヴァが苛める～」

「体も幼児体系にしてやろうか？」

「すいませんでした・・・・」

シエルの毒舌にも慣れてきました・・・・もう反抗期なんだから二人とも、これだから幼女・・・・

「「なんだって・・・？」」

「ナンデモアリマセン」

エスパーかっ!?とまぁ色々会ったんですよ・・・・察してください

「ケンイチ、敵じゃ・・・・」

「うぇ～・・・・マジカヨ」

「ふん、丁度良い新技の実験台にしてやる」

「ケケケ・・・」

エヴァはやる気だし・・・・俺は・・・・・あ～めんどくさい・・・この頃多くないッすか?追って、もう自分しんどいんですけど・・・・・

「と言う事で、クロ任せた！」

「ケケケ、残念ダッタナゴ主人出番ハ無シミタイダゼ」

「コラァ！ケンイチ！！クロを使うな！新技が験せないではないか！！」

《ぐぅぉおおおおおおおおお》

久々に見るクロの本当の姿・・・すげぇでかい・・・ってアレ？何か成長してない？え？成長期？なら仕方ないか・・・・

「やっちゃえ、バーサカー！」

「大人の体で言っても変態なだけじゃぞ、ケンイチ」

「変態」

「変態ダナ、ケケケ」

なんだよぉおおお！！ネタに走っただけだろう！！

「見ろぉ人がゴミのようだ！」

「わし等には見えンのじゃがケンイチ」

「「バグめ」」

な・・・んだっと!?クロのメガフレイムは見えると言うのに敵が見えんと言うのか!?（大体１５ｋｍ離れてます）・・・・

「はぁ・・・取り合えずここから離れるか？」

「だな」

「ケケケ、ケンイチ・・・頭」

「ヘイヘイ」

茶々ゼロを頭に乗せ放浪の旅を続行する

「結局、竜の鱗どこ行ったんだぁ？」

吸血鬼幼女（後書き）

感想評価待ってます。過去編ですね今回のネギまの世界はその内ナギ達と合流

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7589i/

魔王×勇者

2011年7月28日18時03分発行